

博士論文

聴覚投映法に関する臨床心理学的研究

— その開発と応用 —

松川 春樹

はじめに

今日の心理臨床においては、知能・発達検査や性格検査、神経心理学検査を組み合わせたテスト・バッテリー、および面接や行動観察により、多面的な心理アセスメントが行われている。心理アセスメントは「面接や心理検査やその他の情報などから、クライアント自身だけでなく、クライアントの置かれている環境・状況を把握し、治療や対応の方針を立てるもの（青木・三浦・和迹・吉武・月田・原田・村上・山田，2012）」であり、適切な心理的支援を行うために必要不可欠なものである。心理アセスメントは臨床心理士に必須の技能として位置づけられ、その技能を常日頃から磨いていくことが求められている。また、心理検査に関しては医療領域の保険点数にも加えられ、その利用価値が公的に認められており、平成 30 年から始まる「公認心理師」の養成においてはよりいっそう重要視されるだろう。

心理アセスメントの諸技法のうち、性格検査は質問紙法と投映法¹⁾、作業検査法に大きく三分される。質問紙法は定められた質問項目に対して定められた様式で回答を求めるものであり、「必ずしも被検者のありようを客観的に示すものではなく、その被検者の自己像、自己評価、とくに他者に示したい自己、を示す（馬場，1997）」ものである。これに対し、投映法は曖昧で多義的な刺激に対して自由な反応を求めたり、「一本の木」など特定の対象に関する描画を求めたりするものである。反応の枠組みが定められること以外は自由に反応することができ、被検者は意識的に反応を操作するのが難しく、被検者の非意識的な心理過程を映し出すと考えられている（馬場，1997）。作業検査法は計算や模写などの作業を求めるもので、代表的なものとしては内田クレペリン検査やベンダー・ゲシュタルト・テストなどが挙げられる。これらは神経心理学検査にも分類されており、性格検査としての使用頻度は、質問紙法や投映法に比べると少ない。実際の心理アセスメントにおいては、このような多様な心理検査が、その特徴および実施目的に基づいて選択されテスト・バッテリーとして構成され、実施されている。

投映法では、ロールシャッハ法や主題統覚検査（Thematic Apperception

Test ; 以下 TAT と略記), 文章完成法 (Sentence Completion Test ; 以下 SCT と略記), P-F Study, そしてバウム・テストなどの描画法がよく知られ, 心理臨床において活用されている。これらの投映法は視覚あるいは言語を介したものであるのに対し, 本論で取り上げる聴覚投映法 (Auditory Projective Technique ; 以下 APT と略記) はその名の通り聴覚を介した投映法である。APT は, 行動主義心理学者として知られる B. F. Skinner (1936) によって考案された Verbal Summator に始まる一群の投映法である。視覚障害者に適用可能な投映法としても研究され, 有用性や可能性が検討されたものの, ロールシャッハ法や TAT に比べると研究の数が圧倒的に少なく, 筆者の知る範囲では現在用いられていない。

視点を変えると, 私たちは普段, 視覚や聴覚をはじめとする感覚を意識的にも無意識的にも大いに活用して生活している。一般に, 「私たちが日常生活の中で得る全情報量の中で視覚からのものが約 7 割であるのに対して, 聴覚からのものは約 2 割といわれている (重野, 2003)」が, これはあくまで割合の問題であり, 聴覚をはじめとする他の感覚が視覚に比べると重要でないという意味ではない。そもそも視覚による情報処理の比重が増したのは近代になってからのことであり, それ以前には, 人は視覚よりも聴覚や触覚, 嗅覚, 味覚といった感覚をより優位に用いていたと考えられている (たとえば Schafer, 1986 鳥越他訳 1986)。この点では, 視覚に比べて聴覚などの他の感覚は原始的な感覚といえよう。また, その中でも聴覚はまだ文字がない時代から, あるいは現代の識字率が高くない地域においても, 音声によるコミュニケーションおよび言語を成立させ, 暗闇や背後など目に見えない周囲の状況や危険を察知する機能に優れている。視覚は光という特定の情報 (適当刺激 adequate stimulus) を受容しているのであり, 音や, 表面の質感, 空気中に漂う物質の成分, あるいは物質自体を構成する成分など, 私たちの身の周りに満ちている他の情報 (不適當刺激 inadequate stimulus) は適切に受容することができないのである。

このように感覚ごとに異なる刺激を受容していることに加えて, それぞれの感覚の鋭さには個人差があることが一般的な理解となっている。視覚では物質の細かな色味を正確に見分けられたり, 高い速度の物質の動きを正確に目で追うことができたり, 聴覚では音の高さを正確に認識できたり, 一瞬の音を正確

に聴き取れたりする人もいれば、それらが不得意な人もいる。このような感覚ごとの能力の個人差は、たとえば知能・発達検査において聴覚的能力の強弱として解釈され、発達や教育の実践をより効果的なものにするために活用されてきた。しかし、性格検査においてはこのような視点はこれまで取り入れられてこなかった。たとえば、曖昧な形や絵を認知し意味づけを行うことと、曖昧な音を認知して意味づけを行うことは、曖昧刺激の認知という点では一致するかもしれないが、それぞれの感覚における情報処理過程や情報処理能力の個人内差の点では必ずしも同じとは言い切れないだろう。

このような視点から、本論では APT の心理臨床における利用可能性について検討する。APT には、聴覚の側面からパーソナリティを映し出し、被検者のより原始的な内的過程をアセスメントする可能性があり、また、視覚的能力よりも聴覚的能力が強い人の豊かな反応を引き出す可能性が秘められていると考えられる。さらに、APT は視覚障害者に実施可能な投映法としても、研究する意義が見出せよう。APT の有用性や可能性および妥当性が明らかになれば、テスト・バッテリーの選択肢の 1 つに APT が加えられ、より多面的な心理アセスメントを実施することが可能になるだろう。心理アセスメントを充実させることは、より適切で効果的な心理的支援の実践にもつながり、この点で本研究は臨床への還元が期待できるだろう。

1) 投映法は「投影法」とも表記されるが、被検者のパーソナリティが投映法の反応に映し出されることと、精神分析における防衛機制の「投影」を区別する馬場（2006）に倣い、本論でも「投映法」と表記する。

目 次

はじめに	i
第一部 問題と目的	
第一章 聴覚投映法について	
1-1 投映法について	2
1-2 聴覚投映法の歴史	10
1-3 聴覚投映法の特徴	17
1-4 聴覚投映法の利用可能性	26
第二章 本研究の目的	
2-1 聴覚投映法研究における問題	28
2-2 聴覚投映法の実施法と刺激	29
2-3 反応を分析する指標	32
2-4 本研究の目的と構成	35
第二部 聴覚投映法の開発	
第三章【研究1】音声刺激による聴覚投映法と Big Five の関連	
3-1 問題と目的	40
3-2 予備実験の目的	41
3-3 予備実験の方法	41
3-4 予備実験の結果と考察	42
3-5 本実験の目的	44
3-6 本実験の方法	44
3-7 本実験の結果	54
3-8 考察	63
第四章【研究2】非音声刺激による聴覚投映法と Big Five の関連	
4-1 問題と目的	72
4-2 予備実験の目的	72

4-3	予備実験の方法	73
4-4	予備実験の結果と考察	75
4-5	本実験の目的	77
4-6	本実験の方法	77
4-7	本実験の結果	89
4-8	考察	100
第五章【研究3】非音声刺激による聴覚投映法とロールシャッハ法の関連		
5-1	問題と目的	111
5-2	方法	112
5-3	結果	119
5-4	考察	129
第六章【研究4】刺激セットの再構成		
6-1	問題と目的	139
6-2	方法	145
6-3	結果と考察	152
第七章【研究5】各聴覚刺激の特徴		
7-1	問題と目的	168
7-2	予備実験の目的	171
7-3	予備実験の方法	171
7-4	予備実験の結果と考察	172
7-5	本実験の目的	175
7-6	本実験の方法	175
7-7	本実験の結果	176
7-8	考察	199
第八章【研究6】各聴覚刺激における反応の特徴		
8-1	問題と目的	206
8-2	方法	207
8-3	結果	212
8-4	考察	227

第三部 聴覚投映法の応用

第九章【研究7】聴覚投映法と自己関係づけの関連

9-1	問題と目的	246
9-2	方法	248
9-3	結果	253
9-4	考察	258

第十章【研究8】聴覚投映法と対人恐怖心性の関連

10-1	問題と目的	270
10-2	方法	275
10-3	結果	280
10-4	考察	286

第四部 総合考察

第十一章 考察と展望

11-1	各研究の総括	296
11-2	聴覚投映法の投映法としての位置づけ	315
11-3	心理臨床における聴覚投映法の意義	320
11-4	今後の課題と展望	321

引用文献	325
出典	336
謝辞	337
資料	339

第一部

問題と目的

第一章

聴覚投映法について

1-1 投映法について

(1) 投映法の特徴

投映法は、質問紙法や作業検査法と並ぶ性格検査の一種であり、「新奇で、通常の意味では一義的ではない不明瞭な刺激を提示し、それに対する自由度の高い反応を求めることによって、もっともその人らしいありようを表出させ、それを通してその人個人を解釈的に理解しようとする方法（池田，1995）」と定義される。質問紙法は、定められた質問項目に対して定められた方法で回答を記入させるものであり、被検者は検査の目的や、自身の回答がどのように解釈されるかをある程度推測し、その推測に基づいて回答することができる。つまり、質問紙法は実施者が知ろうとするパーソナリティの一側面に関する情報を効率的に集めることができ、その情報は主に被検者の意識的水準を反映している。これに対して投映法は、曖昧な刺激に対して自由度の高い方法で反応を求めるものであり、被検者にとって検査の目的が曖昧で、検査者が反応のどこに注目するかが分かりにくく、直感的に対応することになる。その結果、被検者らしい態度や内的世界が表出されやすく、その読み取りには熟練を要するが、非意識的なパーソナリティや心理過程の理解に有効と考えられている。心理臨床においては、クライアントがあまり意識していない部分が心理的問題につながっていることが多く、その部分の理解は重要である。

投映法の力動的解釈に精通する馬場（2006）によると、投映法の自由度の高さは、被検者を不安定な手探り状態に導き、被検者の自我機能を退行させる。その検査状況において、観念活動や情緒反応を惹起しやすい図版などの刺激が提示され、さらに、検査者の存在も被検者の依存欲求や敵対心、自己顕示願望などを惹起する刺激となり得る。このような条件から「防衛・適応機能も退行し（中略）通常の世界生活では表面化しないような被検者の願望や欲動や空想

の世界が現れやすくなる」という。そして、被検者に不安や動揺が見られた際に、何に、どの程度不安になり動揺し、それに対してどのように対処し、どの程度回復することができたかという心理過程が反応に表れるという。この馬場の視点はどの投映法においてどのような反応が見られたかによって変わり得るが、このように反応から得られた情報は、被検者が日常生活および不安や動揺を感じる場面でどのように対処しているか、その対処のどこが効果的でなくなっているか、今後どのようになればより適応的に生活を送ることができるかなど、臨床的に意義のある所見や仮説を提供してくれる。

また、斎藤・林（1979）によると、投映法は「時間制限がなく、被検者自身のペースでじっくり取り組める」ものであり、「特殊な面接法」と捉えることもできるという。ロールシャッハ法においては、被検者 - 検査者の関係性も反応過程に影響を及ぼし得ることから、「ロールシャッハ面接」という発想まで生じている（藤岡，1992）。このような被検者 - 検査者の相互作用の中で、被検者の自由な反応表出を共有する過程を含んでいるため、投映法の実施自体が治療的意味を持つこともある（安香，1992）。このことは、描画やコラージュ、箱庭療法が投映法と表現療法の両側面を有していることとも関連するだろう。また、山本（1992）の「TAT かかわり分析」のように、心理療法の途中でクライアントの内面に焦点をあてる目的で投映法が用いられる例もある。これらとは逆に、たとえばテスターとしてのみクライアントに関わる場合に投映法の面接的な側面を極力小さくしようとする考え方もあり、この点についての考え方は臨床家や投映法の実施状況によって様々である。

反応の解釈に関しては、ロールシャッハ法の包括システムや P-F Study のように量的解釈を中心に行うものから、ロールシャッハ法の片口法のように量的解釈を手掛かりに質的解釈を行うもの、そして TAT や SCT、描画法のように質的解釈を中心に行うものまである。ただし、これはあくまでどこに重点を置くかの違いであり、包括システムにおいても、運動反応やマイナス反応、特別な言語的修飾がなされた反応など、特に投映が生じている可能性が高い反応に対して質的分析を行う。TAT においても関山（2001）の SCORS-C（Social Cognition and Object Relations Scale 中京大学版）のように対象関係について量的分析を行うための綿密な指標が開発されている例もある。量的解釈に偏る

と反応という質的データからこぼれ落ちていく情報が増え、質的解釈に偏ると恣意的解釈に陥ってしまう可能性があり、どちらの場合も臨床的に役立つ所見が得られなくなる可能性がある。このため、両方のアプローチを十分に理解しバランスよく用いる必要があるといえよう。また、「反応は被検者の人格の諸特徴が複合的に濃縮された資料と見られるから、その読み取りには鋭い感受性と理論的枠組み、中でも精神分析的な人格理論と現象学的接近法への馴染み込み(斎藤・林, 1979)」が必要とされる。このため、投映法の効果的な実施には、検査法だけでなくパーソナリティ理論や面接技術などの修練を要する。

(2) 投映法に対する議論

投映法には一定の実施方法と分析方法があるが、「反応のバリエーションは無限大で、解釈にはマニュアルを超えたパーソナリティ理解が必要(吉村, 2011)」である。上記のように投映法を面接法の1つ捉える立場もあり、「投映法は検査なのか」という議論や、投映法の多くは統計的な信頼性や妥当性が十分に備わっていないという批判が古くからなされてきた(氏原, 2005)。ロールシャッハ法の包括システムはこのような批判の中から誕生したものの、それでもスコアリングや研究成果の不一致、さらにブラインド・アナリシスにおける不一致も問題として取り上げられてきた(Wood, Nezworski, Lilienfeld, & Garb, 2003 宮崎訳 2006; 村上, 2005)。このような批判に対し、まず、今日では投映法によって得られる情報が被検者のパーソナリティの一側面であることが広く知られ、ブラインド・アナリシスは訓練として行われる程度になっている。また、氏原(2005)は投映法の妥当性に関して、数量的妥当性の重要性をふまえつつ、各反応には数量化しきれない独自性が含まれていることを指摘している。そのため、量的分析はパーソナリティの全体的傾向を確かめられれば十分であり、その全体的傾向を確かめた上で行う質的分析に臨床的妥当性を見出している。馬場(2006)のいう投映法の反応に映し出される被検者の非意識的な心理過程も数量化が困難であり、質的分析によってこそ理解され、臨床的に役立てられると考えられる。ただし、臨床的妥当性のある質的分析を実践するには、検査や面接について相当の熟練が必要である。氏原(2005)は「反応を媒介とした被験者理解は、カウンセリング場面でのクライアント理解ほどに直接

的ではないけれども、基本的には同じパターン」であるとし、教育分析などにより、検査者が自身の中にある普遍性やそれを妨げているものについて十分に理解できれば、反応に対する主観的な解釈にも一定の普遍性が備わるとしている。さらに、氏原（2005）は投映法の信頼性にも言及し、被検者 - 検査者の関係性が反応に影響を与えることは必然的に生じ得るものとして、むしろそれを臨床的に活用する視点を提示し、「信頼性を超えたレベルに、わざわざこのテストを施行する妙味」があると述べている。

面接法よりの観点にずれた感もあるが、筆者としても、投映法における数量化は、異なる刺激状況における反応の一部を数値として抽出し、刺激状況の差を一度脇に置いて合算し、全体的な反応傾向から被検者の全体的なパーソナリティ傾向を読み取る過程であると考えている。質問紙法はパーソナリティに関する情報の抽出方法の差から、映し出される傾向の明確さや反映される意識 - 非意識の水準は異なっているが、被検者の思考・行動傾向の集積から全体的傾向を測定する点で一致する。この一致を検討することで投映法における量的解釈の統計的な妥当性がある程度保証され、このようにして得られた量的解釈を手がかりに質的解釈を行うのが妥当であろう。

（3）投映法の歴史と分類

投映法は、Jung（1910）の言語連想検査や Rorschach（1921）のロールシャッハ法、Morgan & Murray（1935）の TAT の考案を経て、Frank（1939）がこれら 3 つを総称して「投映法」と呼んだことに始まり（吉村，2011）、「20 世紀初頭から盛んになった精神測定派（psychometricians）の活動に対するプロテスト（安香，1992）」として広く知られるようになったといわれている。安香によると、この精神測定派とは、1905 年に世界初の知能検査を開発した Binet や、検査法の始祖とされる Cattell をはじめとする学者たちであり、信頼性や妥当性の検証、標準化などの手続きをふまえた客観的心理検査を発展させた人々を指している。そして、これらの心理検査がより深く複雑な構造を成すパーソナリティを捉えられていないという指摘から、また、当時の精神力動論の隆盛を背景に力動的にパーソナリティを捉えようとするニーズの高まりから、数多くの投映法が考案されたという。投映法研究は、特に 1940～1950 年代に

アメリカを中心に飛躍的に発展し、1960～70年代には下火になっていった（田中，1991）。後に活用されなくなった投映法も数多くある中で、臨床的な有用性や妥当性を広く認められたものが現在でも活用されていると考えられる。

これらの投映法について、表 1-1 に示すように、手続きや反応など様々な視点から分類がなされている（安香，1992）。その中でも、精神分析における投影の概念から独立した独自の投映理論を展開した Frank（1939）による、被検者の反応の仕方に基づいた分類が多く研究者に引用されている。具体的に見ていくと、①構成的（constitutive）な反応は、粘土やフィンガー・ペインティング、ロールシャッハ法や雲模様検査などのように、未分化で未構造的な事態の中で、ある構造ないしは形態を構成させるものである。②構築的（constructive）な反応は、モザイク・テストや色彩ピラミッド検査などのように、与えられた材料で、ある組み立てを行わせるものである。③解釈的（interpretative）な反応は、TAT や SCT，P-F Study などのように、多義的な解釈が可能な刺激に対して、その人なりの意味付けを求めるものである。④浄化的（cathartic）な反応は、粘土や自由画，心理劇，人形遊びなどのように、自由な表現を通して情緒的発散が行なわれるものである。⑤屈折的（refractive）な反応は、筆跡やしぐさ，言い間違い，誤字脱字などのように、失錯行為などに被検者の内面的特質が表されるものである。このような Frank の表現全般を含む網羅的な分類にも、当時の投映法の多様性を窺い知ることができるだろう。

馬場（1997）は、①被検者にとって検査の目的は明瞭であるか、②検査の刺激はどのようなものか、③検査場面は被検者が自主的に回答するものか、検査者との対人場面で回答するものか、④被検者は自身の反応を意識的に操作できるかという 4 つの観点から、性格検査間の比較を行っている（表 1-2）。これは投映法における構造化の程度による分類とも考えられる（吉村，2011）。さらに、馬場（1997）は投映水準による各性格検査の位置づけを整理している（図 1-1）。それによると、質問紙法など構造化が強いほど精神内界（非意識水準）よりも対社会的態度（意識水準）を多く反映し、ロールシャッハ法など構造化が弱いほど社会的態度よりも精神内界を多く反映し、ただし、心理検査である以上、投映法の中でも構造化が弱いロールシャッハ法であっても対社会的態度

を反映する割合が小さくないと考えられる。馬場（1997）も指摘しているように、実践においてはこれらの性格検査ごとの特徴をふまえてテスト・バッテリーを組み、所見をまとめることが重要である。

表 1-1. 各研究者による投映法の分類（安香，1992）

研究者	分類	分類の基準
Murray (1938)	①知覚的投映, ②統覚的投映, ③認知的投映	反応に示される投映の質
Frank (1939, 1948)	①構成的, ②構築的, ③解釈的, ④浄化的, ⑤屈折的	反応の種類
Sargent (1945)	①診断的, ②実験的, ③治療的	技法を用いる目的
Bell (1948)	①視覚刺激, ②言語連想, ③表 現運動, ④遊戯・ドラマ	投映を起こさせる刺激も しくは手続き
Symonds (1946)	①解釈的, ②表出的	投映を起こさせる刺激も しくは手続き
Lindzey (1959, 1961)	①連想, ②構成, ③完成, ④配 列, ⑤表出	反応の種類

表 1-2. 被検者の視点による各性格検査の特徴

検査法	<目的>	<刺激>	<場面>	<被検者の意識的操作>
質問紙法	明瞭	具体的	単独 自主的	可能
SCT	ほぼ明瞭	具体的	単独 自主的	表面的可能
TAT	不明	具象的	テスターとの 対人場面	表面的可能
ロールシヤツハ	不明	非具象的	テスターとの 対人場面	困難

※ 馬場（1997）から抜粋

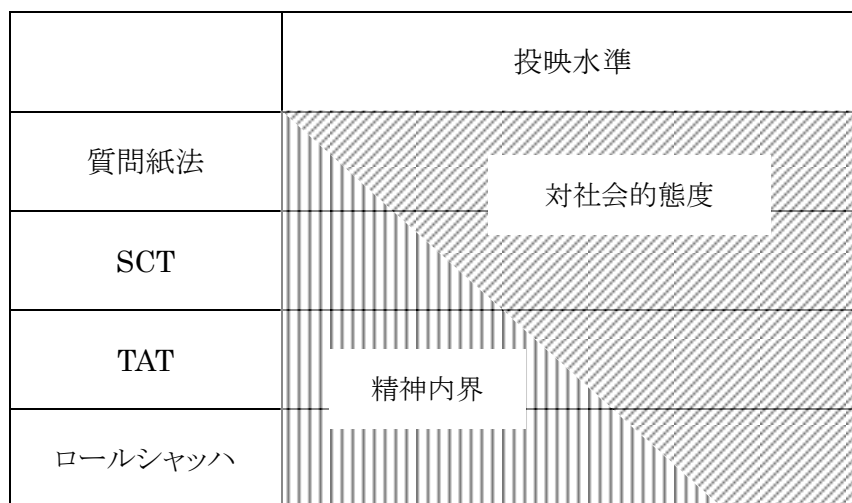


図 1-1. 各性格検査の投射水準

※ 馬場（1997）が、各性格検査において対社会的態度と精神内界が投射される割合を便宜的に図示したものである。縦軸は性格検査の構造化の度合いを、横軸は対社会的態度と精神内界の割合を示していると考えられる。

1-2 聴覚投映法の歴史

本論で取り上げる APT は、行動主義心理学者として有名な B. F. Skinner (1936) による Verbal Summator に始まる、投映法の一つである。他の多くの投映法が被検者に視覚刺激を提示して反応を求めたり、描画などの視覚的表現を求めたりするのに対し、APT はその名の通り、被検者に聴覚刺激を提示して反応を求めたり、聴覚的表現を求めたりする。音楽療法などの領域で現在も活用されている可能性はあるが、筆者の知る限りでは、投映法として活用されている例は見られない。以下では、APT の歴史を概観し (表 1-3)、その特徴や独自性について整理していく。

(1) 海外における APT 研究

1) Verbal Summator (Skinner, 1936) 本 APT は、実験室の機械の音 (騒音) を何度も聴くうちにそれがある言葉を発しているかのように感じられたという、Skinner 自身の偶然の体験が考案のきっかけになったとされている。母音のみで構成された曖昧で聴き取りにくい音声を被検者に聴かせ、それについて「何と言っているように聞こえるか」を尋ねて意味付けさせるもので、ロールシャッハ法に近いものであった (厳密には、刺激の偶然性が異なっていると考えられる)。しかし、Skinner はパーソナリティの研究よりも、言語行動や潜在的コミュニケーションの研究にその有用性を見出し、専ら後者の研究のために Verbal Summator を活用したといわれている (Rutherford, 2003)。

2) Tautophone (Shakow & Rosenzweig, 1940) 本 APT は Skinner とは別の研究者が Verbal Summator を性格検査として発展させたものである。接頭語の“tauto-”は「同じことを繰り返す」の意で、被検者に音声を繰り返し聴取させたことによる。反応を量的に分析するスコアリング・システムも作られ、後続する研究もいくつか見られたが、その後広く用いられるまでには至らなかった。なお、本 APT の研究者の一人であった Rosenzweig は、その後、P-F Study の開発研究に力を注いだことで知られている。

3) Auditory Apperception Test (Stone, 1950) 本 APT は、自然音や会話などから成る 3 つの聴覚刺激を被検者に提示して、1 つの過去 - 現在 - 未来

に渡る物語を作らせるもので、その名の通り TAT の聴覚版に近いものであった。物語の内容面に加えて、物語作成における 3 つの刺激の配列（3 つの音を提示順序の通りに過去 - 現在 - 未来に配置するかどうか）などの形式面、元の刺激からの歪曲の程度などの認知面から分析・解釈したとされるが、文献が少ないため詳細は不明である。

4) Auditory Apperception Test (Ball & Bernardoni, 1953) 本 APT は、2 つの聴覚刺激を被検者に提示し、1 つ目の刺激（足音）で登場人物のパーソナリティなどを決定させ、2 つ目の音で物語を作らせるものであった。さらに、ロールシャッハ法の質疑 (Inquiry) に近いことも行っており、ロールシャッハ法（あるいはハンド・テスト）と TAT の両方を取り入れた形で、総合的に被検者のパーソナリティを把握しようとした。独特の実施手続きが興味深いが、後続する研究は見当たらなかった。

5) Azzageddi Test (Davids & Murray, 1955) 本 APT は樂觀、信賴、社会中心性 (sociocentricity)、悲觀、不信、不安、怒り、自己中心性という 8 つの属性のうちどれかを中心に持ち、かつ、他の属性も少しずつ備えているような会話を被検者に聴かせ、その後、会話の内容について再生させるものであった。再生された内容や、各要素のまとめ方および関連づけの仕方などから解釈を行ったようであるが、本 APT も後続する研究が見られなかった。なお、Murray は本 APT よりも前に TAT を考案していたことで知られている (Morgan & Murray, 1935)。

これらの他にも、視覚障害者のための心理アセスメントとして発展した APT (Braverman & Chevigny, 1952 ; Husni-Palacios & Palacios, 1964) や、音楽を用いた自由連想法に近い Van den Daele (1967) による Music Projective Technique (以下 MPT と略記) など、多種多様な APT が考案されていた。

(2) 本邦における APT 研究

1) 音の TAT (水口・佃, 1955) 本 APT は、Murray の欲求 - 圧力理論をもとに、楽音と騒音、声音の 3 種類による 1 分間程度の聴覚刺激を 10 個作成し、TAT と同様に物語作成の手続きで実施するものであった。TAT の白紙 (カード 16) に相当する聴覚刺激 (無関係の物音や声音をランダムに並べたもの)

まで作成した点でも、TAT の聴覚版を目指した APT であった。刺激中の言葉は 1 つの刺激において 1 文か 2 文にとどめられ、かつ、抑揚のない平板な調子で発音されていたという。また、中島（1959）はこの APT について、TAT やロールシャッハ法、YG 性格検査、P-F Study、SCT などと共に実施し、事例的検討を試みている。しかし、いずれの研究においても被験者の人数が少なく、結果を一般化することができない問題を残している。

（3）近年の APT 研究

1) 聴覚投映法（松井，1980） 松井は、聴覚イメージの鮮明度および聴覚的現実検討と、統合失調症における幻聴生起の関連について、Shakow & Rosenzweig（1940）の Tautophone に類似した APT を作成して検討を行っている。具体的には、女性による日常的話し言葉を録音し、周波数切除および白色雑音により了解度が 50%程度になるよう加工した 20 個の刺激を採用した。それを幻聴のある統合失調症患者 20 名と健常者 20 名に対してヘッドフォンで提示し、聴き取った内容を報告させ、かつ、それに対する自信の程度を 6 段階で評定させた。APT で聴覚的現実検討を測定した点が特徴的であり、松井も視覚的な認知機能と聴覚的な認知機能を区別して捉えた点で本論と一致するが、詳細な研究データは不明である。

2) 音の投影法（熊倉，1989） 熊倉は、TAT と同様に物語作成の手続きを取る投映法である絵画空想法（Phantasy Releasing Technique；以下 PRT と略記）と、その聴覚版として類似作成した APT の両方を大学生 34 名に実施し、同時に行った各刺激に対する印象評定およびインタビュー調査、後日に行った反応の比較により、聴覚刺激の特徴や有効性について考察している（次節で詳述する）。綿密に計画された研究であったが後に続く研究はなされておらず、また、PRT という現在ではほとんど用いられない投映法との比較であったためか、他の研究者が引き継ぐこともなかったようである。

3) Projective Test of Auditory Perception and Personality（Grace, 2003） 視覚障害者に実施可能な投映法として、ロールシャッハ法をモデルに作成された。有意味音声を含まない曖昧な、数秒程度の長さの聴覚刺激 20 個で構成され、その刺激を 1 つずつ実験参加者に聴かせ、「これは何ですか？」と質問す

るものであった。しかし、Grace の研究は各刺激に対する反応の多様性を示すだけにとどまっており、投映法としての有用性や妥当性は検討されていない。また、本論で挙げた先行研究の中では唯一、実際の聴覚刺激を聴くことができたが、電子音で構成されたものが多く感じられ、全体的に軽く、現実味のない印象であった。刺激に関しても実施法に関しても、改良や検討の余地が多く残された状態と考えられる。

表 1-3. APT の研究の歴史および提示する聴覚刺激による分類

年代	< 無意味母音つづり >	< 言語 >	< 音楽 >
1935			
	1936 Verbal Summator (Skinner)		
1940	1940 Tautophone (Shakow & Rosenzweig)		
1945	< 効果音その他 >		
1950	1950 AAT (Stone)		
	1951 ASAT (Wilmer & Husni)	1951 Auditory Recognition (Lazarus)	
	1952 APT (Braverman & Chevigny)		
	1953 AAT (Ball & Bernardoni)		1953 MPT (Cattel)
1955	1955 音の TAT (水口・佃)	1955 Azzageddi Test (Davids & Murray)	1955 MPT (Crocker)
	1957 AAT (梅津ほか)	1957 V - TAT (Lebo)	
	1959 音 TAT (中島)		
1960			
1965	1965 SAT (Bean)		
	1967 APT (Kramer)		1967 MPT (Van den Daele)
.	.	.	.
.	.	.	.
.	.	.	.
1980		1980 聴覚投映法 (松井)	
1985			
	1989 音の投影法 (熊倉)		
.	.	.	.
.	.	.	.
.	.	.	.
2000			
	2003 TAPP (Grace)		

※ 熊倉(1989)の表を改変。主に各 APT の初出を、文献が手に入る範囲で整理したものであり、その後も研究が行われたものもあるが 2016 年 3 月現在まで続いているものは見られない。

(4) APT が用いられなくなった理由と改善策

これまで多種多様な興味深い APT が考案されてきたことを概観してきたが、これらの APT がなぜ用いられなくなっていったのかという点は本論において非常に重要である。Rutherford (2003) や熊倉 (1989) は APT 研究を概観し、APT 研究が後退していった理由を考察している。これらに筆者の考えも含めると、以下の 6 つにまとめられる。

1) **最初の考案者 Skinner の立場** Skinner は Verbal Summator を性格検査として確立することにあまり興味を持たず、むしろパーソナリティを否定するような立場をとるようになったことで知られている。Rorschach や Murray が自身の考案した投映法の研究に多大な力を注いだことと比較しても、Skinner の APT に対する考えや態度が他の研究者たちに与える影響は小さくなかったと推察される。

2) **考案された時期の遅さ** 1940～50 年代に投映法の開発や研究が盛んになり、その後下火になっていく歴史の中で、APT の多くはその後期に考案されたため研究された期間自体が短かった。このため、APT の有用性や独自性が明確化される前に研究の流れが衰退していった可能性が考えられる。

3) **研究成果の共有の困難さ** 研究者が属する文化や使用言語などによって作成される聴覚刺激が異なり、研究成果の共有や相互利用がなされにくかった。1) や 2) の影響も重なり、大きな研究グループも生まれず、各研究者が単発的に研究を発表するだけにとどまり、発展につながらなかったと考えられる。

4) **得られる情報量の少なさ** 前提として聴覚刺激は、例えばロールシャッハ法における視覚刺激と比較すると、刺激の曖昧性と知覚の多様性の間の許容度が低い。つまり、視覚刺激においては曖昧性が高くても「あれにも見えるし、これにも見える」という知覚の幅が大きいのに対し、聴覚刺激においては曖昧性が高くても知覚の幅はあまり大きくならず、「何の音か分からない」という反応も生じ得る。結果として、聴覚刺激は視覚刺激よりも内容的な曖昧性を低めざるを得ず、投映水準もより対社会的態度（意識）の比重が高まる可能性がある。また、ロールシャッハ法のように、被検者が刺激の特徴にもとづいて自分の反応を説明することも、検査者が観察し推測することも困難であり、知覚や認知の側面を把握するには不向きと考えられた。TAT と比較しても、視覚障害

者への適用を除くと、あえて聴覚刺激を利用するに値するだけの有効性も明らかにされなかった。

5) 検査状況の統制の困難さ ロールシャッハ法や TAT の視覚刺激は一枚の図版にまとめられ、他の刺激が入り込むのを統制しやすいのに対し、スピーカーを通して聴覚刺激を提示する場合、検査室の外の足音や話し声、建物の外の鳥の鳴き声など周囲の音の影響を受けやすく、検査状況を統制するのが難しかった。当時はスピーカーの性能差も現代に比べて大きかったと考えられる。これらによって解釈の根拠が弱まり、結果として4) のように得られる情報の減少につながった可能性もあるだろう。

6) 検査道具の扱いにくさ 視覚刺激は紙にまとめられ、複製して共有するのも持ち運びもしやすかったのに対し、当時の技術水準では APT には大きな器具が必要であり、扱いにくい上に高価であったと考えられる。APT の有用性や独自性が明らかでない中で、あえてこのような検査道具を扱おうとする研究者は少なかったと推察される。

これらのうち、本論を進めるにあたって考慮しなければならないのは3) ～6) である。技術が進歩した現代であれば6) はあまり問題にならないだろう。5) に関しては、松井(1980) や熊倉(1989) のように、スピーカーではなくヘッドフォンやイヤフォンを用いることで解決するだろう。しかし、ロールシャッハ法や TAT のように、被検者と検査者が刺激をその場で共有して検査を進めることによって、被検者としては刺激に基づいた反応について説明がしやすく、被検者のその人らしい反応が産出されると考えられる。このため、本論ではスピーカーによる刺激提示を採用する。十分な広さの防音室を利用することができなかつたため、音源定位がしやすい高性能のスピーカーを用い、周囲の音の影響も検討することとした。3) と4) に関しても改善の工夫が必要である。たとえば、3) については文化差がより少ない、言語を含まない聴覚刺激の採用が、4) については知覚や認知に重点を置かない実施法の採用が、それぞれ考えられよう。

1-3 聴覚投映法の特徴

先行研究では、TATのように、被検者に聴覚刺激を提示してそれに基づいた物語作成を求める手続きによる APT が多く見られた。既述の通り、APT は知覚や認知の側面を捉えるには不向きなところがあり、刺激を認知した上での「解釈的な反応 (Frank, 1939)」からパーソナリティに迫る方が適していると考えられる。以下では、この物語作成の手続きを用いた水口・佃 (1955) や熊倉 (1989) による APT 研究を参考に、APT の特徴をまとめる。なお、これらは視覚を介した投映法との比較による想定であり、今後、研究を積み重ねて明確化していく必要がある。

(1) 刺激の特徴

1) 継時性 視覚刺激の場合には同時処理が重要であるが、聴覚刺激には時間軸があり、その知覚には継次処理を要する。被検者にとっては刺激の時間関係を容易に把握することができ、物語を作成しやすいだろう。しかしその一方で、刺激を聴いて物語を連想している際に、その連想とは異なる流れの刺激の変化が生じる場合もあり、つまり、刺激の継時性によって自由な連想が途切れてしまったり制限されたりすることもある (熊倉, 1989)。

2) 一過性 聴覚刺激は一度聴いたらなくなり、被検者はその短期記憶にもとづいて物語を作成しなければならない。つまり、刺激の提示中は上記の継次処理を行い、刺激の提示後は作業記憶で物語作成を行うことが求められる。これに加えて、TAT やロールシャッハ法における図版のように、被検者と検査者の間を仲介するものが刺激の記憶やスピーカーだけになるため、被検者によっては語りにくく感じる可能性がある。

3) 音の長さ 聴覚刺激に時間軸があることから、音の長さの要素が生じる。例えば、同じ笑い声であってもそれが短いときと長いときとで意味づけが異なり、また、短いか長いかの判断は被検者の主観でなされるものである。音量や音高などの音響学的特徴と共に、認知や反応に対して何かしらの影響を与える可能性がある。

4) 複雑性の低さ 聴覚刺激は一度聴いたらなくなり、視覚における同時処

理に比べて聴覚による同時処理には限界がある。前述の *Azzageddi Test* (Davids & Murray, 1955) のように被検者に再生課題を与える場合には複雑さを上げられるが、物語の作成可能性を維持するため、TAT 図版と比較して複雑性の低い刺激が採用される傾向があるように思われる。これに対しては、2, 3 個の刺激を聴かせて 1 つの物語を作成させたり、刺激の継時的な変化を大きくしたりするなど、内容よりも形式的な面で刺激の複雑さを調整する工夫が考えられるだろう。

5) 抽象化と内容の限界 聴覚刺激は視覚刺激に比べて、内容を抽象化する程度の幅が小さい。その上で、心理的侵襲性を適切な水準に抑えるため、表現できる、あるいは表現が許容される内容に限界がある。例えば、性的内容は心理臨床において重要な要素の 1 つとなり得るが、聴覚刺激での許容範囲は視覚刺激よりも小さい。

6) 背景の無規定性 聴覚刺激においても前景と背景（後景）を設定することができる。しかし、視覚刺激と比較して、継時性や一過性があることから、被検者の注意の大部分は前景に向けられ、背景に注意を向ける程度は低まる可能性が考えられる。結果として、背景音は曖昧に認知されることが多く、物語の中では比較的自由に意味づけを行うことができるだろう。背景に音がない聴覚刺激においてはそれ以上に自由度があることが予想される。

7) 時間の無規定性 刺激中に一日の中での時間帯や季節を感じさせる要素がない限り、時間や季節などの設定は曖昧であり、被検者がある程度自由に設定することができる。また、刺激中のある音と音の間に空白の時間がある場合、物語の中ではその空白の時間を長くも短くも設定することができる。

8) 空間の無規定性 程度の差はあれ、聴覚刺激は被検者に内的な 3 次元の世界（聴空間）を形成させる。音量の大小や音が聴こえてくる方向からその空間内のものの配置はある程度限定されるが、そのような聴覚での空間定位の正確さには限界がある。このため、被検者は聴空間にある人や物の位置関係を比較的自由に設定できると考えられる。

9) 人物の無規定性 聴覚刺激では人物の表情や属性、その場にいる人の数などが曖昧であり、被検者はこれらを物語に沿って設定することが可能である。また、空間の無規定性と相まって、本来は一人の人物の発話であるものが、別々

の人物の発話とされたり、逆に、本来は別々の人物の声であるものが一人の人物の声として物語に取り込まれることもあり得る。

10) 感情喚起 視覚刺激と比較すると、聴覚刺激は被検者の感情やイメージ、記憶を喚起しやすく（熊倉，1989），そのためにショックを引き起こしやすい可能性がある。この点は慎重に扱う必要があるが、逆に、ある刺激が特定の感情やイメージを喚起しやすいことが分かっている場合には、それを踏まえた反応解釈が可能になるだろう。

11) 受身性 視覚は積極的に視界を動かして周囲の情報を取り込むのに対して、聴覚は特定の方向を向かなくても周囲の情報を察知できる仕組みになっている。もちろん「聞き耳を立てる」というように積極的に知覚することもあるが、基本的には受身の感覚といわれている。また、視覚と比較すると聴覚は知覚対象に明確な区分がなく、選択的知覚を行うことが難しいと考えられる。さらに刺激の一過性もあり、被検者は一度刺激全体を取り込まざるを得なくなる可能性がある。被検者はこの受身での知覚の後、能動的に物語作成を行うことが求められるのであり、この視点は反応解釈において重要である。

12) 心理的侵襲性 聴覚刺激は受身的に被検者に知覚され、内的な感情やイメージ、記憶を刺激するため、被検者にとっては「聴覚刺激が直に入ってくる」というように体験されやすい可能性がある。そもそも投映法は一定の不安や退行を促進する要素を備えており、その検査状況における被検者の心理過程から、主に心理療法を行う上で役立つであろう情報を読み取る目的で実施される（馬場，1997）。不安状況での対処をアセスメントすることは重要であるが、投映法を実施して被検者が調子を崩すのは本末転倒であるため、APTにおける心理的侵襲性も慎重に扱う必要がある。

13) 視覚情報化 熊倉（1989）によると、被検者の多くが聴覚刺激を一度視覚情報に置き換えてから物語作成を行ったと報告したという。すべての刺激に対してそのような処理を行ったのかは不明であるが、視覚化することによって刺激の記憶を保持しやすく、物語も豊かになる可能性がある。この視覚化の処理にも得意不得意の個人差があると考えられるため、実施手続きの工夫によっては認知的側面の理解において手がかりとして活用できるかもしれない。

14) 刺激の取りこぼしや歪曲 聴覚刺激は一度聴くとなくなるため印象性

が高くなり、作業記憶の中で物語作成が行われるため、刺激の取りこぼしや加工、歪曲が生じやすいと考えられる。それらが生じる程度にもパーソナリティの個人差が表れる可能性がある。

(2) 反応の特徴

1) **刺激外の人物の導入** 上述の各種無規定性とも関連し、TAT に比べて刺激外の人や動物、物質などが物語に導入されやすく、導入人物が物語の主人公になることも多いと考えられる。これらの導入物には被検者の内的イメージが強く反映される可能性が高いため、この点は被検者のパーソナリティ理解を促進する材料となることが期待される。

2) **創造性** 上述の無規定性をうまく活用し物語を完成させることには、被検者の内的イメージの豊かさや創造性が反映されるだろう。聴覚刺激を視覚や他の感覚に拡張して知覚できることもこれに関連すると考えられる。

3) **自己言及** 聴覚刺激は一度聴いたらなくなるため、被検者は作業記憶の中で自身の記憶や過去の体験との照合を行い、物語を作成すると考えられる。TAT では自己の外部にある刺激の知覚と、自己の内部での連想を照合する過程になる (Rapaport, Gill & Schafer, 1968) のに対し、APT では自己の内部での過程が中心になる。このため、反応には被検者の内的過程が色濃く反映され、実際の自己体験を織り交ぜた反応が産出されやすいと考えられる。

4) **防衛機制** 感情喚起や心理的侵襲性、自己言及などの特徴から、被検者が聴覚刺激によって心理的に大きく揺さぶられる可能性があり、その結果として反応に防衛機制が表れることも予想される。防衛機制のアセスメントも性格検査の中では重要なものの1つであり、APT における表れ方を検討することには意義があると考えられる。

(3) 反応過程の特徴

投映法における反応過程についても、これまで多くの研究者によって取り上げられてきた。例えば、ロールシャッハ法に関しては、森田・高橋・高橋・杉村・中原 (2010) や藤岡 (2004)、鈴木 (2004)、Rapaport et al. (1968) を参考に、以下のようにまとめられる (図 1-2)。検査者に図版 (インクのしみ)

を手渡され、「これは何に見えますか？」と問われた被検者は、図版に目をやり（知覚）、それと自身の長期記憶を照合しながら、あれこれ似たものを探す（連想）。そのうち反応として不適切と判断されたものは振るい落とされ、「どのように言おうか」「検査者にどう思われるか」ということも含めて調整や判断がなされ、思いついたものを意識化し（概念形成）、答える（言語化）。その後、質疑段階で検査者から「どこが、どうしてそのように見えたのか教えてください」と求められた被検者は、なぜそのように見えたかを考え、説明を行う（合理化）。また、鈴木（2004）は、インクのしみという何にでも見立てられ得るものに関して「何であるか」を問われるロールシャッハ法と、絵や写真というすでに何ものであるものを見て「何が起こっているか」を問われる TAT を対比し、「ロールシャッハ・テストは比較的単純なものを広く探索しなければならないのに対し、TAT は、探索の範囲は狭いが、比較的複雑なものを入念に選別しなければならない」と述べている。つまり、ロールシャッハ法では人や動物、物などの中から自己に親近な対象イメージが、TAT では人間場面の中から自己に親近な状況イメージが、それぞれ触発される。この TAT の反応過程は、ロールシャッハ法との対比および鈴木（1997）を参考にすると以下のようにまとめられよう（図 1-3）。検査者に図版（絵や写真およびそれを合成・加工したもの）を手渡され、「この絵を見て物語を作ってください」と求められた被検者は、図版を見て（知覚）、それと自身の長期記憶を照合しながら、あれこれ似た場面状況を探す（連想）。そのうち反応として不適切と判断されたものは振るい落とされ、「どの視点で語ろうか」「どのように言おうか」「検査者にどう思われるか」ということも含めて調整や判断がなされ、思いついたものを意識化する（状況決定）。このときロールシャッハ法とは異なり、被検者は複数ではなく単一の反応に絞り込むことが求められる。それから登場人物や人物間の関係性、および過去から未来に渡る物語の展開を修飾し、物語として表現する（発話）。自発的な発話の後に、検査者から物語の過去や未来および人物の気持ちなどに関して問われれば、それに対して補足的に発話することもある。TAT では物語成立の決定因を問う質疑は行わず、知覚に比べて連想過程に重点が置かれている。

物語作成の手続きによる APT は、基本的には TAT に類似した反応過程が想定されるが、先述の聴覚刺激や反応の特徴から相違点も考えられる。まず、刺

激の知覚過程には継次処理を要し、刺激の一過性により知覚 - 連想過程から作業記憶 - 連想過程への移行が生じる。刺激を知覚し記憶する際に、視覚イメージ化が生じることもある（熊倉，1989）。ただし、聴覚刺激だけから場面状況を理解およびイメージすることは難しく、日常的にラジオ・ドラマを聴いている人でもない限り、慣れてもいないだろう。これは、臨床経験を積んだカウンセラーでも電話相談でクライアントを理解したり状況をイメージしたりするのに困難を感じることも通じる。これらの特徴をふまえると、APTには以下のような反応過程が想定される（図 1-4）。検査者に「これから流れる音を聴いて物語を作ってください」と言われた被検者は、音を聴きながら（知覚）、それと自身の長期記憶を照合しながら、あれこれ似た場面状況を探す（連想）。そのうち反応として不適切と判断されたものは振るい落とされ、「どの視点で語ろうか」「どのように言おうか」「検査者にどう思われるか」ということも含めて調整や判断がなされる。継時的に提示される刺激によってこの過程は適宜軌道修正されていき、刺激の視覚イメージ化もこの過程で生じると考えられる。聴覚刺激の提示が終わると、その作業記憶をもとに同様の連想や調整、判断を行い、思いついたものを意識化する（状況決定）。このとき TAT と同様に、被検者は複数ではなく単一の反応に絞り込むことが求められる。それから登場人物や人物間の関係性、および過去から未来に渡る物語の展開を修飾し、物語として表現する（発話）。自発的な発話の後に、検査者から物語の過去や未来および人物の気持ちなどに関して問われれば、それに対して補足的に発話することもある。TAT と少し異なり、APT では、刺激提示中は知覚過程に重きが置かれ、刺激提示後には連想過程に重きが置かれる可能性がある。また、連想のための参照物が作業記憶として被検者の中に保持されることから、内的作業の比重がいつも高まり、それが反応にも反映されると考えられる。

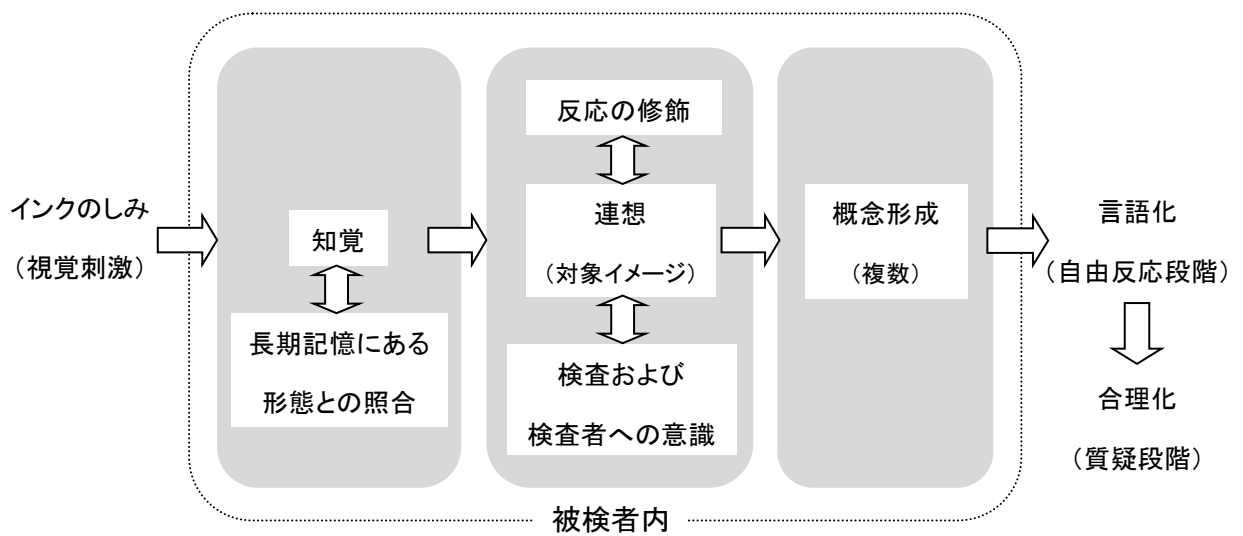


図 1-2. ロールシャッハ法における被検者の反応過程

※ 森田ら (2010) や藤岡 (2004), 鈴木 (2004), Rapaport et al. (1968) をもとに図示。
 実際には一方向的な過程ではなく、知覚 - 連想 - 概念形成の過程を行ったり来たりして最終的な反応に至る複雑な過程である。また、質疑段階では、検査者が反応をコード化するために質疑を行い、それに対して被検者が説明するというやり取りの中での反応となる。

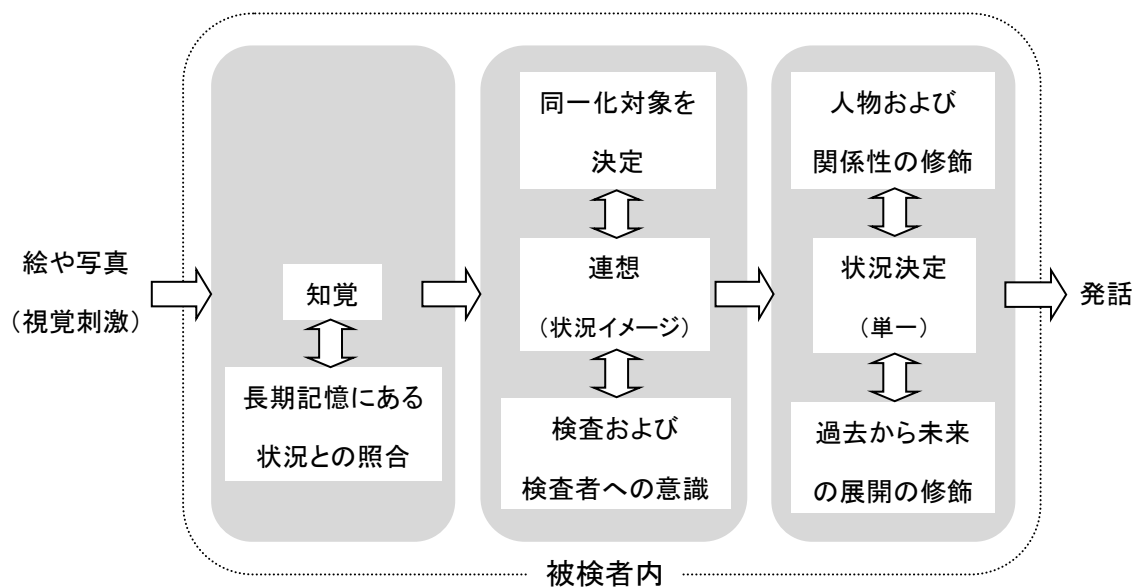


図 1-3. TAT における被検者の反応過程

※ ロールシャッハ法との対比，および鈴木（1997）をもとに図示。実際には一方向的な過程ではなく，知覚 - 連想 - 状況決定の過程を行ったり来たりして最終的な反応に至る複雑な過程である。また，被検者の自発的な発話の後，検査者は物語の過去や未来および登場人物の気持ちなどについて質疑を行い，それに対して被検者が説明するというやり取りの中で物語が明細化されることもある。

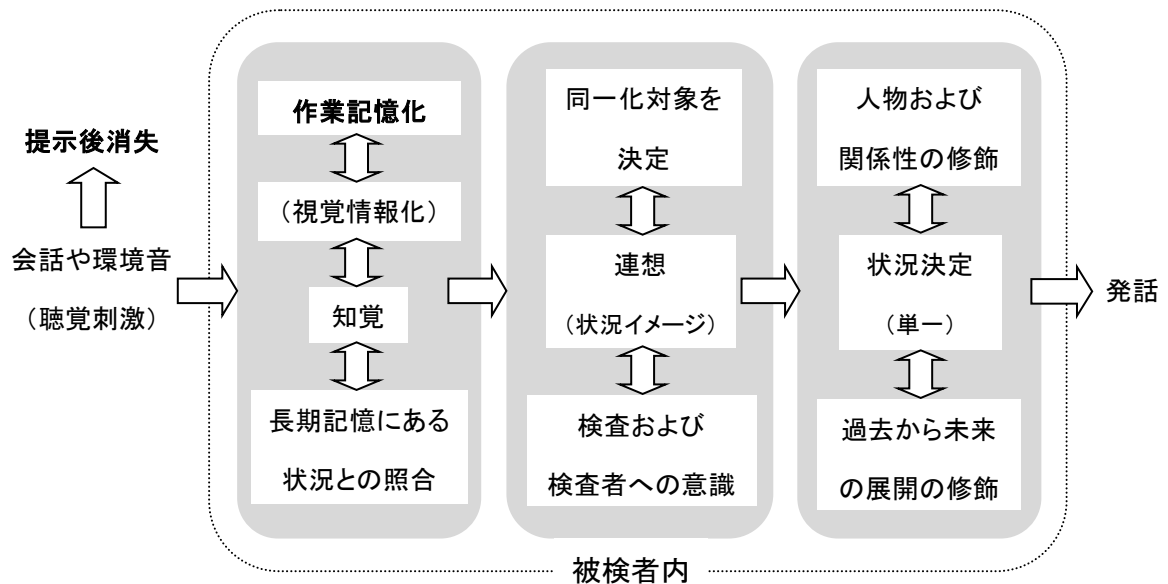


図 1-4. 物語作成の手続きによる APT において想定される被検者の反応過程

※ ロールシャッハ法や TAT における反応過程との対比から想定して図示。刺激提示後には刺激が聴こえなくなるため、刺激の作業記憶に基づく反応過程が想定される。視覚刺激に比べて聴覚刺激は人物等の無規定性が高いため、連想 - 状況決定 - 修飾の過程に創造性や思い切りのよさなどがより強く影響すると考えられる。また、APT においても一方向的な過程ではなく、知覚 - 連想 - 状況決定の過程を行ったり来たりして最終的な反応に至る複雑な過程と考えられる。被検者の自発的な発話の後、検査者は物語の過去や未来および登場人物の気持ちなどについて質疑を行い、それに対して被検者が説明するというやり取りの中で物語が明細化されることもある。

1-4 聴覚投映法の利用可能性

私たちは普段、視覚や聴覚をはじめとする感覚を意識的にも無意識的にも活用して生活している。その中でも私たちは視覚に最も頼っており、一般に、私たちが日常生活の中で得る全情報量のうち視覚情報が約7割を占めるといわれている。目に見えるものに比べて目に見えないものは非常に扱いにくい性質を持っているが、それでも決して他の感覚が重要でないということにはならない。聴覚は言語を成立させ、目に見えない周囲の状況や危険を察知する機能に優れ、ほぼ昼夜を問わずその機能が持続する。聴覚器官にある三半規管は平衡感覚も司っている。触覚にも周囲の状況を肌で感じ取る機能があり、スキンシップのように親密な対人関係とも関連する。嗅覚にも状況や危険を察知する機能があり、ある程度の時間経過があってもそれらを感じ取ることができる。また、味覚とともに食物や水などの毒性の有無を知るのに重要な役割を果たしている。そもそも視覚の重要性が増したのは近代になってからのことであり、歴史を遡るほど、人は視覚よりも聴覚や触覚、嗅覚、味覚といった感覚を優位に、より活発に用いていたと考えられている (Schafer, 1986 鳥越他訳 1986)。多くの文明や文化は、見えないものを何らかの創意工夫で扱えるようにするところから生まれてきたといわれることもある。このような視点からすると、聴覚は視覚よりも原始的な感覚といえよう。

さらに、心理臨床において実施されている WISC や WAIS など多くの知能・発達検査や、LD の認知機能を測定する ITPA は視覚的能力と聴覚的能力を分類して測定しており、聴覚的能力の方が高い人の存在が想定されている (上野・松田・小林・木下, 2015 ; 藤田・前川・大六・山中編, 2011 ; Kirk & Kirk, 1972 三木・上野・越智共訳 1984)。イメージ研究の分野においても、たとえば過去の体験を思い出す際に人の表情や服装などから思い浮かぶか、人の言葉や声などから思い浮かぶかなど、個人によって特定の感覚に優位性が見られることが知られており、表象型の1つとして聴覚型が位置づけられている。これに対して、心理臨床で実施されている投映法はほとんどが視覚を用いたものである。触覚刺激によるロールシャッハ法や、P-F Study の刺激文を音読した録音によって提示する実施法など、文献としては散見されるが、現場での活用には至つ

ていない。

ここまでに見てきた APT の特徴も含めて考えると、APT には、視覚障害者への適用に加えて、被検者の感情やイメージ、記憶と関連する内的過程や、原始的な心理過程を映し出す可能性、および、視覚的能力よりも聴覚的能力が高い人の豊かな反応を引き出す可能性が秘められている。また、心理臨床においてテスト・バッテリーを組み立てる際にも、WISC などのように、多様な感覚に焦点をあてた検査を組み合わせる方が、被検者のパーソナリティについてより豊かな情報を引き出すことができるだろう。

第一章のまとめ

本章では、まず、今日の心理臨床において活用されている投映法について、質問紙法との対比からその特徴や問題点を整理し、投映法の歴史や分類を概観した。その上で、本論で取り上げる APT の歴史を概観し、研究がなされなくなっていった理由について考察した。APT は、①最初の考案者 Skinner が性格検査としての開発に関心を持たず、②投映法の歴史の中でも考案された時期が遅かった上に、③文化差の影響からも研究成果の共有が困難であり、研究が十分に行われて来なかった。また、④ロールシャッハ法に比べて APT は知覚や認知について情報を得るのが難しく、TAT ではなくあえて APT を採用する利点も十分には見出されなかった。さらに、視覚を介した投映法に比べて、⑤ハード面とソフト面の両方で検査状況の統制が困難で、⑥当時は検査道具も扱いにくく高価であったと考えられた。これらの問題点は、音響技術が進歩し、投映法研究が積み上げられてきた現代であれば対処可能性が増しているといえよう。次に、先行研究において採用されることが多かった物語作成の手続きによる APT に焦点をあて、視覚による投映法との対比から刺激や反応および反応過程の特徴について考察した。TAT に比べて、聴覚刺激は提示後に知覚できなくなるため、刺激の作業記憶に基づいて連想 - 状況決定 - 物語の修飾という過程が進行することや、聴覚刺激は視覚刺激に比べて登場人物などを規定する程度が低いいため、連想 - 状況決定 - 物語の修飾の過程に投映が現れやすいことが APT の特徴として考えられた。最後に、聴覚心理学やイメージ心理学、知能・発達検査との対比から APT の利用可能性についても言及した。

第二章

本研究の目的

2-1 聴覚投映法研究における問題

第一章では APT 研究の歴史を概観し、Rutherford (2003) や熊倉 (1989) を参考に、APT が用いられなくなった理由について整理を行った。改めてその理由を挙げると、①最初の考案者 Skinner が性格検査の開発に関心を持たず、②投映法の歴史の中でも考案された時期が遅かった上に、③文化差の影響からも研究成果の共有が困難で、APT に関する研究が十分に継続的に行われなかった。また、④ロールシャッハ法に比べて APT は知覚や認知について情報を得るのが難しく、TAT と比べても、あえて APT を利用するに値する根拠が示されなかった。さらに、視覚を介した投映法に比べて、⑤検査状況の統制が困難で、⑥当時は検査道具も扱いにくく高価であったと考えられる。これらのうち、技術が進歩した現代であれば⑥はあまり問題にならないだろう。⑤に関しては、松井 (1980) や熊倉 (1989) のようにヘッドフォンを用いることで解消する部分はあるが、ロールシャッハ法や TAT のように、被検査と検査者が聴覚刺激をその場で共有することを重視する立場から、本論ではスピーカーによる刺激提示を採用することにした。音源定位がしやすいような高性能のスピーカーを用い、周囲の音の影響を検討したい。③については文化差の少ない聴覚刺激を採用することによって、④については認知面の把握に重点を置かない手続きの採用によって、それぞれ改善が可能であると考えられた。

これらの理由とも関連し、これまでの APT 研究の多くは、各研究者が独自に APT を開発して単発的に成果を発表するだけにとどまっている。つまり、いずれの研究においても、APT の有用性や可能性を議論するには、もとななるデータが少ないといわざるを得ない。ロールシャッハ法や TAT、バウム・テストなど他の投映法においては、現在進行形で実践データが積み上げられており、そのような積み上げによって各投映法の有用性や妥当性が保証されている。APT

には、聴覚的能力が高い人の豊かな反応を引き出す可能性や、感情やイメージ、記憶など被検者の内的過程を色濃く映し出す可能性、テスト・バッテリーの1つに加えることでより多面的なパーソナリティ理解を導く可能性が想定され、さらに APT は視覚障害者に適応することができる性格検査としても発展の可能性を秘めている。この APT においても、特定の刺激と手続きによるものを用いた一連の研究を行ってこそ、その真価を明らかにすることができるだろう。

2-2 聴覚投映法の実施法と刺激

(1) 実施法について

先行研究では様々な手続きによる APT が考案されていたが、その中でも TAT のような物語作成の手続きによる APT が大半を占めていた (第一章)。たとえば、Verbal Summator や Tautophone のように、被検者に曖昧な聴覚刺激を聴かせて「何に聴こえますか」という問いに答えさせるところまでは可能だが、産出された反応について「この音のどの部分が、どうしてそのように聴こえたのか教えてください」と質疑を行っても、被検者は具体的に説明するのが困難に感じるだろう。つまり、ロールシャッハ法に比べると APT は知覚や認知の側面を映し出すには不向きと考えられる。このため、TAT のように、知覚よりも連想過程の方に焦点をあてた手続きが採用されることが多かったのだろう。

TAT においては「どんなに微弱であっても、その人物にならないかぎり、その人物の意図や感情は語れないのである。それで、その人物について語られたことは、その人自身を表している、すなわち、その人物の言動や気持ちは語り手のものでもある (鈴木, 2006)」と考えられ、TAT は「物語内容から、被検者の実際にした経験をうかがい知る道具ではなく、実際の経験をもたらすもの—これらを『内的枠組み』といっても、表象モデルといっても差し支えない—の存在を推測させたり、予想させてくれたりする手段 (鈴木, 2011)」である。この内的枠組みや表象モデルは、精神分析における対象関係とも概念的に重なると考えられる。また、「物語を作るという課題は、図版の絵を単に『知覚する』ことだけではなく、知覚した対象への主観的な関与を、言い換えれば、理解、推測、想像、判断、解釈などの複雑な心理的過程の働きを要求している (太田,

1995)」といわれ、過去 - 現在 - 未来に渡る物語作成という反応には被検者のパーソナリティが豊かに反映され得る。さらに、Murstein (1963) によると、「投映」は4つに分類される。すなわち、①古典的あるいは精神分析的投映（自我が脅威を感じた対象を自分以外のものに帰属させる、防衛機制の1つとしての投映）、②帰属的投映（自分自身の動機や感情や行動が他者にもあてはまると考えること）、③自閉的投映（知覚が、個人の欲求によって強く影響され、知覚対象の形態面がその欲求と合致するように変容させられること）、④合理化的投映（行動内容については意識しており、その行動の責任を他者に帰属させる投映）である。Murstein (1963) は、それぞれの投映法にはこれらの概念のいずれかが使われているが、TATにおいてはこれらのいずれも現れることがあると述べている。以上のことは物語作成の手続きによるAPTにもあてはまり、反応から被検者の対象関係や心理過程の在り様を読み取ることができると考えられる。

（2）刺激について

今日、心理臨床で用いられている投映法の中で、被検者に対して特定の刺激を提示するものは、ロールシャッハ法やTAT、SCT、P-F Study、ソディ・テストなどが挙げられる。CATやK-SCTなど、これらの改良版もあるが、いずれも考案時の研究資料の入手が困難であり、刺激選定の経緯や根拠が不明確なものも多い（表2-1）。おおまかにまとめると、ロールシャッハ法やTATは多くの図版の中から臨床的有用性を基準に選定を行い、また、言語連想検査やSCTも同様に選定が行われたが、選定は暫定的なものとなされ、実施者が目的に応じて刺激語や刺激文を変更できるようになっていた。これらに対し、P-F Studyは統計的な妥当性や信頼性を基準に選定が行われたと考えられ、逆にハンド・テストなど刺激の選定が行われなかった投映法もあったようである。他方、刺激選定直後の投映法の有用性に関する研究の大半は、健常群と病理群の比較による診断的妥当性の検討であった（たとえばRorschach, 1921, 1954 鈴木訳 1998）。刺激選定における臨床的有用性の判断にも、この診断的妥当性の要素が含まれていたと考えられる。

表 2-1. 既存の投映法における刺激選定の経緯および基準

投映法	刺激	刺激選定の経緯および基準
ロール シャッハ法	左右対称の インクのしみ	Rorschach が、自作した 40 枚以上の図版の中から、臨床的により有用であると判断された 10 枚を選定。15 枚から 12 枚、10 枚と徐々に枚数が絞られていった。
TAT	様々な場面を 描いた絵画	Murray が、数百枚の絵画の中から物語性、状況性、感情移入性の 3 要件を基に選抜し、さらに臨床的有用性の検討により 30 枚の絵画と白紙を選定した。
SCT	短い刺激文や 未完成文章	Ebbinghaus が知的統合能力を測定する道具として利用したのが始まり。その後はそれぞれの研究者が目的に合わせて刺激文を選択し、精緻化している。
P-F Study	欲求不満場面を 描いた漫画風の 絵	Rosenzweig が作成したものを、日本文化に合うように修正したものが臨床的に用いられている。投映法の中でも特に統計的な妥当性や信頼性の検討および標準化がなされており、その評価検討に堪えた刺激が選定されている。
ゾンディ・ テスト	精神疾患患者の 顔写真	Szondi が、自らが関わったケースや、他者の論文などの中から顔写真を選び、その好悪について研究する中で妥当な刺激を選定した。
ハンド・ テスト	手の絵	Wagner が最初に描いた 9 枚の絵と白紙が、ほぼそのまま採用されている。様々なポーズをとっている「手」を描いたとされている。
カロ・ テスト	左右対称の インクのしみ	片口らが、Rorschach による平行シリーズの作成法にもとづき、ロールシャッハ法の図版と等価性の高い図版を 10 枚選定した。
絵画 空想法	様々な場面を 描いた絵画	槇田らが、①「交差点」をメタファーとして提示するもの、②反応の自由度が高いものという 2 つの基準から、19 枚の絵画と白紙を選定した。TAT の現代版・日本版として、TAT との等価性も意識されている。
言語連想 検査	単語	Jung が、100 語からなる刺激語のリストを作成した。連想の多様性や臨床的有用性によって選定されたと考えられる。
SCT-B	短い刺激文と 接続詞「が」	小林が、先行研究や直観により刺激を選定した。ただし、「最初の刺激文ではあるが絶対的なものではない」とし、研究者が目的に合わせて刺激を選択する利点を残している。

(3) 本研究における APT の実施法と刺激

本論では、被検者のパーソナリティを包括的に映し出し、かつ、心理臨床における利用可能性を重視する視点から、精神病理（以下、病理と略記）に関連するパーソナリティをも映し出すことができる APT を想定する。先行研究を参考に、被検者に聴覚刺激を提示してそれをもとに物語作成を求める実施法を採用し、それに適した聴覚刺激の作成と選定を行う。その際、刺激の曖昧性や多義性と物語の作成可能性のバランスに配慮する。また、本論では APT を心理的支援に役立つ情報を収集する心理アセスメントの一道具として位置づけるが、特に APT の有用性や心理的侵襲性についての検討が十分でないうちは倫理的配慮から臨床群への実施を避けるべきと判断し、他のパーソナリティとの関連を有用性の一指標として刺激の選定を行うこととする。

2-3 反応を分析する指標

鈴木（2004）によると、ロールシャッハ法の刺激はインクのしみであり、被検者から見て作成者の意図が加わっていない点で共通し、同質とみなされるため、量的分析が意味をなしている。これに対し、TAT の刺激は絵や写真であり、作成者の意図が含まれているため同質とはいえず、「それぞれの絵（写真）に対して作られる物語も、作成者の意図に多かれ少なかれ制約されたそれぞれ異なった種類のものにならざるをえない」という。実際に、TAT の量的分析はあまり行われておらず、各図版の特徴や反応傾向を照合して反応を質的に分析し、解釈することが多い。

また、鈴木（2004）は物語の内容面（何が物語られているか）の量的分析には限界を設定しているのに対し、物語の形式面（物語がいかにかに語られるか）は多くの物語に共通して認められる可能性があるため、量的分析が可能であるとも述べている。さらに、山本（1992）は、TAT 物語の特性が精神医学的分類診断を可能にするか、攻撃的行動のアクティング・アウトを予測するサインを提供しうるか、という視点から研究を概観している。その結果、TAT の内容的特性では不可能であるが、形式的特性（検査状況、図版刺激特性の知覚の仕方、語り口など）は、病態水準の大まかな分類を行う限りにおいて有効であるとし

ている。その一方で、山本（1992）は、TATでその形式的特性を量的に測定しようとすることの限界と、ロールシャッハ法に類似した分析に近づこうとすることへの懸念から、TATの持ち味である内容分析を中心に据え、そこに形式的特性を加味する接近方法を提唱している。太田（1995）も「語り手を理解するためには、何が語られているのかということと同様に、いかに語られているのかという形式的側面に注目することも重要である」としている。

筆者も鈴木（2004）や山本（1992）らの考えに賛同する。しかし、APTにおいて、質的分析や物語の内容と形式の両側面に着目する接近方法をより効果的に行うためには、形式面を含む諸指標が反応の分析および解釈においてどのような意味を持ち得るか明らかにしておく必要がある。また、質的分析および解釈のみに頼ると検査者の主観に偏ってしまい、誤った心理アセスメントや不適切な心理的支援を導いてしまう可能性もある。量的客観的分析を加味することによって、そのように間違った方向に進むのを防ぐこともできるだろう。

以上から、本論では、量的分析の限界をふまえつつ、諸指標がパーソナリティのどのような側面を映し出すのか、およびその妥当性について検討する。指標としては、TATで用いられる指標をAPTでも用いることができるように変更・修正を加えたものと、APTの特徴（第一章）から考えられる独自の指標を採用する（内容については第三章、第四章で詳述する）。なお、本論ではそれらを内容面・形式面・認知面に分類する。この3側面は相互に関連するものであり、認知面の指標は研究者によって形式面に吸収されることもあり、自己体験や主観的印象への言及は内容面にも形式面にも分類され得る。第一章で想定したAPTの反応過程と照らし合わせると、聴覚刺激を知覚し長期記憶と照合する過程は認知面の指標に、知覚した刺激から状況イメージを連想し物語の概要を決定する過程は内容面の指標に、反応として物語を言語化する過程は形式面に、それぞれおおまかに対応すると考えられる（図2-1）。

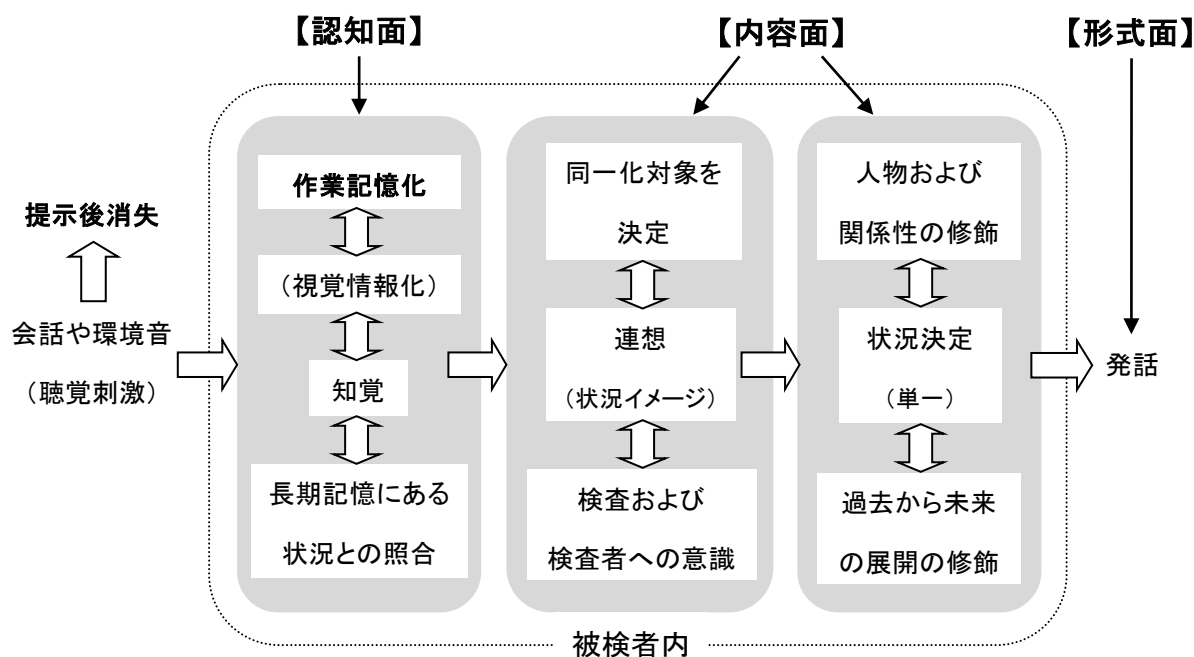


図 2-1. 本論の APT において想定される反応過程と指標の 3 側面の対応

※ 内容面は連想 - 状況決定 - 物語の修飾の過程に，形式面は発話の様式に，認知面は知覚および記憶の過程にそれぞれ焦点化したものと捉えられる。ただし，この反応過程は一方向的なものではなく，行き来しながら進む複雑な過程であると想定されるため，指標の 3 側面に関しても相互に関連すると考えられる。

2-4 本研究の目的と構成

本論では、物語作成の手続きによる 2 種類の APT を開発し、反応を分析する諸指標と他のパーソナリティとの関連を量的に分析することにより、APT の有用性や可能性、および妥当性を検討することを目的とする。また、どのような聴覚刺激や指標が、どのようなパーソナリティの側面を測るのに有効であるのかということについても明らかにする。APT の利用可能性や、APT が映し出すことのできるパーソナリティの側面および水準などが明らかになれば、APT は心理臨床におけるテスト・バッテリーの選択肢の 1 つに加えられ、より多面的な心理アセスメントを実施することが可能になると考えられる。心理アセスメントを充実させることは、より適切で効果的な心理的支援を行うことにつながり、この点に本研究の臨床的な意義を見出すことができるだろう。

本論の構成は以下の通りである (図 2-2)。第一部では投映法の一つである APT の歴史や先行研究を概観し、現代において APT 研究を行う上での問題や意義を述べた。これを受けて第二部では、2 種類の聴覚刺激による APT を開発し、それらが他のパーソナリティの指標とどのように関連するかを検討する。1 つは葛藤を喚起しやすい会話場面を中心とする音声刺激による APT であり (研究 1)、もう 1 つは葛藤を喚起しにくい、言葉以外で人が発する音や環境音を中心とする非音声刺激による APT である (研究 2)。関連を検討する他のパーソナリティとしては、Big Five を取り上げる。Big Five とは、主に健常者のパーソナリティを外向性 (内向性)、協調性 (調和性)、勤勉性 (誠実性)、情緒安定性 (神経症傾向)、知性 (経験への開放性) の 5 次元で捉えるモデルであり、APT の有用性や可能性を幅広く検討する本研究の目的に合致していると考えられる。また、音声刺激よりも曖昧さの高い非音声刺激による APT については、投映法の中でも心理臨床で活用されることが多いロールシャッハ法との関連も検討する (研究 3)。これによって APT がパーソナリティの非意識的な側面を映し出すことができるか否か、1 つの知見を得ることができるだろう。以上の 3 つの実証研究の結果をもとに、研究 4 では音声刺激と非音声刺激の中から有用と考えられる刺激を選定し、両者を組み合わせた APT を構成する。本論の APT はこれをもって完成版とし、続く研究 5 では形容詞対による印象評定

や音響学的分析により刺激自体の特徴について明らかにし、研究6では研究1, 2の評定値を整理し直すことにより反応の特徴を明らかにする。この刺激の特徴と反応傾向は、今後の量的分析や質的分析を行う際の1つの客観的な根拠となることが期待される。さらに第三部では、この完成版APTが、青年期の心理臨床において出会う可能性が高い自己関係づけ（研究7）や対人恐怖心性（研究8）とどのように関連するかを検討する。これらの関連から、APTの心理臨床における利用可能性について考察していく。最後に第四部では、この一連の研究をまとめ、完成版APTがパーソナリティのどのような側面を映し出すかを考察し、反応過程や指標の観点からも整理を行い、今後のAPT研究の課題や展望を述べていく。

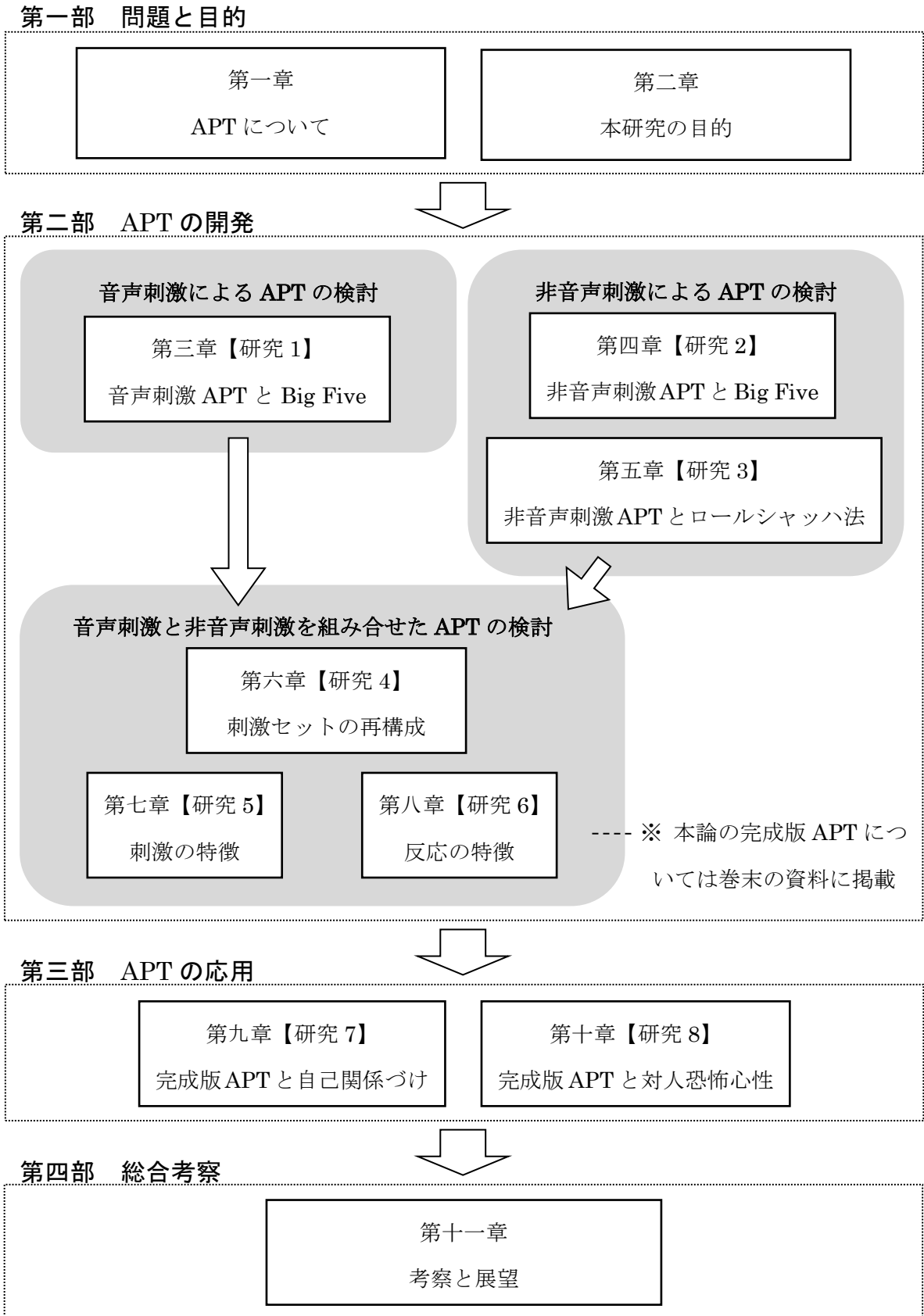


図 2-2. 本論の構成

第二章のまとめ

本章では、最初に、APT が用いられなくなっていった歴史から、APT 研究において考慮すべき問題について整理した。APT の有用性や可能性を検討するためには、実施法の工夫や、特定の実施法による APT 研究の蓄積が重要であると考えられた。そこで本論では、包括的なパーソナリティも、病理に関連するパーソナリティも映し出すことができる APT を想定し、得られる情報の豊かさから聴覚刺激を提示して物語作成を求める実施法を採用した。聴覚刺激に関しては、刺激の曖昧性や多義性と物語の作成可能性のバランスに配慮して作成し、他のパーソナリティとの関連から選定を行うことにした。また、反応（物語）を分析する指標としては、量的分析の限界をふまえつつ、内容面・形式面・認知面の指標を採用した。これらは TAT 指標を APT でも活用できるように変更・修正したものや APT 独自の指標から成り、他のパーソナリティとどのように関連するか検討を行う。本論はこのように独自に開発した APT の有用性や可能性、および妥当性を検討することを目的とし、最後に、4 部 11 章および 8 つの実証研究から成る本論全体の構成を示した。

第二部

聴覚投映法の開発

第三章

【研究 1】 音声刺激による聴覚投映法と Big Five の関連

3-1 問題と目的

第一章と第二章では、投映法研究と APT 研究を概観し、現代において APT 研究を行う上での留意点や臨床心理学的な意義、および APT の特徴について整理を行ってきた。以降の章では、実際に 2 種類の聴覚刺激を作成して APT を実施することにより、APT の性格検査としての有用性や可能性および妥当性を実証的に検討していく。聴覚刺激では、ロールシャッハ法のように刺激のどの部分にどのように反応したのかを詳しく把握することが難しく、TAT のように知覚よりも反応の在り様に焦点を当てる方が適していると考えられるため、本論では、実施法として物語作成の手続きを採用する。この実施法に関しては、今後 APT 研究を積み重ねていく中で、あるいは音響技術の進歩によって、修正・変更される可能性もあるだろう。

本章では 1 つ目の APT の開発を行う。TAT における刺激（図版）の特徴を参考に、葛藤的な会話場面を含む聴覚刺激（以下、音声刺激）を作成し、音声刺激による APT が投映法として有用であるか検討することを目的とする。反応を分析する指標に関しても、TAT 指標や APT 独自の指標などを幅広く採用し、どのようなものが有効であるか探索的に検討を行う。APT 指標の比較対象としては Big Five を取り上げ、本章の APT がパーソナリティのどのような側面を映し出すのか、作成した聴覚刺激にはどのような特徴があるのかについても併せて考察していく。

(1) Big Five について

Big Five とは外向性（内向性）、協調性（調和性）、勤勉性（誠実性）、情緒

安定性（神経症傾向）、知性（経験への開放性）の 5 因子で、健常者のパーソナリティを幅広く捉えるモデルである。Big Five は近年世界的にも多く取り上げられてきているが、投映法との関連を検討した研究はまだ少ない（たとえば 澁上・中村・津川・佐藤，2004）。投映法研究の歴史を遡ると、Big Five モデルが構成され研究が盛んになるよりも前に、向性などの基本的なパーソナリティとの関連は既に研究が蓄積されており、その上で現代では投映法の多くが病院や特定の施設などにおいて用いられているため、診断や不安、問題行動など、より臨床的で限定的な比較対象が選ばれやすくなっていると考えられる。他方、本論においては診断や不安、問題行動などとの関連を検討する前に、APT がパーソナリティを測定する道具として有用であるか否かを明らかにする必要がある。このため、Big Five と比較することによって、APT の有用性や可能性を幅広く検討することができると考えた。

3-2 予備実験の目的

葛藤的な会話場面を含む聴覚刺激を作成し、有効な刺激を選定することを目的とする。刺激の提示順序や APT の実施手続き、教示についても検討を行う。

3-3 予備実験の方法

実施時期 2004 年 8 月の日中 9:00~18:00 の間に実施した。

実験参加者 大学生 9 名（男性 6 名，女性 3 名）を対象とした。

聴覚刺激 本学サークルや知人親子の協力を得て、TAT 図版を参考に筆者が用意した会話場面を録音した。市販の効果音集（出典参照）からも素材を収集し、上記の録音と合成したものも含めて 30 個程度の刺激を用意した。Stone (1950) が Auditory Apperception Test において 3 つの音に対して 1 つの物語作成を求めたのを参考に、2 つの音に対して 1 つの物語作成を求める刺激も準備した。これらの刺激の中から、選定のために 15~20 個の間で入れ替えを行いながら用いた。

手続き 実験室において、参加者に予備実験の主旨を説明し、協力の同意を

得た上で APT を実施した。教示は TAT を参考にし、参加者に刺激を聞いて思い浮かんだ、過去・現在・未来および登場人物の気持ちを含む物語を話してもらった。後で詳しく分析するために参加者の了承を得た上で実験の様子を録音した。実験者は参加者の反応を紙に記録しながら、参加者の語りに耳を傾けた。なお、実験者と参加者の座席の配置（90 度，180 度，対面）は随時変更しながら行った。APT の実施後には参加者の感想や意見を聴取した。

3-4 予備実験の結果と考察

参加者の感想や意見、および反応の多様性に基づき、17 個の聴覚刺激を選定した（表 3-1）。実施全体が 1 時間程度で終わることを目安にし、第 2～16 刺激を中心に、参加者が比較的容易に物語を作成できていた第 1 刺激と第 17 刺激を補足的に配置した。提示順序については、同一人物が台詞を言っている刺激が連続しないよう考慮した。同一の演者の刺激が連続した場合、2 つ目の刺激に対する物語が 1 つ目の刺激に対する物語の続きになるなど、刺激間の影響が強くなるのが予想されたためである。さらに、刺激や反応が比較的単調なものから複雑なものへと推移するように配列した。これは参加者の話しやすさや実験状況への慣れを考慮したためであり、2 つで 1 セットの刺激も後半の第 10 刺激と第 15 刺激として配置した。

予備実験における反応は現実的な内容が多く、本研究の刺激は全般的に日常場面を想起させやすいと考えられた。このため、より空想的な物語も引き出すことができるように、坪内（1997）を参考に教示内容を若干修正した。具体的には、教示の後半に「ちょうど、物語の一場面が先にできてしまって、それに短いお話しをつけなくてはならなくなった小説家のような気持ちで、頑張ってみて下さい」という内容を追加した。

APT においては刺激が一度聞くとなくなってしまう。参加者にとっては、特に刺激を聞いてから物語を語り始めるまでの間、ロールシャッハ法や TAT のように実験者との間に仲介できるものがなく、実験者からの圧力を感じ得る状況のようであった。このため、座席は参加者の話しやすさを考慮して 90 度で向かい合う配置に決定した。

表 3-1. 聴覚刺激の提示順序と内容および長さ

刺激	内容	長さ (秒)
1	静かな場所での会話: 女性 A「すみません, ここから駅に行くにはどうしたらいいですか?」、女性 B「ああ, すみません, 私もちょっと分かりません」。	8
2	賑わっているデパートで, 女声のアナウンスが入り, 以下の会話へ: 男の子「ねえ, あれ欲しいんだけど, 買ってー」、父親「えー, うーん, また今度ね」、男の子「えー買ってよー」。	30
3	静かな場所での会話: 男性 A「例の件, うまく行ったらしいな」、男性 B「ああ, 少々てこずったがね」、男性 A「ふん, さすがだ」、男性 B「ありがとう. こっちもほっと一安心だよ」。	10
4	いくぶん静かな場所での会話: 女の子「お母さーん, ちょっとこっち来てー」、母親「はい、<ブランク>、女の子「お母さん早く早くー」、母親「はい、今行くー」。	16
5	土砂降りの雨の中, 1 台の車が通り過ぎ, 以下の会話へ: 女性「やっぱマズイって...」、男性「お前, 今さら何弱気になってんだよ. もうやるしかないって分かっているだろ? さあ, 行くぞ!」、女性「あ, ちょっと待ってよ...」。	14
6	静かな場所での会話: 女性 A「ねえ, さっき彼と何話してたの?」、女性 B「何だっさいいじゃん, そんなこと...」、女性 A「えー, 教えてよー」。	8
7	静かな場所での会話: 男性 A「お前は, 何をしたのか分かっているのか! ?」、男性 B「はい, でも, あれは...」、男性 A「言い訳を聞きたいんじゃない! こんなことになって... お前どうするつもりなんだ! ?」、<ブランク>。	12
8	静かな場所で 3, 4 人の男女が一緒に泣いている。	24
9	高架下での会話: 女性 A「それよりさ, どこ行こっか?」、女性 B「どっか遠いところ... どうせなら海がいいな」。	25
10	①パーティー会場で, 1 人の走る足音が近づいて来て止まり, 以下の会話へ: 男性 A「準備はいいか?」、男性 B「オッケー」、<男性 A が息をつく>, 男性 A「よし, やるぞ!」、<数人が走り去る足音>。 ②静かな場所で, 1 人の男性が興奮を伴った荒い息をし, 最後に不思議な音(録音中に偶然入った, 形容しがたい音)が入る。	①26 ②12
11	賑わっているレストランで, ウェイターが新しい客を迎え, 以下の会話へ: 男性「あ, もうこんな時間だ. 僕そろそろ帰るよ」、女性「(小声で)後で電話するよ. (ふつうの声で)じゃあまた!」。	27
12	賑わっているレストランでの会話: 女性 A「...そっかあ...そりゃ辛かったね...」、女性 B「うん...」、<携帯電話の着信音>, 女性 A「あ, ちょっとごめん」、<携帯電話に出る>, 女性 A「あ, はいはい, どうしたの?え, うっそお! ?へえー...うん...うん, うん分かった! じゃあ, 明日ねー」、<ブランク>。	34
13	男性 A「ちょっとこっち来い!」、男性 B「あ, あんた何なんだって! ? ちよっ, 放せっておい! ちよっ, 誰か, 助けて!」。	7
14	いくぶん静かな場所での会話: 母親「そんなことしちゃいけないって, いつも言ってるでしょ! ?」、女の子「だって...」、母親「もうしないって約束する?」、女の子「はい」。	14
15	①静かな場所で 1 人の男性がいびきをかいて寝ている。 ②静かな場所で 1 人の女性がすすり泣いている。	①38 ②23
16	公園で子どもたちが遊んでいる中での会話: 父親「何ですかねてんの? ちゃんと言わなきゃ分かんないだろ?」、男の子「別にすねてなんかはないよ...」、父親「言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさい」、男の子「うん...」。	15
17	静かな場所での会話: 女性 A「あ, 私こっちだから」、男性「あ, うん, じゃあねー」、女性 B「またねー!」、女性 A「また!」、<3 人の歩く足音>。	13

※ 内容は作成時の想定であり, 参加者により必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない
 ˆ: 2 つの刺激に対して 1 つの物語作成を求めるもの

3-5 本実験の目的

予備実験で選定した刺激を用いて APT を実施し、Big Five との関連を探索的に検討することにより、APT の有用性や可能性、聴覚刺激や反応を分析する指標の特徴を明確化することを目的とする。

3-6 本実験の方法

実施時期 2004 年 9～11 月の日中 9:00～18:00 の間に実施した。

実験参加者 大学生・大学院生 60 名（男女とも 30 名）を対象とした。

聴覚刺激 予備実験で選定した 17 刺激を用いた。

質問紙 村上・村上（2001）の主要 5 因子性格検査を採用した。全 70 項目について「はい／いいえ」の 2 件法で回答を求めた（資料 1）。

手続き 実験室において、実験者と参加者は机を挟んで 90 度で向かい合って座った（図 3-1）。実験者は実験の主旨を参加者に説明し、協力に同意を得た上で APT を実施した。坪内（1997）による TAT の手続きを参考に、「これからこちらのスピーカーを通して、あなたにいろいろな人や場面の音声を聞いていただきます。その音声を聞いて思い浮かぶ物語を作って、私に話して下さい。その場面の中の人、今、何を感じ、どうしているのか、その場面の前にはどのようなことがあって、その場面の後にはどうなっていくのか、お話の筋をつけて話して下さい。ちょうど、物語の一場面が先にできてしまって、それに短いお話をつけなくてはならなくなった小説家のような気持ちで、頑張ってやってみて下さい。音声は 1 つか 2 つで 1 セットで、全部で 17 セットあります。これから 1 セットずつあなたに聞かせていきますから、1 セットに 1 つずつお話を話して下さい」と教示し、スピーカー（ONKYO WAVIO GX-D90）を通して 1 つずつ聴覚刺激を提示し、参加者に物語作成を求めた。なお、後で詳しく分析するために参加者の了承を得た上で実験の様子を録音した。APT の実施後に質問紙への回答を求めた。実験後には参加者の感想を聴取した。

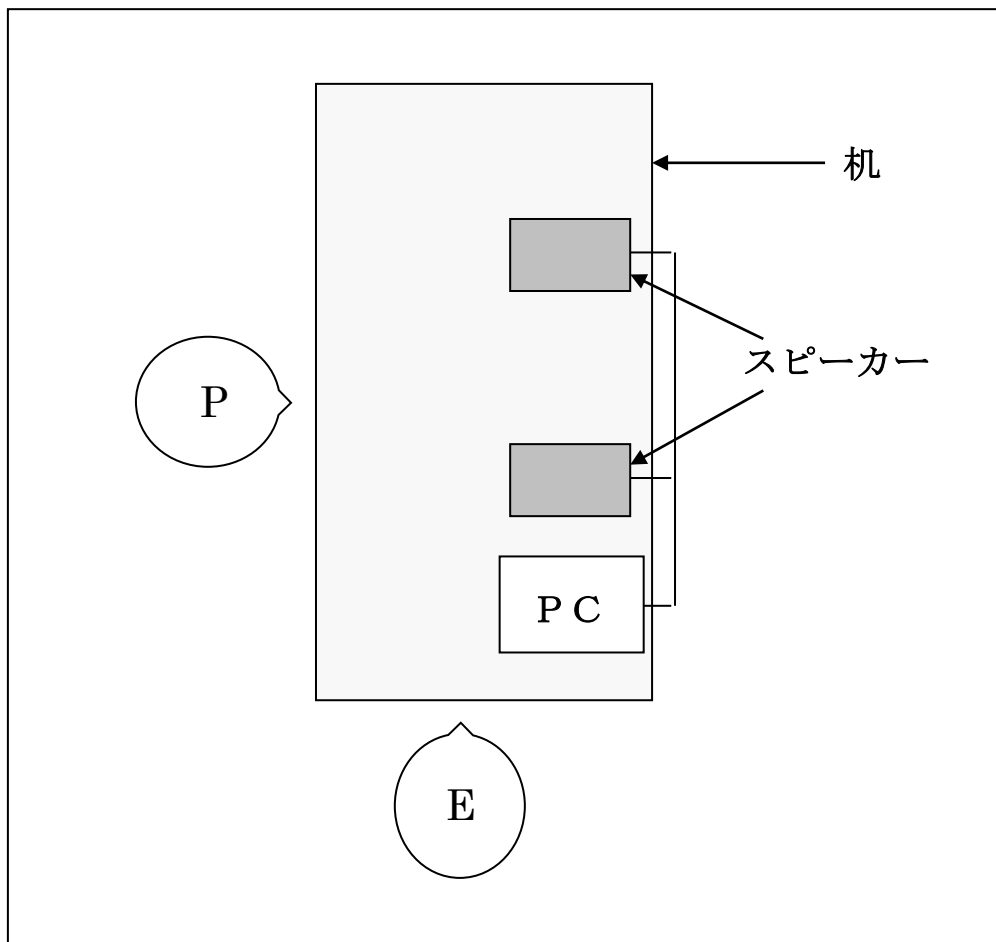


図 3-1. 実験時の配置

P : 参加者 E : 実験者 PC : ノートパソコン

※ ノートパソコン (SONY VAIO PCG-8Q8N) とスピーカー (ONKYO WAVIO GX-D90) を接続し、実験者は PC 上で聴覚刺激の Wave ファイルを再生した。スピーカーは 2 つで 1 セットのもので、参加者が正面になるように設置した。

分析方法 反応を評定する指標に関しては、まず、鈴木（1997）の反応分類や藤田（2001）の TAT の情報分析枠（FIA）、関山（2001）の Social Cognition and Object Relations Scale 中京大学版（SCORS-C）などから TAT 指標を収集した。次に、熊倉（1989）や水口・佃（1955）が挙げている APT の特徴から考えられる、APT 独自の指標を作成した。そして、実際にそれらの指標を用いていくつかの反応の評定を試み、本研究の APT に合うように適宜変更や修正を加え、評定基準が一定になるよう評定マニュアルを作成した（資料 2, 3）。内容面・形式面・認知面から成るこれらの諸指標（表 3-2）を用いて、反応ごとに幅広く分析を行った。各指標の評定方法と想定される解釈について以下にまとめて示す。

（1）内容面

1）自己の内界に向ける関心 本論では、参加者が物語において特に同一化した登場人物、つまり主人公を「自己」とする。TAT においても物語の主人公を「自己」と捉えることには諸説あるが、「被検者が強く同一化している人物の特徴的な面は、被検者自身のそれでもあろう（鈴木，1997）」という視点に本論も重きを置く。本指標では、その「自己」の気持ちの移り変わりなどの内的過程や、思考過程に関する言及について「ある／ない」の 2 件法で評定する。ただし、刺激中の会話をなぞるだけの語りや、明らかに表面的な語り、まったく情緒を伴わない語りなどは、自己の内界に強い関心があるとはいえないので、「ない」に評定する。本指標には、参加者自身の内界に向けるエネルギーの強さが反映され、それはいわゆるユング的な向性に関連すると考えられる。

2）自己に向ける感情 自己に向けられている感情について「肯定的／どちらでもない／否定的／言及なし」のいずれかに分類する。ただし、刺激中の台詞を単純になぞるだけのものは評定対象としない。本指標では、「言及あり／言及なし」には自己に注意を向ける程度が反映され、「肯定的／どちらでもない／否定的」には自己イメージが肯定的であるか否定的であるか、自尊心が高いか低いか、それらの程度が反映されると考えられる。

3）他者に向ける関心 本論における「他者」は「自己」以外の登場人物を指し、1 つの物語で複数登場することもある。本研究の聴覚刺激には複数人物

間の会話が含まれているため、本指標では、それを基準とした対人関係の描写の程度について「強い／どちらでもない／弱い」の3件法で評定する。刺激中に他者が存在しているにもかかわらず、登場人物が1人のみの場合は対人関係の回避と考え、「弱い」に評定する。本指標には、他者に向ける関心や対人希求、回避傾向などが反映されると考えられる。

4) 他者に向ける感情 他者および周囲の環境に対する感情を「肯定的／どちらでもない／否定的／言及なし」に分類する。他者は安心して甘えられる存在であるか、あるいは脅威を与えてくる存在であるかということも含まれる。ただし、刺激中の言葉を単純になぞるだけのものは評定対象としない。本指標では、「言及あり／言及なし」には他者に注意を向ける程度が反映され、「肯定的／どちらでもない／否定的」には他者イメージが肯定的であるか否定的であるか、周囲に対する信頼 - 不信や対象関係、対人関係の質が反映されると考えられる。

5) 父親（的人物）に向ける感情，母親（的人物）に向ける感情 両親や祖父母などの保護者、それに近い立場の登場人物に対する感情を評定する。評定方法は「他者に向ける感情」に準ずる。本指標には、親イメージや親子関係の質、さらには依存傾向なども反映され得るだろう。

6) 人物の導入 刺激中に存在しない人物を物語に登場させた場合には「ある」、登場させていない場合には「ない」と評定する。単なる「通行人」など、物語の展開に関係しない人物の導入が見られた場合には「ない」と評定する。本指標は、他者に対する関心や想像力・創造性、課題に対する自由な態度などを反映すると考えられる。「導入人物の性質」と共に総合的に解釈すると、より豊かな情報が得られる。

7) 導入人物の性質 物語に導入人物がいる場合、その人物は他の登場人物、特に主人公にとってどのような存在であるかを検討し、「肯定的／どちらでもない／否定的」に分類する。山本（1992）はTATの図版1に関して述べる中で、「この絵の中に描かれていない人物が導入されたとき（導入人物）は、他の絵でも同じであるが、その人物との関係が深いことが予想される」としている。参加者にとっては刺激中の人物よりも導入人物の方が近い存在であり、本指標は、「他者に向ける感情」以上に参加者の対象関係や対人関係の根幹に関わる特徴を示す可能性がある。

8) **標準的年齢／性別設定からのずれ** 本研究の聴覚刺激が実際に大学生や親子に依頼して台詞を録音したものを中心に構成されていることから、刺激中の人物の実際の年齢や性別は明確であり、物語作成においてもそれに沿った形で人物設定がなされると想定される。しかし、声を聴いただけで人物の年齢や性別を正確に判断することは必ずしも容易なことではなく、聴覚刺激には「人物の無規定性（水口・佃，1955）」という特徴もあり、被検者は物語作成においてある程度自由に人物設定を行うことが可能であると考えられる。このため、本研究では試験的に本指標が APT 指標として利用可能であるか検討する。刺激中の人物の実際の年齢や性別（表 3-1）を「標準」とし、年齢設定のずれに関しては、子どもの声が成人の声とされたり、成人の声が子どもの声とされたりする場合に「ある」、そのような設定のずれがない場合に「ない」と評定する。性別設定のずれに関しても同様に、女性の声が男性の声とされたり、男性の声が女性の声とされたりしたときは「ある」、そのような設定のずれがないときは「ない」と評定する。本指標における「標準」に関しては、今後、研究を蓄積する中で検討を行っていく必要があるだろう。

9) **独特な人物設定** 本指標も「人物の無規定性（水口・佃，1955）」による探索的指標である。登場人物に社会的地位や特定の性格、容貌などが設定されている場合に「ある」、設定されていない場合に「ない」と評定する。本指標には、他者に対する特殊な関心や、想像力が反映されると考えられる。

10) **有音／無音の背景音の取り込み** 背景音を反応に取り込んでいるか否かを検討し、「ある／ない」の 2 件法で評定する。背景に音がある場合（有音）と、音がない場合（無音）を分けて評定を行う。本指標には周囲に対する関心や敏感さ、注意深さ、および刺激全体を取り込もうとする努力などが反映されると考えられる。

11) **背景音に対する情緒的意味づけ** 背景音は物語の登場人物、特に主人公にとってどのようなものであるか、その性質を「肯定的／どちらでもない／否定的／言及なし」に分類する。無音の背景音についても評定対象とする。例えば、「周囲に何も聴こえないがそこに何か潜んでいる気がする」という場合は「否定的」、「逃亡者が誰もいない静かな場所に辿り着いてほっとしている」という場合は「肯定的」となる。本指標には、周囲に対する信頼 - 不信や対象関係の

質などが反映されると考えられ、「他者に向ける感情」よりも非意識的な部分が表れやすいだろう。

1 2) 明確な結末 物語に明確な結末がある場合には「ある」、結末が曖昧であったり、そもそも物語の展開に乏しかったりする場合には「ない」に評定する。本指標には、葛藤を明確に解決しておきたいか、曖昧なままにしておきたいかという処理や態度が反映されると考えられる。また、物語の展開に乏しい場合には、APT に対する意欲の低さや防衛的態度とも関連する可能性がある。

1 3) 結末の性質 登場人物、特に主人公にとって物語の結末はどのようなものであるかを検討し、その性質を「肯定的／どちらでもない／否定的」に分類する。一般的に投映法の刺激は否定的な性質のものが多く、本章の APT もそのように作成している。そのような刺激に対して肯定的な結末を多く語る人は、否定的なものを受け入れられず、否認している可能性もある。逆に、否定的な結末ばかりで肯定的な結末を語らない人は、抑うつ的で、悲観主義的な構えがあることが推測されるだろう。

1 4) 攻撃的内容 自己や他者、導入人物の区別にかかわらず、物語の登場人物の攻撃的行動や強い怒り、破壊が述べられていれば「ある」に、述べられていなければ「ない」に評定する。自傷他害を含め、自殺など攻撃が自己に向けられている場合にも「ある」と評定する。本指標には、参加者の攻撃性や強い怒りの感情が反映されると考えられる。

1 5) 自己言及 物語を語る際に自分の体験に言及した場合は「ある」に、言及しなかった場合は「ない」に評定する。聴覚刺激が備える「一過性」の特徴から、物語には参加者の記憶が強く反映される可能性があり、TAT よりも本指標に該当する反応が多くなると予想される。その一方で、実際に自分の体験をもとに物語を作成しているとしても、そのことを明言する人は少ないかもしれない。本指標には、TAT における自己言及と同様に、独断性や自己中心性が反映されると考えられる。

1 6) 主観的印象 反応において物語作成とは関係のない主観的印象が語られた場合に、聴覚刺激に対するものを「対刺激」に、刺激中の人物に対するものを「対人物」に、参加者が作成した物語に対するものを「対物語」に評定する。鈴木（1997）によると、TAT における主観的印象は、反応に対する主体の

かかわりを薄め、反応から心理的に距離をとろうとする語りの様式の1つとされ、「主観的なことを口にしはするが、それを人に委ねることはしない反応」であるという。つまり、このような反応が生じるとき、被検者は反応に自らのパーソナリティが反映されていることを程度の差はあれ自覚し、自分と反応の関連性を薄め、検査者による解釈を薄めようとしており、その背景には性格検査に対する不安が推測される。APTにおいても同様に、本指標には参加者がAPTに対して心理的に距離をとろうとしていることや、その背景にある不安を反映すると考えられる。また、主観的印象に批判的要素が含まれることがあり、「対刺激」と「対人物」ではAPTに対する批判を、「対物語」では参加者の自己批判を読み取ることもできるだろう。

(2) 形式面

1) **初発反応時間** 聴覚刺激を提示し終えてから参加者が物語を語り始めるまでの時間を秒単位で計測する。物語に関連しない発話は評定対象としない。本指標は、他の投映法と同様に、反応性や衝動性、刺激に対するショック、試行錯誤あるいは熟慮という対処スタイルなどを反映すると考えられる。なお、APTにおける物語作成では、刺激に対する短期記憶、および自身の体験に対する長期記憶に基づく内的作業が必要であるため、他の投映法において時間をかけて反応を表出する人は、APTにおいてはさらに多くの時間をかけることが予想される。その一方で、反応性が高い人は刺激を聴きながら物語を作成し、初発反応時間は非常に短くなる可能性もある。このため、APTの初発反応時間は取り得る値の範囲が大きくなると考えられる。

2) **実験者による質問回数** 実験者が教示内容に則した質問を行った回数を数える。つまり、参加者の自発的な語りが無い場合の物語の「過去」および「未来」、登場人物の「気持ち」の3点に関する質問に評定対象を限定する。聴覚刺激は17個あり、たとえ最初の教示内容を理解できていなかったとしても、17個の物語を語っていく中で参加者は何を語れば良いのかを理解していくことができるだろう。最初は実験者の質問が多くても、実験が進むにつれてその数は減っていくことが期待される。このため本指標には、物語作成に取り組む意欲の低さや、受身的・依存的な構えが反映されると考えられる。

3) **刺激の追加提示回数** 参加者が実験者に刺激の追加提示を求めた回数を数える。刺激の「一過性」という特徴を持つ APT 特有の指標の 1 つである。刺激をうまく聴き取れなかったり、もともと聴き取りにくい内容を確認したり、1 度聴いて物語を作成できなかったりしたときに、刺激の追加提示が求められる。本指標には、注意集中の失敗や、物事を正確に把握しようとする態度、参加者の物語作成に対する努力などが反映されると考えられる。

4) **語りの様式** 参加者の反応の語り方を検討し、登場人物の 1 人に同一化して、その台詞を交えながら物語を展開するものを「移入形式」、複数の登場人物に同一化して、その対話を交えて物語を進めていくものを「会話形式」、「昔々あるところに…」で始まるような語り部として物語を展開するものを「物語形式」と分類する。TAT の中では、それぞれ人に対して不自然に構えてしまうことを示唆するが、「移入形式」と「会話形式」にはある種の演技能力が必要とされ、その能力には感情生活の活発さや流動性が含まれる（鈴木, 1997）。他方、APT では刺激中に台詞があるため、TAT と比較すると「移入形式」や「会話形式」の該当が多くなると予想される。この差が解釈にどのような影響を与えるか、確認する必要がある。

5) **複数の物語** 1 つの刺激において複数の物語を作成した場合に「ある」、1 つの物語を作成した場合に「ない」と評定する。APT の最初に「1 セットに 1 つずつお話を話して下さい」と教示するため、各刺激に対して 1 つの物語を作るのが一般的な反応である。本指標には、複数の可能性から 1 つの物語に絞り込む思い切りの弱さや、取捨選択することへの不安を反映していると考えられる。

(3) 認知面

1) **微小音要素の取り込み** 取り込む参加者の割合が 10%に満たない音要素を微小音要素とし（資料 2）、それを取り込んだ場合に「ある」、取り込まなかった場合に「ない」に評定する。本指標には、情報処理における過度な注意深さや、細部に対するこだわりが反映されると考えられる。

2) **音要素に対する標準的意味づけからのずれ** 本研究では暫定的に表 3-1 の意味づけを「標準」とし、刺激中の台詞の内容や話者に関して、他の参加者

が行わないような意味づけをした中でも、刺激作成時の意図から過度に外れている場合に「ある」と評定する。APT では刺激の「一過性」という特徴から、参加者は刺激を作業記憶として保持し、自身の体験の長期記憶と照合しながら物語を作成すると考えられる。情報処理過程に加えて、その内的作業の過程において本指標のようなずれが生じると推察される。この視点から、本指標には、情報処理過程における歪曲や、「知覚過程よりも連想過程が優位な状態 (Rapaport et al., 1974)」が反映されると考えられる。本指標の「標準」に関しても、今後、研究の蓄積により検討していく必要がある。

3) 登場人物の標準的位置関係からのずれ 本指標に関しても、筆者が刺激作成時に意図した人物の位置関係(表 3-1)を暫定的に「標準」とし、他の参加者が行わないような配置の中でも、その「標準」から過度に外れた配置が見られた場合に「ある」と評定する。聴覚刺激の特徴である「空間の無規定性(水口・佃, 1955)」を参考に取り上げた探索的指標であり、本指標の「標準」に関しても今後検討していく必要がある。

4) 聴空間の拡大・縮小 本指標も、聴覚刺激の特徴である「空間の無規定性(水口・佃, 1955)」を参考に探索的に取り上げた指標である。刺激が参加者の内界に作り出す聴空間に対して、それとは別の空間を想像し、その空間で物語を大きく展開させたり(拡大)、建物や乗物などで空間を区切り、その小さな空間内で物語が収まったり(縮小)する場合に「ある」と評定する。

表 3-2. 音声刺激による APT における指標

	指標
内容面	自己の内界に向ける関心, 自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 人物の導入, 導入人物の性質, 標準的年齢/性別設定からのずれ, 独特な人物設定, 有音/無音の背景音の取り込み, 背景音に対する情緒的意味づけ, 明確な結末, 結末の性質, 攻撃的内容, 自己言及, 主観的印象(対刺激/対人物/対物語)
形式面	初発反応時間, 実験者による質問回数, <i>刺激の追加提示回数</i> , 語りの様式(移入形式/会話形式/物語形式), 複数の物語
認知面	微小音要素の取り込み, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, <i>登場人物の標準的位置関係からのずれ, 聴空間の拡大・縮小</i>

※ 斜字体は APT 独自の指標を示す。

3-7 本実験の結果

(1) APT の評定値の算出

評定マニュアルに従って、筆者を含む臨床心理学を専攻する大学院生 2 名で全体の 20%にあたる参加者 12 名分（物語 204 個分）の評定を独立して行ったところ、83.5%と十分な一致率が得られた。評定が一致しなかった部分は合議により最終的な評定を決定し、残りの評定は筆者が 1 人で行った。評定後、指標ごとに評定値を算出した（表 3-3）。まず、「初発反応時間」など単純に時間や回数を計測したものについては、そのまま物語 17 個分の値を合計し、それを分析の対象とした。「初発反応時間」と「刺激の追加提示回数」の理論的な取り得る値の範囲は「0~∞」となる。「実験者による質問回数」では、計測する質問を参加者の自発的発話がない場合の物語の「過去」と「未来」、「登場人物の気持ち」の 3 つに限ったため、取り得る値の範囲は「0~51」となる。次に、「ある／ない」の 2 件法で評定した指標については、「ある」を 1 に、「ない」を 0 に変換し、物語 17 個分の値を合計した。これらの取り得る値の範囲は「0~17」となる。最後に、「自己に向ける感情」などの感情や性質に関する指標では、「言及」および「性質」に分けて評定値を算出した。「言及」については「言及なし」を「0」に、それ以外の評定を「1」に変換し、物語 17 個分の値を合計した。「性質」については、「肯定的（強い）／どちらでもない／否定的（弱い）」の評定を「+1/0/-1」に変換し、物語 17 個分の値を合計した。取り得る値の範囲は、「言及」では「0~17」、「性質」では「-17~+17」となる。「性質」は値が大きいほど肯定的または強いことを示し、値が小さいほど否定的または弱いことを示す。評定値の平均と標準偏差は表 3-4 に示した通りであった。なお、「語りの様式（物語形式）」は該当した参加者数が非常に少なかったため、以下の分析対象から除外した。

(2) Big Five の得点の算出

主要 5 因子性格検査ハンドブック（村上・村上，2001）に従い T 得点を算出した。表 3-5 に各因子の平均値と標準偏差を示しておく。Big Five の因子間で Pearson の相関係数を算出したところ有意な相関が 3 つ見られた（表 3-6）。

表 3-3. 各指標における評定値の算出方法

評定方法	評定値の算出方法	該当する指標
時間や回数を計測	物語 17 個 (参加者 1 人分) に対する値をそのまま合計	初発反応時間, 実験者による質問回数, 刺激の追加提示回数
「ある／ない」の 2 件法	「ある／ない」を「1／0」に変換後, 物語 17 個分の値を合計	自己の内界に向ける関心, 人物の導入, 標準的年齢／性別設定からのずれ, 独特な人物設定, 有音／無音の背景音の取り込み, 明確な結末, 攻撃的内容, 自己言及, 主観的印象, 語りの様式, 複数の物語, 微小音要素の取り込み, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, 登場人物の標準的位置関係からのずれ, 聴空間の拡大・縮小
「肯定的(強い)／どちらでもない／否定的(弱い)／言及なし」の 4 件法	<p>言及 「言及なし以外／言及なし」を「1／0」に変換後, 物語 17 個分の値を合計</p> <p>性質 「肯定的(強い)／どちらでもない／否定的(弱い)」を「1／0／-1」に変換後, 物語 17 個分の値を合計</p>	自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 導入人物の性質, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結末の性質

表 3-4. 各指標の評定値の平均および標準偏差

APT 指標	平均値	標準偏差
自己の内界に向ける関心	4.40	2.35
自己に向ける感情(言及)	3.85	1.85
自己に向ける感情(性質)	0.08	1.29
他者に向ける関心	1.02	1.67
他者に向ける感情(言及)	7.82	0.39
他者に向ける感情(性質)	-1.13	2.27
父親(的人物)に向ける感情(言及)	1.55	0.95
父親(的人物)に向ける感情(性質)	-0.23	1.06
母親(的人物)に向ける感情(言及)	1.50	0.75
母親(的人物)に向ける感情(性質)	-0.52	0.83
人物の導入	2.65	1.83
導入人物の性質	-0.62	1.12
標準的年齢設定からのずれ	1.15	1.31
標準的性別設定からのずれ	0.68	0.75
独特な人物設定	3.38	2.05
有音の背景音の取り込み	1.45	0.77
無音の背景音の取り込み	0.53	0.62
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	1.12	0.92
背景音に対する情緒的意味づけ(性質)	-0.35	0.63
明確な結末	4.63	1.53
結末の性質	0.58	2.13
攻撃的内容	1.27	1.21
自己言及	0.23	0.65
主観的印象(対刺激)	0.23	0.50
主観的印象(対人物)	0.17	0.53
主観的印象(対物語)	0.32	1.03
初発反応時間(秒)	47.12	53.77
実験者による質問回数	4.73	3.73
刺激の追加提示回数	0.10	0.35
語りの様式(移入形式)	6.18	2.12
語りの様式(会話形式)	0.62	1.12
複数のお話	0.60	1.30
微小音要素の取り込み	0.30	0.65
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	0.28	0.52
登場人物の標準的位置関係からのずれ	0.27	0.52
聴空間の拡大・縮小	0.93	1.09

N= 60

表 3-5. Big Five の各因子の平均値および標準偏差

	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
平均値	48.33	55.75	54.62	46.85	47.00
標準偏差	10.02	8.48	10.22	8.30	9.21

N = 60

表 3-6. Big Five の因子間での Pearson の相関係数

	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
外向性	0.34**	0.16	0.07	0.15
協調性		0.28*	0.03	0.02
勤勉性			0.00	0.43**
情緒安定性				0.18

N = 60, ** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意

(3) 分析

APT の指標ごとに、参加者を上位および下位から少なくとも 10 名程度ずつ抽出して高群および低群、あるいは「あり群」および「なし群」に分けた。これらの 2 群における Big Five の T 得点について、等分散性の検定を行った上での t 検定により差を検討した。その結果、以下の有意差が認められた (表 3-7 ~ 表 3-9)。なお、本章では探索的検討を行う目的から、10%水準の有意傾向についても慎重に取り上げることにする。

内容面の指標では、「自己の内界に向ける関心」の高群は低群より協調性および勤勉性が高い傾向が見られた (順に $t=1.81$, $df=26$, $p<.10$; $t=1.72$, $df=26$, $p<.10$)。「自己に向ける感情 (性質)」の高群は知性が有意に低かった ($t=-2.62$, $df=30$, $p<.05$)。「他者に向ける関心」の低群は外向性が有意に低く ($t=2.09$, $df=20$, $p<.05$)、高群は協調性が有意に高かった ($t=2.41$, $df=20$, $p<.05$)。「他者に向ける感情 (性質)」の高群は勤勉性が有意に高かった ($t=2.89$, $df=23$, $p<.05$)。「母親 (的人物) に向ける感情 (言及)」の高群は低群よりも外向性が高い傾向が見られ ($t=1.90$, $df=26$, $p<.10$)、「母親 (的人物) に向ける感情 (性質)」の高群は協調性が高い傾向が見られた ($t=1.91$, $df=24$, $p<.10$)。「導入人物の性質」の高群は勤勉性が有意に高く ($t=2.52$, $df=24$, $p<.05$)、低群は知性が低い傾向が見られた ($t=1.93$, $df=24$, $p<.10$)。「標準的年齢設定からのずれ」の高群は外向性が有意に低かった ($t=-2.65$, $df=26$, $p<.05$)。「背景音への情緒的意味づけ (言及)」の低群は勤勉性が高い傾向にあり ($t=-1.97$, $df=23$, $p<.10$)、高群は情緒安定性と知性が有意に低かった (順に $t=-3.30$, $df=23$, $p<.01$; $t=-3.18$, $df=23$, $p<.01$)。「攻撃的内容」の低群は勤勉性が有意に高く ($t=-2.64$, $df=37$, $p<.05$)、「攻撃的内容」の高群は知性が有意に低かった ($t=-2.68$, $df=37$, $p<.05$)。「自己言及」の高群は情緒安定性が低い傾向が見られた ($t=-1.97$, $df=58$, $p<.10$)。「主観的印象 (対刺激)」の高群、および「主観的印象 (対人物)」のあり群は有意に情緒安定性が低かった (順に $t=-2.39$, $df=42$, $p<.05$; $t=-2.27$, $df=58$, $p<.05$)。形式面の指標では、「刺激の追加提示回数」のあり群は協調性が高い傾向が見られた ($t=1.92$, $df=58$, $p<.10$)。「語りの様式 (移入形式)」の低群は知性が低い傾向にあり ($t=1.79$, $df=24$, $p<.10$)、「語

りの様式（会話形式）」の高群は情緒安定性が低い傾向にあった（ $t = -1.71$, $df = 45$, $p < .10$ ）。「複数の物語」の高群は情緒安定性が有意に低かった（ $t = -2.79$, $df = 46$, $p < .01$ ）。認知面の指標では、「聴空間の拡大・縮小」の高群は有意に知性が低かった（ $t = -2.29$, $df = 32$, $p < .05$ ）。

表 3-7. APT 指標の高群および低群における Big Five の平均 (標準偏差)

APT 指標	群:人数	外向性	協調性	勤勉性	情緒 安定性	知性
自己の内界に向ける関心	高:14	49.86 (11.01)	59.07 [†] (8.43)	56.29 [†] (8.46)	47.21 (7.34)	45.93 (8.87)
	低:14	50.00 (10.03)	53.36 [†] (8.31)	49.07 [†] (13.27)	44.71 (9.20)	44.79 (7.30)
自己に向ける感情(言及)	高:14	49.36 (10.99)	56.00 (6.39)	55.14 (6.74)	49.07 (9.01)	45.64 (9.08)
	低:10	46.20 (9.26)	55.40 (7.40)	52.70 (9.35)	51.00 (7.10)	45.00 (8.92)
自己に向ける感情(性質)	高:13	48.77 (11.69)	55.54 (9.09)	50.62 (11.53)	44.15 (9.16)	42.46* (7.30)
	低:19	46.32 (8.77)	54.84 (7.65)	56.00 (8.04)	49.37 (9.00)	50.26* (8.87)
他者に向ける関心	高:10	52.80* (10.50)	58.40* (6.83)	55.30 (8.83)	46.80 (8.61)	47.30 (10.04)
	低:12	44.33* (8.54)	50.92* (7.56)	51.75 (11.14)	46.75 (9.76)	48.08 (8.88)
他者に向ける感情(言及)	高:35	49.60 (10.51)	54.74 (8.10)	54.86 (10.41)	47.09 (8.15)	47.20 (8.95)
	低:25	46.56 (9.21)	57.16 (8.95)	54.28 (10.16)	46.52 (8.65)	46.72 (9.74)
他者に向ける感情(性質)	高:12	46.67 (8.33)	56.00 (9.25)	60.17* (4.69)	45.50 (9.96)	46.42 (9.65)
	低:13	47.85 (12.92)	54.00 (9.35)	50.23* (11.41)	44.23 (6.35)	43.92 (8.78)
父親(的人物)に向ける 感情(言及)	高:10	49.60 (9.72)	56.00 (9.23)	54.00 (11.05)	49.00 (4.67)	48.30 (6.62)
	低:16	46.56 (9.27)	56.88 (9.02)	57.06 (11.76)	48.75 (10.22)	46.75 (7.93)
父親(的人物)に向ける 感情(性質)	高:15	49.53 (11.63)	57.00 (8.81)	55.53 (9.37)	47.87 (9.51)	47.00 (10.89)
	低:14	48.43 (9.55)	54.93 (8.76)	54.14 (11.02)	44.86 (6.25)	48.79 (9.15)
母親(的人物)に向ける 感情(言及)	高:10	53.70 [†] (10.41)	56.20 (5.45)	55.10 (11.88)	47.30 (7.20)	47.40 (7.38)
	低:18	47.22 [†] (7.56)	54.17 (8.45)	55.39 (11.07)	46.83 (8.92)	45.83 (9.54)
母親(的人物)に向ける 感情(性質)	高:13	51.54 (6.74)	59.00 [†] (5.73)	57.62 (8.05)	45.92 (10.20)	46.00 (7.07)
	低:13	49.00 (13.28)	53.23 [†] (9.28)	54.23 (9.50)	50.23 (4.53)	46.85 (9.29)
人物の導入	高:10	48.40 (10.18)	52.00 (8.64)	52.20 (9.77)	46.00 (9.35)	43.70 (8.94)
	低:10	48.40 (6.70)	54.00 (9.63)	57.70 (13.25)	47.60 (10.20)	46.60 (10.70)
導入人物の性質	高:13	51.15 (7.82)	57.77 (8.61)	58.77* (10.72)	46.62 (8.47)	48.85 [†] (6.61)
	低:13	46.31 (11.01)	54.23 (7.63)	48.54* (9.97)	46.92 (7.95)	43.23 [†] (8.19)

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意, † : 10%水準で有意

表 3-8. APT 指標の高群および低群における Big Five の平均 (標準偏差)

APT 指標	群:人数	外向性	協調性	勤勉性	情緒 安定性	知性
標準的年齢設定からの ずれ	高:13	42.46* (9.93)	54.00 (6.86)	52.23 (9.73)	46.23 (6.27)	45.62 (7.08)
	低:15	51.73* (8.60)	56.27 (8.68)	58.27 (10.08)	45.40 (8.15)	50.00 (10.45)
標準的性別設定からの ずれ	高:16	45.56 (9.74)	55.44 (7.96)	54.31 (8.99)	46.38 (6.74)	46.19 (8.26)
	低:15	48.00 (10.55)	55.00 (7.99)	54.27 (12.23)	45.00 (8.68)	46.27 (8.11)
独特な人物設定	高:11	51.55 (12.17)	55.27 (5.87)	54.91 (11.29)	44.64 (8.76)	47.91 (10.40)
	低:14	46.21 (9.22)	55.36 (9.26)	56.14 (8.37)	45.43 (9.47)	50.36 (9.38)
有音の背景音の取り込み	高:17	47.71 (9.54)	55.82 (6.76)	55.18 (10.18)	43.47 (9.19)	44.41 (8.87)
	低:24	47.63 (9.17)	55.67 (9.24)	55.21 (10.87)	47.29 (7.50)	48.42 (9.08)
無音の背景音の取り込み	高:20	47.75 (10.22)	56.25 (8.10)	55.95 (10.91)	46.25 (8.31)	46.50 (7.31)
	低:15	48.93 (10.22)	57.60 (9.48)	55.60 (8.93)	45.60 (6.79)	48.67 (11.32)
背景音に対する情緒的 意味づけ(言及)	高:11	47.27 (9.38)	55.18 (6.69)	49.00† (14.49)	39.00** (5.42)	41.55** (7.34)
	低:14	49.00 (10.01)	58.64 (10.29)	58.43† (7.39)	47.00** (6.45)	51.93** (8.67)
背景音に対する情緒的 意味づけ(性質)	高:12	49.58 (11.00)	56.92 (7.95)	58.17 (12.47)	46.25 (11.77)	48.00 (10.97)
	低:10	46.89 (11.77)	53.44 (6.75)	50.89 (12.95)	46.67 (8.28)	45.22 (8.47)
明確な結末	高:15	49.80 (11.26)	59.27 (9.30)	57.13 (9.06)	43.93 (9.77)	46.87 (8.01)
	低:14	46.07 (10.04)	55.50 (9.85)	55.36 (11.07)	48.71 (7.74)	48.79 (6.77)
結末の性質	高:11	49.36 (10.05)	61.27 (6.17)	57.00 (8.58)	44.00 (8.82)	43.82 (8.55)
	低:13	48.23 (13.10)	56.77 (9.26)	53.62 (11.65)	47.31 (7.42)	44.23 (9.36)
攻撃的内容	高:16	46.31 (12.43)	54.00 (9.47)	49.81* (7.80)	47.63 (8.53)	41.56* (7.43)
	低:23	48.00 (9.31)	54.96 (9.11)	57.22* (9.12)	48.09 (8.92)	48.91* (9.02)
自己言及	あり:16	47.38 (13.49)	54.94 (7.90)	53.69 (9.75)	43.44† (8.11)	48.56 (9.76)
	なし:44	48.68 (8.60)	56.05 (8.75)	54.95 (10.48)	48.09† (8.10)	46.43 (9.05)
主観的印象(対刺激)	高:10	46.70 (9.07)	57.60 (7.09)	56.80 (11.24)	41.30* (7.82)	44.70 (10.22)
	低:34	48.29 (10.10)	55.56 (9.08)	53.91 (10.13)	47.82* (7.54)	46.38 (8.98)

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意, † : 10%水準で有意

表 3-9. APT 指標の高群および低群における Big Five の平均 (標準偏差)

APT 指標	群:人数	外向性	協調性	勤勉性	情緒 安定性	知性
主観的印象(対人物)	あり:10	48.30 (11.77)	53.30 (7.21)	54.40 (12.19)	41.60* (5.99)	46.40 (9.98)
	なし:50	48.34 (9.77)	56.24 (8.69)	54.66 (9.92)	47.90* (8.34)	47.12 (9.15)
主観的印象(対物語)	あり:18	50.33 (9.98)	56.56 (7.66)	55.17 (11.00)	46.67 (7.40)	45.94 (8.69)
	なし:42	47.48 (10.03)	55.40 (8.87)	54.38 (10.00)	46.93 (8.73)	47.45 (9.49)
初発反応時間	高:10	45.40 (10.48)	54.70 (9.10)	53.20 (4.98)	46.40 (9.03)	47.20 (11.61)
	低:10	52.20 (8.12)	58.20 (8.23)	54.00 (12.96)	47.80 (8.83)	47.00 (9.36)
実験者による質問回数	高:11	44.55 (11.04)	52.00 (9.39)	51.64 (9.18)	45.18 (6.98)	49.36 (9.77)
	低:10	46.70 (9.32)	56.80 (7.90)	56.20 (6.18)	49.00 (7.44)	48.10 (8.29)
刺激の追加提示回数	あり:8	45.13 (7.62)	61.00 [†] (5.71)	58.75 (8.48)	46.50 (7.43)	46.25 (12.99)
	なし:52	48.83 (10.31)	54.94 [†] (8.59)	53.98 (10.39)	46.90 (8.49)	47.12 (8.65)
語りの様式(移入形式)	高:14	50.86 (11.95)	57.29 (8.31)	56.50 (9.97)	44.43 (9.03)	50.57 [†] (6.15)
	低:12	48.33 (9.45)	51.75 (11.01)	51.83 (9.09)	48.33 (10.74)	45.33 [†] (8.75)
語りの様式(会話形式)	高:11	45.64 (9.82)	56.45 (6.36)	52.00 (13.31)	42.64 [†] (7.28)	42.45 (8.19)
	低:36	48.36 (8.83)	55.00 (8.68)	54.89 (9.81)	47.36 [†] (8.23)	47.50 (9.12)
複数の物語	高:17	47.41 (10.87)	55.47 (9.23)	54.65 (9.93)	41.94 ^{**} (8.02)	44.94 (9.88)
	低:31	48.68 (10.19)	56.13 (8.48)	54.10 (11.77)	49.00 ^{**} (8.59)	47.61 (8.83)
微小音要素の取り込み	あり:21	47.24 (11.49)	54.86 (7.72)	53.57 (9.42)	46.05 (7.20)	45.71 (10.36)
	なし:39	48.92 (9.24)	56.23 (8.92)	55.18 (10.70)	47.28 (8.89)	47.69 (8.59)
音要素に対する標準的 意味づけからのずれ	高:11	45.36 (9.30)	55.36 (7.02)	56.55 (8.73)	44.45 (8.57)	44.64 (10.68)
	低:14	50.43 (9.52)	55.93 (8.53)	54.93 (8.40)	48.64 (6.74)	49.21 (9.10)
登場人物の標準的位置 関係からのずれ	高:14	51.29 (6.43)	57.29 (6.71)	51.86 (12.56)	43.50 (10.04)	46.29 (8.43)
	低:29	47.00 (11.27)	56.90 (8.09)	55.48 (9.05)	47.34 (8.17)	49.62 (9.03)
聴空間の拡大・縮小	高:16	47.31 (9.82)	57.13 (6.40)	56.19 (8.10)	47.19 (7.70)	44.88* (8.16)
	低:18	49.83 (9.32)	54.89 (8.51)	56.44 (10.87)	44.78 (9.98)	51.39* (8.38)

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意, † : 10%水準で有意

3-8 考察

(1) 各指標と Big Five の関連について

以下では、有意差や有意傾向が見られた指標を中心に考察していく。

1) **自己の内界に向ける関心** 主人公の内的過程や思考過程に多く言及した人は、Big Five の協調性と勤勉性が高い傾向にあるという結果が得られた。本指標にはユング的な内向性が反映されると想定されたが、Big Five の外向性においては有意差が認められなかった。本研究の刺激の特徴を振り返ると、葛藤的な対人場面を想起させ、否定的な情緒を引き起こしやすいと考えられるものが多く採用されていた。葛藤状況において自己の内界に注意を向ける傾向は内省能力に関連すると考えられ、対人葛藤への適切な対処および良好な人間関係につながる可能性がある。本指標と協調性については良好な人間関係の側面から、勤勉性については内省し衝動を統制する側面から、それぞれ了解できるだろう。外向性に関しては、本研究の APT では刺激中に台詞があることから、外向性の高い参加者も登場人物の気持ちに焦点が合せやすく、差が表れにくかった可能性が考えられる。この点は、今後研究を重ねる中で明らかになっていくだろう。

2) **自己に向ける感情（性質）** 自己をより肯定的に捉える人は、Big Five における知性が低いという結果が得られた。知性は知識の豊かさや分析的思考を示すとされ（村上・村上，2001）、さらに主要 5 因子性格検査における知性は「他の人と比べると…」という項目が含まれていることから、對他者優位の自信や、自分を良く見せようとする傾向（社会的望ましさ）も反映すると考えられる。これらをふまえると、本指標に想定していた自己イメージや自尊心との関連とは逆の結果であった。反応を見直すと、本指標で「肯定的」と評定される例として、有能なビジネスマンやキャリアウーマンのサクセスストーリーも挙げられるが、「凄腕のヒットマンが難しい仕事を次々に成功させていく」などの反応も挙げられる。後者は社会的望ましさに反し、知性の高い人はそのような内容を語らなかった可能性がある。この点については、今後、本指標の評定対象を分類することによってより明確になるだろう。

3) **他者に向ける関心** 結果は他者および対人関係についての描写が少な

った人はより内向的であり、他者および対人関係についての描写が多かった人は協調性が高いことを示していた。Big Fiveにおける外向性には社交性が反映され（村上・村上，2001），積極的に他者に関わらない点で本指標と一致するだろう。協調性に関しても，概念的に一致した結果と考えられる。

4) 他者に向ける感情（性質） 他者を肯定的に捉えることが多い人は，Big Fiveの勤勉性が高いという結果であった。本指標には他者イメージや対象関係の質が反映されると考えられたが，Big Fiveの協調性や情緒安定性との関連は認められなかった。勤勉性の高い人は，衝動を抑えて内省することができ，良心性も備えているとされ（村上・村上，2001），それらが本研究の刺激の葛藤的な対人場面において表現された結果と見ることも可能かもしれない。

5) 母親（的人物）に向ける感情（言及），母親（的人物）に向ける感情（性質） 母親に対する感情により多く言及した人は外向性が高い傾向にあり，母親をより肯定的に捉える人は協調性が高い傾向にあった。先に後者の方から見ていくと，本研究の刺激は葛藤や否定的感情を喚起しやすいことが想定され，その状況において肯定的人物として母親を導入することが多い人は良い母親イメージを持っていると考えられる。良い母親イメージは安定したアタッチメントと関連し，安定したアタッチメントは対人関係における適応と関連する（数井・遠藤，2005）ことから，本指標と協調性に関連が見られたのだろう。前者の外向性との関連については，もともと母親の台詞を含む刺激は17個中2個しかないため，この指標の値が高いことは母親を導入人物として物語に多く登場させたことを意味する。刺激中の葛藤的な状況に刺激外の人物を導入することには，葛藤状況を解決あるいは軽減する効果が想定され，その点では母親は肯定的に捉えられている可能性がある。Big Fiveの外向性は社交性も反映しており，このように考えると，アタッチメントの視点から先程とほぼ同様に解釈することができるだろう。ただし，母親と同時に他の人物も導入されている可能性も否定はできず，より詳細な検討を行う余地が残されている。

6) 導入人物の性質 物語に肯定的な人物を多く導入する人は勤勉性が高く，否定的な人物を多く導入する人は知性が低い傾向にあるという結果が得られた。「他者に向ける感情（性質）」と同様に，協調性や情緒安定性との関連は認められず，想定とは異なる結果であった。本指標が高くなる時，導入人物は参加

者のほぼ完全な投映物と考えられるため、肯定的な他者イメージがあることを示す。また、刺激の葛藤的な対人場面において、肯定的人物の導入により葛藤を中和していることも予想される。勤勉性との関連については、葛藤場面で生じる衝動に流されず適応的に振舞うという、勤勉性の衝動統制や社会的適応の側面（村上・村上，2001）と、本指標に想定される葛藤状況の中和に重なる部分が見出せるだろう。知性は本研究では勤勉性との正の相関が確認されており（ $r=0.43$ ）、勤勉性と同様の視点から解釈が可能であろう。

7) 標準的年齢設定からのずれ 標準的でない年齢設定をより多く行った人は内向的であるという結果が得られた。本指標への該当は、刺激中に登場する成人を中学生や高校生とするものが多かった。刺激中には学校場面と判断できる明確な特徴はなく、その刺激に対して学校の場面を想定し、そこで生じる物語を構成する過程は、参加者の過去の体験にも触れるような内的作業といえよう。内向的な人はそのような作業に親和性があると考えられ、この結果も了解可能であろう。

8) 背景音に対する情緒的意味づけ（言及） 背景音に対する情緒的な意味づけをあまり行わない人は勤勉性が高い傾向にあり、多く行う人は情緒安定性と知性が低いという結果が得られた。本指標には、周囲の環境や他者に対する関心や敏感さに加えて、参加者の情報処理の仕方も反映されると考えられる。つまり、刺激の詳細を正確に把握しようとするすると記述反応に近づき情緒は伴いにくく、本指標の値は低くなることが多い。一方、勤勉性が高い人は注意深く正確であり（村上・村上，2001）、知性が低い人は物事を分析的に捉える傾向が弱い（村上・村上，2001）。この情報処理の在り様から勤勉性と知性の結果は了解可能と考えられる。また、情緒安定性が低い人は神経質あるいは神経過敏とされ（村上・村上，2001）、本指標に想定される解釈と一致した関連が見られた。

9) 攻撃的内容 攻撃的内容をあまり語らなかった人は勤勉性が高く、多く語った人は知性が低いという結果であった。勤勉性が高い人は、衝動を統制し社会的に適応した生活を送るとされ（村上・村上，2001）、本指標のような攻撃的内容には言及しないことが予想される。本研究ではその勤勉性と知性に正の相関が確認されており（ $r=0.43$ ）、勤勉性は社会的適応の側面から、知性は社

会的価値の側面から、社会的望ましさに正の関連があると予想される。この視点からも、勤勉性と知性の高い人は攻撃的内容にあまり言及しないと考えられ、本結果も了解可能であろう。

10) 自己言及 反応の中で自己体験に言及した人は情緒安定性が低い傾向にあるという結果であった。本指標には、反応を主観によって正当化する傾向に加えて、その背景に自信のなさや、自己への焦点付けなども反映されると考えられる。本結果は、そのような自信のなさや独断性が情緒安定性の低さ（神経症傾向）と関連したものと了解できよう。また、自分の過去の体験をそのまま物語に盛り込んで語った場合、物語は非常に現実味があり、情緒豊かなものとなり得る。その意味では、本結果は参加者の情緒生活の豊かさも反映している可能性がある。

11) 主観的印象（対刺激）、主観的印象（対人物） 聴覚刺激および物語の登場人物に対する主観的印象を多く語った人は情緒安定性が低いという結果であった。本指標は、刺激自体や登場人物に対する感想や評価、批判を評定し、APTの課題に対する心理的距離や不安が反映されると考えられる。Big Fiveの情緒安定性も不安や、対象に関わる際の不安定さを反映するとされ（村上・村上、2001）、本結果は十分に了解可能である。

12) 刺激の追加提示回数 本指標は出現数が少なく、差も有意傾向にとどまっているが、APT独自の指標であり、資料的価値を考慮して記載しておく。刺激の追加提示を一度でも求めた人は協調性が高い傾向にあるという結果が得られた。勤勉性との関連は認められず、予想とは異なる結果であった。本研究では、実験者は教示の中で刺激の追加提示に言及しておらず、参加者にとって刺激の追加提示を求めるには積極性が必要であったと考えられる。あり群においては、それができるくらいの参加者と実験者の関係性になっていたとも考えられ、この点で協調性との関連が見出され得る。また、刺激の追加提示を求めてまでAPTの課題を達成しようとしたことよりも、刺激の追加提示を求めてまでAPTおよび実験に協力したことが反映された結果とも捉えられよう。

13) 語りの様式（移入形式）、語りの様式（会話形式） まず、登場人物の1人に同一化し、その台詞も交えて生き生きと語ることが少なかった人は知性が低い傾向にあった。知性が低い人は、空想的でなく想像的でないとされ（村

上・村上, 2001), 情緒豊かで演技的な要素も含まれる「移入形式」の語り方に馴染みにくかったと解釈できるだろう。次に, 複数の登場人物に同一化し, その会話を交えてさらに生き生きと語った人は情緒安定性が低い傾向にあった。音声刺激が台詞を交えた反応を暗に要求している可能性があるとはいえ, 初対面の実験者に対して一人芝居のような語りを行うのには逸脱性が生じる可能性がある。「移入形式」以上の演技性や感情生活の活発さや不安定さは, **Big Five** における情緒安定性の低さ (神経症傾向) と一致するだろう。

1 4) 複数の物語 複数の物語に多く言及した人は情緒安定性が低いという結果が得られた。1つの刺激に対して1つの物語を作るよう実験者が最初に指示を行っているため, **TAT** と同様に, 参加者は複数の物語の可能性から1つの反応にまとめあげることが要求される。本指標には, その際の思い切りの悪さや, 「こんな話をしたら実験者に否定的に捉えられるのではないか」などの不安が反映されると考えられる。**Big Five** の情緒安定性が低い人 (神経症傾向) は不安が高く (村上・村上, 2001), 本結果は概念的に一致しているといえよう。

1 5) 聴空間の拡大・縮小 刺激が設定する空間に対し, 別の空間を加えて物語を展開させたり, もとの空間を区切って限定的な空間で物語を展開させたりすることが多かった人は, 知性が低いという結果が得られた。本指標には, 刺激に直面することができない参加者の不安や, 刺激空間を加工することによる参加者の対処が反映されると考えられたが, **Big Five** の情緒安定性との関連は見られなかった。このため, 不安の有無にかかわらず, 情報処理が忠実であるか否かが反映される可能性が考えられよう。他方, 知性の高い人は物事を分析的に捉え (村上・村上, 2001), 刺激自体の把握に重きを置くことが推測されるのに対し, 知性の低い人は相対的に刺激を詳細には把握しないことが推測される。このため, 知性の低い人の方が聴空間を加工しやすく, 本結果につながった可能性が考えられる。今後, サンプル数を増やし, 聴空間の拡大と縮小を個別に検討することにより, 本結果についてもより詳細に検討され得るだろう。

(2) 17 刺激全体について

本研究で用いた 28 個の指標のうち 18 個において **Big Five** との間に関連が

見られ、概ね了解可能であった。また、そのうち 13 個の指標において **Big Five** と一対一の関連が見られたことから、本研究の **APT** がパーソナリティを映し出す道具として有用であり、**Big Five** に関する弁別性も有していることが示唆された。

結果全体を **APT** の指標の側から見ると（表 3-7）、まず、人物に関する指標（「自己の内界に向ける関心」「自己に向ける感情」「他者に向ける関心」「他者に向ける感情」「父親（的人物）に向ける感情」「母親（的人物）に向ける感情」「刺激外の人物の導入」「導入人物の性質」「標準的年齢／性別設定からのずれ」「独特な人物設定」）のうち 7 個で有意差や有意傾向が認められた。本研究の **APT** が対象関係や対人関係を映し出す **TAT** に近いことや、葛藤的な対人場面の刺激を採用したことから、この結果は予想通りであった。次に、**APT** 独自の指標である背景音に関する指標（「有音／無音の背景音の取り込み」「背景音に対する情緒的意味づけ」）では、そのうち 1 つで有意傾向が得られた。これらは出現率が低く、本研究では参加者の人数も少なかったため、2 つの群に分ける時点で困難があった。**APT** の独自性にも関連する可能性がある指標であるため、今後さらに検討したい。課題から逸れた発言に関する指標（「自己言及」「主観的印象」）では、共に有意差や有意傾向が得られた。これらはロールシャッハ法における逸脱言語表現などの特殊スコアに近く、本研究の **APT** が精神病理に関連するパーソナリティを映し出すのに有効である可能性を示唆している。これらについても、今後の研究を重ねていく必要がある。形式面の指標（「初発反応時間」「実験者による質問回数」「刺激の追加提示回数」「語りの様式」「複数の物語」）のうち、3 つで有意差や有意傾向が得られた。本研究で用いた指標の中でも客観性が高いこれらの指標が、特に情緒安定性（神経症傾向）と関連していたのは興味深い結果であった。**APT** 独自の指標を含む認知面の指標（「微小音要素の取り込み」「音要素の標準的意味づけからのずれ」「登場人物の標準的位置関係からのずれ」「聴空間の拡大・縮小」）では、1 つの指標で有意差が認められた。これらの指標は、**TAT** において同様の指標があるとはいえ、聴覚の認知に関するものであるため評価基準が特に曖昧であった。認知の側面は臨床的に重要な側面であり、可能な限り本研究の **APT** の指標として取り上げたいと考えている。今後、研究を進める中で精緻化を図っていきたい。

Big Five の側から結果全体を見ていくと、有意差や有意傾向が認められた指標は、外向性で 3 個、協調性で 4 個、勤勉性で 5 個、情緒安定性で 6 個、知性で 6 個であった。この中でも特に興味深かったのは情緒安定性である。有意差や有意傾向が多く認められた上、他の 4 因子では人物に関わる内容面の指標を中心に結果が得られているのに対し、情緒安定性では内容面の中でも特殊な指標や形式面の指標を中心に結果が得られた。本研究の APT と指標により、情緒安定性を量的にも質的にも捉え得る可能性が示されたといえよう。情緒安定性は神経症傾向とも呼ばれ、精神病理に関わるパーソナリティとも相関があることから、APT の心理臨床に対する適用可能性をも示唆していよう。

以上から、音声刺激による本研究の APT はパーソナリティを測定する道具として十分に機能し、自己や他者、対人関係に加えて、特に精神病理に関連するパーソナリティを映し出すことが示唆された。物語の分析に用いる指標に関しては、TAT で用いられている指標の多くは APT にも適用可能であり、背景音や認知面に関する APT 独自の指標についてはまだ課題を残している。

表 3-10. 本章において有意差・有意傾向が見られた指標

APT 指標	E	A	C	N	O	計
<内容面>						
自己の内界に向ける関心		†	†			2
自己に向ける感情(性質)					*	1
他者に向ける関心	*	*				2
他者に向ける感情(性質)			*			1
母親(的人物)に向ける感情(言及)	†					1
母親(的人物)に向ける感情(性質)		†				1
導入人物の性質			*		†	2
標準的年齢設定からのずれ	*					1
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)			†	**	**	3
攻撃的内容			*		*	2
自己言及				†		1
主観印象(対刺激)				*		1
主観印象(対人物)				*		1
<形式面>						
刺激の追加提示回数		†				1
語りの様式(移入形式)					†	1
語りの様式(会話形式)				†		1
複数の物語				**		1
<認知面>						
聴空間の拡大・縮小					*	1
計	3	4	5	6	6	24

E: 外向性, A: 協調性, C: 勤勉性, N: 情緒安定性, O: 知性

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意, † : 10%水準で有意

(3) 今後の課題と展望

既述の通り、認知面の指標をはじめ、本研究で有意差や有意傾向が得られた指標についても吟味し直し、評定法を精緻化することが課題である。また、本研究では被験者が大学生・大学院生 60 名に限られているため、実際にはその集団内でさえ本研究の知見を一般化することは難しいだろう。今後、被験者の人数を増やしたり他の集団に対して実施したりして、本研究の知見をより確かなものにしていく必要がある。さらに、パーソナリティを測定する有効な道具として APT を位置づけるためには、Big Five 以外のパーソナリティとの関連を検討する必要がある。特に臨床的な活用を考えれば、精神病理に関連するパーソナリティの質問紙や投映法との比較は欠かせない。今後、そうした研究を積み上げていくことで、APT の可能性もより広がっていくだろう。

第三章のまとめ

本章では、葛藤的な会話場面を中心とする音声刺激を独自に録音・作成し、予備実験により 17 個の刺激を選定した。その音声刺激による APT の反応に、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性という全般的なパーソナリティを測定する Big Five がどのように表れるか探索的に検討することを目的とし、本実験を行った。実験参加者は大学生・大学院生 60 名（男女とも 30 名）で、実験室において個別に APT と主要 5 因子性格検査（村上・村上，2001）を実施した。後日、参加者の反応を内容面・形式面・認知面の指標を用いて分析し、Big Five との関連を検討した。その結果、APT 指標と Big Five の各因子の間に関連が見られ、特に情緒安定性（神経症傾向）との間に特徴的な関連が認められた。神経症傾向は Big Five の中でも病理や症状に関連する因子であり、本研究の APT は参加者の自己や他者、対人関係に加えて、病理に関連するパーソナリティを映し出すことが示唆された。

第四章

【研究 2】非音声刺激による聴覚投映法と Big Five の関連

4-1 問題と目的

研究 1 で用いた音声刺激は葛藤的な会話場面が中心であったため、刺激内容が比較的明確であり、「葛藤的対人状況」の枠組みに基づく解釈が有効であった。その点で、研究 1 の APT は P-F Study に近いものになっていた可能性が考えられる。測定対象が明確である場合にはこのような APT が適しているが、APT の有用性や可能性をより広く検討するためには、パーソナリティについて得られる情報がより広範である方が適しているといえよう。

そこで本章では、会話などの有意味音声を含まず、物音や環境音を中心とする刺激（以下、非音声刺激）を作成し、その非音声刺激による APT がパーソナリティのどのような側面を映し出すか探索的に検討することを目的とする。非音声刺激を採用することにより反応の自由度が高まり、より広くパーソナリティを映し出すことができると考えられる。研究 1 と同様に、Big Five を比較対象とし、反応を分析する指標としてはどのようなものが有効か、本研究の聴覚刺激にはどのような特徴があるかについても、併せて考察していく。新たな刺激作成にあたっては、研究 1 での考察をふまえ、特に認知面を映し出す可能性に着目し、その可能性についても検討を行う。

4-2 予備実験の目的

主に物音や環境音から成る非音声刺激を作成し、有効な刺激を選定することを目的とする。刺激の提示順序や APT の実施手続き、教示内容についても併せて検討する。

4-3 予備実験の方法

実施時期 2006年8月の日中9:00~18:00の間に実施した。

実験参加者 大学院生6名（男性4名，女性2名）を対象とした。

聴覚刺激 筆者や協力者が独自に録音した音（環境音や物音）と，市販の効果音集（出典）の音を組み合わせて作成した。音素材の収集にあたっては，臨床心理学的に意味のある音であることと，聴覚の認知心理学に関わる音であることを念頭に置いた。音素材の合成にあたっては，刺激の曖昧さと物語の作成可能性のバランスに配慮した。刺激の長さは30秒に統一し，2つで1セットという形態の刺激も本研究では採用しないことにした。刺激の枠を固定することによって，参加者がより安定して刺激に接することができると考えた。このようにして約30種類作成した刺激から，臨床心理学を専門とする大学教員と協議の上，予備実験で用いる刺激を選定した（表4-1）。

手続き 実験室において，参加者に予備実験の主旨を説明し，いつでも中断可能であることを伝え，協力に同意を得た上でAPTを実施した。教示はTATを参考にし，希望すれば再び刺激を聴けることも伝え，参加者に刺激を聞いて思い浮かんだ，過去・現在・未来および登場人物の気持ちを含む物語を話してもらった。さらに，後で分析するために参加者の了承を得た上で実験の様子を録音した。実験者と参加者の座席の配置は90度とし，APT実施後，参加者の感想や意見を聴取した。

表 4-1. 予備実験で用いた刺激

刺激	内容	予備実験中での 変更・修正点
1	雑踏(いろいろな足音, いろいろな笑い声)	
2	火の音, 砂利道を遠ざかっていく足音	火の音をより明確なもの に変更
3	穏やかな波の音, 女性がさめざめと泣く声	泣き声を足音に変更
4	2人の赤ちゃんが遊ぶ声	
5	時計の秒針, 男性のため息	ノイズを低減
6	轟音, 波の音, 砂利道を足を引き摺るように歩く足音, 不思議な動物の羽音や鳴き声	
7	泡がブクブクいう音, 冷蔵庫の微かな唸り, 電気のスイッチを操作する音, 木製の床を靴で歩く足音, 衣擦れ, ベッドに倒れ込むような音	泡の音を除去
8	いろいろなものを壊しながら暴れるような音	
9	ピアノで即興演奏しているような音	
10	地下室のような反響のある場所を歩く 2人の足音, 開錠する音, 軋むドアを開閉する音, 施錠する音	
11	風の音, スコップで土を掘る音	
12	衣擦れ	
13	心拍	音量を低減
14	風が吹き荒れる音	硝子が割れる音を追加
15	ヒグラシの鳴き声, 沢の音, 鳥(ウグイスやカラスを含む)の鳴き声	ウグイスの鳴き声を除去

※ 予備実験は刺激の提示順序も変更しながら行った

4-4 予備実験の結果と考察

楽音（表 4-1 の第 9 刺激）以外は、どの刺激も物語作成の自由度が高く、反応に十分な幅があり、刺激として採用可能と考えられた。ただし、以下のような問題や課題も生じたため、それぞれ変更や修正を行った。まず、静かで薄暗い印象の刺激や攻撃性を喚起するような刺激を採用した影響か、登場人物が男性になりやすく、物語に女性が登場する刺激が少なかった。登場人物の性別は男女均等になるのが理想的であるため、女性が登場しやすい刺激を配置した。次に、人の会話を含まないようにした影響で、全体的に静かで寂しい刺激が多くなっていた。本研究の APT は寂しさや孤独感に焦点を当てることを目的としていないため、賑やかな刺激を増やした。また、音声刺激に比べて、参加者が注意深く刺激を聴くようになり、参加者の 1 人はノートパソコンの処理音も気になったと報告した。このため、本実験ではノートパソコンではなく MD ウォークマンを用いて刺激を再生することにした。

最終的な刺激および提示順序を表 4-2 と表 4-3 に示しておく。提示順序は比較的明確な刺激から、より曖昧な刺激へと進行するように配置した。これら 14 個の刺激は、音声刺激ほどではないが寂しさや不安、怒りなどの否定的感情を喚起する性質を備えていると考えられる。

表 4-2. 聴覚刺激の内容と提示順序および音要素

刺激	内容
1	都会の交差点(①車, ②車のクラクション, ③人々の足音や話し声, ④人の笑い声)で, いろんな足音が聴こえてくる(⑤ゆっくり歩く音[ハイヒール], ⑥歩く足音[革靴], ⑦走って近づいて来て止まる足音[ハイヒール])。
2	①静かな場所で, ②焚火をする音や③カラスの鳴き声が聴こえる。途中から, ④砂利道を歩く足音が遠ざかって消えていく。
3	①静かな場所で, 2人の赤ちゃんの喃語(②声, ③人数, ④言葉の内容)や⑤お腹が鳴る音が聴こえる。
4	①走る電車内で, ②小さなざわめきや③電車が建物などの傍を通過する音, ④ドンドンと鳴っている音が聴こえる。途中で女性が2回深いため息をつき(⑤ため息, ⑥ため息の数や深さ), ⑦踏み切りの音が微かに聴こえてくる。
5	①静かな場所で, ②冷蔵庫の電気音が聴こえる。③電気のスイッチ音がして, ④木製の床を靴で歩く足音と共に移動していく。足音が止まって, ⑤衣擦れが聴こえ, ⑥ベッドに倒れ込む音がする。
6	①静かな場所で, ②振り子時計の秒針の音が聴こえる。突然, ③やや遠くでガラスが割れる音がする。
7	①穏やかな波の音と②カモメやウミネコの鳴き声が聴こえる。③コンクリートの道を歩く足音[ハイヒール]がゆっくりと近づいてきてしばらく立ち止まり, 少しして, ④やや足早に遠ざかって消えていく。
8	①静かな場所で, ②音が反響する廊下を, 歩く2人の足音(③足音, ④人数や性別, ⑤枯葉を踏むような音)が近づいてくる。足音が止まり, ⑥鍵を開け, ドアを開閉し(⑦開閉, ⑧軋み), ⑨再び鍵をかける。
9	①轟音と②荒れた波の音, ③砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が聴こえる。突然不思議な生物の④羽音や⑤鳴き声がして, ⑥足音が止まる。再び不思議な生物の⑦羽音や⑧鳴き声が聴こえてくる中, 歩き始める足音が聴こえる。
10	家の中を荒らすような音が聴こえる(①ガラスが割れる音, ②何かがぶつかる音[木の質感], ③走り回る音)。
11	①静かな場所で, ②衣擦れ(③音と音の間(動きが止まる))や④トントンと叩くような音が聴こえる。
12	①風が吹き荒れる中, スコップで土を掘り続ける音が聴こえる(②土を掘る音, ③草の根が千切れるような音)。
13	①静かな場所で, 心拍が聴こえる(①心拍, ②心拍の不規則さ)。
14	①ヒグラシや②鳥や③カラスの鳴き声と④沢の音が聴こえる。

※ 内容は作成時の想定であり, 必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない
①～⑨: 音要素, 下線: 微小音要素

4-5 本実験の目的

APTの可能性や有用性、反応を分析する指標、聴覚刺激の特徴を検討することを目的とし、予備実験で選定した聴覚刺激を用いてAPTを実施し、Big Fiveとの関連を探索的に検討する。

4-6 本実験の方法

実施時期 2006年9～11月の日中9:00～18:00の間に実施した。

実験参加者 大学生・大学院生60名（男女とも30名）を対象とした。

聴覚刺激 予備実験で選定した14刺激を用いた。

質問紙 研究1と同様に村上・村上(2001)の主要5因子性格検査を採用し、全70項目について「はい/いいえ」の2件法で回答を求めた(資料1)。

手続き 実験室において、実験者と参加者は机を挟んで90度で向かい合って座った(図4-1)。実験者は参加者に実験の主旨を説明し、協力に同意を得た上でAPTを実施した。坪内(1997)によるTATの手続きを参考に、「これからこちらのスピーカーを通して、あなたにいろいろな人や場面の音を聞かせていただきます。その音を聞いて思い浮かぶ物語を作って、私に話して下さい。その場面の中の人、今、何を感じ、どうしているのか、その場面の前にはどのようなことがあって、その場面の後にはどうなっていくのか、お話の筋をつけて話して下さい。ちょうど、物語の一場面が先にできてしまって、それに短いお話をつけなくてはならなくなった小説家のような気持ちで、頑張ってやってみて下さい。音は全部で14個あります。これから1つずつあなたに聞かせていきますから、1つの音に対して1つずつお話を話して下さい。正しい答えや間違った答えというのはないので、思ったようにやってみて下さい。それから音は一度流すと消えてしまうのですが、もう一度聞きたいときには遠慮なく仰って下さい」と教示して、スピーカー(ONKYO WAVIO GX-D90)を通して1つずつ刺激を提示し、参加者に物語作成を求めた。後で分析するために参加者の了承を得た上で実験の様子を録音した。APTの実施後に質問紙への回答を求めた。実験後には参加者の感想を聴取した。

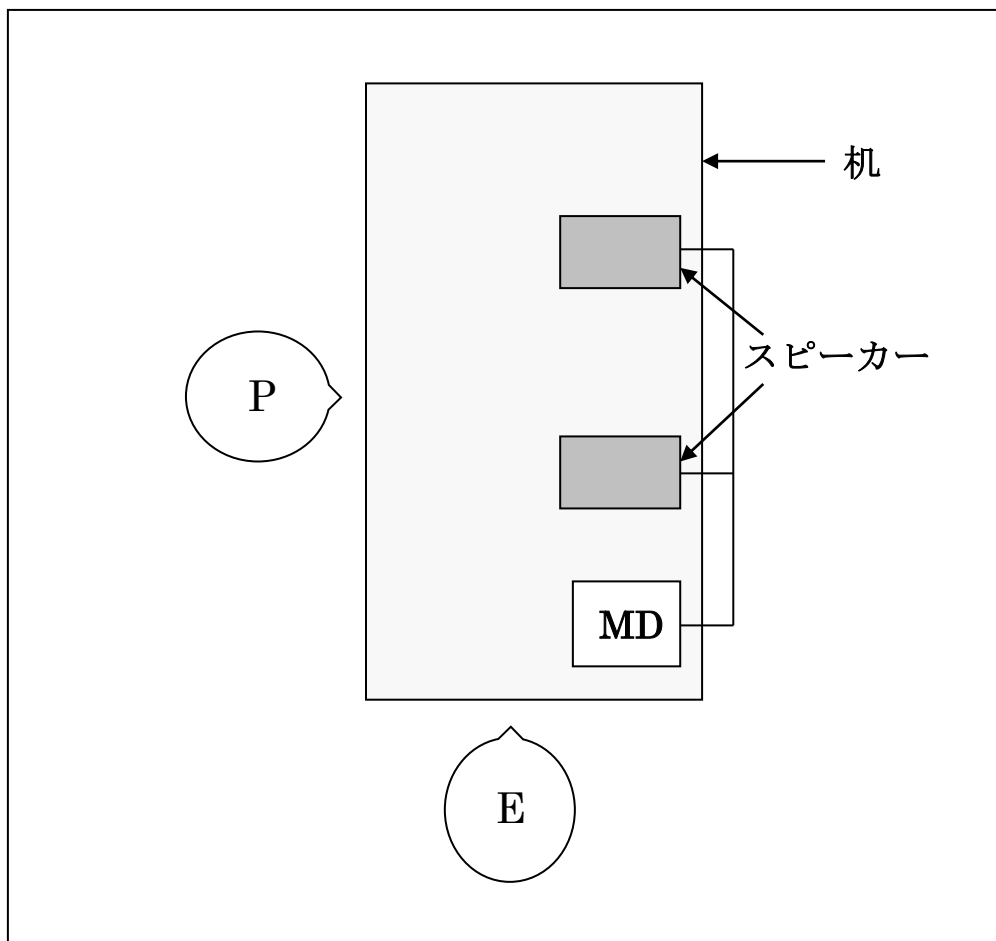


図 4-1. 実験時の配置

P : 参加者 E : 実験者 MD : MD ウォークマン

※ MD ウォークマン (SONY Hi-MD WALKMAN MZ-RH1) とスピーカー (ONKYO WAVIO GX-D90) を接続し、実験者は MD ウォークマンを操作して聴覚刺激を再生した。スピーカーは 2 つで 1 セットのもので、参加者が正面になるように設置した。

分析方法 研究1と同様に、内容面・形式面・認知面から成る諸指標を用いて反応ごとに幅広く分析を行った。指標に関しては、研究1で用いたものを本研究のAPTに合わせて変更・修正し(表4-3)、評定基準が一定になるよう評定マニュアルを作成した(資料4,5)。修正に関しては後述の各指標の説明とともに示す。変更に関しては、本研究の刺激は台詞を含んでおらず、登場人物の人数も少ないため、研究1で用いた「標準的年齢/性別設定からのずれ」や「登場人物の標準的位置関係からのずれ」は「標準的年齢/性別設定」や「標準的位置関係」の基準を設けることが困難であり、本研究では取り上げなかった。「明確な結末」は明確さの基準設定が困難であるため除外した。他方、「主人公の導入」や「動物の導入」「反応の失敗・拒否」「音要素の取り込み」「触覚情報の性質」のほか、探索的な指標を多数採用した。また、研究1では「自己に向ける感情」などの指標において「肯定的/どちらでもない/否定的/言及なし」の4件法を採用していたが、本研究ではさらに「肯定的」と「否定的」のいずれも強い場合を「両価的」とし、5件法を採用した。出現数としては少ない可能性があるが、両価性は臨床的にも重要な側面であるため取り上げることにした。各指標の評定方法や想定される解釈を以下にまとめておく。

(1) 内容面

1) **自己の内界に向ける関心** 本論では、参加者が物語において特に同一化した登場人物、つまり主人公を「自己」とする。TATにおいても物語の主人公を「自己」と捉えることには諸説あるが、「被検者が強く同一化している人物の特徴的な面は、被検者自身のそれでもあろう(鈴木,1997)」という視点に本論も重きを置く。本指標では、その「自己」の気持ちの移り変わりなどの内的過程や、思考過程に関する言及について「ある/ない」の2件法で評定する。ただし、明らかに表面的な語りや、まったく情緒を伴わない語りなどは、自己の内界に強い関心があるとはいえないので、「ない」に評定する。本指標には、参加者自身の内界に向けるエネルギーの強さが反映され、それはいわゆるユング的な向性に関連すると考えられる。

2) **自己に向ける感情** 自己に向けられている感情について「肯定的/どちらでもない/否定的/両価的/言及なし」のいずれかに分類する。本指標では、「言

及あり／言及なし」には自己に注意を向ける程度が反映され、「肯定的／どちらでもない／否定的」には自己イメージが肯定的であるか否定的であるか、自尊心が高いか低いか、それらの程度が反映され、「両価的／両価的以外」には自己イメージにおける両価性の程度が反映されると考えられる。

3) 他者に向ける関心 研究1の音声刺激と異なり、非音声刺激には対人場面がほとんど含まれておらず、含まれていても曖昧であるため、本研究では他者や対人関係の描写について「ある／ない」の2件法で評定する。解釈に関しては研究1と同様で、他者に向ける関心や対人希求、回避傾向などが反映されると考えられる。

4) 他者に向ける感情 他者および周囲の環境に対する感情を「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」に分類する。他者は安心して甘えられる存在であるか、あるいは脅威を与えてくる存在であるかということも含まれる。本指標では、「言及あり／言及なし」には他者に注意を向ける程度が反映され、「肯定的／どちらでもない／否定的」には他者イメージが肯定的であるか否定的であるかの程度が反映され、「両価的／両価的以外」には他者イメージにおける両価性の程度が反映されると考えられる。つまり、全体として、本指標は周囲に対する信頼 - 不信や対象関係、対人関係の質を映し出すと想定される

5) 父親（的人物）に向ける感情，母親（的人物）に向ける感情 両親や祖父母などの保護者、それに近い立場の登場人物に対する感情を評定する。評定方法は「他者に向ける感情」に準ずる。本指標には、親イメージや親子関係の質、さらには依存傾向なども反映され得るだろう。

6) 人物の導入 刺激中に存在しない人物を物語に登場させた場合には「ある」、登場させていない場合には「ない」と評定する。単なる「通行人」など、物語の展開に関係しない人物の導入が見られた場合には「ない」と評定する。本指標は、他者に対する関心や想像力・創造性、課題に対する自由な態度などを反映すると考えられる。「導入人物の性質」と共に総合的に解釈すると、より豊かな情報が得られる。

7) 主人公の導入 物語に刺激外の人物が導入され、かつ、その人物が主人公である場合に「ある」、そのような反応でなければ「ない」と評定する。刺激中に台詞がなく、参加者が同一化する対象が曖昧であるためか、音声刺激によ

る APT に比べて本指標に該当する反応が多く、探索的な指標として取り上げた。本指標には、参加者が刺激中の人物に同一化しない点から、刺激に対して心理的に距離を取っている場合と、逆に、刺激との心理的距離が近すぎて、その刺激の中に参加者がいるかのように体験される場合の両方が考えられる。どちらの場合も、刺激との心理的距離の取り方に特徴がある人といえよう。また、刺激中に人物が存在しないもの（第 14 刺激）もあり、主人公の導入が生じることが物語作成の前提になる場合もある。つまり、本指標は課題に取り組む意欲も反映する可能性がある。

8) 導入人物の性質 物語に導入人物がいる場合、その人物は他の登場人物、特に主人公にとってどのような存在であるかを検討し、「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的」に分類する。山本（1992）は TAT の図版 1 に関して述べる中で、「この絵の中に描かれていない人物が導入されたとき（導入人物）は、他の絵でも同じであるが、その人物との関係が深いことが予想される」としている。参加者にとっては刺激中の人物よりも導入人物の方が近い存在であり、本指標は、「他者に向ける感情」以上に参加者の対象関係や対人関係の根幹に関わる特徴を示す可能性がある。

9) 独特な人物設定 本指標は「人物の無規定性（水口・佃，1955）」という聴覚刺激の特徴に基づく探索的指標である。登場人物に社会的地位や特定の性格、容貌などが設定されている場合に「ある」、設定されていない場合に「ない」と評定する。本指標には、他者に対する特殊な関心や、想像力が反映されると考えられる。

10) 動物の導入 参加者が刺激中に存在しない動物を物語に導入した場合に「ある」、そのような導入が見られなければ「ない」と評定する。本指標も音声刺激による APT に比べて該当する反応が多く、探索的な指標として取り上げた。本指標には、人物ではなく動物を導入する点から、対人関係からの回避が推測される。ただし、同じ反応の中で人物が導入されている可能性もあり、実際の解釈は他の要素と総合して行う必要があるだろう。

11) 有音／無音の背景音の取り込み 背景音を反応に取り込んでいるか否かを検討し、「ある／ない」の 2 件法で評定する。背景に音がある場合（有音）と、音がない場合（無音）を分けて評定を行う。本指標には周囲に対する関心

や敏感さ、注意深さ、および刺激全体を取り込もうとする努力などが反映されると考えられる。

1 2) 背景音に対する情緒的意味づけ 背景音は物語の登場人物、特に主人公にとってどのようなものであるか、その性質を「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」に分類する。無音の背景音についても評定対象とする。例えば、「周囲に何も聴こえないがそこに何か潜んでいる気がする」という場合は「否定的」、「逃亡者が誰もいない静かな場所に辿り着いてほっとしている」という場合は「肯定的」となる。本指標には、周囲に対する信頼 - 不信や対象関係の質などが反映されると考えられ、「他者に向ける感情」よりも非意識的な部分が表れやすい可能性がある。

1 3) 結末の性質 登場人物、特に主人公にとって物語の結末はどのようなものであるかを検討し、その性質を「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的」に分類する。一般的に投映法の刺激は否定的な性質のものが多く、本研究の非音声刺激もそのことを念頭に作成している。そのような刺激に対して肯定的な結末を多く語る人は、否定的なものを受け入れられず、否認している可能性もある。逆に、否定的な結末ばかりで肯定的な結末を語らない人は、抑うつ的で、悲観主義的な構えがあることが推測されるだろう。

1 4) 攻撃的内容 自己や他者、導入人物の区別にかかわらず、物語の登場人物の攻撃的行動や強い怒り、破壊が述べられていれば「ある」に、述べられていなければ「ない」に評定する。自傷他害を含め、自殺など攻撃が自己に向けられている場合にも「ある」と評定する。本指標には、参加者の攻撃性や強い怒りの感情が反映されると考えられる。

1 5) 自己言及 物語を語る際に自分の体験に言及した場合は「ある」に、言及しなかった場合は「ない」に評定する。聴覚刺激が備える「一過性」の特徴から、物語には参加者の記憶が強く反映される可能性があり、TAT よりもこの指標への該当が多くなると予想される。その一方で、実際に自分の体験をもとに物語を作成しているとしても、そのことを明言する人は少ないかもしれない。本指標には、TAT における自己言及と同様に、独断性や自己中心性が反映されると考えられる。

1 6) 主観的印象 反応において物語作成とは関係のない主観的印象が語ら

れた場合に、聴覚刺激に対するものを「対刺激」に、刺激中の人物に対するものを「対人物」に、参加者が作成した物語に対するものを「対物語」に評定する。鈴木（1997）によると、TATにおける主観的印象は、反応に対する主体のかかわりを薄め、反応から心理的に距離をとろうとする語りの様式の1つとされ、「主観的なことを口にしはするが、それを人に委ねることはしない反応」であるという。つまり、このような反応を生じるとき、被検者は反応に自らのパーソナリティが反映されていることを程度の差はあれ自覚し、自分と反応の関連性を薄め、検査者による解釈を薄めようとしており、その背景には性格検査に対する不安が推測される。APTにおいても同様に、本指標には参加者がAPTに対して心理的に距離をとろうとしていることや、その背景にある不安を反映すると考えられる。また、主観的印象に批判的要素が含まれることがあり、「対刺激」と「対人物」ではAPTに対する批判を、「対物語」では参加者の自己批判を読み取ることもできるだろう。

17) 損傷内容 「人が傷つけられる」「物が破壊される」「老朽化した家」などの内容に言及があった場合に「ある」、言及がなければ「ない」と評定する。本指標は、ロールシャッハ法における「損傷内容 (MOR) (高橋・高橋・西尾, 2007)」を参考に取り入れた探索的指標の1つである。

18) 食物反応 食べ物に言及があった場合に「ある」と評定する。本指標も、ロールシャッハ法における「食物反応 (Fd) (高橋ら, 2007)」を参考に取り入れた探索的指標の1つである。

19) 衣服反応 登場人物の服装に関して言及があった場合に「ある」と評定する。本指標も、ロールシャッハ法における「衣服反応 (Cg) (高橋ら, 2007)」を参考に取り入れた探索的指標の1つである。

20) 性的内容 性的な内容に言及があった場合に「ある」と評定する。本指標も、ロールシャッハ法における「性反応 (Sx) (高橋ら, 2007)」を参考に取り入れた探索的指標の1つである。

21) 物質の導入 刺激中に存在しない物質が導入された場合に「ある」と評定する。「動物の導入」と同様に、本指標も音声刺激によるAPTに比べて該当する反応が多く、探索的指標の1つとして取り上げた。

22) 劇化反応 演劇や映画、アニメーションの一場面として物語が語られ

た場合に「ある」と評定する。本指標には、反応に対する心理的距離を確保する意味合いが想定され、特定の映画のタイトルなどに言及すると、より反応に含まれる主観が薄まるだろう。その背景には、参加者の主観を提示することへの不安が推測される。

2 3) 非現実的内容 夢や地獄などの一場面として物語が語られた場合に「ある」と評定する。本刺激に該当する反応には参加者の想像や内的世界が、ときに生々しく感じられるほどに表現され得る。その一方で、夢の中的一场面として短く反応を終える場合もあり、解釈には反応の内容や表出の仕方について質的な分析を行う必要がある。

2 4) 歴史的 content 現代ではない時代設定で物語が語られた場合に「ある」と評定する。本指標も、ロールシャッハ法における「人類学反応 (Ay) (高橋ら, 2007)」を参考に取り入れた探索的指標の 1 つである。

(2) 形式面

1) 反応の失敗・拒否 参加者が反応しようとするが適切に反応できなかった場合、あるいは、参加者が反応することを拒んだ場合に「ある」、普通に物語を語った場合には「ない」と評定する。非音声刺激を採用したことにより、研究 1 に比べて本指標への該当が相対的に増えたため取り上げた。本指標には、参加者の処理能力や、その一時的な低下 (ショック)、課題に取り組む意欲、想像力などが反映されるだろう。

2) 初発反応時間 聴覚刺激を提示し終えてから参加者が物語を語り始めるまでの時間を秒単位で計測する。物語に関連しない発話は評定対象としない。本指標は、他の投映法と同様に、反応性や衝動性、刺激に対するショック、試行錯誤あるいは熟慮という対処スタイルなどを反映すると考えられる。なお、APT における物語作成では、刺激に対する短期記憶、および自身の体験に対する長期記憶に基づく内的作業が必要であるため、他の投映法において時間をかけて反応を表出する人は、APT においてはさらに多くの時間をかけることが予想される。その一方で、反応性が高い人は刺激を聴きながら物語を作成し、初発反応時間は非常に短くなる可能性もある。このため、APT の初発反応時間は取り得る値の範囲が大きくなると考えられる。

3) **実験者による質問回数** 実験者が教示内容に則した質問を行った回数を数える。つまり、参加者の自発的な語りが無い場合の物語の「過去」および「未来」、登場人物の「気持ち」の3点に関する質問に評定対象を限定する。聴覚刺激は14個あり、たとえ最初の教示内容を理解できていなかったとしても、14個の物語を語っていく中で参加者は何を語れば良いのかを理解していくことができるだろう。最初は実験者の質問が多くても、実験が進むにつれてその数は減っていくことが期待される。このため本指標には、物語作成に取り組む意欲の低さや、受身的・依存的な構えが反映されると考えられる。

4) **刺激の追加提示回数** 参加者が実験者に刺激の追加提示を求めた回数を数える。刺激の「一過性」という特徴を持つAPT特有の指標の1つである。刺激をうまく聴き取れなかったり、もともと聴き取りにくい内容を確認したり、1度聴いて物語を作成できなかつたりしたときに、刺激の追加提示が求められる。本指標には、注意集中の失敗や、物事を正確に把握しようとする態度、参加者の物語作成に対する努力などが反映されると考えられる。

5) **語りの様式** 参加者の反応の語り方を検討し、登場人物の1人に同一化して、その台詞を交えながら物語を展開するものを「移入形式」、複数の登場人物に同一化して、その対話を交えて物語を進めていくものを「会話形式」、「昔々あるところに…」で始まるような語り部として物語を展開するものを「物語形式」と分類する。TATの中では、それぞれ人に対して不自然に構えてしまうことを示唆するが、「移入形式」と「会話形式」にはある種の演技能力が必要とされ、その能力には感情生活の活発さや流動性が含まれる(鈴木, 1997)。他方、APTでは刺激中に台詞があるため、TATと比較すると「移入形式」や「会話形式」の該当が多くなると予想される。この差が解釈にどのような影響を与えるか、確認する必要がある。

6) **複数の物語** 1つの刺激において複数の物語を作成した場合に「ある」、1つの物語を作成した場合に「ない」と評定する。APTの最初に「1セットの音に対して1つずつお話を話して下さい」と教示するため、各刺激に対して1つの物語を作るのが一般的な反応である。本指標には、複数の可能性から1つの物語に絞り込む思い切りの弱さや、取捨選択することへの不安を反映していると考えられる。

7) **前の刺激や物語との関連づけ** 前に提示された聴覚刺激や、前に語った物語の続きなどとして物語が語られた場合に「ある」と評定する。本指標も、ロールシャッハ法における「固執反応 (PSV) (高橋ら, 2007)」を参考に取り入れた探索的指標の1つである。

(3) 認知面

1) **微小音要素の取り込み** 取り込む参加者の割合が10%に満たない音要素を微小音要素とし、それを取り込んだ場合に「ある」、取り込まなかった場合に「ない」に評定する。本指標には、情報処理における過度な注意深さや、細部に対するこだわりが反映されると考えられる。

2) **音要素の取り込み** 各刺激を表4-2のように細かい要素に試験的に分類し、参加者がそれらをどれくらい取り込んだか数える。本指標は、課題に取り組む際に、情報をより多く取り込むことで対処しようとするか、情報の取り込みは最小限で内的作業により対処しようとするかを反映すると考えられる。特に前者の対処を行う場合には、課題に対する努力の量的側面も反映されるだろう。また、細かい部分まで注意を向ける傾向や、取り込んだ刺激を記憶する能力も関連すると考えられる。

3) **音要素の統合** 本指標では、「音要素の取り込み」に該当した音要素のうち、単に言及しただけではなく、物語の展開に関わる音要素として統合されたものを数える。記述水準の反応とも関連が想定される、試験的な指標である。

4) **音要素に対する標準的意味づけからのずれ** 本章のAPTでは刺激に台詞が含まれていないため、主に物音を評定対象とした。例えば、多くの参加者が強い衝撃を感じる音についてその衝撃を極端に低めて捉えたり、多くの参加者が移動していく足音と捉えるものを移動していないと捉えたりというように、ずれが明確な場合にのみ「ある」と評定する。本指標は、表4-2の意味づけを「標準」と想定するが、ロールシャッハ法における形態水準のように参加者の現実検討力を測るものとするには、評定の基準が確立できていない。ただ、参加者の強引な統合が反映される可能性がある。つまり、物語全体の辻褄を合わせるために、刺激中の要素に特殊な意味づけをしたり、意味づけを強引に変えたりした場合に、本指標に該当すると考えられる。刺激の記憶を保持する能力

も関わり、実際の解釈では他の反応も総合的に見て行く必要があるだろう。

5) 聴空間の拡大／縮小 本研究では「拡大」と「縮小」を分けて評定する。評定方法や解釈については研究 1 と同様であり、刺激が設定する聴空間に対して、それとは別の空間を想像し、その空間で物語を大きく展開させた場合は「拡大」に、建物や乗物などで空間を区切り、その小さな空間内で物語が収まった場合は「縮小」と評定する。

6) 他の感覚への言及 視覚や触覚など、聴覚以外の感覚への言及について「ある／ない」の 2 件法で評定する。「触覚情報の性質」と共に取り上げる、独自の探索的指標の 1 つである。

7) 触覚情報の性質 触覚や材質感に関する表現について、「肯定的（快、温かい、柔らかい）／どちらでもない／否定的（不快、冷たい、硬い）／両価的／言及なし」に分類する。ロールシャッハ法における「材質反応 (T) (高橋ら, 2007)」を参考に取り入れた探索的指標の 1 つであり、本指標は親密な対人関係への関心およびその性質を反映すると考えられた。

表 4-3. 本章で用いた APT の指標

内容面	<p>自己の内界に向ける関心, 自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 人物の導入, 主人公の導入, 導入人物の性質, 独特な人物設定, 動物の導入, 有音／無音の背景音の取り込み, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結末の性質, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己言及, 主観的印象, 食物反応, 衣服反応, 性的内容, 物質の導入, 劇化反応, 非現実的内容, 歴史的 content</p>
形式面	<p>反応の失敗・拒否, 初発反応時間, 実験者による質問回数, <i>刺激の追加提示回数</i>, 語りの様式, 複数の物語, 前の刺激や物語との関連づけ</p>
認知面	<p>微小音要素の取り込み, 音要素の取り込み, 音要素の統合, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, <i>聴空間の拡大／縮小</i>, 他の感覚への言及, <i>触覚情報の性質</i></p>

※ *斜字体*は APT 独自の指標を示す

4-7 本実験の結果

(1) APT の評定値の算出

評定マニュアルに沿って、筆者を含む臨床心理士 3 名で、全体の 20%にあたる 12 名分（物語 168 個分）を独立して評定したところ、87.2%および 84.2%と十分な一致率が得られたため、一致しなかった部分については合議により最終的な評定を決定し、他の評定は筆者が 1 人で行った。評定後、指標ごとに 14 刺激全体の評定値を算出した。評定値の算出方法を表 4-4 に、平均値と標準偏差を表 4-5 と表 4-6 に示す。なお、「主観的印象（対刺激）」と「主観的印象（対人物）」は出現数が低かったため、「主観的印象（対物語）」も含めて合算し、「主観的印象」として統合した。「父親（的人物）に向ける感情（両価）」「母親（的人物）に向ける感情（両価）」「歴史的 content」の 3 指標は出現数が非常に小さかったため、以下の分析対象から除外した。

(2) Big Five の得点の算出

主要 5 因子性格検査ハンドブック（村上・村上，2001）に従い T 得点を算出した（表 4-7）。Big Five の因子間で Pearson の相関係数を算出したところ、外向性と勤勉性に弱い負の相関が、勤勉性と知性および情緒安定性と知性の間に弱い正の相関が見られた（表 4-8）。

(3) 分析

APT の指標ごとに、参加者を上位および下位から少なくとも 10 名程度ずつ抽出して高群および低群、あるいは「あり群」および「なし群」に分けた。これらの 2 群における Big Five の T 得点について、等分散性の検定を行った上での t 検定により差を検討した。その結果、以下の有意差が認められた（表 4-9～表 4-12）。なお、本章では探索的検討を行う目的から、10%水準の有意傾向についても慎重に取り上げることにする。

内容面の指標では、「自己の内界に向ける関心」の高群は低群に比べて外向性が低い傾向にあった ($t = -2.08$, $df = 23$, $p < .10$)。「自己に向ける感情（性質）」の高群は外向性が低く、協調性が高い傾向にあり（順に $t = -1.75$, $df = 21$, p

<.10 ; $t=1.84$, $df=21$, $p<.10$), 低群は勤勉性および知性が低い傾向にあった (順に $t=1.86$, $df=21$, $p<.10$; $t=1.96$, $df=21$, $p<.10$)。「他者に向ける感情 (性質)」の高群は外向性が低い傾向にあり ($t=-2.07$, $df=28$, $p<.10$), 協調性が有意に高かった ($t=2.34$, $df=28$, $p<.05$)。「父親 (的人物) に向ける感情 (言及)」の高群は協調性が高い傾向にあり ($t=1.73$, $df=35$, $p<.10$), 「父親 (的人物) に向ける感情 (性質)」の高群は協調性が有意に高かった ($t=2.26$, $df=29$, $p<.05$)。「母親 (的人物) に向ける感情 (言及)」の高群は協調性が高く, 勤勉性が低い傾向にあり (順に $t=1.81$, $df=29$, $p<.10$; $t=-2.00$, $df=29$, $p<.10$), 「母親 (的人物) に向ける感情 (性質)」の高群は協調性が有意に高く, 低群は勤勉性が有意に低かった (順に $t=3.31$, $df=39$, $p<.01$; $t=2.13$, $df=39$, $p<.05$)。「刺激外の人物の導入」の低群は外向性が低い傾向にあった ($t=1.73$, $df=30$, $p<.10$)。「主人公の導入」の低群は高群よりも情緒安定性が有意に低く ($t=2.71$, $df=27$, $p<.05$), 知性も低い傾向が見られた ($t=1.72$, $df=27$, $p<.10$)。「導入人物の性質 (性質)」の高群は協調性が有意に高かった ($t=2.15$, $df=28$, $p<.05$)。「動物の導入」のなし群は協調性が有意に高かった ($t=-2.72$, $df=58$, $p<.01$)。「有音の背景音の取り込み」の高群は協調性が高い傾向にあり ($t=2.02$, $df=27$, $p<.10$), 「背景音に対する情緒的意味づけ (言及)」の高群も協調性が有意に高かった ($t=2.39$, $df=23$, $p<.05$)。「背景音に対する情緒的意味づけ (両価)」の高群は低群に比べて知性が高い傾向にあった ($t=1.94$, $df=58$, $p<.10$)。「結末の性質 (性質)」の高群は協調性が高い傾向にあり ($t=1.90$, $df=21$, $p<.10$), 低群は勤勉性が有意に低かった ($t=2.26$, $df=21$, $p<.05$)。「攻撃的内容」の低群は協調性が有意に高かった ($t=-3.12$, $df=37$, $p<.01$)。「自己言及」のあり群はなし群に比べて外向性が高い傾向にあり ($t=1.98$, $df=58$, $p<.10$), 勤勉性が有意に低かった ($t=-3.20$, $df=58$, $p<.01$)。「主観的印象」の高群は情緒安定性が低い傾向にあった ($t=-1.75$, $df=35$, $p<.10$)。「物質の導入」の低群は外向性と知性が共に低い傾向にあった (順に $t=1.85$, $df=29$, $p<.10$; $t=1.74$, $df=29$, $p<.10$)。形式面の指標では, 「反応の失敗・拒否」のなし群は協調性が有意に高く ($t=-2.31$, $df=58$, $p<.05$), あり群は勤勉性が高い傾向にあった ($t=1.94$, $df=58$, $p<.10$)。「初発反応時間」の高群は外向性が低い傾向

にあり、低群は勤勉性が低い傾向にあった（順に $t = -1.82$, $df = 18$, $p < .10$; $t = 1.93$, $df = 18$, $p < .10$ ）。「語りの様式（移入形式）」の高群は低群に比べて情緒安定性が高い傾向にあった（ $t = 1.83$, $df = 20$, $p < .10$ ）。「複数の物語」の低群は協調性が高く、高群は勤勉性が低い傾向にあった（順に $t = -1.87$, $df = 49$, $p < .10$; $t = -1.68$, $df = 49$, $p < .10$ ）。認知面の指標では、「微小音要素の取り込み」の低群は協調性が高い傾向にあった（ $t = -1.68$, $df = 44$, $p < .10$ ）。「音要素の取り込み」および「音要素の統合」の低群は有意に外向性が低かった（順に $t = 2.58$, $df = 21$, $p < .05$; $t = 2.68$, $df = 22$, $p < .05$ ）。

表 4-4. 各指標における評定値の算出方法

評定法	評定値の算出方法	該当する指標
時間や回数を計測	物語 14 個(参加者 1 人分)に対する値をそのまま合計	初発反応時間, 実験者による質問回数, 刺激の追加提示回数
「ある／ない」「該当する／該当しない」の 2 件法	「ある／ない」「該当する／該当しない」を「1／0」に変換後, 物語 14 個分を合計	自己の内界に向ける関心, 他者に向ける関心, 人物の導入, 主人公の導入, 独特な人物設定, 動物の導入, 有音／無音の背景音の取り込み, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己言及, 主観的印象, 食物反応, 衣服反応, 性的内容, 物質の導入, 劇化反応, 非現実的内容, 歴史的内容, 反応の失敗・拒否, 語りの様式, 複数の物語, 前の刺激や物語との関連づけ, 微小音要素の取り込み, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, 聴空間の拡大／縮小, 他の感覚への言及
	音要素ごとに「該当する／該当しない」を「1／0」に変換後, 物語 14 個分を合計	音要素の取り込み, 音要素の統合
「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」の 5 件法	言及 「言及なし以外／言及なし」を「1／0」に変換後, 物語 14 個分の値を合計	自己に向ける感情, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 導入人物の性質, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結末の性質, 触覚情報の性質
	性質 「肯定的／どちらでもない／否定的」を「1／0／-1」に変換後, 物語 14 個分の値を合計	
	両価 「両価的／両価的以外」を「1／0」に変換後, 物語 14 個分の値を合計	

表 4-5. 各指標の評定値の平均および標準偏差

APT 指標	平均値	標準偏差
自己の内界に向ける関心	7.03	2.92
自己に向ける感情(言及)	3.07	2.10
自己に向ける感情(性質)	-0.20	1.62
自己に向ける感情(両価)	0.22	0.83
他者に向ける関心	6.83	2.81
他者に向ける感情(言及)	3.58	1.92
他者に向ける感情(性質)	0.33	2.76
他者に向ける感情(両価)	0.50	0.83
父親(的人物)に向ける感情(言及)	2.17	2.04
父親(的人物)に向ける感情(性質)	-0.08	1.04
父親(的人物)に向ける感情(両価)	0.07	0.25
母親(的人物)に向ける感情(言及)	2.63	1.59
母親(的人物)に向ける感情(性質)	0.42	1.24
母親(的人物)に向ける感情(両価)	0.03	0.18
人物の導入	8.10	2.63
主人公の導入	3.77	1.84
導入人物の性質(言及)	6.22	2.93
導入人物の性質(性質)	0.79	2.11
導入人物の性質(両価)	0.22	0.56
独特な人物設定	6.40	2.97
動物の導入	0.40	0.56
有音の背景音の取り込み	3.20	1.47
無音の背景音の取り込み	1.63	1.13
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	4.83	1.95
背景音に対する情緒的意味づけ(性質)	-0.81	1.45
背景音に対する情緒的意味づけ(両価)	0.17	0.38
結末の性質(性質)	1.08	3.49
結末の性質(両価)	0.45	0.83
攻撃的内容	2.28	1.39
損傷内容	1.87	1.44
自己言及	0.20	0.55
主観的印象	1.30	1.93
食物反応	2.27	1.78
衣服反応	1.83	1.36
性的内容	0.23	0.53
物質の導入	4.77	2.20
劇化反応	0.54	1.11
非現実的内容	0.27	0.65

N=60

表 4-6. 各指標の評定値の平均および標準偏差

APT 指標	平均値	標準偏差
反応の失敗・拒否	0.23	0.55
初発反応時間(秒)	135.43	143.09
実験者による質問回数	8.57	6.86
刺激の追加提示回数	1.55	1.70
語りの様式(移入形式)	9.40	3.01
語りの様式(会話形式)	0.32	0.72
語りの様式(物語形式)	0.70	2.31
複数の物語	0.80	1.33
前の刺激や物語との関連づけ	0.21	0.58
微小音要素の取り込み	1.24	1.28
音要素の取り込み	32.30	3.85
音要素の統合	30.53	3.67
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	0.72	0.74
聴空間の拡大	0.43	0.72
聴空間の縮小	1.38	1.43
他の感覚への言及	7.52	2.99
触覚情報の性質(言及)	3.17	1.01
触覚情報の性質(性質)	-0.83	1.08
触覚情報の性質(両価)	0.33	0.57

N=60

表 4-7. Big Five の各因子の平均値および標準偏差

	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
平均値	48.17	53.73	49.45	48.98	47.88
標準偏差	8.19	9.25	8.60	8.91	8.97

$N = 60$

表 4-8. Big Five の因子間での Pearson の相関係数

	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
外向性	-0.02	-0.28*	0.19	0.14
協調性		0.15	-0.02	0.01
勤勉性			-0.04	0.40**
情緒安定性				0.26*

$N = 60$, ** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意

表 4-9. APT 指標の高群および低群における Big Five の平均 (標準偏差)

APT 指標	群:人数	外向性	協調性	勤勉性	情緒 安定性	知性
自己の内界に向けた関心	高:12	46.00 [†] (10.59)	53.00 (5.94)	46.75 (8.09)	54.25 (8.53)	45.50 (7.15)
	低:13	53.31 [†] (6.29)	51.08 (7.27)	48.69 (8.21)	51.77 (9.58)	51.85 (11.13)
自己に向けた感情(言及)	高:13	49.08 (9.47)	55.54 (7.76)	50.15 (8.75)	50.38 (9.24)	49.00 (9.27)
	低:16	46.44 (7.34)	56.06 (9.73)	50.63 (7.95)	46.75 (7.29)	47.63 (9.08)
自己に向けた感情(性質)	高:10	44.40 [†] (10.80)	57.40 [†] (8.00)	50.20 [†] (10.21)	51.50 (6.02)	49.30 [†] (11.31)
	低:13	50.38 [†] (5.28)	50.08 [†] (10.40)	43.54 [†] (6.97)	49.31 (10.29)	42.08 [†] (6.20)
自己に向けた感情(両価)	あり:8	44.25 (4.77)	53.25 (7.70)	51.13 (6.56)	42.38 (6.59)	48.25 (6.86)
	なし:52	48.77 (8.47)	53.81 (9.53)	49.19 (8.90)	50.00 (8.83)	47.83 (9.31)
他者に向けた関心	高:15	48.07 (9.98)	53.20 (7.83)	47.93 (10.70)	46.93 (7.88)	47.80 (9.99)
	低:12	48.33 (7.48)	53.83 (8.35)	48.58 (7.45)	44.83 (8.24)	46.92 (5.71)
他者に向けた感情(言及)	高:13	50.31 (10.27)	56.23 (6.34)	47.62 (9.86)	51.38 (9.16)	49.23 (9.09)
	低:13	46.00 (8.63)	52.00 (7.39)	48.08 (8.69)	48.69 (8.78)	48.38 (8.40)
他者に向けた感情(性質)	高:14	44.43 [†] (9.97)	56.50 [*] (8.53)	49.57 (9.66)	48.29 (8.19)	46.64 (10.42)
	低:16	50.56 [†] (5.25)	48.88 [*] (9.26)	47.56 (6.40)	47.88 (9.80)	46.38 (6.78)
他者に向けた感情(両価)	あり:20	47.75 (9.17)	53.20 (10.79)	47.40 (9.10)	49.40 (8.65)	47.30 (10.58)
	なし:40	48.38 (7.77)	54.00 (8.52)	50.48 (8.27)	48.78 (9.13)	48.18 (8.19)
父親(的人物)に向けた感情(言及)	高:11	48.45 (12.36)	57.64 [†] (6.05)	47.55 (9.50)	52.82 (9.76)	49.91 (11.16)
	低:26	47.12 (7.35)	52.92 [†] (8.08)	50.15 (8.07)	48.08 (8.36)	49.12 (10.36)
父親(的人物)に向けた感情(性質)	高:14	45.86 (9.68)	59.21 [*] (8.49)	50.07 (10.69)	50.43 (6.55)	45.79 (6.94)
	低:17	50.35 (7.82)	51.53 [*] (10.09)	46.47 (9.64)	49.41 (9.97)	47.47 (10.32)
母親(的人物)に向けた感情(言及)	高:17	48.41 (10.32)	56.82 [†] (7.41)	45.76 [†] (8.23)	51.00 (8.57)	47.41 (9.91)
	低:14	45.64 (7.67)	51.64 [†] (8.53)	51.79 [†] (8.51)	48.00 (10.48)	49.07 (8.53)
母親(的人物)に向けた感情(性質)	高:29	47.83 (9.83)	57.55 ^{**} (8.01)	50.34 [*] (8.69)	50.07 (8.24)	47.45 (8.89)
	低:12	48.33 (5.45)	47.50 ^{**} (10.72)	45.00 [*] (6.65)	48.42 (11.30)	44.17 (7.21)
人物の導入	高:13	51.85 [†] (8.55)	57.23 (8.00)	47.15 (8.69)	48.77 (9.82)	48.38 (9.79)
	低:19	46.79 [†] (7.79)	52.84 (10.91)	48.79 (8.06)	46.16 (8.40)	46.63 (8.77)

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意, † : 10%水準で有意

表 4-10. APT 指標の高群および低群における Big Five の平均（標準偏差）

APT 指標	群:人数	外向性	協調性	勤勉性	情緒 安定性	知性
主人公の導入	高:15	50.67 (10.02)	54.20 (7.35)	48.07 (7.81)	53.20* (7.99)	49.73 [†] (11.61)
	低:14	48.43 (5.83)	53.50 (10.24)	47.57 (9.14)	45.71* (6.75)	43.50 [†] (7.29)
導入人物の性質(言及)	高:13	50.31 (8.93)	53.85 (7.84)	48.23 (11.50)	46.31 (8.64)	49.38 (9.41)
	低:10	45.30 (8.08)	56.10 (8.45)	49.40 (7.82)	46.40 (10.64)	51.30 (7.47)
導入人物の性質(性質)	高:14	45.07 (10.59)	56.43* (8.27)	50.00 (10.48)	49.14 (7.31)	44.21 (6.66)
	低:16	49.06 (5.47)	49.25* (9.83)	47.06 (7.94)	51.06 (9.85)	47.19 (8.10)
導入人物の性質(両価)	あり:10	47.00 (9.59)	52.70 (12.95)	47.20 (6.94)	47.20 (8.04)	45.00 (12.32)
	なし:50	48.40 (7.97)	53.94 (8.49)	49.90 (8.89)	49.34 (9.10)	48.46 (8.19)
独特な人物設定	高:11	51.18 (7.83)	53.91 (6.33)	48.27 (9.30)	49.18 (10.20)	52.09 (11.51)
	低:12	45.83 (8.39)	56.25 (9.29)	47.42 (9.37)	50.92 (10.40)	45.67 (8.67)
動物の導入	あり:22	46.64 (9.65)	49.68** (9.95)	50.45 (8.94)	50.14 (9.50)	50.18 (10.17)
	なし:38	49.05 (7.20)	56.08** (8.05)	48.87 (8.47)	48.32 (8.60)	46.55 (8.04)
有音の背景音の取り込み	高:10	51.40 (8.54)	56.50 [†] (8.21)	51.30 (7.45)	49.10 (7.08)	49.80 (6.48)
	低:19	48.11 (7.48)	50.47 [†] (7.35)	48.37 (7.89)	49.16 (10.83)	48.32 (7.74)
無音の背景音の取り込み	高:12	48.42 (8.69)	53.83 (8.59)	49.08 (8.08)	48.67 (9.16)	44.92 (6.56)
	低:30	48.47 (9.01)	54.17 (8.32)	49.97 (8.74)	50.23 (9.64)	49.73 (10.18)
背景音に対する情緒的 意味づけ(言及)	高:11	49.36 (9.92)	58.09* (7.11)	51.82 (6.54)	52.91 (8.72)	48.55 (4.28)
	低:14	47.57 (7.26)	50.57* (8.30)	50.86 (9.47)	48.36 (7.12)	48.36 (7.18)
背景音に対する情緒的 意味づけ(性質)	高:24	46.79 (7.87)	55.58 (9.64)	49.04 (9.34)	47.25 (6.36)	48.92 (11.16)
	低:12	49.67 (7.32)	51.58 (6.04)	47.83 (8.15)	45.67 (7.48)	45.58 (4.81)
背景音に対する情緒的 意味づけ(両価)	あり:10	49.70 (10.77)	55.00 (7.47)	46.80 (11.11)	52.30 (7.82)	52.80 [†] (11.14)
	なし:50	47.86 (7.67)	53.48 (9.61)	49.98 (8.04)	48.32 (9.03)	46.90 [†] (8.26)
結末の性質(性質)	高:10	45.80 (10.36)	58.90 [†] (8.17)	52.10* (9.34)	50.00 (9.89)	47.40 (7.34)
	低:13	51.00 (7.54)	51.08 [†] (10.86)	44.00* (7.85)	45.92 (9.25)	47.23 (11.48)
結末の性質(両価)	あり:18	45.83 (10.27)	52.78 (9.95)	47.44 (8.34)	50.83 (9.45)	49.56 (10.75)
	なし:42	49.17 (7.02)	54.14 (9.03)	50.31 (8.67)	48.19 (8.66)	47.17 (8.14)
攻撃的内容	高:22	49.50 (7.38)	52.36** (7.39)	49.64 (7.75)	48.36 (9.55)	47.68 (8.34)
	低:17	45.82 (8.24)	59.47** (6.57)	49.06 (11.39)	48.00 (6.77)	45.65 (9.24)

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意, † : 10%水準で有意

表 4-11. APT 指標の高群および低群における Big Five の平均（標準偏差）

APT 指標	群:人数	外向性	協調性	勤勉性	情緒 安定性	知性
損傷内容	高:17	48.12 (9.35)	53.53 (11.20)	49.41 (10.39)	47.29 (7.49)	48.41 (10.04)
	低:28	47.61 (8.46)	53.96 (8.89)	49.89 (8.26)	49.86 (9.12)	46.82 (9.44)
自己言及	あり:8	53.38 [†] (8.23)	51.63 (7.46)	43.88 ^{**} (4.52)	50.25 (6.36)	51.38 (13.29)
	なし:52	47.37 [†] (7.96)	54.06 (9.52)	50.31 ^{**} (8.78)	48.79 (9.27)	47.35 (8.17)
主観的印象	高:10	50.10 (7.84)	53.00 (7.70)	49.10 (10.79)	45.40 [†] (6.42)	50.30 (6.90)
	低:27	48.26 (8.31)	53.52 (10.54)	50.37 (9.23)	50.00 [†] (8.68)	47.59 (9.20)
食物反応	高:16	48.19 (9.00)	52.50 (11.43)	48.75 (10.52)	49.44 (7.96)	45.88 (6.29)
	低:12	48.58 (5.70)	55.08 (9.26)	50.50 (5.96)	48.92 (7.97)	50.67 (8.91)
衣服反応	高:14	47.07 (6.96)	51.14 (10.55)	48.93 (10.15)	47.71 (8.46)	48.79 (10.14)
	低:10	48.20 (8.78)	54.30 (11.39)	49.30 (9.81)	49.30 (9.52)	47.30 (10.10)
性的内容	あり:11	49.09 (10.22)	52.73 (7.60)	48.82 (10.68)	47.09 (12.12)	48.55 (10.94)
	なし:49	47.96 (7.77)	53.96 (9.64)	49.59 (8.19)	49.41 (8.12)	47.73 (8.60)
物質の導入	高:13	50.38 [†] (8.50)	51.62 (8.81)	49.54 (7.29)	49.62 (5.11)	49.92 [†] (5.62)
	低:18	45.50 [†] (6.24)	55.89 (10.12)	49.33 (7.94)	47.67 (10.51)	45.39 [†] (8.05)
劇化反応	高:17	47.82 (8.29)	55.18 (8.29)	50.35 (9.10)	47.12 (7.36)	48.94 (10.93)
	低:41	47.90 (7.89)	53.22 (9.85)	49.83 (7.95)	49.61 (9.32)	47.02 (7.00)
非現実的内容	高:11	49.00 (8.59)	52.64 (7.16)	46.45 (8.23)	46.55 (6.08)	47.45 (6.92)
	低:47	48.00 (8.35)	53.89 (9.64)	50.19 (8.75)	49.40 (9.57)	48.02 (9.61)
反応の失敗・拒否	あり:12	46.58 (9.09)	48.42 [*] (9.77)	53.67 [†] (8.27)	47.42 (8.37)	47.08 (6.20)
	なし:48	48.56 (8.00)	55.06 [*] (8.72)	48.40 [†] (8.44)	49.38 (9.08)	48.08 (9.59)
初発反応時間	高:10	46.20 [†] (6.09)	54.10 (8.31)	50.60 [†] (5.58)	45.90 (8.47)	47.70 (7.86)
	低:10	52.60 [†] (9.32)	53.80 (8.60)	43.90 [†] (9.43)	50.60 (8.00)	47.90 (12.32)
実験者による質問回数	高:10	47.50 (9.63)	54.10 (11.95)	50.90 (10.70)	49.00 (5.38)	48.50 (9.42)
	低:14	44.79 (8.26)	52.71 (7.58)	50.50 (7.05)	49.36 (11.00)	48.79 (7.53)
刺激の追加提示回数	高:14	47.07 (9.68)	52.79 (11.28)	47.21 (10.41)	50.64 (7.78)	47.86 (11.62)
	低:23	47.87 (9.10)	55.65 (9.02)	49.13 (7.76)	51.43 (9.87)	49.04 (9.10)
語りの様式(移入形式)	高:11	51.36 (9.70)	56.00 (7.21)	49.73 (8.20)	53.55 [†] (8.02)	48.64 (3.96)
	低:11	49.55 (6.96)	56.09 (8.79)	49.55 (8.01)	47.36 [†] (7.84)	47.36 (8.05)

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意, † : 10%水準で有意

表 4-12. APT 指標の高群および低群における Big Five の平均（標準偏差）

APT 指標	群:人数	外向性	協調性	勤勉性	情緒 安定性	知性
語りの様式(会話形式)	あり:13	45.31 (9.32)	56.92 (7.89)	52.85 (9.00)	52.00 (8.18)	48.00 (6.43)
	なし:47	48.96 (7.77)	52.85 (9.48)	48.51 (8.34)	48.15 (9.00)	47.85 (9.62)
語りの様式(物語形式)	あり:7	44.00 (9.20)	52.43 (5.03)	50.86 (6.89)	47.43 (7.93)	51.14 (7.11)
	なし:53	48.72 (7.98)	53.91 (9.69)	49.26 (8.84)	49.19 (9.08)	47.45 (9.16)
複数の物語	高:13	49.85 (5.29)	49.77 [†] (11.45)	45.31 [†] (7.19)	45.85 (6.34)	43.77 (6.93)
	低:38	47.29 (9.07)	55.08 [†] (7.81)	50.08 [†] (9.30)	48.71 (8.97)	48.00 (9.26)
前の刺激や物語との 関連づけ	あり:12	48.67 (6.10)	53.42 (10.26)	48.75 (8.72)	49.08 (9.19)	48.33 (10.26)
	なし:48	48.04 (8.68)	53.81 (9.10)	49.63 (8.66)	48.96 (8.94)	47.77 (8.74)
微小音要素の取り込み	高:24	48.79 (7.55)	50.75 [†] (8.64)	49.04 (9.31)	49.54 (9.13)	49.54 (9.83)
	低:22	47.32 (9.52)	55.09 [†] (8.89)	50.73 (8.04)	48.91 (10.30)	48.55 (7.50)
音要素の取り込み	高:13	51.92* (7.24)	50.85 (11.03)	47.15 (7.57)	51.15 (8.29)	47.54 (9.97)
	低:10	42.70* (9.93)	57.70 (8.37)	49.60 (9.89)	50.10 (7.95)	49.60 (10.78)
音要素の統合	高:14	51.07* (7.70)	53.36 (8.71)	49.64 (8.44)	50.64 (8.35)	48.36 (12.16)
	低:10	41.80* (9.24)	56.20 (9.99)	53.00 (8.89)	54.30 (9.27)	51.00 (9.20)
音要素に対する標準的 意味づけからのずれ	高:10	48.40 (6.60)	54.10 (9.15)	46.30 (7.24)	46.20 (11.71)	46.50 (3.87)
	低:27	48.07 (8.10)	55.00 (8.53)	50.63 (9.16)	49.56 (7.33)	48.89 (9.58)
聴空間の拡大	あり:21	46.43 (7.72)	55.81 (7.85)	51.14 (8.66)	47.67 (7.36)	45.86 (7.94)
	なし:39	49.10 (8.38)	52.62 (9.84)	48.54 (8.54)	49.69 (9.66)	48.97 (9.40)
聴空間の縮小	高:11	50.36 (8.61)	54.55 (8.35)	53.45 (7.16)	51.36 (9.44)	49.09 (8.29)
	低:20	48.35 (8.49)	55.75 (11.03)	50.25 (9.74)	48.20 (7.44)	49.10 (10.75)
他の感覚への言及	高:15	48.13 (11.09)	52.00 (8.23)	46.13 (9.06)	49.80 (9.03)	49.07 (10.14)
	低:10	51.00 (4.50)	52.90 (9.75)	50.90 (7.17)	46.00 (8.56)	48.20 (8.30)
触覚情報の性質(言及)	高:22	46.27 (10.13)	52.59 (10.59)	50.55 (7.46)	50.41 (8.24)	47.32 (10.00)
	低:19	49.00 (6.01)	52.74 (7.61)	48.53 (9.22)	48.05 (8.82)	47.47 (9.87)
触覚情報の性質(性質)	高:21	47.38 (8.65)	57.38 (8.71)	49.38 (8.28)	49.29 (7.70)	47.95 (9.14)
	低:14	48.57 (5.56)	52.86 (11.54)	51.50 (8.52)	49.07 (9.99)	47.36 (8.47)
触覚情報の性質(両価)	あり:17	47.47 (9.34)	52.94 (13.30)	48.82 (8.35)	50.41 (8.59)	46.00 (8.40)
	なし:43	48.44 (7.79)	54.05 (7.25)	49.70 (8.78)	48.42 (9.07)	48.63 (9.18)

**:.1%水準で有意, *:5%水準で有意, †:10%水準で有意

4-8 考察

(1) 各指標と Big Five の関連について

以下では、有意差や有意傾向が見られた指標を中心に考察していく。

1) 自己の内界に向ける関心 参加者が同一化した人物、主に主人公の内界や思考過程に多く言及した人は内向的な傾向にあるという結果が得られた。本指標はいわゆるユング的な向性を想定しており（鈴木，1997），評定値が高いほど内向性が強いと考えられる。他方，Big Five の外向性は社会的外向性を反映しており（村上・村上，2001），本指標の高群において得点が低かったのは十分に了解可能であろう。

2) 自己に向ける感情（性質） 本指標は参加者が同一化した人物、主に主人公の自信や有能感が多く表現されると値が高くなり、逆に、自信のなさや無力感が多く描写されると値が低くなる。本指標には参加者自身の自信や自己評価の程度が反映される考えられ、さらに鈴木（1997）は TAT における本指標と対他者定位の組み合わせにより、自己に対し肯定的で対他者優位である場合は誇大自己などを、対他者対等位である場合は有能感や自信を、自己に対し否定的で対他者劣位である場合は自己不全感などを関連づけている。一方，Big Five の中で自信と直接関連するのは情緒安定性であるが（村上・村上，2001），本研究ではそれ以外の 4 因子において有意傾向が認められた。先に勤勉性と知性について見て行くと、共に能力（competence）と関連するとされ（村上・村上，2001），特に知性は「ほかの人より洗練された考え方をする方です」などの項目内容から鈴木（1997）のいう対他者優位の有能感との関連を推測することができる。このため本指標は自信や有能感の中でも対他者優位のものを反映している可能性があり、勤勉性および知性との関連が見られたと推察されるが、このことを明確にするためには、今後、対他者定位の評定を行う必要がある。次に、外向性に関しては、APT における物語作成が内的作業を要することと関連した結果と考えられる。そもそも否定的感情を喚起しやすい刺激に引き摺られると、本指標も低くなりがちになることが予想される。これに対して、刺激の取り込みや取り込んだ刺激にあまり重点を置かず、連想を中心に物語作成を行うことは、否定的な刺激に引き摺られない 1 つの方法といえる。この方法は Big

Fiveにおける内向的な人の方が得意と考えられ、この視点から本結果を解釈することが可能であろう。協調性に関しては、本指標が「他者に向ける感情（性質）」と弱い正の相関（ $r=0.33$ ）があることと関連するかもしれない。つまり、他者と安定した関係を築くことができると自己肯定感も生じやすくなることから、本指標と協調性の関連が認められた可能性が考えられる。

3) **他者に向ける感情（性質）** 物語における他者、つまり、自己以外の人物に対する感情が肯定的である人は協調性が高く、内向的な傾向にあるという結果が得られた。本指標には、一方の極として他者に与える側としての敬愛、配慮などや他者からもらう側としての愛情、援助などへの欲求が、他方の極として他者を支配したり支配されたりすることや危害を加えたり被ったりすることが想定される（鈴木，1997）。これらは Big Five の協調性と概念的に一致する部分が多い。外向性に関しては、「自己に向ける感情（性質）」と同様の解釈が可能であろう。つまり、否定的感情を喚起しやすい刺激に対し、知覚よりも連想に重きを置いて物語作成を行うことが、本指標の高群にも Big Five における内向性にも共通する可能性がある。

4) **父親(的人物)に向ける感情，母親(的人物)に向ける感情** まず両指標の共通部分から見て行くと、物語作成にあたって両親やそれに近い人物を多く連想し、登場人物に安心感や具体的支援を提供するような肯定的人物として語ることが多い人は、協調性が高いという結果が得られた。本研究における聴覚刺激は、寂しさや不安などの否定的感情を喚起しやすいと考えられ、その状況において肯定的人物として両親を導入することが多い人は良い親イメージを持っていると推察できる。良い親イメージは安定したアタッチメントと関連し、安定したアタッチメントは対人関係における適応と関連する（数井・遠藤，2005）ことから、協調性との間にも関連が見られたのだろう。次に、物語作成にあたって母親やそれに近い人物を多く連想したり、脅威を与えてくる冷たい人物として母親を語ることが多かった人は、勤勉性が低いという結果も得られた。Big Five における勤勉性の低さは怠惰やだらしなさを反映し（村上・村上，2001）、親に甘えたり叱られたりする経験を重ねてきている可能性が考えられる。この視点から本結果も了解可能であろう。

5) **人物の導入** 物語に刺激外の人物をあまり登場させない人は内向的な傾

向にあるという結果が得られた。刺激外の人物を導入することは、物語中の対人関係を増やすことにつながる。このため本指標には、対人関係を積極的に取り入れることによって物語の内容を膨らませる想像力や、刺激が喚起する否定的感情の中和が想定される。他方、**Big Five**における外向性は社交性と関連し（村上・村上，2001）、本指標の低群において外向性が低かったのは了解可能である。

6) 主人公の導入 導入人物を中心に物語を展開することが少ない人は情緒安定性が低く、知性も低い傾向にあるという結果が得られた。このような反応は TAT よりも APT において出現しやすい（熊倉，1989）。刺激中の人物に同一化せず、ときには偶然その場において音を聴いている人物の立場をとることから、本指標には否定的感情を喚起しやすい刺激に対して心理的に距離をとっていることが反映されると考えられる。他方、**Big Five**において情緒安定性が低い人は神経質で感情的であり（村上・村上，2001）、知性の項目には「大抵の人が動揺するような時でも、落ち着いて対処することができます」や「難しい問題にぶつかると、頭が混乱することが多い（逆転項目）」などがある。本指標の低群は情緒刺激に対してあまり距離をとらない人と考えられ、これらの **Big Five** の解釈と一致する部分があると考えられる。

7) 導入人物の性質（性質） 肯定的な導入人物を物語に登場させることが多い人は協調性が高いという結果が得られた。本指標は「他者に向ける感情（性質）」に比べて評定対象を導入人物に限定しているため、参加者の他者イメージや対人関係イメージの性質をより色濃く反映すると考えられる。「他者に向ける感情」と同様の視点から、協調性との関連は了解できるだろう。

8) 動物の導入 刺激中に存在しない動物を想像して物語に登場させることがなかった人は、協調性が高かった。複数の人物が登場しない刺激においては特に、TAT と同様に、物語作成の課題は暗に人物の導入を要求していると考えられる（鈴木，1997）。これに対して動物の導入は、人物を導入する反応と導入しない反応の間に位置すると想定できよう。人物を導入しない反応ほどではないが、そこには人や対人関係の回避が含まれると考えられる。この視点から、本指標のなし群の方が協調性が高かったことも了解可能であろう。

9) 有音の背景音の取り込み、背景音に対する情緒的意味づけ（言及） 有

音の背景音を多く物語に取り込んだ人も、背景音に対して情緒的意味づけを多く行った人も協調性が高いという結果であった。2 指標とも背景音、つまり周囲の状況に関心および注意を向け、それをふまえて物語を作成した点で共通する。Big Fiveの協調性は追従と関連し(村上・村上, 2001), 周囲の状況に合わせて対処する姿勢の点で一致が見られるだろう。

10) **背景音に対する情緒的意味づけ(両価)** 背景音、つまり周囲の状況を両価的に捉えた人は、両価的に捉えることがなかった人に比べて知性が高い傾向にあるという結果が得られた。本指標は、周囲の状況に敏感で、両価的感情を向け、複雑に捉えていることを反映すると考えられる。Big Fiveにおける知性の高い人は物事を分析的に、複雑に捉えるとされる(村上・村上, 2001)が、感情面での複雑さは想定されていない。本指標には「他者に向ける感情」よりも非意識的な部分が表れやすいと考えられ、評定内容の詳細な検討が必要であろう。

11) **結末の性質** 否定的な結末を多く語る人は勤勉性が低いという結果が得られた。本指標には、複数の結末の可能性から1つに絞り込んで具体化する思い切りのよさを背景に、楽観-悲観主義や長期的展望などが反映される。他方、勤勉性の高い人には計画性や達成意欲があり(村上・村上, 2001), 物語の結末を曖昧なまま終えることなく、登場人物が何かを成し遂げた形で終えることが多かったと考えられる。この視点から、本指標と勤勉性の関連は了解可能であろう。また、肯定的な結末を多く語る人は協調性が高い傾向にあるという結果も得られた。本指標は「他者に向ける感情」や「導入人物の性質」との間に比較的強い正の相関が認められた(順に $r=.61$; $r=.64$)。たとえば「誰かに助けられる」「誰かと幸せに暮らす」など、対人関係が肯定的であれば結末も肯定的になりやすいことから、協調性との関連も了解できるだろう。

12) **攻撃的内容** 本指標は物語の中で何らかの破壊や爆発、人物の暴力や強い怒りの表出などが語られた場合に値が高くなる。結果は攻撃的内容をあまり語らない人は協調性が高いことを示していた。Big Fiveにおける協調性の低さは攻撃性や敵対心に関連するため(村上・村上, 2001), 本指標の低群の方が協調性が高いという本結果は了解可能である。

13) **自己言及** 本指標に該当する反応は出現率が低いため、詳細な検討は

今後の研究に期待し、参考として取り上げておく。反応において自己体験に言及する人は勤勉性が低く、相対的に外向性が高い傾向にあるという結果であった。本指標は、独断性や自己中心性を反映すると考えられる。Big Fiveにおいて勤勉性が低い人は、衝動統制が弱く、社会的慣習にあまり従わず、外向性が高い人は独断的に行動するところがあるとされる(村上・村上, 2001)。いずれも本指標と一致する部分があると考えられる。

14) **主観的印象** 結果は、反応時に主観的印象を多く述べる人は情緒安定性が低い傾向にあることを示していた。本指標は APT の課題に対する心理的距離や不安を反映すると考えられる。他方、Big Fiveにおける情緒安定性の低さは不安と関連するため(村上・村上, 2001)、本指標と一致した結果が得られたといえよう。

15) **物質の導入** 刺激中に存在しない物質を物語にあまり導入しない人は内向的で、知性が低い傾向にあるという結果が得られた。評定対象の物質には、家具などのインテリアや、メガネなどの身に着けるもの、傘などの道具、車などの乗物などが含まれており、分類して詳細な検討を行う余地がある指標である。これらの多くは登場人物個人の所有物であり、本指標の高群は、外面にも関連する所有物に強い関心を持っていることが推測される。Big Fiveにおける外向性が高い人は社会的な流行に強い関心を持ち、知性が高い人は芸術性や美的感覚があるとされる(村上・村上, 2001)。この視点から、本指標の低群において外向性と知性が低い傾向にあったことを理解することができるかもしれないが、今後の詳細な検討が待たれる。

16) **反応の失敗・拒否** 物語自体や、物語の過去や未来について語る事ができた人、および語ることを拒否しなかった人は協調性が高く、語る事ができなかった人、および語ることを拒否した人は勤勉性が高い傾向にあったという結果が得られた。本指標は参加者の処理能力や、その一時的な低下、課題に取り組む意欲、想像力などを反映すると考えられる。Big Fiveにおける協調性が高い人は協力的であり(村上・村上, 2001)、APTにも意欲的に取り組んだ点から本結果を理解することができるだろう。勤勉性の高さは几帳面さや正確さに関連し(村上・村上, 2001)、刺激に対して忠実に反応するが、過去や未来を自由に連想していくのが困難であること、あるいは、空想的なことはあ

まり語りたくないという姿勢が推測される。このような視点から本結果を理解することができるかもしれないが、今後さらなる検討が必要であろう。

17) 初発反応時間 聴覚刺激には時間軸があり、参加者は刺激の提示中から物語を考えることができ、思い切りのよい人であれば刺激の提示直後に物語を語り始めることもある。逆に、刺激の継時的変化によってそれまでに想起していた物語を破棄・修正せざるを得なくなり、初発反応時間が長くなることもある。結果を見ると、初発反応時間が長い人は内向的な傾向にあり、短い人は勤勉性が低い傾向にあった。Big Fiveにおける内向性は「社会的内向(村上・村上, 2001)」であるが、ユング的な内向性とも重なる部分があると考えられる。つまり、物語作成においては自己の内界にエネルギーを向け、そこで処理を行ってから語り始めるスタイルを取ると考えられるため、初発反応時間の長さに関連が見られた可能性がある。勤勉性の低い人は衝動統制が弱く(村上・村上, 2001)、物語を練り上げずに語り始めることが予想され、初発反応時間の短さに関連が見られたことも了解可能であろう。

18) 語りの様式(移入形式) 物語の登場人物に同一化し、その台詞を交えて物語を展開する人は情緒安定性が高い傾向にあるという、第三章とは逆の結果が得られた。詳しく検討すると、本指標は「主人公の導入」との間に中程度の正の相関が見られた($r=0.41$)。導入人物には参加者の中にある人物のイメージが色濃く反映されるため、参加者は同一化しやすく、本指標にも該当しやすくなると考えられる。さらに、既述の通り、「主人公の導入」には否定的感情を喚起しやすい刺激に対する心理的距離が反映されると考えられ、その高群は情緒安定性が相対的に高かった。この視点から本結果を解釈することも可能と考えられるが、今後より詳細な検討が求められよう。

19) 複数の物語 1つの刺激に対して複数の物語を語らなかった人は協調性が高い傾向にあり、複数の物語を語った人は勤勉性が低い傾向にあるという結果が得られた。本指標は複数の可能性から1つの物語に絞り込む思い切りの弱さや、取捨選択することへの不安を反映すると考えられる。Big Fiveにおける勤勉性の低い人は衝動統制が弱く、いい加減なところがあり(村上・村上, 2001)、物語を1つに絞り込むことができなかつたり、複数の物語を思い浮かぶままに語ったりする可能性が考えられる。協調性の高い人は協力的で追従的

などところもあり（村上・村上，2001），実験者が教示した通りに1つの刺激に対して1つの物語を語ったと考えられる。

20）微小音要素の取り込み 本研究では参加者60名のうち10%未満の参加者だけが取り込んだ音要素を微小音要素と呼び，その微小音要素をあまり取り込まなかった人は，協調性が高い傾向にあるという結果であった。本指標には，情報処理における過度な注意深さや警戒心，細部に対するこだわりが反映されると考えられる。**Big Five**における協調性の高さは物わかりのよさと関連し（村上・村上，2001），本指標の低群との関連は了解可能である。

21）音要素の取り込み, 音要素の統合 物語作成というAPTの課題に対し，参加者が刺激を多く取り込みそれに基づいて対処するか，刺激をあまり取り込まず連想に基づいて対処するかという，いわゆるユング的な向性が反映されると考えられる。結果を見ると，音要素をあまり取り込まない人および物語に統合しない人は，共に内向的であった。**Big Five**における外向性が高い人は積極的に社会的場面に出て行き，社会的な流行や変化を取り入れていく傾向がある（村上・村上，2001）。外的刺激を取り込む程度および向性の視点から，本結果は了解できよう。なお，この2指標の差異に関しては今後検討する余地がある。

（2）14 刺激全体について

本研究のAPTにおいても，多くの指標で有意差や有意傾向が認められ，了解可能なものが多かった。このことは本研究のAPTもパーソナリティを測定する道具として有用であることを示唆している。以下では，結果全体を俯瞰することにより本研究のAPTの特徴について明らかにしていく。有意差や有意傾向が見られた指標について表4-13にまとめておく。

APTの指標の側から見ていくと，まず，人物に関する指標（「自己の内界に向ける関心」「自己に向ける感情」「他者に向ける関心」「他者に向ける感情」「父親（的人物）に向ける感情」「母親（的人物）に向ける感情」「人物の導入」「主人公の導入」「導入人物の性質」「独特な人物設定」）のうち，「他者に向ける関心」と「独特な人物設定」を除くすべての指標で有意差や有意傾向が得られた。聴覚刺激を作成した時点では，刺激中にあまり人物が登場しないため物語はシ

サンプルになりやすく、これらの指標ではあまり差が出ないと予想していたが、それに反する結果であった。本研究のような曖昧さの程度が高い刺激を採用しても内容豊かな物語が語られたこと、そして、参加者が予想以上に自由に刺激外の人物を登場させて物語を展開させていたことによると考えられる。それと関連して、導入に関する指標（「人物の導入」「動物の導入」「物質の導入」）のすべてで有意差や有意傾向が得られたことも注目に値する。このような導入のしやすさが本研究の APT の大きな特徴といえよう。導入された人物や動物、物質には参加者の投影が強く働く可能性が高いため、参加者のパーソナリティを理解する上でもこの特徴は利点となり得る。APT 特有の指標である背景音に関する指標（「有音の背景音の取り込み」「背景音に対する情緒的意味づけ」）においても有意差や有意傾向が認められた。刺激作成時に、人物に関する指標に対する予想とは逆に、本研究の APT では風景描写が多くなり、これらの指標では差が出やすいと予想していたため、予想通りの結果であった。内容面におけるその他の指標や形式面の指標においても多くの有意差や有意傾向が得られ、これらの指標が参加者のパーソナリティを映し出すのに有効であることを示している。最後に、認知面の指標の中でも基本的な指標（「微小音要素の取り込み」「音要素の取り込み」「音要素の統合」）で有意差や有意傾向が得られた。評定基準がまだ明確とはいえないが、第三章の APT とは異なり、APT の新たな可能性が示された。この点については、今後、実施法に質疑を加えるなどしてより緻密に検討していく方向性も見えてこよう。

次に、Big Five の側から見ていくと、有意差や有意傾向が見られた指標は外向性について 9 個、協調性について 15 個、勤勉性について 8 個、情緒安定性について 3 個、知性について 4 個であった。協調性において多くの有意差や有意傾向が得られたことは、人物に関する APT 指標において多くの有意差や有意傾向が認められたこととも関連し、本研究の APT が参加者の自己や他者、対人関係に関する情報を収集するのに適していることを示している。本研究の APT が TAT の特徴を備えていることから、当然の結果といえよう。次いで外向性で多くの結果が得られた。これに関しては、本研究ではユング的な向性に絡めた解釈が多く適用されたことから、本研究の APT は向性を映し出す特徴を備えている可能性が考えられる。次いで勤勉性で多くの結果が得られた。第三章の

APTとは異なり、衝動統制だけではなく、慎重さなど情報処理の視点からの解釈が多かった。残る知性や情緒安定性では、有意差および有意傾向はあまり多くは認められなかった。

以上をまとめると、本研究のような曖昧さの程度が高い刺激を用いても APT は投映法として十分に機能し、自己や他者、対人関係に関する情報はもちろんのこと、向性などのパーソナリティの基本的な次元や、認知に関する情報も引き出せる可能性が示唆された。

表 4-13. 本章において有意差・有意傾向が見られた指標

APT 指標	E	A	C	N	O	計
<内容面>						
自己の内界への関心	†					1
自己に向ける感情(性質)	†	†	†		†	4
他者に向ける感情(性質)	†	*				2
父親(的人物)に向ける感情(言及)		†				1
父親(的人物)に向ける感情(性質)		*				1
母親(的人物)に向ける感情(言及)		†	†			2
母親(的人物)に向ける感情(性質)		**	*			2
人物の導入	†					1
主人公の導入				*	†	2
導入人物の性質(性質)		*				1
動物の導入		**				1
有音の背景音の取り込み		*				1
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)		*				1
背景音に対する情緒的意味づけ(両価)					†	1
攻撃的内容		**				1
結末の性質		†	*			2
自己言及	†		**			2
主観的印象				†		1
物質の導入	†				†	2
<形式面>						
反応の失敗・拒否		*	†			2
初発反応時間	†		†			2
語りの様式(移入形式)				†		1
複数の物語		†	†			2
<認知面>						
微小音要素の取り込み		†				1
音要素の取り込み	*					1
音要素の統合	*					1
計	9	15	8	3	4	39

E:外向性, A:協調性, C:勤勉性, N:情緒安定性, O:知性

** : 1%水準で有意, * : 5%水準で有意, † : 10%水準で有意

(3) 今後の課題と展望

今後は本研究と研究1の知見の比較を行い、聴覚刺激や反応の特徴、映し出されるパーソナリティの側面の検討を進めたい。熊倉(1989)がAPTと絵画連想法の比較を行なっているように、TATとの比較も行なう必要があるだろう。それによってAPTにおける人物等の導入の意味や、APTとパーソナリティの非意識的側面との関連を吟味し、APTの独自性をより明確にすることができるだろう。病理に関わる他のパーソナリティとの関連も調べ、APTの臨床的な可能性についても検討したい。また、本研究では実験参加者が大学生・大学院生60名に限られており、今後、参加者の人数を増やし他の集団に実施するなどして、本研究の知見をより確かなものにしていく必要がある。

第四章のまとめ

本章では、有意味の音声を含まない、物音や環境音を中心とする非音声刺激を独自に録音・作成し、予備実験により14個の刺激を選定した。その非音声刺激によるAPTの反応に、研究1と同様にBig Fiveがどのように表れるか探索的に検討するため、本実験を行った。参加者は大学生・大学院生60名(男女とも30名)で、実験室で個別にAPTと主要5因子性格検査(村上・村上, 2001)を実施した。実験後、各反応を内容面・形式面・認知面の指標を用いて分析し、Big Fiveとの関連を検討した。その結果、APT指標とBig Fiveの各因子の間に関連が見られ、特に外向性との間に特徴的な関連が認められた。Big Fiveにおける外向性は社交性に近いが、神経症傾向と並んで古くからパーソナリティの基本的次元として捉えられてきた向性とも重なる部分がある。非音声刺激によるAPTは参加者の自己や他者、対人関係に加えて基本的なパーソナリティを映し出し、音声刺激と比べて、認知的側面を映し出す可能性が示唆された。

第五章

【研究 3】非音声刺激による聴覚投映法と ロールシャッハ法の関連

5-1 問題と目的

研究 1 と研究 2 では、音声刺激および非音声刺激による APT の量的分析と Big Five の関連について検討を行ってきた。本論の APT の量的分析は、パーソナリティの全体的傾向の非意識的水準を映し出していると想定されるのに対し、Big Five は主に意識的水準のパーソナリティを測定するものである。意識的水準と非意識的水準は完全に分離されるものではなく、両者には一定の関連が見られるのが自然と考えられる。しかし、Big Five と関連が見られなかった指標が、被検者のパーソナリティを何も映し出していないのかという点に関しては判断が困難である。この点に関しては、面接や行動観察および他の投映法など、APT 以外の心理アセスメントとの照合とそのデータの蓄積によって明確にしていく必要がある。

本研究では、心理臨床においてしばしば活用され、投映法の中でも特に非意識的水準を映し出すといわれるロールシャッハ法（馬場，1997）と APT の比較を試みる。一般に、ロールシャッハ法はパーソナリティの「構造」を映し出すのに対し、TAT はパーソナリティの「内容」を映し出すといわれることがあるが、鈴木（2004）はそのような単純な区分はできないと指摘している。つまり、ロールシャッハ法においては人間反応 (Human Content) が多数産出され、反応の修飾の仕方にパーソナリティの「内容」が読み取れることが多い。TAT においても、物語の形式面（物語をいかに語るか）にパーソナリティの「構造」を読み取ることが可能であるという。本研究の APT もパーソナリティの「内容」と同時に「構造」を映し出す可能性があり、このような側面に対応した形でロールシャッハ法との関連が見られるかもしれない。APT の聴覚刺激としては、

内容が相対的に曖昧と考えられる非音声刺激を採用した。ロールシャッハ法との関連から、APTはパーソナリティを測定するのに有効であるか、有効であるとしたらパーソナリティのどのような側面を映し出すことができるか、反応を分析する指標としてはどのようなものが有効かという点について探索的に検討することを目的とする。

5-2 方法

実施時期 2006年9～12月の日中9:00～18:00の間に実施した。

実験参加者 研究2と同一の大学生・大学院生60名（男女とも30名）を対象とした。

聴覚刺激 研究2で作成し選定を行った14個の非音声刺激を用いた（表5-1）。有意味な音声を含まず、葛藤は想起させにくい、寂しさや孤独感、不安などの否定的な感情を喚起しやすい刺激と考えられた。

手続き APTは研究2と同一の手続きにより筆者が、ロールシャッハ法は包括システム（高橋・西尾，1994）により別の実験者（臨床心理学を専攻する修士2年生の男性）が、それぞれ日程を変えて実施した。いずれも後で詳細な分析を行うため、参加者に十分に説明し同意を得た上で、ICレコーダーにより実験の様子を録音した。

分析方法 APTについては研究2と同一の指標（表5-2）や評定マニュアル（資料4，5）により評定を行い、指標ごとに評定値を算出した（表5-3）。ロールシャッハ法については高橋・西尾（1994）や高橋・高橋・西尾（2002）に準拠してコーディングを行い、構造一覧表にまとめた。本研究では、構造分析において特に重要とされる鍵変数を分析対象とする。鍵変数はPTI>3，DEPI>5かつCDI>3，DEPI>5，D<Adj D，CDI>3，Adj D<0，L>0.99，反射反応あり，体験型内向型，体験型外拡型， $p>a+1$ ，HVI陽性という変数で構成され（表5-4），このうちLは日本人において高い値を示すことが広く知られているため，本研究では高橋・高橋・西尾（1998）による $L\geq 1.18$ の基準を採用した。高橋ら（2007）によれば，「PTI>3からAdj D<0までの鍵変数は，パーソナリティの構造に関連し，思考や感情のいちじるしい混乱や発達上の問

題に焦点をあてて」おり、 $L \geq 1.18$ 以下の鍵変数は「基本的な行動様式に関連している」という。各鍵変数には以下のような解釈仮説が考えられている。PTI（知覚思考指標）は「認知の正確度（Reality Testing：現実検討力）と思考の明確性（Ideational Clarity：概念の明確性）の程度を表し（高橋ら，2007）」、PTIの値が高いときにはこの2つの機能に潜在的な問題があると考えられる。高い値のDEPI（抑うつ指標）は、「情緒が混乱し、悲観的な認知をし、無気力で、挫折感を抱いている人に見られやすい（高橋ら，2007）」とされ、CDI（対処力不全指標）の値が高い人は、「他者との成熟した人間関係を作り維持する社会的技能（Social Skill）を欠き、不適切で無力な行動をとりやすい（高橋ら，2007）」とされている。Adj D（修正Dスコア）は平素の統制力を、D（Dスコア）は現在の統制力を表し、その差は状況ストレスの影響の程度を表すと考えられている（藤岡，2004）。また、Adj Dがマイナスの人は「内外からの刺激や要求が強すぎ、ストレスが続いた状態により、潜在的な問題をもつ可能性（高橋ら，2007）」がある。L（ラムダ）が高い人は、「複雑であいまいな刺激も過度に単純化し、現実を歪めて知覚しやすい（中略）筒の中から外界を眺めるように、注意を向ける対象の範囲を狭め、視野を狭くして、外界の出来事や自分を眺めている（高橋ら，2007）」とされ、反射反応（鏡映反応）は、「自己中心性に関連し、自己への関心が強く、自己を過大評価し、自己を美化し、他者をあまり考慮しないなどの傾向を表している（中略）アイデンティティを確立する過程での葛藤や不安を表したり、他者との関係で自己を理解し統合しようと努力している体験を示す場合もある（高橋ら，2007）」とされている。体験型は「判断・決定に際して、主として思考を使うか（内向型）、感情を使うか（外拡型）、それとも一貫したスタイルをもっていないか（不定型）（藤岡，2004）」を示し、「内向型の人が『考える人』とすれば、外拡型の人は失敗にこだわらない『反応し行動する人』である（高橋ら，2007）」とされる。p（passive：消極的運動反応）がa（active：積極的運動反応）よりも2以上多い場合、「対人関係で受動的な役割をとることを好み、意思決定の責任を回避しようとすることが多い（藤岡，2004）」と考えられる。HVI（警戒心過剰指標）が陽性の人は「警戒心が過剰であり、外界が危険に満ちていると考え、他者に対して身構え、他者との間に距離をおき、親密になることを避け、自分の考えや感情を示

さないで、自分の世界に閉じこもりがちである（高橋ら，2007）」という解釈仮説が立てられる。

表 5-1. 聴覚刺激の内容と提示順序および音要素 (表 4-2 を再掲)

刺激	内容
1	都会の交差点(①車, ②車のクラクション, ③人々の足音や話し声, ④人の笑い声)で, いろんな足音が聴こえてくる(⑤ゆっくり歩く音[ハイヒール], ⑥歩く足音[革靴], ⑦走って近づいて来て止まる足音[ハイヒール])。
2	①静かな場所で, ②焚火をする音や③カラスの鳴き声が聴こえる。途中から, ④砂利道を歩く足音が遠ざかって消えていく。
3	①静かな場所で, 2 人の赤ちゃんの喃語(②声, ③人数, ④言葉の内容)や⑤お腹が鳴る音が聴こえる。
4	①走る電車内で, ②小さなざわめきや③電車が建物などの傍を通過する音, ④ドンドンと鳴っている音が聴こえる。途中で女性が 2 回深いため息をつき(⑤ため息, ⑥ため息の数や深さ), ⑦踏み切りの音が微かに聴こえてくる。
5	①静かな場所で, ②冷蔵庫の電気音が聴こえる。③電気のスイッチ音がして, ④木製の床を靴で歩く足音と共に移動していく。足音が止まって, ⑤衣擦れが聴こえ, ⑥ベッドに倒れ込む音がする。
6	①静かな場所で, ②振り子時計の秒針の音が聴こえる。突然, ③やや遠くでガラスが割れる音がする。
7	①穏やかな波の音と②カモメやウミネコの鳴き声が聴こえる。③コンクリートの道を歩く足音[ハイヒール]がゆっくりと近づいてきてしばらく立ち止まり, 少しして, ④やや足早に遠ざかって消えていく。
8	①静かな場所で, ②音が反響する廊下を, 歩く 2 人の足音(③足音, ④人数や性別, ⑤枯葉を踏むような音)が近づいてくる。足音が止まり, ⑥鍵を開け, ドアを開閉し(⑦開閉, ⑧軋み), ⑨再び鍵をかける。
9	①轟音と②荒れた波の音, ③砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が聴こえる。突然不思議な生物の④羽音や⑤鳴き声がして, ⑥足音が止まる。再び不思議な生物の⑦羽音や⑧鳴き声が聴こえてくる中, 歩き始める足音が聴こえる。
10	家の中を荒らすような音が聴こえる(①ガラスが割れる音, ②何かがぶつかる音[木の質感], ③走り回る音)。
11	①静かな場所で, ②衣擦れ(③音と音の間(動きが止まる))や④トントんと叩くような音が聴こえる。
12	①風が吹き荒れる中, スコップで土を掘り続ける音が聴こえる(②土を掘る音, ③草の根が千切れるような音)。
13	①静かな場所で, 心拍が聴こえる(①心拍, ②心拍の不規則さ)。
14	①ヒグラシや②鳥や③カラスの鳴き声と④沢の音が聴こえる。

※ 内容は作成時の想定であり, 必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない

①～⑨: 音要素, 下線: 微小音要素

表 5-2. 本章で用いた APT の指標 (表 4-3 を再掲)

内容面	<p>自己の内界に向ける関心, 自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 人物の導入, 主人公の導入, 導入人物の性質, 独特な人物設定, 動物の導入, 有音/無音の背景音の取り込み, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結末の性質, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己言及, 主観的印象, 食物反応, 衣服反応, 性的内容, 物質の導入, 劇化反応, 非現実的内容, 歴史的内容</p>
形式面	<p>反応の失敗・拒否, 初発反応時間, 実験者による質問回数, <i>刺激の追加提示回数</i>, 語りの様式, 複数の物語, 前の刺激や物語との関連づけ</p>
認知面	<p>微小音要素の取り込み, 音要素の取り込み, 音要素の統合, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, <i>聴空間の拡大/縮小</i>, 他の感覚への言及, <i>触覚情報の性質</i></p>

※ 斜字体は APT 独自の指標を示す

表 5-3. 各指標における評定値の算出方法（表 4-4 を再掲）

評定法	評定値の算出方法	該当する指標
時間や回数を計測	物語 14 個(参加者 1 人分)に対する値をそのまま合計	初発反応時間, 実験者による質問回数, 刺激の追加提示回数
「ある／ない」「該当する／該当しない」の 2 件法	「ある／ない」「該当する／該当しない」を「1／0」に変換後, 物語 14 個分を合計	自己の内界に向ける関心, 他者に向ける関心, 人物の導入, 主人公の導入, 独特な人物設定, 動物の導入, 有音／無音の背景音の取り込み, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己言及, 主観的印象, 食物反応, 衣服反応, 性的内容, 物質の導入, 劇化反応, 非現実的内容, 歴史的内容, 反応の失敗・拒否, 語りの様式, 複数の物語, 前の刺激や物語との関連づけ, 微小音要素の取り込み, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, 聴空間の拡大／縮小, 他の感覚への言及
	音要素ごとに「該当する／該当しない」を「1／0」に変換後, 物語 14 個分を合計	音要素の取り込み, 音要素の統合
「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」の 5 件法	言及 「言及なし以外／言及なし」を「1／0」に変換後, 物語 14 個分の値を合計	自己に向ける感情, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 導入人物の性質, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結末の性質, 触覚情報の性質
	性質 「肯定的／どちらでもない／否定的」を「1／0／-1」に変換後, 物語 14 個分の値を合計	
	両価 「両価的／両価的以外」を「1／0」に変換後, 物語 14 個分の値を合計	

表 5-4. ロールシャッハ法の鍵変数と解釈仮説

鍵変数	解釈仮説
PTI > 3	認知の正確度と思考の明確性の機能に潜在的問題あり
DEPI > 5 かつ CDI > 3	一人でいても、他の人といっても抑うつ的になる
DEPI > 5	情緒が混乱し、悲観的な認知をし、無気力で、挫折感あり
D < Adj D	状況ストレスの影響で統制力が低下
CDI > 3	社会的スキルを欠き、不適切で無力な行動をとる
Adj D < 0	内外からの刺激や要求が強すぎ、ストレスが続いた状態により、潜在的な問題をもつ可能性
L ≥ 1.18	複雑であいまいな刺激も過度に単純化し、現実を歪めて知覚
反射反応あり	自己への関心が強く、自己を過大評価し、他者をあまり考慮しないなどの傾向あり
体験型内向型	判断・決定に際して、主として思考を使う
体験型外拡型	判断・決定に際して、主として感情を使う
p > a + 1	対人関係で受動的な役割をとり、意思決定の責任を回避する傾向あり
HVI 陽性	警戒心が過剰であり、自分の考えや感情を示さないで、自分の世界に閉じこもる傾向あり

パーソナリティの構造に関連し、思考や感情の著しい混乱や発達上の問題に焦点

基本的な行動様式に関連

5-3 結果

(1) APT の評定値算出

研究 2 と同様に、評定マニュアルに沿って、筆者を含む臨床心理士 3 名で、全体の 20%にあたる 12 名分(物語 168 個分)を独立して評定したところ、87.2% および 84.2%と十分な一致率が得られたため、一致しなかった部分については合議により最終的な評定を決定し、他の評定は筆者が 1 人で行った。指標ごとに算出した 14 刺激全体の評定値の平均値と標準偏差を表 5-5 と表 5-6 に示す。なお、「自己に向ける感情 (両価)」「父親 (的人物) に向ける感情 (両価)」「母親 (的人物) に向ける感情 (両価)」「自己言及」「主観的印象 (対人物)」「性的内容」「歴史的 content」の 7 指標は出現数が非常に小さかったため、以下の分析対象から除外した。

(2) ロールシャッハ法の変数算出

ロールシャッハ法の実施経験が豊富な実験協力者が高橋・西尾 (1994) や高橋ら (2002) に基づいてコーディングを行い、後日、筆者がダブルチェックを行った。疑問の残るコーディングについては、さらに後日、実験協力者との合議により最終的なコーディングを決定した。鍵変数の値を算出し、それぞれの該当者数とその割合は表 5-7 に示す通りであった。なお、 $PTI > 3$ 、 $DEPI > 5$ かつ $CDI > 3$ 、 $DEPI > 5$ 、 $Adj D < 0$ の 4 変数では該当者数が少なかったため、以下の分析対象から除外した。

表 5-5. 各指標の評定値の平均および標準偏差（表 4-5 を再掲）

APT 指標	平均値	標準偏差
自己の内界に向ける関心	7.03	2.92
自己に向ける感情(言及)	3.07	2.10
自己に向ける感情(性質)	-0.20	1.62
他者に向ける関心	6.83	2.81
他者に向ける感情(言及)	3.58	1.92
他者に向ける感情(性質)	0.33	2.76
他者に向ける感情(両価)	0.50	0.83
父親(的人物)に向ける感情(言及)	2.17	2.04
父親(的人物)に向ける感情(性質)	-0.08	1.04
母親(的人物)に向ける感情(言及)	2.63	1.59
母親(的人物)に向ける感情(性質)	0.42	1.24
人物の導入	8.10	2.63
主人公の導入	3.77	1.84
導入人物の性質(言及)	6.22	2.93
導入人物の性質(性質)	0.79	2.11
導入人物の性質(両価)	0.22	0.56
独特な人物設定	6.40	2.97
動物の導入	0.40	0.56
有音の背景音の取り込み	3.20	1.47
無音の背景音の取り込み	1.63	1.13
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	4.83	1.95
背景音に対する情緒的意味づけ(性質)	-0.81	1.45
背景音に対する情緒的意味づけ(両価)	0.17	0.38
結末の性質(性質)	1.08	3.49
結末の性質(両価)	0.45	0.83
攻撃的内容	2.28	1.39
損傷内容	1.87	1.44
主観的印象(対刺激)	0.75	1.47
主観的印象(対物語)	0.60	1.06
食物反応	2.27	1.78
衣服反応	1.83	1.36
物質の導入	4.77	2.20
劇化反応	0.54	1.11
非現実的内容	0.27	0.65

N=60

表 5-6. 各指標の評定値の平均および標準偏差 (表 4-6 を再掲)

APT 指標	平均値	標準偏差
反応の失敗・拒否	0.23	0.55
初発反応時間(秒)	135.43	143.09
実験者による質問回数	8.57	6.86
刺激の追加提示回数	1.55	1.70
語りの様式(移入形式)	9.40	3.01
語りの様式(会話形式)	0.32	0.72
語りの様式(物語形式)	0.70	2.31
複数の物語	0.80	1.33
前の刺激や物語との関連づけ	0.21	0.58
微小音要素の取り込み	1.24	1.28
音要素の取り込み	32.30	3.85
音要素の統合	30.53	3.67
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	0.72	0.74
聴空間の拡大	0.43	0.72
聴空間の縮小	1.38	1.43
他の感覚への言及	7.52	2.99
触覚情報の性質(言及)	3.17	1.01
触覚情報の性質(性質)	-0.83	1.08
触覚情報の性質(両価)	0.33	0.57

N=60

表 5-7. 各変数の該当者数 (%)

鍵変数	該当者数 (%)
PTI > 3	0 (0.0)
DEPI > 5 かつ CDI > 3	4 (6.7)
DEPI > 5	8 (13.3)
D < Adj D	29 (48.3)
CDI > 3	19 (31.7)
Adj D < 0	7 (11.7)
L ≥ 1.18	12 (20.0)
反射反応あり	15 (25.0)
体験型内向型	21 (35.0)
体験型外拡型	15 (25.0)
p > a + 1	24 (40.0)
HVI 陽性	30 (50.0)

(3) 分析

APTの指標ごとに上位・下位の約3分の1ずつ抽出し、高群（肯定群，あり群）と低群（否定群，なし群）の2群に分けた。その2群とロールシャッハ法の鍵変数への該当の頻度について χ^2 検定により検討を行った。その結果，以下の有意差および有意傾向が得られ，それぞれについて残差分析を行った（表5-8～表5-23）。なお，クロス表の中で期待値が5未満になるセルが1つ以上あった指標は，本研究では分析の対象から除外した。

内容面の指標では，「父親（的人物）に向ける感情（性質）」における肯定群はD<Adj Dに該当することが有意に多かったのに対し，否定群はD<Adj Dに該当しないことが多かった（ $\chi^2=5.25$, $p<.05$ ）。「母親（的人物）に向ける感情（性質）」における否定群はHVIに該当することが有意に多かったのに対し，肯定群はHVIに該当しないことが多かった（ $\chi^2=4.29$, $p<.05$ ）。「導入人物の性質（性質）」における肯定群はD<Adj Dに該当することが多い傾向にあったのに対し，否定群はD<Adj Dに該当しないことが多い傾向にあった（ $\chi^2=3.36$, $p<.10$ ）。「動物の導入」におけるなし群は $p>a+1$ に該当することが有意に多かったのに対し，あり群は $p>a+1$ に該当しないことが多かった（ $\chi^2=12.50$, $p<.001$ ）。「背景音に対する情緒的意味づけ（言及）」の高群はD<Adj Dに該当することが有意に多かったのに対し，低群はD<Adj Dに該当しないことが多かった（ $\chi^2=5.46$, $p<.05$ ）。「主観的印象（対物語）」におけるなし群はD<Adj Dに該当することが多い傾向にあったのに対し，あり群はD<Adj Dに該当しないことが多い傾向にあった（ $\chi^2=3.79$, $p<.10$ ）。また，「主観的印象（対物語）」のあり群はCDI>3に該当することが多い傾向にあったのに対し，なし群はCDI>3に該当しないことが多い傾向にあった（ $\chi^2=3.05$, $p<.10$ ）。「食物反応」における低群は $p>a+1$ に該当することが有意に多かったのに対し，高群は $p>a+1$ に該当しないことが多かった（ $\chi^2=4.71$, $p<.05$ ）。「物質の導入」における高群はHVIに該当することが多い傾向にあったのに対し，低群はHVIに該当しないことが多い傾向にあった（ $\chi^2=3.78$, $p<.10$ ）。「劇化反応」における高群は反射反応ありに該当することが有意に多かったのに対し，低群は反射反応ありに該当しないことが多かった（ $\chi^2=4.98$, $p<.05$ ）。形式面の指標では，「初発反応時間」における高群はHVIに該当することが有

意に多かったのに対し、低群は HVI に該当しないことが多かった ($\chi^2=8.29$, $p<.01$)。「語りの様式 (会話形式)」のあり群は D<Adj D に該当することが有意に多かったのに対し、なし群は D<Adj D に該当しないことが多かった ($\chi^2=6.69$, $p<.01$)。「複数の物語」におけるなし群は体験型内向型に該当することが多い傾向にあった ($\chi^2=4.69$, $p<.10$)。「前の刺激や物語との関連づけ」のなし群は D<Adj D に該当することが有意に多かったのに対し、あり群は D<Adj D に該当しないことが多かった ($\chi^2=4.90$, $p<.05$)。認知面の指標では、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」におけるあり群は体験型内向型に該当することが多い傾向にあったのに対し、なし群は不定型に該当することが多い傾向にあった ($\chi^2=5.91$, $p<.10$)。「触覚情報の性質 (言及)」における高群は反射反応ありに該当することが有意に多かったのに対し、低群は反射反応ありに該当しないことが多かった ($\chi^2=4.43$, $p<.05$)。

表 5-8. 父親（的人物）に向ける感情（性質）と $D < \text{Adj } D$

	$D < \text{Adj } D$	$D \geq \text{Adj } D$	合計
肯定群	9▲	3▽	12
否定群	5▽	11▲	16
合計	14	14	28

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-9. 母親（的人物）に向ける感情（性質）と HVI

	陽性	陰性	合計
肯定群	10▽	18▲	28
否定群	20▲	12▽	32
合計	30	30	60

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-10. 導入人物の性質（性質）と $D < \text{Adj } D$

	$D < \text{Adj } D$	$D \geq \text{Adj } D$	合計
肯定群	13▲	7▽	20
否定群	12▽	19▲	31
合計	25	26	51

▲：残差分析で高い傾向にあった，▽：残差分析で低い傾向にあった

表 5-11. 動物の導入と $p > a+1$

	$p > a+1$	$p \leq a+1$	合計
あり群	2▽	19▲	21
なし群	22▲	17▽	39
合計	24	36	60

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-12. 背景音に対する情緒的意味づけ（言及）と $D < \text{Adj } D$

	$D < \text{Adj } D$	$D \geq \text{Adj } D$	合計
高群	12▲	6▽	18
低群	5▽	13▲	18
合計	17	19	36

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-13. 主観的印象（対物語）と $D < \text{Adj } D$

	$D < \text{Adj } D$	$D \geq \text{Adj } D$	合計
あり群	7▽	15▲	22
なし群	22▲	16▽	38
合計	29	31	60

▲：残差分析で高い傾向にあった，▽：残差分析で低い傾向にあった

表 5-14. 主観的印象（対物語）と $\text{CDI} > 3$

	$\text{CDI} > 3$	$\text{CDI} \leq 3$	合計
あり群	10▲	12▽	22
なし群	9▽	29▲	38
合計	19	41	60

▲：残差分析で高い傾向にあった，▽：残差分析で低い傾向にあった

表 5-15. 食物反応と $p > a+1$

	$p > a+1$	$p \leq a+1$	合計
高群	7▽	17▲	24
低群	15▲	10▽	25
合計	22	27	49

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-16. 物質の導入と HVI

	陽性	陰性	合計
高群	11▲	9▽	20
低群	4▽	13▲	17
合計	15	22	37

▲：残差分析で高い傾向にあった，▽：残差分析で低い傾向にあった

表 5-17 劇化反応と $Fr+rF \geq 1$

	$Fr+rF \geq 1$	$Fr+rF = 0$	合計
高群	9▲	11▽	20
低群	6▽	29▲	35
合計	15	40	55

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-18. 初発反応時間と HVI

	陽性	陰性	合計
高群	13▲	7▽	20
低群	4▽	16▲	20
合計	17	23	40

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-19. 語りの様式（会話形式）と $D < Adj D$

	$D < Adj D$	$D \geq Adj D$	合計
あり群	11▲	3▽	14
なし群	18▽	28▲	46
合計	29	31	60

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-20. 複数の物語と体験型

	内向型	不定型	外拡型	合計
あり群	4▽	9	8	21
なし群	17▲	14	7	38
合計	21	23	15	59

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-21. 前の刺激や物語との関連づけと $D < Adj D$

	$D < Adj D$	$D \geq Adj D$	合計
あり群	2▽	9▲	11
なし群	27▲	22▽	49
合計	29	31	60

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-22. 音要素に対する標準的意味づけからのずれと体験型

	内向型	不定型	外拡型	合計
あり群	14▲	7▽	8	29
なし群	7▽	16▲	7	30
合計	21	23	15	59

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

表 5-23. 触覚情報の性質（言及）と $Fr+rF \geq 1$

	$Fr+rF \geq 1$	$Fr+rF = 0$	合計
高群	10▲	16▽	26
低群	5▽	29▲	34
合計	15	45	60

▲：残差分析で有意に高かった，▽：残差分析で有意に低かった

5-4 考察

(1) 各 APT 指標とロールシャッハ法の関連について

以下では、ロールシャッハ法の鍵変数との関連が認められた APT 指標について考察していく。なお、鍵変数の下位変数における差について Mann-Whitney の U 検定により検討した結果も必要に応じて記載する。

1) 父親(的人物)に向ける感情(性質) 父親やそれに近い人物を、他の登場人物に安心感を与えるような肯定的人物として物語に登場させることが多かった人は、 $D < Adj D$ に該当することが有意に多いという結果が得られた。本指標には父親イメージや父子関係の質が反映されると考えられ、研究 2 では、本指標における肯定群は否定群よりも、Big Five における協調性が有意に高かった。他方、 $D < Adj D$ は状況ストレスの影響が強いことを示しており(高橋ほか、2007)、本鍵変数に関連する変数を検討すると、 m (無生物運動反応)が肯定群において有意に多かった($U=35.00$, $p<.01$)。つまり、周囲の環境から揺さぶられるようなストレスが強くなり、思考に影響を及ぼしていると考えられ、本指標に想定される解釈と一致しない。視点を変えてみると、本研究における実験参加者の大半が学部 3 年生から修士 1 年生で、進路に関して両親からの期待や要望も受けつつ悩んでいる人が比較的多かったと考えられる。この時期の学生が本指標に該当するような父親イメージを意識化するとき、進路に関する悩みやストレスがより身近に感じられている可能性があり、 $D < Adj D$ の該当につながったのかもしれない。本結果に関しては、参加者の状況ストレスに関する調査を行ったり、APT とロールシャッハ法の反応を詳細に分析したりすることで、より明確になるだろう。

2) 母親(的人物)に向ける感情(性質) 母親やそれに近い人物を、他の登場人物に危害を加えたり嫌な思いをさせたりする否定的人物として物語に登場させることが多かった人は、HVI に該当することが有意に多いという結果が得られた。本指標には、母親イメージや母子関係の質が反映されると考えられ、研究 2 では、本指標における否定群は肯定群よりも、Big Five における協調性と勤勉性が有意に低かった。他方、HVI 陽性の人は、「他者への警戒心が強く、自分の生活空間を守ろうとつとめ、他者に利用されたり、他者から傷つけられ

ないように控え目に行動することで、自己を防衛する。また、彼らは他者を信用せず、他者と親密になることを避け、いつ何事が起こっても対応できるように、外界を注意深く慎重に眺め、用心深い態度を示す（高橋ら，2007）」という。本鍵変数に関連する変数を検討すると、Sum T（材質反応の総数）が否定群において有意に少なかった（ $U=361.00$ ， $p<.05$ ）ことから、本結果は特に「他者と親密になることを避ける」傾向が反映されたものと考えられる。この点は協調性の低さと関連し、本結果は了解可能であろう。

3）導入人物の性質（性質） 導入人物を、他の登場人物に安心感を与えるような肯定的人物として登場させることが多い人は、D<Adj D に該当することが多い傾向にあるという結果が得られた。本指標には他者イメージや対象関係が強く反映されると考えられ、研究2では、本指標における肯定群は否定群よりも、Big Fiveにおける協調性が有意に高かった。他方、D<Adj D は状況ストレスの影響が強いことを示しており（高橋ら，2007）、本鍵変数に関連する変数を検討すると、m（無生物運動反応）が肯定群において有意に多かった（ $U=194.00$ ， $p<.05$ ）。先述の「父親（的人物）に向ける感情（性質）」と類似した結果であり、実際に、刺激中に父親の存在が明確なものがない非音声刺激においては、「父親（的人物）に向ける感情（性質）」も父親やそれに近い人物が物語に導入されて初めて評定される。このため、「父親（的人物）に向ける感情（性質）」と同様に解釈できる可能性があるが、本指標には父親以外の導入人物も評定対象に含まれているため、慎重に考える必要があるだろう。導入人物の細かい分類も含めて、今後の検討課題としたい。

4）動物の導入 刺激中には存在しない動物を物語に導入した人は、 $p>a+1$ に該当することが有意に少ないという結果であった。本指標には人物ではなく動物を導入する点から対人関係の回避が推測され、研究2では、本指標におけるあり群はなし群よりも、Big Fiveにおける協調性が有意に低かった。他方、 $p>a+1$ に該当する人は、「行動が受動的・消極的であり、自分の行動の決定を他者に任せる依存的行動をとりやすい（高橋ら，2007）」という。主要5因子性格検査（村上・村上，2001）には協調性の質問項目として「みんなで決めたことは、できるだけ協力しようと思います」や「みんなで決めたことでも、自分に不利になる場合は協力したくありません」という項目がある。これらは追

従と関連し（村上・村上，2001）， $p > a+1$ の「自分の行動の決定を他者に任せる」ことと重なる部分がある。また，動物を導入するという稀な手段によって物語作成の課題に対処しようとする事自体に能動性や積極性も感じられよう。これらの視点から，本結果も了解可能である。

5) **背景音に対する情緒的意味づけ（言及）** 刺激中の背景音に対して不安感や安心感などを付与することが多かった人は， $D < Adj D$ に該当することが有意に多いという結果が得られた。本指標には周囲の環境に対する関心や敏感さ，投影が生じる程度が反映されると考えられ，研究2では，本指標における高群は低群よりもBig Fiveにおける協調性が有意に高かった。他方， $D < Adj D$ は状況ストレスの影響が強いことを表し（高橋ら，2007），周囲の環境や状況に対する敏感さの点で，本指標と一致する部分があると考えられる。

6) **主観的印象（対物語）** 参加者自身が語った物語に対して主観的印象を述べる人が多かった人は， $D < Adj D$ に該当することが少なく，CDIに該当することが多い傾向にあるという結果が得られた。本指標には，自信のなさや自己批判，不安，反応に対する自我関与を薄める防衛的態度などが反映されると考えられる。他方， D と $Adj D$ の差は統制力に対する状況ストレスの影響の程度を表す（高橋ら，2007）。 $D < Adj D$ が周囲の環境や状況に対する敏感さを表し得るのに対し，本指標の自己批判的な側面は対自的な敏感さとも捉えられ，この視点からすると本結果も了解できるかもしれない。また，CDIが高い人は，「①漠然とした無力感があつたり，②他者の気持ちに無関心・鈍感であつたり，③他者を警戒したり，④受動的であつたりして，⑤他者との間に距離をおき，表面的な関係しかもてないことが多い（高橋ら，2007）」という。本鍵変数に関連する変数を検討すると， $pure H$ （人間全体反応）が高群において有意に少なかった（ $U=278.50$ ， $p < .05$ ）ことから，上記の②の側面が特に反映されている可能性が高い。本指標に対自的な敏感さが反映されると考えると，CDIとの関連も了解できる部分があるといえよう。

7) **食物反応** 物語の中で食べ物に言及することが多かった人は， $p > a+1$ に該当することが有意に少ないという結果が得られた。本指標はロールシャッハ法における食物反応（Fd）を参考に取り上げた探索的指標である。しかし，本研究のAPTにおける食物反応は，刺激中に引き金となるものがなく，純粹に

連想の産物であることがほとんどであり、形態の知覚をきっかけに産出されるロールシャッハ法の食物反応（Fd）とは質的に異なっていると考えられる。他方、 $p > a+1$ は対人関係における受動性や消極性、依存性を示す（高橋ら，2007）。本結果からすると、より積極的に食事場面を連想して語ったことが本指標と鍵変数の関連として表れたといえるかもしれない。食べ物の内容と物語における位置づけについて質的に分析を行うことで、本指標の意味がより明確になると考えられる。

8) 物質の導入 刺激中に存在しない何らかの物質を物語に導入することが多い人は、HVI に該当することが多い傾向にあるという結果が得られた。本指標も探索的なものであり、創造性が関連すると考えられ、研究 2 では、本指標における高群は低群よりも Big Five における外向性と知性が高い傾向にあった。他方、HVI 陽性の人は「他者への警戒心が強く、自分の生活空間を守ろうとつとめ、他者に利用されたり、他者から傷つけられないように控え目に行動することで、自己を防衛する。また、彼らは他者を信用せず、他者と親密になることを避け、いつ何事が起こっても対応できるように、外界を注意深く慎重に眺め、用心深い態度を示す（高橋ら，2007）」という。本鍵変数に関連する変数を検討すると、S（空白反応）が低群より高群において有意に高かった（ $U = 92.50, p < .05$ ）ことから、何も刺激がない部分にあえて注目するような警戒心の点で、本指標と一致する部分があると考えられる。

9) 劇化反応 演劇や映画、アニメーションの一場面として物語を展開させることが多い人は、反射反応ありに該当することが有意に多いという結果であった。本指標には、見られることに対する敏感さや、反応に対する心理的距離の大きさが想定される。他方、反射反応を示す人は、「過大に評価した自分にふさわしい地位や名声を求め、他者は自分の欲求を実現するために存在すると考えたり、自分の失敗の責任を他者に帰し、自己を美化する情報だけを取り入れ、自分を特別扱いにしがちである（高橋ら，2007）」、また、反射反応は「アイデンティティを確立する過程での葛藤や不安を表したり、他者との関係で自己を理解し統合しようと努力している体験を示す場合もある（高橋ら，2007）」という。見られることに対する敏感さや、主観的な反応を提示することへの不安と、その決定を製作者という他者に帰属することで自己を守っている点から、

本結果も了解可能といえよう。

10) 初発反応時間 聴覚刺激を提示し終えてから物語を語り始めるまでの時間が長い人は HVI 陽性に該当することが有意に多かった。本指標には反応性や衝動性、刺激に対するショック、試行錯誤あるいは熟慮という対処スタイルなどを反映すると考えられる。研究 2 では、本指標における高群は低群よりも、Big Five における外向性が低く、勤勉性が高い傾向にあった。他方、HVI 陽性の人は警戒心が強く、自己防衛的で、外界に対して慎重で用心深い態度で接する（高橋ら、2007）。この用心深さは初発反応時間を長くする可能性があり、この点で本指標と HVI は一致する部分があると考えられる。

11) 語りの様式（会話形式） 複数の登場人物に同一化して、その対話を交えて物語を進めることが多かった人は、D<Adj D に該当することが有意に多いという結果が得られた。本指標には人に対する不自然な構え、ある種の演技能力、感情生活の活発さや流動性が反映されることが考えられる（鈴木、1997）。他方、D<Adj D は統制力に状況ストレスが強く影響を及ぼしていることを表す（高橋ら、2007）。本指標に想定される解釈と一致しないが、ロールシャッハ法において状況関連ストレスを示す m や Sum Y（拡散反応の総数）について詳細な分析を行うなど、検討の余地が残っている。

12) 複数の物語 1 つの刺激に対して複数の物語を作成することが少なかった人は、体験型内向型に該当することが多い傾向にあるという結果であった。本指標は、複数の可能性から 1 つの物語に絞り込む思い切りの弱さや、取捨選択することへの不安を反映すると考えられ、研究 2 では、本指標における低群は高群よりも、Big Five における協調性と勤勉性が高い傾向にあった。他方、内向型の人は「個性的な知能や創造性を働かせながら、さまざまな見方や可能性を考え、最善と思う方法を選び、計画的に問題を処理しようとする（高橋ら、2007）」とされ、試行錯誤的に対処する外拡型と対比される。実際の実験場面では、試行錯誤しながら複数の物語を作成する場合も見られたが、教示において「1 つの刺激に対して 1 つの物語を作って話してください」と言われているため抑制され、本指標と外拡型の関連が見られなかったと考えられる。逆に、熟慮して対処する内向型の人は試行錯誤しながら複数の物語を作成することが起りにくく、本指標の低さと関連したと考えられる。

1 3) 前の刺激や物語との関連づけ 前に提示された聴覚刺激や、前に語った物語への言及が多い人は、 $D < Adj D$ に該当することが有意に少ないという結果が得られた。本指標はロールシャッハ法の固執反応 (PSV) を参考にした探索的指標であり、新しい物語を作成するのに必要な心的エネルギーの低さや意欲の低さ、場面の切り換えの困難さなどが反映されると考えられる。他方、 $D \geq Adj D$ は状況ストレスが統制力に影響を及ぼすほど強くないことを表す(高橋ら, 2007)。本指標に想定される解釈と一致しないため、 D や $Adj D$ の内容について詳細な検討が必要である。

1 4) 音要素に対する標準的意味づけからのずれ 刺激中の台詞の内容や話者に関して、他の参加者が行わないような意味づけをすることが多い人は体験型内向型に該当することが多く、そのような意味づけをすることが少ない人は不定型に該当することが多い傾向にあるという結果であった。本指標には、作業記憶や物語作成過程における刺激情報の歪曲や、知覚過程に対する連想過程の優位性が反映されると考えられる。他方、内向型の人は「現実の刺激をそのまま受け入れず、感情が通常安定し、内省的で内面生活を送ることが多い(高橋ら, 2007)」とされ、外的な刺激をそのまま取り入れ反応する外拡型と対比される。刺激に対して観念活動を働かせて対処する点で、本指標の高群と体験型内向型に該当する人は一致していると考えられ、本結果は了解可能であろう。

1 5) 触覚情報の性質(言及) 聴覚刺激における触覚や材質感に言及することが多い人は、反射反応ありに該当することが有意に多かった。本指標は、ロールシャッハ法の材質反応 (T) を参考にした探索的指標であり、繊細さや、親密な対人関係への関心を反映すると考えられた。他方、反射反応は自己愛的傾向を反映し、特に若い被検者の場合、「アイデンティティを確立する過程での葛藤や不安を表したり、他者との関係で自己を理解し統合しようと努力している体験を示す(高橋ら, 2007)」こともあるとされ、そのような繊細さの点で本指標と重なる部分もあるかもしれない。しかし、その可能性は低いといわざるを得ず、触覚情報が刺激中の何に対して、どのようになされたかを含めて、詳細な検討が必要である。

(2) 指標全体とロールシャッハ法の関連について

研究2と比較すると、有意差や有意傾向が認められた指標は少なく、理解が困難なものが多かった。投映法同士の量的分析の比較であるため限界はあると考えられるが、今後、APT反応の細かい分類やロールシャッハ法の下位変数を含む詳細な検討が必要である。以下では、結果全体を俯瞰することにより本研究のAPTの特徴について考察する(表5-24)。

APTの指標の側から見ていくと、まず、人物に関する指標(「自己の内界に向ける関心」「自己に向ける感情」「他者に向ける関心」「他者に向ける感情」「父親(的人物)に向ける感情」「母親(的人物)に向ける感情」「人物の導入」「主人公の導入」「導入人物の性質」「独特な人物設定」)では、「自己」や「他者」に関する指標において有意差や有意傾向が得られなかったのに対し、「両親」や「導入人物」に関する指標において有意差や有意傾向が得られた。本研究で用いた刺激の内容を見ると(表5-1)、刺激中に登場する人物で両親やそれに近い特徴を持つ人物はいないため、「父親(的人物)に向ける感情」や「母親(的人物)に向ける感情」は参加者自身が反応に持ち込んだ要素であり、「導入人物の性質」はさらにその意味合いが強い。このような要素には参加者の他者イメージや対象関係などが色濃く表れると考えられ、ロールシャッハ法の変数と関連が認められたのも了解可能である。導入に関する指標(「人物の導入」「主人公の導入」「動物の導入」「物質の導入」)のうち2つにおいて有意差や有意傾向が得られたことも同様に考えられよう。ただし、人物に関する指標でロールシャッハ法の自己知覚や対人知覚に関わる鍵変数と関連が見られたのは、HVIのみであった。今後、自己知覚や対人知覚に関する他の変数についても分析を行うことにより、APTとロールシャッハ法がどのような側面で、どの程度関連するのかが明確になるだろう。背景音に関する指標(「有音/無音の背景音の取り込み」「背景音に対する情緒的意味づけ」)もそのうち1つのみで統制とストレス耐性に関わる鍵変数と有意な関連が認められ、他のロールシャッハ変数との関連について検討の余地が残った。その他にも「主観的印象(対物語)」「劇化反応」という特殊な反応を評定する指標や、「食物反応」という探索的指標において有意差や有意傾向が得られた。形式面の指標の中でも特殊な反応を評定する「語りの様式(会話形式)」「複数の物語」「前の刺激や物語との関連づけ」に、

認知面の指標の中でも特殊な反応を評定する「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」や、APT 独自の指標である「触覚情報の性質（言及）」においても有意差や有意傾向が認められた。

次に、ロールシャッハ法の鍵変数の側から見ていくと、D<Adj D において特に多くの関連が得られた。本研究で分析対象とした中でも、この鍵変数と CDI >3 は重大な適応上の問題を示唆する鍵変数とされる（藤岡，2004）。本研究の APT や指標は状況関連ストレスや統制力を強く反映する可能性が示唆されたが、特に D<Adj D に関しては了解が難しい結果が多く、下位変数も含めた詳細な検討が必要である。次いで、HVI 陽性，反射反応あり，体験型， $p > a + 1$ という基本的な行動様式に関連する鍵変数（高橋ら，2007）と関連が認められ、本研究の APT や指標はこれらの行動様式を広く映し出すことができている、認知面の指標との関連がすべてこの基本的行動様式に関連する変数であったのは、興味深い結果であった。最後に、PTI > 3，DEPI > 5 かつ CDI > 3，DEPI > 5 の鍵変数は精神障害の可能性を示唆する鍵変数とされ（藤岡，2004），本研究の実験参加者が大学生・大学院生であった影響もあり、これらの鍵変数への該当は少なく、統計的な検討を行うことができなかった。将来的には、臨床群に対する APT の実施データを収集することにより、これらの鍵変数と APT の関連が明確になるだろう。

以上から、本研究の APT は、精神障害の可能性を示唆する指標を除いた、状況関連ストレスや統制力、基本的な行動様式を広く映し出すことが示唆された。APT の反応を分析する指標としては、参加者の投射をより多く含みやすい内容面の指標や、特殊な反応を評定する内容・形式・認知の指標が、ロールシャッハ法の鍵変数に映し出されるパーソナリティと関連し、有用であることが示唆された。しかし、それらの APT 指標がパーソナリティのどのような側面を反映しているのか、他の APT 指標はロールシャッハ法の鍵変数に映し出されるパーソナリティ以外の側面を反映しているかに関しては、今後の詳細な検討が待たれる。

表 5-24. 本章において有意差・有意傾向が見られた指標

APT 指標	D < Adj D	CDI > 3	L ≥ 1.18	反射反応あり	体験型	p > a + 1	HVI 陽性	計
父親(的人物)に向ける感情(性質)	*							1
母親(的人物)に向ける感情(性質)							*	1
導入人物の性質(性質)	†							1
動物の導入						***		1
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	*							1
主観的印象(対物語)	†	†						2
食物反応						*		1
物質の導入							†	1
劇化反応				*				1
初発反応時間							**	1
話りの様式(会話形式)	**							1
複数の物語					†			1
前の刺激や物語との関連づけ	*							1
音要素に対する標準的意味づけからのずれ					†			1
触覚情報の性質(言及)				*				1
計	6	1	0	2	2	2	3	16

***:0.1%水準で有意, **:1%水準で有意, *:5%水準で有意, †:10%水準で有意

(3) 今後の課題と展望

既述の通り、本研究の結果について、APT とロールシャッハ法の双方からより詳細な検討を行う必要がある。さらに、TAT とロールシャッハ法、および Big Five とロールシャッハ法の関連を検討した先行研究を概観し、本研究の結果と照合する必要があるだろう。これらにより、本研究の結果がより明確になることが期待できる。また、APT における指標や評定方法を改善し、さらにデータ数を増やすなどして、本研究の知見をより確かなものにしていくことが求められよう。このような研究を積み重ねていくことにより、APT とロールシャッハ法の類似点や相違点、APT の利点や欠点が明確化され、投映法全体における APT の位置づけも明らかになっていくだろう。

第五章のまとめ

本章では、心理臨床においてしばしば活用され、投映法の中でも特に非意識的水準を映し出すといわれるロールシャッハ法（馬場，1997）と、非音声刺激による APT の比較検討を行った。APT はパーソナリティを測定するのに有効な道具であるのか、有効であるとしたら、パーソナリティのどのような側面を映し出すのか、APT の指標としてはどのようなものが有効かという点について探索的に検討することが目的であった。大学生・大学院生 60 名に対し APT とロールシャッハ法を実施し、APT 指標の評定値とロールシャッハ法の鍵変数の関連を検討した。その結果、本研究の APT は状況関連ストレスや統制力、基本的な行動様式を広く映し出すことが示唆された。APT の反応を分析する指標としては、参加者の投映をより多く含みやすい内容面の指標や、特殊な反応を評定する内容・形式・認知の指標が有用であることが示唆された。ただし、これらの結果に関しては、今後、APT およびロールシャッハ法の双方からの詳細な検討を要する。

第六章

【研究 4】 刺激セットの再構成

6-1 問題と目的

(1) 音声刺激と非音声刺激の特徴

研究 1 では葛藤的な会話場面を中心とする音声刺激を作成・選定し、研究 2 では物音や環境音を中心とする非音声刺激を作成・選定し、Big Five やロールシャッハ法 (研究 3) との関連を検討してきた。音声刺激と非音声刺激を比較すると、以下のような差が想定される (表 6-1)。音声刺激は、刺激の長さにはばらつきがあり、刺激がより具体的でまとまった形で提示されるため選択的知覚が生じにくく、実験参加者は比較的早く物語作成の段階に入ることができたと考えられる。同時に、刺激中に葛藤的な感情を喚起する要素が含まれているため、参加者はそれらを何らかの形で処理して物語に統合することを求められたと考えられる。これらの点から音声刺激における物語作成の自由度は相対的に低い可能性が考えられよう。音声刺激には会話が含まれているため、視覚的には比較的明るい場面を想起させやすかったことも特徴として挙げられる。また、映し出すパーソナリティの側面としては、TAT と同様に自己や他者、対人関係の側面を多く映し出したのに加えて、Big Five における情緒安定性 (神経症傾向) と特徴的な関連が認められた。神経症傾向は心理臨床で出会う様々な症状と関連することが明らかであり、この点に焦点をあてて APT の研究を積み重ねれば臨床での活用にもつながると考えられる。なお、音声刺激は会話としてまとまった形で提示されるため、参加者自身が刺激を分割して部分的に取り込むという対処を取りにくい。APT は従来、刺激のどの部分から反応を生成したのかを被検者も検査者も説明するのが難しく、パーソナリティの認知的側面を映し出すのには不向きといわれてきており (たとえば熊倉, 1989)、上記の特徴から音声刺激においてはさらに不向きと考えられる。他方、非音声刺激は、刺激の長さにはばらつきがなく、刺激がより抽象的で漠然とした形で提示されるた

め選択的知覚が可能であり、参加者は物語作成の段階に入る前に「これは何の音か」という疑問に向き合い、判断を迫られたと考えられる。同時に、刺激中に葛藤を喚起する要素は含まれていないが、会話がなく視覚的にも暗いイメージを想起させやすく、寂しさや孤独、不安が喚起される可能性があり、参加者はそれらへの対処も求められたらう。これらの特徴から、音声刺激と比較すると、非音声刺激における物語作成の自由度は高いといえよう。物語作成の枠組みが曖昧で戸惑いを覚える可能性もある中で、刺激内容の同定に終始して記述水準の反応をするか、イメージや想像を膨らませるなどして主体的に物語を組み立てていくかなど、それぞれの参加者らしい特徴が表れるだろう。また、映し出すパーソナリティの側面としては、自己や他者、対人関係の側面を多く映し出したのに加えて、**Big Five**における外向 - 内向と特徴的な関連が見られ、ユング的な向性を含む、より基本的な次元のパーソナリティを映し出すことができると考えられる。さらに、非音声刺激は漠然とした形で提示されるため、参加者はある程度刺激中の要素を取捨選択して取り込むことができる。つまり、パーソナリティの認知的側面を映し出すのに不向きな APT の中でも、非音声刺激は認知的側面を映し出す可能性を秘めているといえよう。これらの 2 種類の刺激による APT を他の投映法と比較すると、いずれも TAT との類似が認められるのに加えて、音声刺激による APT には P-F Study のように葛藤や欲求不満場面における対処様式が表れ、非音声刺激による APT にはロールシャッハ法のように曖昧な刺激の認知様式が表れる可能性があると考えられる。

このように、音声刺激も非音声刺激も性格検査として意義のある特徴を備えていると考えられる。これらの臨床的な利用可能性を明確にするためには、**Big Five** やロールシャッハ法以外のパーソナリティや性格検査との比較検討を行うなど、さらなる研究を積み重ねていく必要がある。その際に、17 個の音声刺激による APT と 14 個の非音声刺激による APT をそれぞれ実施していくと膨大な時間がかかってしまうため、本研究では今後の研究の効率性を考慮し、両者を組み合わせた新たな刺激セットを構成することを目的とする。

表 6-1. 音声刺激と非音声刺激の特徴の比較

視点	音声刺激〔研究 1〕	非音声刺激〔研究 2, 3〕
刺激の形式面	17 個	14 個
	長さにはばらつきあり(7~38 秒)	長さにはばらつきなし(30 秒)
刺激の内容面	会話場面が中心	物音や環境音が中心
	葛藤場面を想起させやすい	葛藤場面を想起させにくい
	具体的	抽象的
	選択的に知覚しにくい	選択的に知覚しやすい
	多様で複雑な感情が 喚起され得る	主に寂しさや孤独, 不安が喚起され得る
	(視覚的に)明るいイメージを 想起させやすい	(視覚的に)暗いイメージを 想起させやすい
	物語作成の自由度が 低い可能性	物語作成の自由度が 高い可能性
映し出す パーソナリティ の側面	自己, 他者, 対人関係	自己, 他者, 対人関係
	Big Five の神経症傾向と関連	Big Five の外向 - 内向と関連
	認知面の測定には不向き	認知面の測定にも可能性あり
他の投映法との 関連	TAT と P-F Study の中間	TAT とロールシャッハ法の中間

(2) 刺激の選定基準

他の投映法における刺激の選定基準は、考案当時の研究資料を見ると、診断に役立つ反応を引き出すことができるか否か、あるいは、考案者が知りたいパーソナリティの側面を映し出すことができるか否か、であったと考えられる。今日と比較して、当時は診断基準および研究や統計の手法が十分に発展していなかったため、考案者の臨床経験や直観による部分も大きかったのではないかと推察される（表 6-2）。

本研究では、特定のパーソナリティには焦点をあてず、全体的に焦点をあてることによって APT の有用性や可能性を探索的に検討することを目的としている。このため、医学的診断や特定のパーソナリティとの関連ではなく、他の心理アセスメントとの全体的関連を基準とする。具体的には、第三章から第五章において Big Five やロールシャッハ法と関連が認められた APT 指標について、評定結果を刺激ごとに整理し直し、評定の偏りを検討する。なお、ロールシャッハ法との比較検討は、ロールシャッハ法との類似が推測される非音声刺激に限って行っており、主な比較対象が Big Five の質問紙法であるため慎重を期し、評定が特に偏っていた刺激を消去法の要領で削っていく。その後、刺激セット全体の情緒性や曖昧性に偏りが生じないように、バランスを調整する（図 6-1）。刺激の個数に関しては、実施にかかる所要時間が 1 時間程度となるよう、音声刺激と非音声刺激からそれぞれ 7、8 個ずつ選定し、最終的に 15、16 個の刺激セットにする。

表 6-2. 既存の投映法における刺激選定の経緯および基準（表 2-1 を再掲）

投映法	刺激	刺激選定の経緯および基準
ロール シャツハ法	左右対称の インクのしみ	Rorschach が、自作した 40 枚以上の図版の中から、臨床的により有用であると判断された 10 枚を選定。15 枚から 12 枚、10 枚と徐々に枚数が絞られていった。
TAT	様々な場面を 描いた絵画	Murray が、数百枚の絵画の中から物語性、状況性、感情移入性の 3 要件を基に選抜し、さらに臨床的有用性の検討により 30 枚の絵画と白紙を選定した。
SCT	短い刺激文や 未完成文章	Ebbinghaus が知的統合能力を測定する道具として利用したのが始まり。その後はそれぞれの研究者が目的に合わせて刺激文を選択し、精緻化している。
P-F Study	欲求不満場面を 描いた漫画風の 絵	Rosenzweig が作成したものを、日本文化に合うように修正したものが臨床的に用いられている。投映法の中でも特に統計的な妥当性や信頼性の検討および標準化がなされており、その評価検討に堪えた刺激が選定されている。
ゾンディ・ テスト	精神疾患患者の 顔写真	Szondi が、自らが関わったケースや、他者の論文などの中から顔写真を選び、その好悪について研究する中で妥当な刺激を選定した。
ハンド・ テスト	手の絵	Wagner が最初に描いた 9 枚の絵と白紙が、ほぼそのまま採用されている。様々なポーズをとっている「手」を描いたとされている。
カロ・ テスト	左右対称の インクのしみ	片口らが、 Rorschach による平行シリーズの作成法にもとづき、ロールシャツハ法の図版と等価性の高い図版を 10 枚選定した。
絵画 空想法	様々な場面を 描いた絵画	槇田らが、①「交差点」をメタファーとして提示するもの、②反応の自由度が高いものという 2 つの基準から、19 枚の絵画と白紙を選定した。TAT の現代版・日本版として、TAT との等価性も意識されている。
言語連想 検査	単語	Jung が、100 語からなる刺激語のリストを作成した。連想の多様性や臨床的有用性によって選定されたと考えられる。
SCT-B	短い刺激文と 接続詞「が」	小林が、先行研究や直観により刺激を選定した。ただし、「最初の刺激文ではあるが絶対的なものではない」とし、研究者が目的に合わせて刺激を選択する利点を残している。

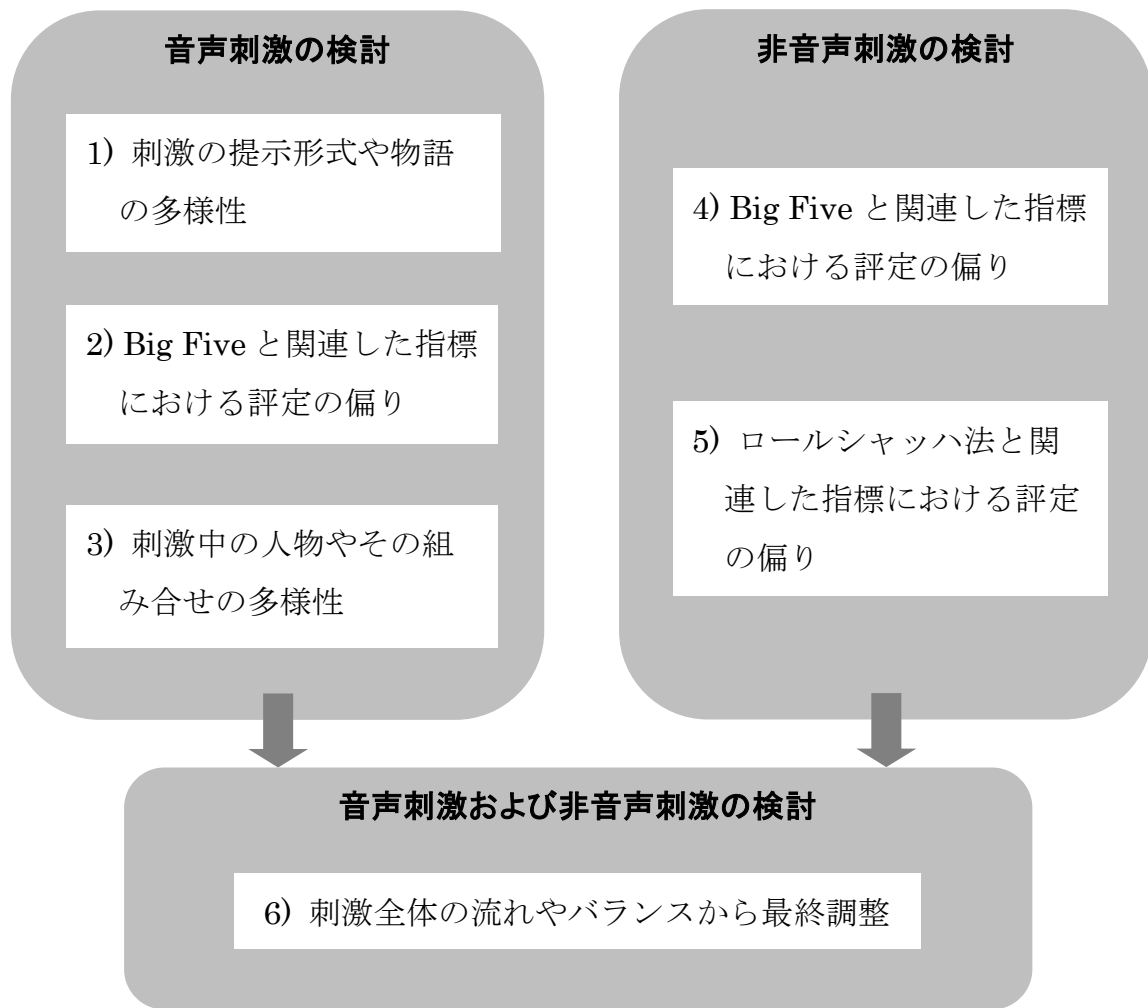


図 6-1. 刺激選定の手続き

6-2 方法

(1) 音声刺激 (研究 1 より)

実験参加者 大学生・大学院生 60 名 (男女とも 30 名) を対象とした。

聴覚刺激 研究 1 で用いた 17 個の音声刺激のうち、2 つの刺激を続けて提示して 1 つの物語作成を求めた第 10 刺激と第 15 刺激、および、物語の多様性が明らかに低かった第 8 刺激を除いた 14 個を分析対象とした (表 6-3)。前者は再構成後の APT の実施手続きや分析が煩雑になるのを防ぐためであり、後者は投映法の刺激に求められる多義性を確保するためである。

手続き APT の実施後、主要 5 因子性格検査 (村上・村上, 2001) への回答を求めた。詳細は第三章を参照されたい。なお、音声刺激による APT は TAT や P-F Study との類似が想定されたため、ロールシャッハ法との比較検討は行っていない。

分析方法・選定方法 研究 1 では TAT で用いられる指標や、APT 独自の指標により各反応に対して評定を行った (表 6-4)。本研究では、これらの指標のうち Big Five と関連が見られたものを抜粋し、刺激ごとに評定を整理し直した。具体的には、「ある／ない」「言及あり／言及なし」「該当する／該当しない」の 2 件法で評定した指標については「ある」「言及あり」「該当する」の出現率を、「肯定的／どちらでもない／否定的」「強い／どちらでもない／弱い」の 3 件法で評定した指標については評定を「1/0/-1」に変換しその標準偏差を、それぞれ指標ごとに算出した。

該当率については評価が非常に困難である。ある指標の該当率がある刺激において 0%に近いほど低かった場合、その刺激においてその指標に該当することには解釈的に大きな意味が生じる。100%に近い該当率になった場合にも、その刺激においてその指標に該当しないことに何らかの解釈仮説が成り立つだろう。しかし、このような例外的な反応は出現率が低く、その反応および解釈に焦点をあてるには膨大なサンプル数が必要となるだろう。他方、50%程度の該当率になった場合には、その刺激におけるその指標に程よいばらつきが生じており、量的分析において有望な刺激と判断され得る。本研究ではこの程よいばらつきの方を重視し、0%と 100%ちょうどの該当率になった指標の数を刺激ご

とに合計し、その値が高い刺激はパーソナリティを反映する反応の特徴をあまり引き出さないと判断し、除外の対象とした。標準偏差については、自己や他者、環境などに対して肯定的な物語と否定的な物語の両方が語られ得る刺激の方が多義性が高いと判断し、各指標のばらつきが小さい刺激を除外の対象とした。

さらに、ここまでに残った刺激について、刺激中の台詞を言っている演者の組み合わせと、刺激中の人物の属性の組み合わせの多様性から刺激の選定を行う。演者の組み合わせが同じ刺激を多く用いると、「前の刺激や物語との関連づけ」という指標への該当率が高まるなど、被検者の物語作成に影響を与える可能性がある。そのような反応は、質的分析を行うことによって被検者に関する重要な情報を得られる可能性があるが、量的分析は各反応が独立したものでないと有効性が低まってしまうため、本研究の APT では刺激間の影響をできる限り低くしておくのが妥当と判断した。刺激中の人物の属性の組み合わせに関しては、母子や父子、男性同士、女性同士、男女など、登場人物の組み合わせが多様にあることで、被検者の対象関係や対人関係に関する情報を幅広く得ることが可能になると考えた。

表 6-3. 音声刺激の内容および長さ

刺激	内容	長さ (秒)
1	静かな場所での会話: 女性 A「すみません, ここから駅に行くにはどうしたらいいですか?」, 女性 B「ああ, すみません, 私もちよっと分かりません」。	8
2	賑わっているデパートで, 女声のアナウンスが入り, 以下の会話へ: 男の子「ねえ, あれ欲しいんだけど, 買ってー」, 父親「えー, うーん, また今度ね」, 男の子「えー買ってよー」。	30
3	静かな場所での会話: 男性 A「例の件, うまく行ったらしいな」, 男性 B「ああ, 少々てこずったがね」, 男性 A「ふん, さすがだ」, 男性 B「ありがとう。こっちもほっと一安心だよ」。	10
4	いくぶん静かな場所での会話: 女の子「お母さーん, ちょっとこっち来てー」, 母親「はい」, <ブランク>, 女の子「お母さん早く早くー」, 母親「はい, 今行くー」。	16
5	土砂降りの雨の中, 1 台の車が通り過ぎ, 以下の会話へ: 女性「やっぱマズイって...」, 男性「お前, 今さら何弱気になってんだよ。もうやるしかないって分かてるだろ? さあ, 行くぞ!」, 女性「あ, ちょっと待ってよ...」。	14
6	静かな場所での会話: 女性 A「ねえ, さっき彼と何話してたの?」, 女性 B「何だっかっていいじゃん, そんなこと...」, 女性 A「えー, 教えてよー」。	8
7	静かな場所での会話: 男性 A「お前は, 何をしたのか分かてるのか! ?」, 男性 B「はい, でも, あれは...」, 男性 A「言い訳を聞きたくないじゃない! こんなことになって...お前どうするつもりなんだ! ?」, <ブランク>。	12
8	静かな場所で 3, 4 人の男女が一緒に泣いている。	24
9	高架下での会話: 女性 A「それよりさ, どこ行こっか?」, 女性 B「どっか遠いところ... どうせなら海がいいな」。	25
10	①パーティー会場で, 1 人の走る足音が近づいて来て止まり, 以下の会話へ: 男性 A「準備はいいか?」, 男性 B「オッケー」, <男性 A が息をつく>, 男性 A「よし, やるぞ!」, <数人が走り去る足音>。 ②静かな場所で, 1 人の男性が興奮を伴った荒い息をし, 最後に不思議な音(録音中に偶然入った, 形容しがたい音)が入る。	①26 ②12
11	賑わっているレストランで, ウェイターが新しい客を迎え, 以下の会話へ: 男性「あ, もうこんな時間だ。僕そろそろ帰るよ」, 女性「(小声で)後で電話するよ。(ふつうの声で)じゃあまた!」。	27
12	賑わっているレストランでの会話: 女性 A「...そっかあ...そりゃ辛かったね...」, 女性 B「うん...」, <携帯電話の着信音>, 女性 A「あ, ちょっとごめん」, <携帯電話に出る>, 女性 A「あ, はいはい, どうしたの?え, うっそお! ?へえー...うん...うん, うん分かった! じゃあ, 明日ねー」, <ブランク>。	34
13	男性 A「ちょっとこっち来い!」, 男性 B「あ, あんた何なんだって! ? ちよっ, 放せっておい! ちよっ, 誰か, 助けて!」。	7
14	いくぶん静かな場所での会話: 母親「そんなことしちゃいけないって, いつも言ってるでしょ! ?」, 女の子「だって...」, 母親「もうしないって約束する?」, 女の子「はい」。	14
15	①静かな場所で 1 人の男性がいびきをかいて寝ている。 ②静かな場所で 1 人の女性がすすり泣いている。	①38 ②23
16	公園で子どもたちが遊んでいる中での会話: 父親「何ですかねてんの? ちゃんと言わなきゃ分かんないだろ?」, 男の子「別にすねてなんかはないよ...」, 父親「言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさい」, 男の子「うん...」。	15
17	静かな場所での会話: 女性 A「あ, 私こっただから」, 男性「あ, うん, じゃあねー」, 女性 B「またねー!」, 女性 A「また!」, <3 人の歩く足音>。	13

※ 網掛けは除外の対象となった刺激である

表 6-4. 音声刺激による APT における指標 (表 3-2 を再掲)

	指標
内容面	自己の内界に向ける関心, 自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 刺激外の人物の導入, 導入人物の性質, 標準的年齢/性別設定からのずれ, 独特な人物設定, 有音/無音の背景音の取り込み, 背景音に対する情緒的意味づけ, 明確な結末, 結末の性質, 攻撃的内容, 自己言及, 主観的印象(対刺激/対人物/対物語)
形式面	初発反応時間, 実験者による質問回数, <i>刺激の追加提示回数</i> , 語りの様式(移入形式/会話形式/物語形式), 複数の物語
認知面	微小音要素の取り込み, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, <i>登場人物の標準的位置関係からのずれ, 聴空間の拡大・縮小</i>

※ 斜字体は APT 独自の指標を示す

(2) 非音声刺激 (研究 2, 3 より)

実験参加者 大学生・大学院生 60 名 (男女とも 30 名) を対象とした。

聴覚刺激 研究 2, 3 で用いた 14 個の非音声刺激を分析対象とした (表 6-5)。

手続き APT の実施後, 主要 5 因子性格検査 (村上・村上, 2001) に回答を求めた。さらに, 別の日程で, 別の実験者がロールシャッハ法を実施した。

分析方法・選定方法 APT に関しては, TAT で用いられる指標や APT 独自の指標により評定を行った (表 6-6)。ロールシャッハ法に関しては, 高橋・西尾 (1994) や高橋ら (2002) に準拠してコーディングを行い, 構造一覧表に集約した。

本研究では, まず, APT 指標のうち Big Five と関連が見られたものを抜粋し, 刺激ごとに評定を整理し直した。音声刺激と同様に該当率と標準偏差を算出し, 除外の対象を決定した。次に, APT 指標のうちロールシャッハ法の包括システムにおける鍵変数と関連が見られたものを抜粋し, Big Five のときと同様に該当率と標準偏差を算出し, 除外の対象を決定した。なお, 鍵変数は PTI > 3 , DEPI > 5 かつ CDI > 3 , DEPI > 5 , D $<$ Adj D, CDI > 3 , Adj D < 0 , L > 0.99 , 反射反応あり, 体験型内向型, 体験型外拡型, $p > a + 1$, HVI 陽性という変数で構成されるが, 本論では, L に関しては高橋ら (1998) による $L \geq 1.18$ の基準を採用した (研究 3)。これらの鍵変数は「パーソナリティの支配的要因として, その人の心理学的特徴に関する情報を与える変数である (高橋ら, 2007)」とされている。

表 6-5. 非音声刺激の内容および音要素（表 4-2 を再掲）

刺激	内容
1	都会の交差点(①車, ②車のクラクション, ③人々の足音や話し声, ④人の笑い声)で, いろんな足音が聴こえてくる(⑤ゆっくり歩く音[ハイヒール], ⑥歩く足音[革靴], ⑦走って近づいて来て止まる足音[ハイヒール])。
2	①静かな場所で, ②焚火をする音や③カラスの鳴き声が聴こえる。途中から, ④砂利道を歩く足音が遠ざかって消えていく。
3	①静かな場所で, 2 人の赤ちゃんの喃語(②声, ③人数, ④言葉の内容)や⑤お腹が鳴る音が聴こえる。
4	①走る電車内で, ②小さなざわめきや③電車が建物などの傍を通過する音, ④ドンドンと鳴っている音が聴こえる。途中で女性が 2 回深いため息をつき(⑤ため息, ⑥ため息の数や深さ), ⑦踏み切りの音が微かに聴こえてくる。
5	①静かな場所で, ②冷蔵庫の電気音が聴こえる。③電気のスイッチ音がして, ④木製の床を靴で歩く足音と共に移動していく。足音が止まって, ⑤衣擦れが聴こえ, ⑥ベッドに倒れ込む音がする。
6	①静かな場所で, ②振り子時計の秒針の音が聴こえる。突然, ③やや遠くでガラスが割れる音がする。
7	①穏やかな波の音と②カモメやウミネコの鳴き声が聴こえる。③コンクリートの道を歩く足音[ハイヒール]がゆっくりと近づいてきてしばらく立ち止まり, 少しして, ④やや足早に遠ざかって消えていく。
8	①静かな場所で, ②音が反響する廊下を, 歩く 2 人の足音(③足音, ④人数や性別, ⑤枯葉を踏むような音)が近づいてくる。足音が止まり, ⑥鍵を開け, ドアを開閉し(⑦開閉, ⑧軋み), ⑨再び鍵をかける。
9	①轟音と②荒れた波の音, ③砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が聴こえる。突然不思議な生物の④羽音や⑤鳴き声がして, ⑥足音が止まる。再び不思議な生物の⑦羽音や⑧鳴き声が聴こえてくる中, 歩き始める足音が聴こえる。
10	家の中を荒らすような音が聴こえる(①ガラスが割れる音, ②何かがぶつかる音[木の質感], ③走り回る音)。
11	①静かな場所で, ②衣擦れ(③音と音の間(動きが止まる))や④トントんと叩くような音が聴こえる。
12	①風が吹き荒れる中, スコップで土を掘り続ける音が聴こえる(②土を掘る音, ③草の根が千切れるような音)。
13	①静かな場所で, 心拍が聴こえる(①心拍, ②心拍の不規則さ)。
14	①ヒグラシや②鳥や③カラスの鳴き声と④沢の音が聴こえる。

※ 内容は作成時の想定であり, 必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない
①～⑨: 音要素, 下線: 微小音要素

表 6-6. 非音声刺激による APT における指標 (表 4-3 を再掲)

内容面	自己の内界に向ける関心, 自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 人物の導入, 主人公の導入, 導入人物の性質, 独特な人物設定, 動物の導入, 有音/無音の背景音の取り込み, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結末の性質, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己言及, 主観的印象, 食物反応, 衣服反応, 性的内容, 物質の導入, 劇化反応, 非現実的内容, 歴史的内容
形式面	反応の失敗・拒否, 初発反応時間, 実験者による質問回数, 刺激の追加提示回数, 語りの様式, 複数の物語, 前の刺激や物語との関連づけ
認知面	微小音要素の取り込み, 音要素の取り込み, 刺激の統合, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, 聴空間の拡大/縮小, 他の感覚への言及, 触覚情報の性質

※ 斜字体は APT 独自の指標を示す

(3) 音声刺激および非音声刺激

残った聴覚刺激について、刺激全体の流れやバランスの観点から最終調整を行った。投映法の刺激はその提示順序も大きな要素である。例えばロールシャッハ法においては、単色で全体反応がしやすいIカードに始まり、IVカードで濃淡、VIIIカードで多色彩が登場し、多色彩で全体反応が難しいXカードで終わるというように、徐々に刺激が多彩かつ複雑になっていくように配置されている。被検者にとって反応しやすいだけでなく、それぞれの刺激状況における被検者の心理過程が読み取りやすいようになっている。TATも基本的な20枚のセットにおいては、前半の10カードではより現実的な場面が、後半の10カードではより空想的あるいは抽象的な場面が配置されており、同様の配慮がなされていると考えられる。本研究のAPTにおいても、刺激が徐々に多彩・複雑あるいは抽象的・曖昧になっていくような配列を採用する。また、最初の刺激には物語作成が比較的容易な刺激を、最後の刺激には肯定的（少なくとも中性的）な物語が作成されやすい刺激を配置し、被検者がAPTに取り組みやすく、実施後に否定的な感情や考えが強まらないように配慮する。さらに、内容が似通った刺激が連続しないように配列の調整を行う。

6-3 結果と考察

(1) 音声刺激

まず、Big Fiveと関連が見られたAPT指標を抜粋し、各刺激における該当率あるいは標準偏差を算出した(表6-7~表6-10)。この該当率と標準偏差からそれぞれ2,3個ずつ指標の除外対象を選出する。該当率に関しては、「母親(的人物)に向ける感情(言及)」が第4刺激と第14刺激において100%の該当率であったが、この2つはもともと母子の会話を中心とする刺激であるため、想定内の値と考えられた。このため、該当率0%の個数のみを刺激ごとに合計し、その合計値が大きかった刺激はパーソナリティに関連する反応をあまり引き出すことができないと考え、合計値が大きかった方から第2刺激と第13刺激を除外の対象とした。標準偏差に関しては、指標ごとに標準偏差が低かった刺激を3つずつ選出し、選出された回数を刺激ごとに合計した。その合計値が大き

かった刺激はパーソナリティに関連する反応を幅広く引き出すことができないと考え、合計値が大きかった方から第4刺激と第6刺激と第11刺激を除いた。

次に、残った音声刺激を人物の属性の組み合わせで分類すると、男性2人が2つ、女性2人が3つ、1組の男女が1つ、母親と娘が1つ、父親と息子が1つ、そして男性1人と女性2人の計3人のものが1つであった。また、刺激中の演者の組み合わせが重なっているのは第1, 12, 17刺激に登場する女性2人と、第3, 7刺激に登場する男性2人であった。女性2人の組み合わせが多いため、3つの中でも物語の発展性が少ないと考えられる第1刺激を除くことにした。これら3つの刺激は指標の該当率も標準偏差もほぼ同等の結果であったが、第1刺激は内容よりも順序効果によって多様な反応を引き出した可能性が高いと考えられた。

(2) 非音声刺激

まず、Big Five と関連が見られた APT 指標を抜粋し、各刺激における該当率と標準偏差を算出した (表 6-11~表 6-14)。この該当率と標準偏差からそれぞれ 1, 2 個ずつ指標の除外対象を選出する。該当率に関しては、該当率 0% の個数を刺激ごとに合計し、その合計値が大きかった方から第 7 刺激と第 10 刺激を除外の対象とした。標準偏差に関しては、「音要素の取り込み」と「音要素の統合」は各刺激で取り得る値の範囲が異なるため、本研究では集計を行わなかった。その他の指標ごとに標準偏差が低かった刺激を 2 つずつ選出し、選出回数を刺激ごとに合計した。その合計値が大きかった方から第 2 刺激と第 14 刺激を除いた。

表 6-7. 音声刺激で Big Five と関連した指標の該当率

	刺激						
	1	2▲	3	4	5	6	7
内容面							
自己の内界に向ける関心	16.7	45.0	30.0	48.3	60.0	61.7	60.0
母親(的人物)に向ける感情(言及)	1.7	20.0	0.0	100.0	5.0	0.0	1.7
標準的年齢設定からのずれ	6.7	3.3	0.0	8.3	21.7	26.7	33.3
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	18.3	31.7	5.0	15.0	31.7	1.7	1.7
攻撃的内容	1.7	0.0	6.7	5.0	20.0	5.0	33.3
自己言及	3.3	0.0	1.7	0.0	3.3	1.7	3.3
主観的印象(対刺激)	1.7	5.0	13.3	1.7	1.7	3.3	3.3
主観的印象(対人物)	3.3	1.7	1.7	0.0	0.0	0.0	1.7
形式面							
語りの様式(移入形式)	40.0	70.0	61.7	75.0	81.7	80.0	81.7
語りの様式(会話形式)	0.0	1.7	1.7	6.7	10.0	10.0	3.3
複数の物語	10.0	0.0	8.3	8.3	8.3	13.3	5.0
認知面							
聴空間の拡大・縮小	3.3	0.0	5.0	6.7	25.0	6.7	10.0
0%の個数(合計値)	1	4▲	2	2	1	2	0

太字: 該当率が 0%であったものを示す, ▲: 除外の対象となった刺激を示す

表 6-8. 音声刺激で Big Five と関連した指標の該当率

	刺激						
	9	11	12	13▲	14	16	17
内容面							
自己の内界に 向ける関心	43.3	43.3	55.0	41.7	68.3	76.7	46.7
母親(的人物)に 向ける感情(言及)	0.0	3.3	1.7	0.0	100.0	20.0	3.3
標準的年齢設定 からのずれ	21.7	1.7	6.7	8.3	8.3	5.0	18.3
背景音に対する情緒 的意味づけ(言及)	10.0	30.0	3.3	25.0	3.3	46.7	10.0
攻撃的内容	13.3	3.3	8.3	50.0	21.7	18.3	5.0
自己言及	1.7	1.7	8.3	3.3	3.3	1.7	0.0
主観的印象(対刺激)	1.7	1.7	0.0	6.7	0.0	1.7	1.7
主観的印象(対人物)	1.7	1.7	5.0	0.0	1.7	3.3	1.7
形式面							
語りの様式(移入形式)	76.7	68.3	81.7	81.7	85.0	81.7	68.3
語りの様式(会話形式)	8.3	0.0	10.0	10.0	6.7	20.0	3.3
複数の物語	6.7	8.3	3.3	0.0	5.0	15.0	8.3
認知面							
聴空間の拡大・縮小	21.7	8.3	3.3	8.3	11.7	11.7	5.0
0%の個数(合計値)	1	1	1	3▲	1	0	1

太字: 該当率が 0%であったものを示す, ▲: 除外の対象となった刺激を示す

表 6-9. 音声刺激で Big Five と関連した指標の標準偏差

	刺激						
	1	2	3	4▲	5	6▲	7
内容面							
自己に向ける感情 (性質)	0.64	0.53	0.55	0.46	0.63	0.56	0.68
他者に向ける関心	0.28	0.32	0.49	0.22	0.46	0.56	0.56
他者に向ける感情 (性質)	0.73	0.62	0.72	0.76	0.62	0.70	0.70
母親(的人物)に向ける 感情(性質)	—	0.51	—	0.78	0.58	—	—
導入人物の性質 (性質)	0.49	0.58	0.63	0.00	0.52	0.34	0.71
形式面							
刺激の追加提示回数	0.13	0.18	0.13	0.00	0.18	0.00	0.00
各刺激で下位 3 位に 該当した個数(合計値)	2		2	4▲	1	4▲	3

※「母親(的人物)に向ける感情(性質)」は第 1, 3, 6, 7 刺激で出現しなかった
太字:各指標の中で標準偏差が下位 3 位であったものを示す
▲:除外の対象となった刺激を示す, **薄字**:既に除外対象となった刺激を示す

表 6-10. 音声刺激で Big Five と関連した指標の標準偏差

	刺激						
	9	11▲	12	13	14	16	17
内容面							
自己に向ける感情 (性質)	0.62	0.55	0.70	0.61	0.57	0.57	0.76
他者に向ける関心	0.45	0.39	0.43	0.37	0.39	0.54	0.52
他者に向ける感情 (性質)	0.73	0.74	0.72	0.43	0.68	0.88	0.71
母親(的人物)に向ける 感情(性質)	0.70	0.00	—	—	0.63	0.79	0.71
導入人物の性質(性質)	0.71	0.38	0.75	0.81	0.61	0.76	0.76
形式面							
刺激の追加提示回数	0.00	0.13	0.00	0.00	0.00	0.18	0.13
各刺激で下位 3 位に 該当した個数(合計値)	1	4▲	2		3	0	0

※「母親(的人物)に向ける感情(性質)」は第 12, 13 刺激で出現しなかった
太字:各指標の中で標準偏差が下位 3 位であったものを示す
▲:除外の対象となった刺激を示す, **薄字**:既に除外対象となった刺激を示す

表 6-11. 非音声刺激で Big Five と関連した指標の該当率

	刺激						
	1	2	3	4	5	6	7▲
内容面							
自己の内界に向ける 関心	30.0	41.7	31.7	65.0	41.7	60.0	50.0
父親(的人物)に 向ける感情(言及)	0.0	8.3	33.3	15.0	11.7	21.7	11.7
母親(的人物)に 向ける感情(言及)	3.3	6.7	88.3	5.0	5.0	30.0	5.0
人物の導入	38.3	61.7	93.3	33.3	33.3	78.3	53.3
主人公の導入	16.7	36.7	61.7	3.3	3.3	51.7	10.0
動物の導入	1.7	5.0	1.7	3.3	1.7	0.0	0.0
有音の背景音の 取り込み	20.0	13.3	0.0	41.7	0.0	3.3	45.0
背景音に対する情緒 的意味づけ(言及)	20.0	31.7	6.7	31.7	20.0	35.0	63.3
背景音に対する情緒 的意味づけ(両価)	0.0	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
攻撃的内容	1.7	11.7	1.7	1.7	13.3	45.0	3.3
自己言及	0.0	5.0	0.0	3.3	5.0	3.3	0.0
主観的印象	11.7	10.0	3.3	11.7	15.0	13.3	6.7
物質の導入	31.7	30.0	45.0	25.0	36.7	31.7	38.3
形式面							
反応の失敗・拒否	7.5	3.3	1.7	1.7	0.0	1.7	0.0
語りの様式 (移入形式)	70.0	58.3	53.3	70.0	80.0	66.7	76.7
複数の物語	3.3	6.7	5.0	10.0	8.3	8.3	5.0
認知面							
微小音要素の 取り込み	16.7	3.3	15.0	15.0	13.3	5.0	3.3
0%の個数(合計値)	3	0	3	1	3	2	4▲

太字:該当率が0%であったものを示す, ▲:除外の対象となった刺激を示す

表 6-12. 非音声刺激で Big Five と関連した指標の該当率

	刺激						
	8	9	10▲	11	12	13	14
内容面							
自己の内界に向ける 関心	55.0	51.7	43.3	56.7	70.0	51.7	51.7
父親(的人物)に 向ける感情(言及)	15.0	8.3	25.0	10.0	13.3	15.0	28.3
母親(的人物)に 向ける感情(言及)	5.0	8.3	25.0	10.0	8.3	28.3	35.0
人物の導入	31.7	45.0	65.0	50.0	66.7	65.0	95.0
主人公の導入	8.3	25.0	25.0	3.3	3.3	41.7	88.3
動物の導入	0.0	6.7	0.0	1.7	3.3	0.0	15.0
有音の背景音の 取り込み	0.0	61.7	8.3	0.0	66.7	3.3	56.7
背景音に対する情緒 的意味づけ(言及)	18.3	55.0	11.7	30.0	66.7	30.0	65.0
背景音に対する情緒 的意味づけ(両価)	1.7	3.3	0.0	1.7	0.0	0.0	6.7
攻撃的内容	13.3	20.0	78.3	5.0	23.3	6.7	3.3
自己言及	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3
主観的印象	8.3	21.7	6.7	10.0	5.0	5.0	5.0
物質の導入	41.7	21.7	25.0	35.0	45.0	26.7	43.3
形式面							
反応の失敗・拒否	3.3	1.7	0.0	0.0	0.0	1.7	1.7
語りの様式 (移入形式)	65.0	66.7	68.3	78.3	68.3	53.3	73.3
複数の物語	6.7	1.7	0.0	3.3	3.3	15.0	1.7
認知面							
微小音要素の 取り込み	8.3	10.0	6.7	16.7	3.3	6.7	6.7
0%の個数(合計値)	3	1	5▲	3	3	3	0

太字: 該当率が 0%であったものを示す, ▲: 除外の対象となった刺激を示す

表 6-13. 非音声刺激で Big Five と関連した指標の標準偏差

	刺激						
	1	2▲	3	4	5	6	7
内容面							
自己に向ける感情 (性質)	0.76	0.58	0.82	0.61	0.82	0.75	0.83
他者に向ける感情 (性質)	0.56	0.41	0.54	0.42	0.78	0.64	0.69
父親(的人物)に 向ける感情(性質)	—	0.45	0.51	0.88	0.69	0.55	0.82
母親(的人物)に 向ける感情(性質)	0.00	0.00	0.61	1.15	0.58	0.54	1.00
導入人物の性質(性質)	0.68	0.63	0.58	0.78	0.64	0.74	0.58
結末の性質(性質)	0.63	0.57	0.57	0.72	0.58	0.54	0.55
形式面							
初発反応時間(秒)	10.21	12.29	9.92	10.66	16.96	9.70	13.69
各刺激で下位 2 位に 該当した個数(合計値)	2	3▲	0	0	0	2	

※「父親(的人物)に向ける感情(性質)」は第 1 刺激で出現しなかった
 太字:各指標の中で標準偏差が下位 2 位であったものを示す
 ▲:除外の対象となった刺激を示す, 薄字:既に除外対象となった刺激を示す

表 6-14. 非音声刺激で Big Five と関連した指標の標準偏差

	刺激						
	8	9	10	11	12	13	14▲
内容面							
自己に向ける感情 (性質)	0.81	0.69	0.86	0.95	0.82	0.76	0.50
他者に向ける感情 (性質)	0.66	0.79	0.51	0.67	0.71	0.79	0.40
父親(的人物)に 向ける感情(性質)	0.67	0.84	0.52	0.52	0.35	0.50	0.51
母親(的人物)に 向ける感情(性質)	0.58	0.84	0.68	0.75	0.71	0.51	0.60
導入人物の性質(性質)	0.44	0.59	0.61	0.74	0.68	0.63	0.56
結末の性質(性質)	0.57	0.55	0.66	0.61	0.75	0.64	0.57
形式面							
初発反応時間(秒)	18.37	19.71	10.11	21.13	9.82	14.56	6.93
各刺激で下位 2 位に 該当した個数(合計値)	1	1		0	1	0	4▲

太字:各指標の中で標準偏差が下位 2 位であったものを示す
 ▲:除外の対象となった刺激を示す, 薄字:既に除外対象となった刺激を示す

次に、ロールシャッハ法の包括システムにおける鍵変数と関連が見られた APT 指標を抜粋し、各刺激における該当率と標準偏差を算出した（表 6-15～表 6-18）。既述の理由から「音要素の取り込み」と「音要素の統合」は集計を行っていない。この該当率と標準偏差からそれぞれ 1, 2 個ずつ指標の除外対象を選出する。該当率に関しては、該当率 0%の個数を刺激ごとに合計し、その合計値が大きい方から第 3 刺激を除外の対象とした。標準偏差に関しては、指標ごとに標準偏差が低かった刺激を 2 つずつ選出し、選出回数を刺激ごとに合計した。その合計値の大きい方から第 1 刺激と第 6 刺激を除いた。これらの選出回数は 2 回と少なかったが、該当率においても第 3 刺激に次いで 0%が多かったため除外対象とした。

表 6-15. 非音声でロールシャッハ法と関連した指標の該当率

	刺激						
	1	2	3▲	4	5	6	7
内容面							
動物の導入	0.0	5.0	1.7	3.3	1.7	0.0	0.0
背景音に対する情緒的 意味づけ(言及)	20.0	31.7	6.7	31.7	20.0	35.0	63.3
主観的印象(対物語)	5.0	3.3	1.7	8.3	3.3	8.3	5.0
食物反応	15.0	45.0	23.3	15.0	16.7	6.7	20.0
物質の導入	31.7	30.0	45.0	25.0	36.7	31.7	38.3
劇化反応	3.3	1.7	0.0	0.0	3.3	5.0	5.0
形式面							
話りの様式(会話形式)	3.3	1.7	0.0	1.7	5.0	0.0	3.3
複数の物語	3.3	6.7	5.0	10.0	8.3	8.3	5.0
前の刺激や物語との 関連づけ	0.0	0.0	0.0	1.7	1.7	3.3	0.0
認知面							
音要素に対する標準的 意味づけからのずれ	0.0	16.7	0.0	6.7	16.7	0.0	0.0
触覚情報の性質(言及)	5.0	18.3	3.3	5.0	91.7	1.7	6.7
0%の個数(合計値)	3	1	4▲	1	0	3	3

太字:該当率が0%であったものを示す

▲:除外の対象となった刺激を示す, 薄字:既に除外対象となった刺激を示す

表 6-16. 非音声でロールシャッハ法と関連した指標の該当率

	刺激						
	8	9	10	11	12	13	14
内容面							
動物の導入	0.0	6.7	0.0	1.7	3.3	0.0	15.0
背景音に対する情緒的 意味づけ(言及)	18.3	55.0	11.7	30.0	66.7	30.0	65.0
主観的印象(対物語)	3.3	8.3	1.7	5.0	1.7	5.0	3.3
食物反応	5.0	11.7	5.0	11.7	20.0	1.7	30.0
物質の導入	41.7	21.7	25.0	35.0	45.0	26.7	43.3
劇化反応	3.3	8.3	5.0	0.0	6.7	3.3	3.3
形式面							
語りの様式(会話形式)	3.3	1.7	1.7	0.0	3.3	0.0	6.7
複数の物語	6.7	1.7	0.0	3.3	3.3	15.0	1.7
前の刺激や物語との 関連づけ	1.7	1.7	3.3	0.0	1.7	0.0	0.0
認知面							
音要素に対する標準的 意味づけからのずれ	5.0	10.0	1.7	5.0	6.7	1.7	1.7
触覚情報の性質(言及)	1.7	5.0	0.0	98.3	46.7	10.0	23.3
0%の個数(合計値)	1	0	3	3	0	3	1

太字: 該当率が 0%であったものを示す, 薄字: 既に除外対象となった刺激を示す

表 6-17. 非音声刺激でロールシャッハ法と関連した指標の標準偏差

	刺激						
	1▲	2	3	4	5	6▲	7
内容面							
父親(的人物)に向ける感情(性質)	—	0.45	0.51	0.88	0.69	0.55	0.82
母親(的人物)に向ける感情(性質)	0.00	0.00	0.61	1.15	0.58	0.54	1.00
導入人物の性質(性質)	0.68	0.63	0.58	0.78	0.64	0.44	0.58
形式面							
初発反応時間(秒)	10.21	12.29	9.92	10.66	16.96	9.70	13.69
各刺激で下位 2 位に該当した個数(合計値)	2▲	1		0	0	2▲	0

※「父親(的人物)に向ける感情(性質)」は第 1 刺激で出現しなかった
太字:各指標の中で標準偏差が下位 2 位であったものを示す
▲:除外の対象となった刺激を示す, **薄字**:既に除外対象となった刺激を示す

表 6-18. 非音声刺激でロールシャッハ法と関連した指標の標準偏差

	刺激						
	8	9	10	11	12	13	14
内容面							
父親(的人物)に向ける感情(性質)	0.67	0.84	0.52	0.52	0.35	0.50	0.51
母親(的人物)に向ける感情(性質)	0.58	0.84	0.68	0.75	0.71	0.51	0.60
導入人物の性質(性質)	0.74	0.59	0.61	0.74	0.68	0.63	0.56
形式面							
初発反応時間(秒)	18.37	19.71	10.11	21.13	9.82	14.56	6.93
各刺激で下位 2 位に該当した個数(合計値)	0	0	0	0	1	0	2

太字:各指標の中で標準偏差が下位 2 位であったものを示す
薄字:既に除外対象となった刺激を示す

(3) 音声刺激および非音声刺激

ここまでで、音声刺激では第 3, 5, 7, 9, 12, 14, 16, 17 刺激の 8 つが、非音声刺激では第 4, 5, 8, 9, 11, 12, 13 刺激の 7 つが残った。これらの刺激を中心に、刺激全体の流れやバランスから、最終的な調整を行う。

まず、最初と最後の刺激について検討する。TAT における最初の刺激を参照すると、カード 1 は少年が何かに取り組もうとして思い悩んでいる絵であり、反応の失敗や拒否が少ない、被検者にとって取り組みやすい刺激が採用されている。また、その少年の姿は、被検者が TAT に取り組もうとしている検査状況に類似しており、反応から被検者の検査（新規の課題）に取り組む態度や姿勢が読み取れることもある（山本, 1992）。当初、本研究の APT においてもそのような刺激を最初に配置することを考えたが、聴覚刺激で一人の人物が静かに思い悩む場面を表現し、かつ、思い悩む内容に関する曖昧な情報を含み、物語を作成しやすいというバランスを実現することが困難であった。このため、本研究では「何かが始まろうとしている場面」を音声刺激および非音声刺激の第 1 刺激として配置していた。両方ともここまでの手続きで除外されたが、他に第 1 刺激として適切と考えられるものがないため、非音声刺激の第 1 刺激を採用することにした。この刺激は「映画の始まりのシーン」と反応した実験参加者もあり、「何かが始まろうとしている雰囲気」が強く表れていると考えられるが、今後、より適切な刺激への変更や修正が必要となるかもしれない。

最後の刺激に関しては、再び TAT を参照すると、カード 20 の他にもカード 12BG, カード 16 が採用されることが多い。カード 20 は夜の街灯の下に一人の人物が佇む絵であり、内省的に過去を振り返ったり、未来に思いを巡らせたりする内容が語られることが多い。検査の締めくくりに適しているが、カード全体の暗さに反応して抑うつ的な内容が語られる場合もある。カード 12BG は人物のいない風景画で、緊張感のないリラックスした内容が語られることが多い。一連のカードで葛藤的な物語を多く作った被検者に対し、最後により緊張感の低い中性的な反応を語ってもらい検査を終えるという配慮から、このカードが採用されることがある。カード 16 は白紙で、被検者 - 検査者の関係性がほどよいものになっていれば、刺激から離れて豊かな物語が展開されることがある。検査の終わり方を被検者に任せることにもなり、しかし、突然の白紙に

戸惑う被検者も多く、反応の失敗や拒否も稀ではない。これらに対して、音声刺激の第 17 刺激はカード 20 に、非音声刺激の第 14 刺激はカード 12BG に似た特徴があるといえよう。ただ、音声刺激の第 17 刺激は登場人物が男女 3 人であり、異性関係の物語に発展する場合もある。また、APT の刺激の侵襲性がまだ不明確である現状を考えると、実施後のデブリーフィングを丁寧に行うのはもちろん、非音声刺激の第 14 刺激を採用するのが安全であろう。この刺激もここまでに除外された刺激であるため、今後、有用性を確認する必要があるだろう。

以上で 2 つの刺激を改めて採用したため、非音声刺激の候補は 9 つになった。本研究では 7, 8 つに絞り込むことを目指しているため、少なくとも 1 つ除く必要が出て来た。9 つの刺激は、登場人物が男性と解釈されやすい刺激が多く、背景音があるものが背景音のないものよりも 1 つ多い。第 9 刺激か第 12 刺激を除外するとこのバランスがより適切になる。第 9 刺激は複雑かつ曖昧で、ファンタジーを含む多様な物語が作られるのに対し、第 12 刺激は具体的で、作られる物語は相対的に限定されていた。嵐の夜にスコップで穴を掘って何かを埋めなければならない状況が想起され、何らかの犯罪につながる物語が大半を占めていた。このため第 12 刺激を除外する。

次に、刺激の提示順序について検討する。最初と最後の刺激については上述の通りである。他の刺激に関しては、より具体的で、物語が作成しやすいと考えられる音声刺激を前半に配列するのがよいかもかもしれない。しかし、刺激の順序効果が明らかにされていないため、暫定的に、音声刺激と非音声刺激を交互に配列しておく（表 6-19）。刺激価が高いものを後半に配列するなどの調整も考えられ、今後、研究を進める中でより適切な提示順序に修正していく必要がある。

表 6-19. 新たな刺激セットの提示順序と内容

	内容
1	都会の交差点で車や人々が往来する中、ハイヒールや革靴で歩く足音が聴こえてくる。最後にハイヒールで走る足音が近づいてきて、手前で立ち止まる。
2	静かな場所で、男性 A「例の件、うまく行ったらしいな」、男性 B「ああ、少々てこずったがね」、男性 A「ふん、さすがだ」、男性 B「ありがとう。こっちもほっと一安心だよ」。
3	静かな場所で、冷蔵庫の微かな唸り。電気のスイッチを操作する音がして、木製の床を靴で歩く足音と共にゆっくり移動していく。衣擦れの音の後に、ベッドに倒れ込む音。
4	いくぶん静かな場所で、女性「そんなことしちゃいけないって、いつも言ってるでしょ！？」、女の子「だって...」、女性「もうしないって約束する？」、女の子「はい」。
5	走行する電車内で、乗客の小さなざわめきが聴こえる。(開始から約 20 秒後) 女性が 2 度深いため息をつく。最後に踏み切りの音がかすかに聴こえてくる。
6	土砂降りの雨の中、1 台の車が通り過ぎ、女性「やっぱマズイって...」、男性「お前、今さら何弱気になってんだよ。もうやるしかないって分かっているだろ？ さあ、行くぞ！」、女性「あ、ちょっと待ってよ...」。
7	静かな地下の廊下を歩く 2 人の足音が近づいてきて止まる。鍵を開け、軋むドアを開閉した後、再び鍵を閉める。
8	公園で子どもたちが遊んでいる中で、男性「何ですかねてんの？ちゃんと行わなきゃ分かんないだろ？」、男の子「別にすねて何かないよ...」、男性「言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさい？」、男の子「うん...」。
9	大勢の客で賑わっているレストランで、女性 A「...そっかあ...そりゃ辛かったね...」、女性 B「うん...」、<携帯電話の着信音>、女性 A「あ、ちょっとごめん」、<携帯電話に出る>、女性 A「あ、はいはい、どうしたの？.....え、うっそお！？.....へえー...うん...うん、うん分かった！じゃあ明日ねー」、<ブランク>。
10	地響きと荒々しい波の音が聴こえる。砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が途中で止まり、動物の羽音や鳴き声が聴こえてくる。
11	静かな場所で、男性 A「お前は何をしたのか分かっているのか！？」、男性 B「はい、でも、あれは...」、男性 A「言い訳を聞きたいんじゃない！こんなことになって...お前どうするつもりなんだ！？」、<ブランク>。
12	静かな場所で、衣擦れの音が聴こえる。
13	高架下で、女性 A「それよりさ、どこ行こっか？」、女性 B「どっか遠いところ... どうせなら海がいいな」。
14	静かな場所で、心拍が聴こえる。
15	静かな場所で、女性 A「あ、私こっちだから」、男性「あ、うん、じゃあねー」、女性 B「またねー！」、女性 A「また！」、<足音>。
16	ヒグラシや鳥の鳴き声と沢の音が聴こえる。

※ 網掛け部分は音声刺激、それ以外は非音声刺激である

第六章のまとめ

本章では、研究 1, 2, 3 の結果をもとに、音声刺激と非音声刺激から 8 つずつ刺激の選定を行い、計 16 個の刺激から成る新たな刺激セットを構成することを目的とした。具体的には、**Big Five** やロールシャッハ法と関連が見られた指標を抜粋し、刺激ごとにその指標の該当率と評定値の標準偏差を算出した。有用な指標の該当率が 0%となるが多かった刺激と、有用な指標の評定値の標準偏差が小さかった刺激を、パーソナリティに関する情報を幅広く引き出しにくい刺激と捉え、消去法の要領で除外した。音声刺激に関しては、刺激中の台詞を言っている演者や、刺激中の人物の属性の組み合わせが多様になるよう調整を行った。さらに、最初と最後の刺激など刺激全体の流れやバランスの観点からも調整を行い、最終的な刺激および提示順序を決定した。ただし、今後改良の必要がないという訳ではなく、研究の蓄積の中でさらに検討を行う必要があるだろう。

第七章

【研究 5】各聴覚刺激の特徴

7-1 問題と目的

今日の心理臨床において活用されている投映法では、分析や解釈が主観に偏り不適切なものにならないよう、分析や解釈を行う際の基準や枠組みを明確化する研究が蓄積されてきた。坪内（1997）は「TATにおいてこそ、各図版の刺激特性に対応した反応解釈をしなければならないと確信している。そのためには、何よりも、解釈者が各図版の刺激特性をしっかりと把握しなければならない」と、各刺激の特徴を把握しておく必要性を強調している。鈴木（1997）は、TATの各図版における反応を分類し、それを熟知することによって、「正しい直観」により反応を解釈することができる」と述べている。この反応分類を見ると、TAT図版がどのような感情体験を喚起しやすいか、図版の中のものがどのように認知されやすいかなどの、刺激の特徴も含まれていることが分かる。また、片口（1987）はロールシャッハ法における各図版の特性を印象評定やコードの集計により客観的に明らかにし、そのデータを踏まえて質的分析（系列分析）を行う重要性を訴えている。他方、本論のAPTでは、音声刺激と非音声刺激に想定される特徴（表 7-1）をもとに反応の分析および解釈を行ってきた。しかし、その特徴は筆者が想定した相対的なものであり、十分な客観性があるとはいえず、また、個々の刺激の特徴も明確化されていない。

以上のことから、本研究では、APTの反応の分析や解釈をより適切で豊かなものにするために、研究4で選定した各聴覚刺激の特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には、各刺激についてSD法（Semantic Differential法）による印象評定や音響学的な分析を行い、それぞれの特徴を明確化する。また、研究1～3において微小音要素（物語に取り込む参加者の割合が10%未満の音要素）とされた音が、実際に聞き取られる程度をチェックリストにより明らかにする。

表 7-1. 音声刺激と非音声刺激の特徴の比較 (表 6-1 を再掲)

視点	音声刺激[研究 1]	非音声刺激[研究 2, 3]
刺激の形式面	17 個	14 個
	長さにはばらつきあり(7~38 秒)	長さにはばらつきなし(30 秒)
刺激の内容面	会話場面が中心	物音や環境音が中心
	葛藤場面を想起させやすい	葛藤場面を想起させにくい
	具体的	抽象的
	選択的に知覚しにくい	選択的に知覚しやすい
	多様で複雑な感情が 喚起され得る	主に寂しさや孤独, 不安が喚起され得る
	(視覚的に)明るいイメージを 想起させやすい	(視覚的に)暗いイメージを 想起させやすい
	物語作成の自由度が 低い可能性	物語作成の自由度が 高い可能性
映し出す パーソナリティ の側面	自己, 他者, 対人関係	自己, 他者, 対人関係
	Big Five の神経症傾向と関連	Big Five の外向 - 内向と関連
	認知面の測定には不向き	認知面の測定にも可能性あり
他の投映法との 関連	TAT と P-F Study の中間	TAT とロールシャッハ法の中間

(1) 音に対する印象評定について

音声や環境音に対する印象評定の研究は、知覚心理学や音響学の分野で盛んに行われてきている。たとえば、音声に関しては、河原・小川・堂下（1995）は99名による母音・単語・文の自然な発声を素材とし、その声質に関して18個の形容詞対を用いて印象評定を行い、因子分析によって「美的」「高低」「声量」の3因子を抽出している。佐藤・森島（1997）はテレビドラマから収録した多様な感情価を持つ103個の音声を素材として、25個の形容詞対を用いて印象評定を行い、因子分析によって抽出された「活性化」と「快 - 不快」の2因子と音声素材の感情価の関連について考察している。環境音に関しては、安倍・小澤・鈴木・曾根（1998）は、39個の形容詞対を（a）音色を表現するもの、（b）音を聞いた際に人が抱く感情を表現するもの、（c）音の持つ情報などに関するものの3グループに整理し、66種類の環境音に対して印象評定を行っている。因子分析を行った結果、「美的」「明るさ」「量的」といういわゆる「音色の3因子」に相当する因子の他に、「音の定位情報」「音源情報」「音の存在意義」「懐古・郷愁」に関する因子が抽出された。川井・小島・平手・安岡（2004）は、居室とテーマパークという2つの状況で聴こえてくる環境音（それぞれ36種と45種）をイメージさせ、被験者が列挙した印象表現語をそのまま印象評定の尺度として採用し、個人それぞれが持つ印象評定構造の抽出を試みている。主成分分析を行った結果、環境音の評価構造における主要な次元が「選好性」「活動性」「日常性」であることが見出され、類型化された音事象（交通、自然、物音など）との関連を検討している。このような研究の積み重ねにより、聴覚情報の中でも音色に関しては、「美的（受容性）」「迫力（力量性）」「金属性（鋭さ）」という3つの次元で捉えられることが1つの共通理解となっている（泉・佐藤，1983）。

また、上記の安倍ら（1998）が「音を聞いた際に人が抱く感情を表現する」形容詞対を取り上げているように、本研究のAPTの聴覚刺激が被検者にどのような感情を抱かせるかという点も明らかにすべき重要な特徴である。感情に関する研究も数多く行われており、たとえば、寺崎・岸本・古賀（1992）は大学生を対象に現在の感情状態に関する87項目に回答させ、因子分析により抑鬱・不安、敵意、倦怠、活動的快、非活動的快、親和、集中、驚愕という8因子を

抽出している。坂上（1999）や Izard, Libero, Putnam & Haynes（1993）は喜び、興味、驚き、悲しみ、怒り、恐れを基本的な個別感情とし、また、これらを否定的感情と肯定的感情にまとめる研究もある（佐藤・安田，2001）。

以上の先行研究を参考に、本研究では、音声や環境音そのものの特徴や、それらを聴いた者が抱く感情について評定できる形容詞対を用いて印象評定を行い、音声刺激と非音声刺激の特徴について包括的に検討していく。

7-2 予備実験の目的

安倍ら（1998）を中心とする先行研究から収集した形容詞対を用いて、実際に各刺激の印象評定を試行し、本実験で用いる形容詞対を選定することを目的とする。また、聴覚刺激の提示が各1回で十分であるかなど、実験手続きに関する意見聴取も併せて行う。

7-3 予備実験の方法

実施時期 2008年8月の日中9:00~18:00の間に実施した。

実験参加者 大学院生5名（男性3名，女性2名）を対象とした。

聴覚刺激 研究4で選定した16個の聴覚刺激を採用した。

形容詞対 安倍ら（1998）を中心に先行研究の中から形容詞対を収集し、本研究の聴覚刺激に適用可能と判断された58個の形容詞対を採用した。各形容詞対について、「非常にあてはまる（1） - あてはまる（2） - ややあてはまる（3） - ややあてはまる（4） - あてはまる（5） - 非常にあてはまる（6）」の6件法に加え、聴覚刺激の印象評定に「フィットしない」という選択肢も設けた。

微小音要素のチェックリスト 形容詞対とは別の用紙に各刺激における微小音要素を記載し、その要素が聴こえた場合に丸で囲んでもらう形式を採用した。

手続き 実験室において、参加者1~3名に対し、スピーカー（ONKYO WAVIO GX-D90）を通して1つずつ聴覚刺激を提示した（図7-1）。この際、再生元のMDウォークマン（SONY Hi-MD WALKMAN MZ-RH1）とスピーカーの音量は一定であった。各刺激の提示後に、参加者ごとに印象評定および

微小音要素のチェックリストへの回答を求めた。16 刺激の印象評定を行った後、全体を通しての感想、および形容詞対や刺激の提示回数に関して意見を聴取した。

7-4 予備実験の結果と考察

参加者の意見を参考に、「フィットしない」と評定された形容詞対や、評定値間の相関が高く内容的にもほぼ同じと思われた形容詞対を除外した。特定の内容の形容詞対に偏らないよう全体のバランスも考慮した。その結果、表 7-2 に示す 30 個の形容詞対を採用した。また、参加者全員が「刺激の提示回数は 1 回で十分」という意見であったため、提示回数を増やす必要はないと判断した。

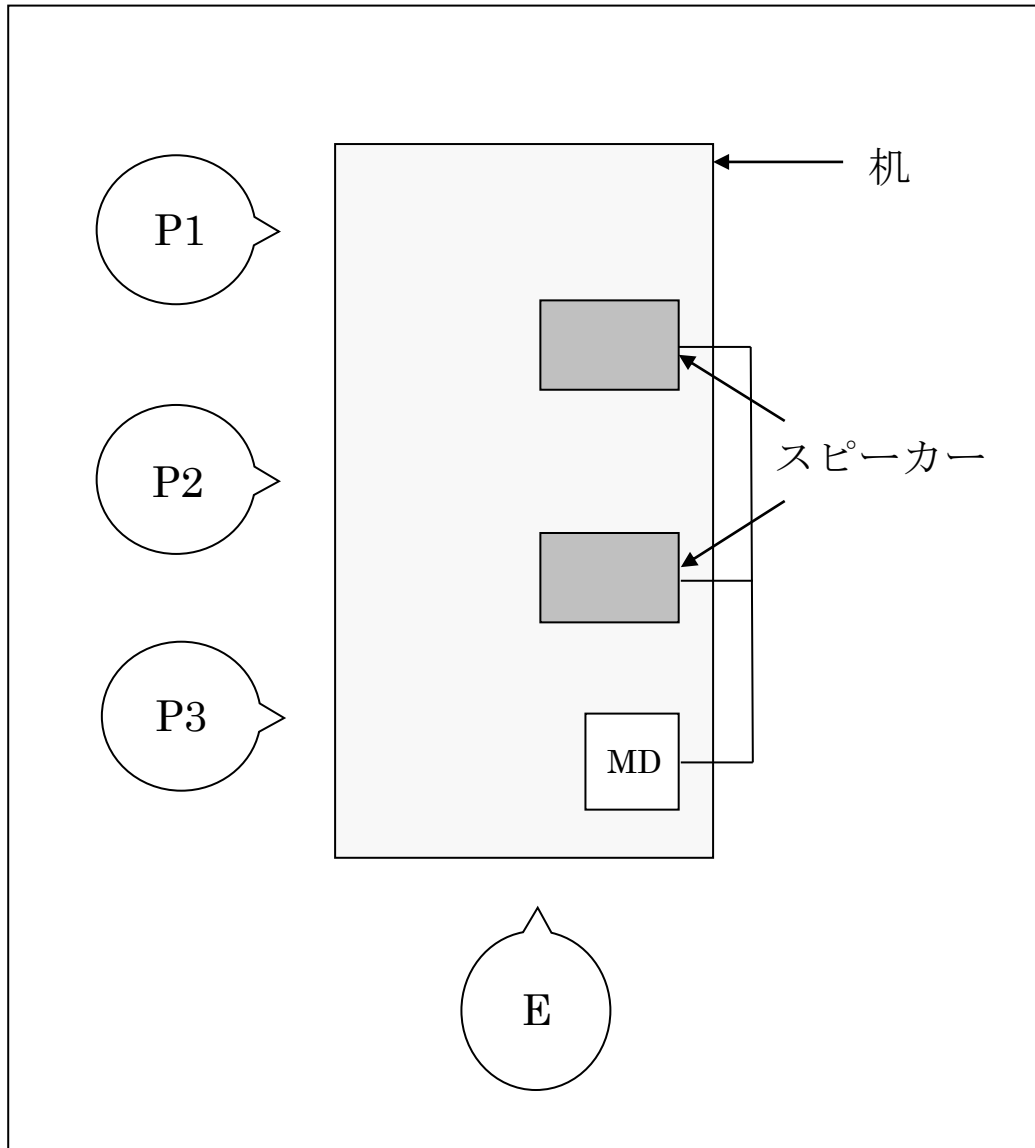


図 7-1. 実験室の配置

P1～3：実験参加者 E：実験者 MD：MD ウォークマン

※ 実験者はスピーカー（ONKYO WAVIO GX-D90）に接続した MD ウォークマン（SONY Hi-MD WALKMAN MZ-RH1）を操作して聴覚刺激を再生した。スピーカーは 2 つで 1 セットであり，参加者に向けて配置した。参加者は各自，評定用紙を挟んだバインダーを持って印象評定を行った。

表 7-2. 予備実験により選定された形容詞対

濁った	-	澄んだ
長さを感じる	-	瞬間的な
印象に残らない	-	インパクトのある
ばらばらな	-	まとまった
冷たい	-	暖かい
静かな	-	騒々しい
嬉しい	-	悲しい
親しみのある	-	親しみのない
眠くなるような	-	目が覚めるような
自然な	-	人工的な
不安な	-	安心した
情景が思い浮かぶ	-	情景が思い浮かばない
柔らかい	-	硬い
腹が立った	-	気が和んだ
非日常的な	-	日常的な
変化のある	-	安定した
快い	-	不快な
曖昧な	-	明瞭な
広がりのある	-	窮屈な
軽やかな	-	重い
生気のない	-	いきいきとした
ざらざらした	-	なめらかな
うきうきした	-	憂うつな
気が抜けた	-	緊張した
単純な	-	複雑な
暗い	-	明るい
臨場感がない	-	臨場感がある
落ち着いた	-	苛々した
奥行きのある	-	平面的な
ゆっくりした	-	勢いのある

7-5 本実験の目的

予備実験で選定した形容詞対を用いて、各聴覚刺激について SD 法による印象評定を行い、その特徴を明らかにすることを目的とする。同時に、微小音要素のチェックリストも実施し、それらが認知される程度について確認する。また、これらとは別に、音響学的な分析により各刺激の物理的な特徴も明らかにする。

7-6 本実験の方法

実施時期 2008 年 9～11 月の日中 9:00～18:00 の間に実施した。

実験参加者 大学生・大学院生 56 名（男性 22 名，女性 34 名）を対象とした。

形容詞対 予備実験で選定した 30 個の形容詞対について、6 件法で回答を求めた（資料 6）。

微小音要素のチェックリスト 予備実験と同じチェックリストを採用し、聴き取れた微小音要素を丸で囲んでもらった（資料 7）。

手続き 予備実験と同様に、参加者 1～3 名に対して 16 個の聴覚刺激を 1 回ずつ提示し、形容詞対による印象評定と微小音要素のチェックリストへの回答を求めた。なお、順序効果を確認するため、前半の 30 名では刺激番号順に刺激を提示し、後半の 26 名では提示順序をランダム化した。

分析方法 印象評定については因子分析を行い、聴覚刺激の特徴を抽出した。微小音要素については、聞き取れたと回答した参加者の人数の割合を算出し、研究 1, 2 において物語に取り込んだ参加者の人数の割合と比較した。

音響分析 以上の実験とは別に、Paul & David (2011) によって開発されたオープンソースの音響分析ソフトウェアである Praat 5.2.15 を用いて、基本的な物理的特徴である長さ、大きさ、高さについて分析を行う。

7-7 本実験の結果

まず、刺激の提示順序（固定 30 名，ランダム 26 名）による印象評定の平均値に差があるかを t 検定により検討した。その結果，有意差が認められた項目はあったが，全体の 5%にも満たなかった。このため，以下では提示順序による区別はせずに参加者 56 名を分析の対象とする。

次に，形容詞対 30 項目について因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った（ $N=56$ 名 \times 16 刺激=896）。スクリープロットおよび初期解における固有値の減衰状況から判断し，5 因子が妥当と考えられた。因子数を 5 に固定して再度因子分析を行った結果，因子負荷量が 1 つの因子について ± 0.35 以上で，かつ 3 因子以上にまたがって ± 0.35 以上の負荷量を示さない 29 項目を選出した。除外された項目は「静かな - 騒々しい」であった。プロマックス回転を行った結果の因子パターン行列と，因子間の相関を表 7-3 と表 7-4 に示した。

第 I 因子は「うきうきした - 憂うつな」「嬉しい - 悲しい」「不安な - 安心した」をはじめ，感情に関わる項目が大きな負荷量を示しているため「肯定的情緒性」と命名した。第 II 因子は「ゆっくりした - 勢いのある」「眠くなるような - 目が覚めるような」「変化のある - 安定した」といった項目が大きな負荷量を示しており，動きや迫力に関係する因子と考えられたため「力動性」と命名した。第 III 因子は「ばらばらな - まとまった」「印象に残らない - インパクトのある」「曖昧な - 明瞭な」といった，シンプルさとインパクトに関連する項目の負荷量が大きいため，「簡明性」と命名した。第 IV 因子は「日常的な - 非日常的な」「情景が思い浮かばない - 情景が思い浮かぶ」「親しみのない - 親しみのある」の親近性に関連する 3 項目が大きな負荷量を示しているため，「異質性」と命名した。第 V 因子は「平面的な - 奥行きのある」「窮屈な - 広がりのある」「臨場感がある - 臨場感がない」の 3 項目が大きな負荷量を示しており，「空間性」と命名した。

「異質性」では因子負荷量が正の値であった形容詞対の評定値を逆転させ，「異質性」以外では因子負荷量が負の値であった形容詞対の評定値を逆転させ，各因子を構成している項目の評定値を合計し，項目数と参加者の人数で除して下位尺度得点を算出した。16 刺激全体と各刺激ごとに，下位尺度得点と各項目

の平均値と標準偏差を示す（表 7-5～7-21）。下位尺度得点と各項目の評定値については、1 サンプルによる t 検定により、平均値と 6 件法の midpoint である 3.5 に有意な差があるか検討した。 t 検定により、刺激の種類による差（音声刺激 8 個，非音声刺激 8 個）と性差（男性 22 名，女性 34 名）が確認された項目もあったため，それらも同じ表中に記載した。

微小音要素のチェックリストについては表 7-22 に，音響分析については表 7-23 と表 7-24 に，それぞれ結果を示した。なお，ほぼすべての聴覚刺激にフェイドインやフェイドアウトを施してあるため，音響分析における「音の大きさ」の中でも特に最小値は意味のある指標と言えないが，資料として示しておく。

表 7-3. 因子パターン行列 (主因子法・プロマックス回転)

形容詞対	因子負荷量					共通性
	I 肯定的 情緒性	II 力動性	III 簡明性	IV 異質性	V 空間性	
うきうきした — 憂うつな	-1.07	-0.22	0.02	0.19	0.07	0.72
暗い — 明るい	0.96	0.31	-0.12	0.11	-0.05	0.75
嬉しい — 悲しい	-0.87	-0.08	-0.07	0.16	0.10	0.57
軽やかな — 重い	-0.85	-0.16	0.16	-0.10	0.05	0.63
不安な — 安心した	0.75	-0.13	0.06	0.04	-0.07	0.74
生気のない — いきいきとした	0.59	0.24	0.15	0.21	0.18	0.58
快い — 不快な	-0.58	0.32	-0.10	-0.01	-0.07	0.71
腹が立った — 気が和んだ	0.50	-0.41	0.07	-0.06	0.11	0.66
冷たい — 暖かい	0.50	-0.23	0.10	0.08	0.10	0.57
気が抜けた — 緊張した	-0.46	0.29	0.26	-0.15	0.06	0.58
ざらざらした — なめらかな	0.43	-0.24	0.32	-0.16	0.03	0.43
ゆっくりした — 勢いのある	0.25	0.85	-0.05	0.06	-0.01	0.53
眠くなるような — 目が覚めるような	0.11	0.72	0.30	-0.05	0.11	0.61
落ち着いた — 苛々した	-0.32	0.58	-0.14	0.18	-0.01	0.59
変化のある — 安定した	-0.01	-0.57	0.19	0.21	-0.22	0.51
自然な — 人工的な	-0.02	0.46	-0.15	-0.21	-0.13	0.36
柔らかい — 硬い	-0.37	0.39	0.04	0.00	-0.23	0.52
長さを感じる — 瞬間的な	0.03	0.38	0.35	0.09	-0.22	0.29
ばらばらな — まとまった	-0.03	-0.21	0.76	-0.10	-0.18	0.53
印象に残らない — インパクトのある	-0.17	0.23	0.56	-0.16	0.28	0.59
曖昧な — 明瞭な	0.11	0.22	0.50	0.39	-0.05	0.58
濁った — 澄んだ	0.34	0.01	0.40	0.07	-0.08	0.36
単純な — 複雑な	-0.09	0.16	-0.39	-0.14	0.37	0.36
日常的な — 非日常的な	-0.07	0.09	0.24	-0.75	0.06	0.64
情景が思い浮 — 情景が思い	-0.15	0.10	0.10	0.73	0.19	0.50
かばない — 浮かぶ						
親しみのない — 親しみのある	0.15	-0.30	0.09	0.53	0.10	0.66
平面的な — 奥行きのある	-0.02	-0.06	-0.17	0.08	0.71	0.47
窮屈な — 広がりのある	0.37	-0.19	-0.21	-0.05	0.51	0.51
臨場感がある — 臨場感がない	0.10	-0.29	-0.07	-0.32	-0.48	0.40
固有値	8.71	5.91	2.72	4.53	1.72	

表 7-4. 因子相関行列

因子	I 肯定的情緒性	II 力動性	III 簡明性	IV 異質性	V 空間性
I 肯定的情緒性		-0.57	0.23	0.56	0.16
II 力動性			0.06	-0.21	0.07
III 簡明性				0.26	0.22
IV 異質性					-0.05
V 空間性					

表 7-5. 16 刺激全体の低位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および刺激の種類による差と性差

			平均値	± 標準偏差	刺激の種類 による差	性差
I	肯定的情緒性		3.26▽	± 0.91		
	憂うつな	— うきうきした	2.89▽	± 1.11		
	暗い	— 明るい	3.11▽	± 1.26	非音声<音声	
	悲しい	— 嬉しい	3.08▽	± 0.97		
	重い	— 軽やかな	3.03▽	± 1.29		
	不安な	— 安心した	3.08▽	± 1.30		女<男
	生気のない	— いきいきとした	3.86▲	± 1.28	非音声<音声	
	不快な	— 快い	3.28▽	± 1.15	音声<非音声	
	腹が立った	— 気が和んだ	3.61▲	± 1.06	音声<非音声	
	冷たい	— 暖かい	3.28▽	± 1.31		
	緊張した	— 気が抜けた	3.14▽	± 1.28		
	ざらざらした	— なめらかな	3.50	± 1.08		
II	力動性		3.32▽	± 0.84	非音声<音声	女<男
	ゆっくりした	— 勢いのある	3.27▽	± 1.24	非音声<音声	女<男
	眠くなるような	— 目が覚めるような	3.52	± 1.23	非音声<音声	女<男
	落ち着いた	— 苛々した	3.37▽	± 1.19	非音声<音声	女<男
	安定した	— 変化のある	3.20▽	± 1.31	非音声<音声	
	自然な	— 人工的な	3.22▽	± 1.38		
	柔らかい	— 硬い	3.54	± 1.27		
	長さを感じる	— 瞬間的な	3.13▽	± 1.33	非音声<音声	
III	簡明性		3.56▲	± 0.86	非音声<音声	女<男
	ばらばらな	— まとまった	3.63▲	± 1.38	非音声<音声	
	印象に残らない	— インパクトのある	3.61▲	± 1.28	非音声<音声	女<男
	曖昧な	— 明瞭な	3.73▲	± 1.41	非音声<音声	女<男
	濁った	— 澄んだ	3.31▽	± 1.33		
	複雑な	— 単純な	3.54	± 1.26	非音声<音声	
IV	異質性		2.87▽	± 1.12	音声<非音声	
	日常的な	— 非日常的な	2.86▽	± 1.44	音声<非音声	女<男
	情景が思い	— 情景が思い	2.37▽	± 1.41	音声<非音声	
	浮かぶ	— 浮かばない	2.37▽	± 1.41	音声<非音声	
	親しみのある	— 親しみのない	3.39▽	± 1.33	音声<非音声	
V	空間性		3.91▲	± 0.91	音声<非音声	
	平面的な	— 奥行きのある	3.98▲	± 1.25	音声<非音声	
	窮屈な	— 広がりのある	3.55	± 1.32	音声<非音声	
	臨場感がない	— 臨場感がある	4.21▲	± 1.19	非音声<音声	女<男

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-6. 第 1 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

			平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性		3.55	±	0.56	
	憂うつな	— うきうきした	3.54	±	0.97	
	暗い	— 明るい	4.14▲	±	1.05	
	悲しい	— 嬉しい	3.57	±	0.66	
	重い	— 軽やかな	3.89▲	±	1.12	
	不安な	— 安心した	3.30	±	0.93	女<男
	生気のない	— いきいきとした	3.98▲	±	1.24	
	不快な	— 快い	3.38	±	0.71	
	腹が立った	— 気が和んだ	3.61	±	0.85	
	冷たい	— 暖かい	3.29	±	1.00	
	緊張した	— 気が抜けた	3.27▽	±	0.80	
	ざらざらした	— なめらかな	2.79▽	±	0.89	女<男
II	力動性		3.80▲	±	0.58	
	ゆっくりした	— 勢いのある	4.13▲	±	0.99	
	眠くなるような	— 目が覚めるような	3.70	±	0.97	
	落ち着いた	— 苛々した	3.86▲	±	0.84	
	安定した	— 変化のある	3.39	±	1.29	
	自然な	— 人工的な	4.48▲	±	1.35	女<男
	柔らかい	— 硬い	4.34▲	±	1.00	
	長さを感じる	— 瞬間的な	2.71▽	±	1.09	
III	簡明性		2.89▽	±	0.56	
	ばらばらな	— まとまった	2.25▽	±	1.32	
	印象に残らない	— インパクトのある	2.88▽	±	1.06	
	曖昧な	— 明瞭な	3.63	±	1.11	
	濁った	— 澄んだ	2.79▽	±	1.02	
	複雑な	— 単純な	2.93▽	±	1.26	
IV	異質性		2.05▽	±	0.68	
	日常的な	— 非日常的な	1.36▽	±	0.67	
	情景が思い浮かぶ	— 情景が思い浮かばない	1.52▽	±	0.97	
	親しみのある	— 親しみのない	3.27	±	1.36	
V	空間性		4.32▲	±	0.83	
	平面的な	— 奥行きのある	4.30▲	±	1.39	
	窮屈な	— 広がりのある	3.82	±	1.28	
	臨場感がない	— 臨場感がある	4.82▲	±	1.06	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-7. 第 2 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	± 標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	3.36	± 0.82	
	憂うつな — うきうきした	3.38	± 0.89	
	暗い — 明るい	3.05▽	± 1.17	
	悲しい — 嬉しい	3.84▲	± 0.97	
	重い — 軽やかな	2.77▽	± 1.04	
	不安な — 安心した	3.61	± 1.27	
	生氣のない — いきいきとした	3.82▲	± 1.01	
	不快な — 快い	3.45	± 0.91	
	腹が立った — 気が和んだ	3.68	± 1.05	
	冷たい — 暖かい	3.02▽	± 1.07	
	緊張した — 気が抜けた	3.00▽	± 1.29	
	ざらざらした — なめらかな	3.34	± 1.00	
II	力動性	3.57	± 0.67	
	ゆっくりした — 勢いのある	2.95▽	± 0.96	女<男
	眠くなるような — 目が覚めるような	3.96▲	± 0.99	
	落ち着いた — 苛々した	3.00▽	± 1.14	
	安定した — 変化のある	3.34	± 1.16	
	自然な — 人工的な	3.70	± 1.39	
	柔らかい — 硬い	4.04▲	± 1.08	
	長さを感じる — 瞬間的な	4.02▲	± 1.07	
III	簡明性	4.03▲	± 0.63	
	ばらばらな — まとまった	4.68▲	± 0.88	
	印象に残らない — インパクトのある	4.02▲	± 1.20	
	曖昧な — 明瞭な	4.32▲	± 1.13	
	濁った — 澄んだ	3.38	± 1.12	
	複雑な — 単純な	3.73	± 1.20	
IV	異質性	3.24▽	± 0.89	
	日常的な — 非日常的な	3.57	± 1.45	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	2.23▽	± 1.11	
	親しみのある — 親しみのない	3.91▲	± 1.15	
V	空間性	3.32	± 0.73	女<男
	平面的な — 奥行きのある	3.09▽	± 1.12	
	窮屈な — 広がりのある	2.84▽	± 0.88	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.02▲	± 1.20	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-8. 第 3 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	± 標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	2.59▽	± 0.56	
	憂うつな — うきうきした	2.34▽	± 0.72	
	暗い — 明るい	1.98▽	± 0.82	
	悲しい — 嬉しい	2.55▽	± 0.66	
	重い — 軽やかな	2.14▽	± 1.10	
	不安な — 安心した	2.29▽	± 0.97	
	生気のない — いきいきとした	2.79▽	± 1.02	
	不快な — 快い	2.93▽	± 0.85	
	腹が立った — 気が和んだ	3.34	± 0.61	
	冷たい — 暖かい	2.48▽	± 0.85	
	緊張した — 気が抜けた	2.48▽	± 1.26	
	ざらざらした — なめらかな	3.16▽	± 0.83	
II	力動性	3.31▽	± 0.69	女<男
	ゆっくりした — 勢いのある	2.48▽	± 1.10	
	眠くなるような — 目が覚めるような	3.16▽	± 1.17	
	落ち着いた — 苛々した	3.29	± 1.09	
	安定した — 変化のある	3.70	± 1.19	
	自然な — 人工的な	3.50	± 1.14	
	柔らかい — 硬い	4.21▲	± 1.06	
	長さを感じる — 瞬間的な	2.82▽	± 1.05	
III	簡明性	3.22▽	± 0.79	
	ばらばらな — まとまった	3.59	± 1.19	
	印象に残らない — インパクトのある	3.55	± 1.45	
	曖昧な — 明瞭な	2.70▽	± 1.26	
	濁った — 澄んだ	2.70▽	± 1.16	
	複雑な — 単純な	3.55	± 1.09	
IV	異質性	3.85▲	± 1.02	
	日常的な — 非日常的な	3.64	± 1.24	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	3.70	± 1.54	
	親しみのある — 親しみのない	4.20▲	± 1.18	
V	空間性	3.71▲	± 0.76	
	平面的な — 奥行きのある	3.98▲	± 1.09	
	窮屈な — 広がりのある	3.21	± 1.19	
	臨場感がない — 臨場感がある	3.93▲	± 1.17	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-9. 第 4 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	± 標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	3.44	± 0.76	
	憂うつな — うきうきした	2.88▽	± 0.76	
	暗い — 明るい	3.52	± 0.95	
	悲しい — 嬉しい	2.98▽	± 0.84	
	重い — 軽やかな	3.18▽	± 1.10	
	不安な — 安心した	3.46	± 1.04	
	生気のない — いきいきとした	4.52▲	± 0.95	
	不快な — 快い	3.38	± 1.05	
	腹が立った — 気が和んだ	3.36	± 1.17	
	冷たい — 暖かい	3.82	± 1.25	
	緊張した — 気が抜けた	3.00▽	± 1.04	
	ざらざらした — なめらかな	3.79▲	± 1.00	
II	力動性	3.58	± 0.66	
	ゆっくりした — 勢いのある	3.75	± 1.12	
	眠くなるような — 目が覚めるような	4.29▲	± 0.99	
	落ち着いた — 苛々した	3.91▲	± 1.24	
	安定した — 変化のある	2.96▽	± 0.97	
	自然な — 人工的な	2.75▽	± 1.10	
	柔らかい — 硬い	3.21	± 1.28	
	長さを感じる — 瞬間的な	4.18▲	± 1.03	
III	簡明性	4.40▲	± 0.55	
	ばらばらな — まとまった	4.54▲	± 0.87	
	印象に残らない — インパクトのある	4.13▲	± 0.99	
	曖昧な — 明瞭な	5.04▲	± 0.89	
	濁った — 澄んだ	4.05▲	± 1.03	
	複雑な — 単純な	4.25▲	± 0.96	男<女
IV	異質性	1.96▽	± 0.63	
	日常的な — 非日常的な	1.82▽	± 0.83	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	1.48▽	± 0.63	
	親しみのある — 親しみのない	2.59▽	± 1.04	
V	空間性	3.77▲	± 0.75	
	平面的な — 奥行きのある	3.45	± 0.95	
	窮屈な — 広がりのある	3.21	± 1.16	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.64▲	± 1.14	女<男

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-10. 第 5 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	2.69▽	±	0.58	
	憂うつな — うきうきした	1.84▽	±	0.80	
	暗い — 明るい	2.32▽	±	0.92	女<男
	悲しい — 嬉しい	2.34▽	±	0.82	
	重い — 軽やかな	2.23▽	±	0.83	
	不安な — 安心した	2.54▽	±	1.03	
	生氣のない — いきいきとした	2.73▽	±	1.12	
	不快な — 快い	2.84▽	±	0.99	
	腹が立った — 気が和んだ	3.30	±	0.74	
	冷たい — 暖かい	2.91▽	±	0.90	
	緊張した — 気が抜けた	3.59	±	1.06	
	ざらざらした — なめらかな	2.91▽	±	0.96	
II	力動性	3.18▽	±	0.47	女<男
	ゆっくりした — 勢いのある	3.00▽	±	0.97	女<男
	眠くなるような — 目が覚めるような	2.77▽	±	1.13	女<男
	落ち着いた — 苛々した	3.71	±	0.95	
	安定した — 変化のある	2.96▽	±	1.03	
	自然な — 人工的な	3.84▲	±	1.14	
	柔らかい — 硬い	3.77▲	±	0.81	
	長さを感じる — 瞬間的な	2.20▽	±	1.00	
III	簡明性	2.69▽	±	0.66	女<男
	ばらばらな — まとまった	2.71▽	±	1.20	
	印象に残らない — インパクトのある	3.00▽	±	1.01	
	曖昧な — 明瞭な	2.64▽	±	1.26	女<男
	濁った — 澄んだ	2.29▽	±	0.91	女<男
	複雑な — 単純な	2.80▽	±	1.10	
IV	異質性	3.05▽	±	1.00	
	日常的な — 非日常的な	2.63▽	±	1.15	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	2.80▽	±	1.49	
	親しみのある — 親しみのない	3.71	±	1.12	
V	空間性	3.78▲	±	0.81	
	平面的な — 奥行きのある	3.98▲	±	1.12	
	窮屈な — 広がりのある	3.34	±	1.25	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.02▲	±	1.09	女<男

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-11. 第 6 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差	
I 肯定的情緒性		2.54▽	±	0.56		
憂うつな	— うきうきした	2.18▽	±	0.88	男<女	
暗い	— 明るい	2.27▽	±	0.92		
悲しい	— 嬉しい	2.61▽	±	0.71		
重い	— 軽やかな	2.23▽	±	1.03		
不安な	— 安心した	1.96▽	±	0.81		
生気のない	— いきいきとした	3.77▲	±	0.87		
不快な	— 快い	2.26▽	±	0.69		
腹が立った	— 気が和んだ	3.00▽	±	0.61		
冷たい	— 暖かい	2.36▽	±	1.09		
緊張した	— 気が抜けた	2.09▽	±	0.84		
ざらざらした	— なめらかな	2.96▽	±	0.91		
II 力動性		4.11▲	±	0.60		
ゆっくりした	— 勢いのある	4.27▲	±	0.84		
眠くなるような	— 目が覚めるような	4.36▲	±	1.00		
落ち着いた	— 苛々した	4.14▲	±	0.86		
安定した	— 変化のある	4.16▲	±	1.25		
自然な	— 人工的な	3.73	±	1.15		
柔らかい	— 硬い	4.07▲	±	0.89		
長さを感じる	— 瞬間的な	4.04▲	±	1.06		
III 簡明性		3.60	±	0.66		
ばらばらな	— まとまった	3.75	±	1.19		
印象に残らない	— インパクトのある	4.54▲	±	1.19		
曖昧な	— 明瞭な	3.68	±	1.27		
濁った	— 澄んだ	3.09▽	±	1.07		
複雑な	— 単純な	2.96▽	±	0.97		
IV 異質性		3.67	±	0.78		
日常的な	— 非日常的な	4.32▲	±	1.34	女<男	
情景が思い浮かぶ	— 情景が思い浮かばない	2.38▽	±	1.05		
親しみのある	— 親しみのない	4.30▲	±	1.09		
V 空間性		3.90▲	±	0.73		
平面的な	— 奥行きのある	3.98▲	±	1.10		
窮屈な	— 広がりのある	3.25	±	1.10		
臨場感がない	— 臨場感がある	4.46▲	±	1.03		

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-12. 第 7 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	± 標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	2.55▽	± 0.61	
	憂うつな — うきうきした	2.29▽	± 0.80	
	暗い — 明るい	2.11▽	± 0.80	
	悲しい — 嬉しい	2.71▽	± 0.65	
	重い — 軽やかな	2.39▽	± 1.06	
	不安な — 安心した	2.18▽	± 1.08	
	生気のない — いきいきとした	2.77▽	± 0.99	
	不快な — 快い	2.89▽	± 0.98	女<男
	腹が立った — 気が和んだ	3.25▽	± 0.72	
	冷たい — 暖かい	1.80▽	± 0.80	
	緊張した — 気が抜けた	2.07▽	± 1.02	女<男
	ざらざらした — なめらかな	3.54	± 0.95	
II	力動性	3.72▲	± 0.61	
	ゆっくりした — 勢いのある	2.82▽	± 0.99	
	眠くなるような — 目が覚めるような	3.95▲	± 1.18	
	落ち着いた — 苛々した	3.29	± 1.00	
	安定した — 変化のある	3.36	± 1.21	
	自然な — 人工的な	4.14▲	± 1.15	
	柔らかい — 硬い	4.98▲	± 1.00	
	長さを感じる — 瞬間的な	3.52	± 1.22	
III	簡明性	4.09▲	± 0.68	
	ばらばらな — まとまった	4.16▲	± 1.17	
	印象に残らない — インパクトのある	4.05▲	± 1.20	
	曖昧な — 明瞭な	4.04▲	± 1.32	
	濁った — 澄んだ	4.21▲	± 1.17	男<女
	複雑な — 単純な	3.96▲	± 1.14	
IV	異質性	3.33	± 0.98	
	日常的な — 非日常的な	3.68	± 1.35	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	2.14▽	± 1.02	
	親しみのある — 親しみのない	4.16▲	± 1.26	
V	空間性	3.83▲	± 0.88	
	平面的な — 奥行きのある	4.05▲	± 1.31	
	窮屈な — 広がりのある	3.07▽	± 1.20	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.38▲	± 1.12	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-13. 第 8 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	3.33	±	0.72	
	憂うつな — うきうきした	2.68▽	±	0.94	
	暗い — 明るい	3.34	±	1.13	
	悲しい — 嬉しい	2.96▽	±	0.85	
	重い — 軽やかな	2.79▽	±	0.91	
	不安な — 安心した	3.34	±	1.16	
	生氣のない — いきいきとした	4.30▲	±	1.06	
	不快な — 快い	3.32	±	0.99	
	腹が立った — 気が和んだ	3.64	±	0.86	
	冷たい — 暖かい	3.88▲	±	1.10	
	緊張した — 気が抜けた	2.98▽	±	0.98	
	ざらざらした — なめらかな	3.45	±	0.85	
II	力動性	3.14▽	±	0.55	
	ゆっくりした — 勢いのある	3.11▽	±	1.07	女<男
	眠くなるような — 目が覚めるような	3.41	±	0.85	
	落ち着いた — 苛々した	3.32	±	0.97	
	安定した — 変化のある	3.25	±	1.01	女<男
	自然な — 人工的な	2.57▽	±	0.91	
	柔らかい — 硬い	3.02▽	±	1.07	
	長さを感じる — 瞬間的な	3.30	±	1.09	
III	簡明性	3.36	±	0.67	
	ばらばらな — まとまった	3.23	±	1.14	
	印象に残らない — インパクトのある	3.75	±	1.01	
	曖昧な — 明瞭な	3.43	±	1.13	女<男
	濁った — 澄んだ	3.04▽	±	1.14	
	複雑な — 単純な	3.38	±	1.09	男<女
IV	異質性	2.33▽	±	0.86	
	日常的な — 非日常的な	2.25▽	±	1.00	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	1.91▽	±	1.01	
	親しみのある — 親しみのない	2.82▽	±	1.06	
V	空間性	4.24▲	±	0.77	
	平面的な — 奥行きのある	4.43▲	±	1.02	
	窮屈な — 広がりのある	4.00▲	±	1.13	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.29▲	±	0.95	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-14. 第 9 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	3.52	±	0.62	
	憂うつな — うきうきした	3.30	±	1.04	
	暗い — 明るい	4.04▲	±	0.97	
	悲しい — 嬉しい	3.13▽	±	0.76	
	重い — 軽やかな	3.93▲	±	0.91	
	不安な — 安心した	3.23▽	±	0.71	
	生氣のない — いきいきとした	4.68▲	±	0.94	
	不快な — 快い	2.82▽	±	0.92	
	腹が立った — 気が和んだ	3.09▽	±	1.10	
	冷たい — 暖かい	3.16▽	±	1.07	
	緊張した — 気が抜けた	3.86▲	±	1.00	
	ざらざらした — なめらかな	3.48	±	0.93	
II	力動性	3.48	±	0.53	女<男
	ゆっくりした — 勢いのある	3.84▲	±	0.95	
	眠くなるような — 目が覚めるような	3.68	±	0.94	女<男
	落ち着いた — 苛々した	3.95▲	±	0.96	
	安定した — 変化のある	3.66	±	1.15	
	自然な — 人工的な	3.20	±	1.34	
	柔らかい — 硬い	3.25	±	0.96	
	長さを感じる — 瞬間的な	2.82▽	±	1.15	
III	簡明性	3.17▽	±	0.64	
	ばらばらな — まとまった	2.52▽	±	1.10	
	印象に残らない — インパクトのある	3.23	±	1.08	
	曖昧な — 明瞭な	3.86▲	±	1.20	
	濁った — 澄んだ	2.71▽	±	1.11	
	複雑な — 単純な	3.52	±	1.35	
IV	異質性	2.21▽	±	0.72	
	日常的な — 非日常的な	2.02▽	±	0.94	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	1.61▽	±	0.78	
	親しみのある — 親しみのない	3.02▽	±	1.14	
V	空間性	4.03▲	±	0.84	
	平面的な — 奥行きのある	4.02▲	±	1.12	
	窮屈な — 広がりのある	3.66	±	1.13	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.41▲	±	1.19	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-15. 第 10 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	2.74▽	±	0.79	
	憂うつな — うきうきした	2.52▽	±	1.06	
	暗い — 明るい	2.38▽	±	1.12	
	悲しい — 嬉しい	2.59▽	±	0.80	
	重い — 軽やかな	2.46▽	±	1.13	
	不安な — 安心した	2.21▽	±	1.09	
	生気のない — いきいきとした	3.52	±	1.21	
	不快な — 快い	2.59▽	±	1.12	女<男
	腹が立った — 気が和んだ	3.27▽	±	0.80	女<男
	冷たい — 暖かい	2.41▽	±	1.07	
	緊張した — 気が抜けた	2.64▽	±	1.10	
	ざらざらした — なめらかな	3.52	±	1.32	
II	力動性	3.48	±	0.78	男<女
	ゆっくりした — 勢いのある	3.63	±	1.23	男<女
	眠くなるような — 目が覚めるような	3.86▲	±	1.31	男<女
	落ち着いた — 苛々した	3.82▲	±	0.97	男<女
	安定した — 変化のある	4.34▲	±	1.30	
	自然な — 人工的な	3.00▽	±	1.35	
	柔らかい — 硬い	3.38	±	1.02	
	長さを感じる — 瞬間的な	2.36▽	±	1.15	
III	簡明性	2.80▽	±	0.70	
	ばらばらな — まとまった	2.45▽	±	1.16	
	印象に残らない — インパクトのある	4.02▲	±	1.23	
	曖昧な — 明瞭な	2.64▽	±	1.10	
	濁った — 澄んだ	2.55▽	±	1.40	
	複雑な — 単純な	2.36▽	±	1.17	
IV	異質性	4.15▲	±	1.11	
	日常的な — 非日常的な	4.32▲	±	1.27	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	3.63	±	1.53	
	親しみのある — 親しみのない	4.52▲	±	1.22	男<女
V	空間性	4.59▲	±	0.72	
	平面的な — 奥行きのある	4.88▲	±	0.94	
	窮屈な — 広がりのある	4.64▲	±	1.09	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.25▲	±	1.05	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-16. 第 11 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	2.54▽	±	0.56	
	憂うつな — うきうきした	2.02▽	±	0.84	
	暗い — 明るい	2.63▽	±	0.84	
	悲しい — 嬉しい	2.43▽	±	0.74	
	重い — 軽やかな	2.20▽	±	0.98	
	不安な — 安心した	2.23▽	±	0.89	
	生氣のない — いきいきとした	3.96▲	±	1.09	男<女
	不快な — 快い	2.23▽	±	0.93	
	腹が立った — 気が和んだ	2.54▽	±	0.81	
	冷たい — 暖かい	2.68▽	±	0.99	
	緊張した — 気が抜けた	2.09▽	±	1.07	
	ざらざらした — なめらかな	2.96▽	±	0.95	
II	力動性	4.35▲	±	0.51	
	ゆっくりした — 勢いのある	4.80▲	±	0.82	
	眠くなるような — 目が覚めるような	4.68▲	±	1.05	
	落ち着いた — 苛々した	4.66▲	±	0.82	
	安定した — 変化のある	3.61	±	1.14	
	自然な — 人工的な	3.64	±	1.17	
	柔らかい — 硬い	4.63▲	±	0.86	
	長さを感じる — 瞬間的な	4.45▲	±	1.09	
III	簡明性	4.19▲	±	0.74	
	ばらばらな — まとまった	4.43▲	±	1.13	
	印象に残らない — インパクトのある	4.30▲	±	1.19	
	曖昧な — 明瞭な	4.63▲	±	1.21	
	濁った — 澄んだ	3.73	±	1.21	男<女
	複雑な — 単純な	3.88▲	±	1.29	
IV	異質性	2.80▽	±	0.78	
	日常的な — 非日常的な	2.84▽	±	1.12	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	1.79▽	±	0.85	
	親しみのある — 親しみのない	3.79	±	1.23	
V	空間性	3.11▽	±	0.63	
	平面的な — 奥行きのある	2.91▽	±	1.03	
	窮屈な — 広がりのある	2.09▽	±	0.79	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.34▲	±	1.10	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-17. 第 12 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	± 標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	3.43	± 0.61	
	憂うつな — うきうきした	3.07▽	± 0.83	
	暗い — 明るい	3.23▽	± 0.93	
	悲しい — 嬉しい	3.16▽	± 0.63	
	重い — 軽やかな	3.50	± 1.06	
	不安な — 安心した	3.21▽	± 0.99	
	生気のない — いきいきとした	3.27	± 1.05	
	不快な — 快い	3.61	± 0.91	
	腹が立った — 気が和んだ	4.00▲	± 0.83	
	冷たい — 暖かい	3.34	± 0.96	
	緊張した — 気が抜けた	3.68	± 1.13	
	ざらざらした — なめらかな	3.66	± 1.08	
II	力動性	2.73▽	± 0.64	
	ゆっくりした — 勢いのある	2.70▽	± 0.99	
	眠くなるような — 目が覚めるような	2.34▽	± 1.07	
	落ち着いた — 苛々した	2.84▽	± 1.06	
	安定した — 変化のある	2.75▽	± 1.28	
	自然な — 人工的な	3.21	± 1.17	
	柔らかい — 硬い	2.95▽	± 1.05	
	長さを感じる — 瞬間的な	2.32▽	± 0.99	
III	簡明性	2.89▽	± 0.77	
	ばらばらな — まとまった	3.52	± 1.28	
	印象に残らない — インパクトのある	2.29▽	± 1.12	
	曖昧な — 明瞭な	2.09▽	± 1.00	
	濁った — 澄んだ	2.93▽	± 1.11	
	複雑な — 単純な	3.63	± 1.27	
IV	異質性	3.67	± 0.96	
	日常的な — 非日常的な	2.95▽	± 1.13	女<男
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	4.34▲	± 1.49	
	親しみのある — 親しみのない	3.71	± 1.17	
V	空間性	3.23▽	± 0.70	
	平面的な — 奥行きのある	3.27	± 1.17	
	窮屈な — 広がりのある	3.32	± 1.16	
	臨場感がない — 臨場感がある	3.09▽	± 1.12	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-18. 第 13 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	3.29	±	0.78	
	憂うつな — うきうきした	2.79▽	±	1.11	
	暗い — 明るい	3.00▽	±	1.16	
	悲しい — 嬉しい	2.84▽	±	0.93	
	重い — 軽やかな	2.98▽	±	1.26	
	不安な — 安心した	2.98▽	±	1.15	
	生氣のない — いきいきとした	3.38	±	1.15	
	不快な — 快い	3.55	±	1.04	
	腹が立った — 気が和んだ	4.04▲	±	0.74	
	冷たい — 暖かい	3.57	±	1.08	
	緊張した — 気が抜けた	3.46	±	1.03	
	ざらざらした — なめらかな	3.63	±	0.89	
II	力動性	3.19▽	±	0.61	
	ゆっくりした — 勢いのある	2.79▽	±	1.09	
	眠くなるような — 目が覚めるような	3.27	±	0.92	
	落ち着いた — 苛々した	3.11▽	±	1.02	
	安定した — 変化のある	3.41	±	1.11	
	自然な — 人工的な	3.55	±	1.23	
	柔らかい — 硬い	3.23	±	1.04	
	長さを感じる — 瞬間的な	2.98▽	±	1.12	女<男
III	簡明性	3.41	±	0.49	
	ばらばらな — まとまった	3.79▲	±	1.02	
	印象に残らない — インパクトのある	3.77▲	±	0.79	
	曖昧な — 明瞭な	3.41	±	1.02	
	濁った — 澄んだ	2.82▽	±	0.97	
	複雑な — 単純な	3.27	±	1.00	
IV	異質性	2.92▽	±	0.71	
	日常的な — 非日常的な	3.39	±	1.26	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	2.11▽	±	0.85	
	親しみのある — 親しみのない	3.25	±	0.96	
V	空間性	4.21▲	±	0.84	
	平面的な — 奥行きのある	4.46▲	±	0.99	
	窮屈な — 広がりのある	3.82	±	1.21	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.34▲	±	1.15	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-19. 第 14 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	3.75▲	±	0.75	
	憂うつな — うきうきした	3.54	±	0.97	
	暗い — 明るい	3.30	±	0.99	
	悲しい — 嬉しい	3.79▲	±	0.91	
	重い — 軽やかな	2.91▽	±	1.20	
	不安な — 安心した	3.57	±	1.26	
	生気のない — いきいきとした	4.75▲	±	1.16	
	不快な — 快い	3.66	±	1.05	
	腹が立った — 気が和んだ	4.02▲	±	0.92	
	冷たい — 暖かい	4.61▲	±	0.97	
	緊張した — 気が抜けた	2.89▽	±	1.15	
	ざらざらした — なめらかな	4.27▲	±	0.98	
II	力動性	2.56▽	±	0.80	女<男
	ゆっくりした — 勢いのある	3.11▽	±	1.33	女<男
	眠くなるような — 目が覚めるような	3.00▽	±	1.44	女<男
	落ち着いた — 苛々した	2.63▽	±	1.04	女<男
	安定した — 変化のある	2.16▽	±	1.16	
	自然な — 人工的な	2.36▽	±	1.24	
	柔らかい — 硬い	2.61▽	±	1.07	
	長さを感じる — 瞬間的な	2.07▽	±	1.02	
III	簡明性	4.29▲	±	0.69	女<男
	ばらばらな — まとまった	5.07▲	±	0.93	
	印象に残らない — インパクトのある	4.36▲	±	1.21	女<男
	曖昧な — 明瞭な	4.48▲	±	1.18	
	濁った — 澄んだ	3.20	±	1.29	
	複雑な — 単純な	4.34▲	±	1.20	
IV	異質性	3.13▽	±	1.01	
	日常的な — 非日常的な	3.34	±	1.34	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	3.30	±	1.41	
	親しみのある — 親しみのない	2.75▽	±	1.08	
V	空間性	3.70	±	0.86	
	平面的な — 奥行きのある	3.77	±	1.26	
	窮屈な — 広がりのある	3.39	±	1.23	
	臨場感がない — 臨場感がある	3.95▲	±	1.24	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-20. 第 15 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	3.99▲	±	0.60	
	憂うつな — うきうきした	3.55	±	0.91	
	暗い — 明るい	3.84▲	±	0.99	
	悲しい — 嬉しい	3.46	±	0.89	
	重い — 軽やかな	4.09▽	±	1.03	
	不安な — 安心した	3.98▲	±	0.92	
	生気のない — いきいきとした	4.30▲	±	0.87	
	不快な — 快い	3.96▲	±	0.76	
	腹が立った — 気が和んだ	4.32▲	±	0.92	
	冷たい — 暖かい	4.14▲	±	0.92	
	緊張した — 気が抜けた	4.36▲	±	0.75	
	ざらざらした — なめらかな	3.89▲	±	0.89	女<男
II	力動性	3.02▽	±	0.50	
	ゆっくりした — 勢いのある	2.80▽	±	0.82	
	眠くなるような — 目が覚めるような	3.18▽	±	0.72	
	落ち着いた — 苛々した	2.68▽	±	0.81	
	安定した — 変化のある	2.57▽	±	0.97	
	自然な — 人工的な	2.63▽	±	1.05	
	柔らかい — 硬い	3.18▽	±	1.10	
	長さを感じる — 瞬間的な	4.13▲	±	1.15	
III	簡明性	3.81▲	±	0.46	
	ばらばらな — まとまった	3.39	±	0.89	
	印象に残らない — インパクトのある	2.59▽	±	0.97	
	曖昧な — 明瞭な	4.48▲	±	0.97	
	濁った — 澄んだ	4.16▲	±	0.87	
	複雑な — 単純な	4.41▲	±	0.97	
IV	異質性	1.90▽	±	0.60	
	日常的な — 非日常的な	1.66▽	±	0.72	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	1.63▽	±	0.65	
	親しみのある — 親しみのない	2.43▽	±	0.78	
V	空間性	3.85▲	±	0.75	
	平面的な — 奥行きのある	3.77	±	1.04	
	窮屈な — 広がりのある	3.84▲	±	1.01	
	臨場感がない — 臨場感がある	3.93▲	±	1.20	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-21. 第 16 刺激の下位尺度得点と各項目の平均値と標準偏差, および性差

		平均値	±	標準偏差	性差
I	肯定的情緒性	4.90▲	±	0.47	
	憂うつな — うきうきした	4.34▲	±	0.75	
	暗い — 明るい	4.71▲	±	1.09	
	悲しい — 嬉しい	4.29▲	±	0.95	
	重い — 軽やかな	4.80▲	±	0.77	
	不安な — 安心した	5.23▲	±	0.76	
	生気のない — いきいきとした	5.29▲	±	0.93	
	不快な — 快い	5.29▲	±	0.71	
	腹が立った — 気が和んだ	5.38▲	±	0.70	
	冷たい — 暖かい	5.11▲	±	0.71	
	緊張した — 気が抜けた	4.75▲	±	0.86	
	ざらざらした — なめらかな	4.73▲	±	0.80	
II	力動性	1.96▽	±	0.53	
	ゆっくりした — 勢いのある	2.18▽	±	1.13	
	眠くなるような — 目が覚めるような	2.82▽	±	1.19	
	落ち着いた — 苛々した	1.77▽	±	0.81	
	安定した — 変化のある	1.64▽	±	0.80	
	自然な — 人工的な	1.29▽	±	0.49	
	柔らかい — 硬い	1.89▽	±	0.76	
	長さを感じる — 瞬間的な	2.16▽	±	0.93	
III	簡明性	4.22▲	±	0.66	
	ばらばらな — まとまった	4.09▲	±	1.18	
	印象に残らない — インパクトのある	3.41	±	1.02	
	曖昧な — 明瞭な	4.64▲	±	1.17	
	濁った — 澄んだ	5.29▲	±	0.82	
	複雑な — 単純な	3.73	±	1.11	
IV	異質性	1.77▽	±	0.57	
	日常的な — 非日常的な	2.04▽	±	0.93	
	情景が思い浮かぶ — 情景が思い浮かばない	1.45▽	±	0.63	
	親しみのある — 親しみのない	1.84▽	±	0.76	
V	空間性	5.09▲	±	0.71	
	平面的な — 奥行きのある	5.32▲	±	0.77	
	窮屈な — 広がりのある	5.38▲	±	0.80	
	臨場感がない — 臨場感がある	4.56▲	±	1.30	

▲:5%あるいは1%水準で3.5より高い, ▽:5%あるいは1%水準で3.5より低い

表 7-22. 微小音要素が聞き取られる割合と物語に取り込まれる割合

刺激	微小音要素	聞き取った参加者の割合(%)	物語に取り込んだ参加者の割合(%)*
1	人の笑い声	53.6	3.3
2	—	—	—
3	電気のスイッチ音	26.8	5.0
	冷蔵庫の電気音	32.1	0.0
4	テレビの音	21.4	1.7
	水の音	41.1	1.7
5	電車が建物などの傍を通過する音	75.0	1.7
	踏み切りの音	37.5	8.3
6	ドンドンと鳴っている音	51.8	3.3
	—	—	—
7	枯葉を踏むような音	5.4	1.7
8	—	—	—
9	周囲の客の会話内容	26.8	1.7
10	足音の不規則さ	42.9	5.0
	足音が突然に止まる	14.3	1.7
11	—	—	—
12	トントんと叩くような音	25.0	3.3
	音と音の間(動きが止まる)	67.9	5.0
13	車の音	50.0	0.0
14	心拍の不規則さ	60.7	1.7
15	—	—	—
16	カラスの鳴き声	30.4	5.0
	カラス以外の鳥の鳴き声	58.9	8.3

*: 研究 1, 2 から抜粋

表 7-23. 各刺激の音響学的特徴

刺激	音の長さ (seconds)	音の大きさ(dB)				
		平均値	標準偏差	最小値	最大値	
1	29.44	64.40	4.57	18.92	79.62	
2	10.73	70.85	9.95	47.01	80.47	
3	29.35	55.13	5.82	31.10	77.51	
4	14.95	75.09	11.03	49.55	88.82	
5	29.70	69.29	5.34	21.75	77.61	
6	14.77	74.88	7.08	39.04	88.09	
7	30.00	57.79	6.55	13.86	79.59	
8	15.98	69.76	9.47	12.67	84.73	
9	33.92	69.47	5.52	35.06	78.89	
10	29.84	79.23	4.05	33.58	85.77	
11	12.45	73.14	12.84	46.14	82.09	
12	30.00	43.32	5.87	4.50	57.90	
13	24.58	77.16	8.42	14.50	83.61	
14	29.14	73.41	8.71	33.76	86.24	
15	13.98	71.03	9.02	30.86	82.31	
16	29.78	65.78	3.93	30.42	73.55	
全体	平均値	23.66	68.11	7.39	28.92	80.43
	標準偏差	8.15	9.25	2.63	13.40	7.31
音声 刺激	平均値	17.67	72.67	9.17	34.35	83.63
	標準偏差	7.74	2.82	2.27	14.29	3.48
非音声 刺激	平均値	29.66	63.54	5.61	23.49	77.22
	標準偏差	0.31	11.31	1.56	10.63	8.89

※ 網掛け部分は音声刺激に関するデータを示す

※ 参加者にとっての刺激価に配慮し、本論のすべての刺激は最初と最後にフェイドインとフェイドアウトの加工を施しているため、「音の大きさ」についてはその点をふまえて見る必要があり、特に「最小値」への影響は大きいと考えられる

表 7-24. 各刺激の音響学的特徴

刺激	音の高さ(Hz)				
	平均値	標準偏差	最小値	最大値	
1	152.82	108.27	74.57	485.52	
2	147.37	83.10	80.84	563.63	
3	99.34	4.37	75.96	146.23	
4	258.43	60.08	92.64	450.68	
5	211.16	76.43	77.72	307.61	
6	173.67	78.11	87.06	513.49	
7	334.38	140.90	85.16	600.37	
8	264.49	173.37	72.22	633.23	
9	259.24	86.65	84.16	504.41	
10	410.25	203.47	74.98	600.52	
11	145.89	28.34	81.88	229.10	
12	320.92	156.15	148.78	464.26	
13	401.69	111.91	233.20	583.07	
14	112.86	32.01	74.95	194.40	
15	241.31	59.81	115.85	340.24	
16	444.04	101.39	223.57	538.92	
全体	平均値	248.62	94.02	105.22	447.23
	標準偏差	109.11	54.26	51.86	155.87
音声刺激	平均値	236.51	85.17	105.98	477.23
	標準偏差	83.83	43.18	52.98	134.21
非音声刺激	平均値	260.72	102.87	104.46	417.23
	標準偏差	134.71	65.31	54.36	178.86

※ 網掛け部分は音声刺激に関するデータを示す

7-8 考察

(1) 刺激の全体的な特徴と、刺激の種類による差について

「肯定的情緒性」の下位尺度得点はやや低く、悲しみや不安・緊張、不快感といった否定的な情緒を含む刺激が多かった。従来の投映法では、被検者の不安や欲求不満が高まった状態での精神力動や行動を把握する目的から、否定的な情緒性を持つ刺激が多く採用されてきた。本研究の聴覚刺激の作成時にもそうした想定をしていたため、本結果は予想通りの結果であった。ただ下位項目を見ると、次の2つの点で逆の方向を示していた。1つは怒りの情緒性が低かったことである。刺激を見直すと怒りを含む刺激は音声刺激の中の2, 3個のみで、割合として少なかったことが影響しているのだろう。もう1つは、いきいきとした印象が強かったことである。これは音声刺激の会話が全体的にいきいきとした印象を与えることを反映していると考えられる。

「力動性」はやや低く、特に非音声刺激において低まっていた。非音声刺激は持続時間が長く、環境音や物音を合成したもので、静かな音が多かったことが影響していると考えられる。

「簡明性」はやや高く、特に音声刺激において高まっていた。会話の音声に比して、背景音や物音はそれが何の音であるのか漠然としていることが影響しているのだろう。下位項目では「濁った - 澄んだ」が逆の傾向を示していた。この項目は美的な感覚や情緒性とも関連すると考えられ、そのために他の下位項目とずれてしまったのかもしれない。

「異質性」は低く、これは音声刺激において顕著であった。会話など聴覚刺激の内容面では普段の生活で聞いたことがあるものが多いため、この結果は予想通りのものであった。このことは投映法の刺激として求められる新奇性と相反するようにも思われるが、音だけが聴こえるという聴覚刺激の形式面がこれを補う可能性があるかと筆者は考えている。今後の検討課題である。

「空間性」は高く、非音声刺激において顕著であった。非音声刺激の中には背景音と他の物音の組合せや移動する足音が多く含まれており、それが遠近のある聴空間を形成しているのだろう。

微小音要素に関しては、第7刺激の「枯葉を踏むような音」以外は予想以上

に認知されており、第1刺激の「車のクラクション」や第7刺激の「ドアが軋む音」「2人の足音のずれ」に至ってはほぼすべての参加者が認知していた。この結果には、APTを実施して物語を作る際には参加者は聴覚刺激を「再生」しなければならないのに対して、本研究ではチェックリストによる「再認」であったことも影響していると考えられる。物語作成においては、「認知はしているが改めて言及するまでもない」と判断されている可能性もあるが、特に「車のクラクション」や「ドアが軋む音」に関しては、明確ではあるが緊張や不安を喚起しやすい点で刺激価が高いため、物語への取り込みが避けられた可能性もあるだろう。また、全体を見ると、音声刺激よりも非音声刺激の方が物語作成における刺激の取捨選択の幅が広いことが読み取れ、表7-1に挙げた想定とも一致している。

音響分析の結果から刺激の種類による差を見ていくと、統計的な分析を行うには数が少なかったが、以下のような傾向が読み取れよう。非音声刺激に比べて音声刺激は、刺激の長さが短く、音量や音量のばらつきが大きく、音高や音高のばらつきが小さい。

(2) 各刺激の特徴について

第1刺激では、「肯定的情緒性」は中程度で、「力動性」はやや高く、「簡明性」と「異質性」は低く、「空間性」は高かった。音響分析では、音の長さも大きさも高さも中程度であった(平均値 $\pm 1SD$ 以内)。全体的に中性的で漠然とした動きを感じる刺激のようであり、やや漠然性が高いかもしれないが、最初の刺激として想定した範囲内の結果であった。

第2刺激では、「肯定的情緒性」と「力動性」と「空間性」は中程度で、「簡明性」は高く、「異質性」はやや低かった。音響分析では、音の長さが全刺激の中でもっとも短いこと以外は、音の大きさも高さも中程度であった(平均値 $\pm 1SD$ 以内)。本刺激は芝居がかった短い会話でインパクトはあるものの、情景は容易に思い浮かぶようである。

第3刺激では、「肯定的情緒性」は低く、「力動性」と「簡明性」はやや低く、「異質性」と「空間性」はやや高かった。音響分析では、音の長さは中程度で(平均値 $\pm 1SD$ 以内)、音の大きさは小さく(平均値 $-1SD$ 以下)、全体的な音

高や最高音は全刺激の中でもっとも低かった。室内を移動しながら無言で漠然としたことをする本刺激の状況は、否定的な感情と結びつくようである。

第4刺激では、「肯定的情緒性」と「力動性」は中程度で、「簡明性」は全刺激中でもっとも高く、「異質性」は低く、「空間性」はやや高かった。音響分析では、音の長さは短く（平均値 $-1SD$ 以下）、最大音量が全刺激中でもっとも大きく、音の高さに関しては中程度であった（平均値 $\pm 1SD$ 以内）。物理的特徴にも表れているように、娘を叱っている女性のインパクトはあるものの、分かりやすく日常的な場面であることで和らいでいるのかもしれない。

第5刺激では、「肯定的情緒性」は低く、「力動性」と「異質性」はやや低く、「簡明性」は全刺激中でもっとも低く、「空間性」はやや高かった。音響分析では、音の長さも大きさも高さも中程度であった（平均値 $\pm 1SD$ 以内）。非音声刺激の中でもため息という比較的明確度の高い要素が入っている割に、漠然性が非常に高かったのは興味深い結果である。

第6刺激では、「肯定的情緒性」は全刺激中でもっとも低く、「力動性」と「空間性」は高く、「異質性」と「簡明性」は中程度であった。音響分析では、音は短く（平均値 $-1SD$ 以下）、音量の最大値が大きいこと（平均値 $+1SD$ 以上）以外は、音の大きさも高さについても中程度であった（平均値 $\pm 1SD$ 以内）。第6刺激は土砂降りの中で葛藤的な会話をする男女の刺激であり、その内容に一致した結果であろう。

第7刺激では、「肯定的情緒性」は低く、「力動性」と「空間性」はやや高く、「簡明性」は高く、「異質性」は中程度であった。音響分析では、平均的な音量が小さい点（平均値 $-1SD$ 以下）以外は、音の長さも大きさも高さも中程度であった（平均値 $\pm 1SD$ 以内）。反響のある廊下を無言で移動していく、単純で硬い本刺激と概ね一致した結果である。

第8刺激では、「肯定的情緒性」と「簡明性」は中程度で、「力動性」はやや低く、「異質性」も低く、「空間性」は高かった。音響分析では、音の長さとおおきさに関しては中程度であったが（平均値 $\pm 1SD$ 以内）、音の高さに関しては全刺激中で最低音と最高音の両方を示していた。この刺激では、背景で遊んでいる子どもたちと前景で会話している2人との対比があり、第I因子の評定がやや複雑になっていた。

第 9 刺激では、「肯定的情緒性」と「力動性」は中程度で、「簡明性」はやや低く、「異質性」も低く、「空間性」は高かった。音響分析では、音が全刺激の中でもっとも長い点以外は、音の大きさも高さも中程度であった（平均値±1SD 以内）。本刺激では対人関係でのずれがより明確になっており、第 8 刺激にも増して第 I 因子で肯定 - 否定のばらつきが多くなっている。

第 10 刺激では、「肯定的情緒性」と「簡明性」は低く、「力動性」は中程度で、「異質性」は全刺激中でもっとも高く、「空間性」も高かった。音響分析では、音の長さは中程度で（平均値±1SD 以内）、全体的な音の大きさが全刺激の中でもっとも大きく、全体的に音高も高かった（平均値+1SD 以上）。APT において本刺激は「夢」などの非現実的な物語が展開されやすく、これらの特徴と一致している。

第 11 刺激では、「肯定的情緒性」は全刺激中でもっとも低く、「力動性」は全刺激中でもっとも高く、「簡明性」も高く、「異質性」は低く、「空間性」も全刺激中でもっとも低かった。音響分析では、音は短く（平均値-1SD 以下）、最高音が低い点（平均値-1SD 以下）以外は、音の大きさも高さも中程度であった（平均値±1SD 以内）。物理的特徴として突出した部分はあまりないが、この刺激では対人関係の対立が明確であり、それが反映された結果であろう。

第 12 刺激では、「肯定的情緒性」と「異質性」は中程度で、「力動性」と「簡明性」は低く、「空間性」もやや低かった。音響分析では、音の長さも高さは中程度で（平均値±1SD 以内）、音の大きさにおいては平均値も最大値も全刺激中で一番小さかった。第 12 刺激は衣擦れのみ刺激であり、静かで漠然とした刺激であるという本結果は予想通りのものであった。

第 13 刺激では、「肯定的情緒性」と「簡明性」は中程度で、「力動性」はやや低く、「異質性」も低く、「空間性」は高かった。音響分析では、音の長さも大きさも中程度であったが（平均値±1SD 以内）、音の高さにおいては最小値が全刺激の中でもっとも高く、平均値も高かった（平均値+1SD 以上）。本刺激は協力者が作成した映像作品から抜粋したものであり、音高の高さは TV 特有の雑音の影響である。その他も概ね了解可能な結果であった。

第 14 刺激では、「肯定的情緒性」はやや高く、「力動性」は低く、「簡明性」は高く、「異質性」はやや低く、「空間性」は中程度であった。音響分析では、

音の長さも大きさも平均的であるのに対し（平均値 $\pm 1SD$ 以内）、音の高さは全体的に低く、最高音も低かった（平均値 $-1SD$ 以下）。本刺激は心拍のみの刺激で、明確で、どちらかといえばゆったりした刺激のようである。

第 15 刺激では、「肯定的情緒性」と「簡明性」と「空間性」はやや高く、「力動性」は低く、「異質性」も低かった。音響分析では、音が短い点（平均値 $-1SD$ 以下）以外は、音の大きさも高さも中程度であった（平均値 $\pm 1SD$ 以内）。検査の終わりに向けて刺激価の低い刺激を採用しており、本結果はそれを裏付けるものである。

第 16 刺激では、「肯定的情緒性」と「空間性」は全刺激中でもっとも高く、「簡明性」も高く、「力動性」と「異質性」は全刺激中でもっとも低かった。音響分析では、音の長さも大きさも中程度であったが（平均値 $\pm 1SD$ 以内）、全体的な音の高さは全刺激の中でもっとも高く、最小値も高かった（平均値 $+1SD$ 以上）。本刺激は唯一下位項目間で矛盾がなく、明るく開放的で、最後の刺激として想定した通りの特徴であった。

（3）性差について

16 刺激全体では、「力動性」と「簡明性」において、女性よりも男性の方が高かった。個別の刺激では、第 2 刺激の「空間性」や第 3 刺激の「力動性」、第 5 刺激の「力動性」と「簡明性」、第 9 刺激の「力動性」、第 14 刺激の「力動性」と「簡明性」において女性よりも男性が高く、第 10 刺激の「力動性」では男性よりも女性の方が高かった。全体的に男性の方が動きやインパクト、明瞭さを敏感に感じ取っていたようであるが、異質で刺激価の高い第 10 刺激では女性の方がそうした特徴を敏感に感じ取っていたという興味深い結果である。また、第 2 刺激は男性 2 人による会話の刺激であり、男性の参加者の方がその状況をより具体的にイメージできたことが「空間性」の高さにつながったのではないかと考えられる。

（4）刺激の侵襲性について

心理検査における侵襲性については、これまでも多くの議論がなされてきた。侵襲性はもともと医学用語で、生体内の恒常性を乱す事象の性質を指して

いる。臨床心理学においてもストレッサーのように広範な概念であるが、心理検査における侵襲性について大まかにまとめると、心理検査における刺激や行為が、被検者の不安・緊張をはじめとする陰性感情を惹起したり、退行を促進して防衛機能を弱めたりする性質といえるだろう。こうした性質は高すぎると危険であるが、ほどよくあると被検者のパーソナリティの理解を深める重要な性質になると考えられている（たとえば馬場，1997）。本研究における印象評定との関連でいえば、①不安・緊張をはじめとして「情緒性」が否定的である、②「力動性」が高く圧迫感がある、③「簡明性」が低く漠然とした感じが強かったり④「異質性」が高かったりして扱いにくく対処が困難であるといったように、ほとんどの要素が関連していると考えられる。ときには⑤「空間性」が高いことも、刺激に巻き込まれる度合いから侵襲性につながり得るだろう。これらすべての側面を見ていくと煩雑になるため、取りこぼしが生じることを承知の上で、ここでは①の中の不安・緊張について見ていく。

「不安な - 安心した」と「緊張した - 気が抜けた」の2項目について改めて見てみると、16刺激全体では不安も緊張もやや高かった。個々の刺激に対する評定では、第3, 6, 7, 10, 11刺激ではどちらも高く、第5, 12, 13刺激では不安のみが高く、第8, 14刺激では緊張のみが高く、第15, 16刺激ではどちらも低く、第9刺激では不安がやや高いのに対して緊張はやや低くなっていた。これらの結果から、全体的に侵襲性はやや高く、特に第6刺激においては非常に高かったといえる。上記の通り、この結果だけで侵襲性について判断することはできないが、今後、特に第6刺激の扱いには注意を払いながら、APTを実施する中で侵襲性について検討していく必要がある。

（5）今後の課題

本研究により APT における聴覚刺激の特徴が明らかになった。今後はこれらの特徴を踏まえた上で、反応解釈をより適切で豊かなものにしていきたい。例えば、聴覚刺激の特徴に一致する物語と一致しない物語のそれぞれの意味合いや、一致しない物語がどのように刺激と異なっているのか、それらの物語を被検者がどのように語っているかといった側面から、パーソナリティの理解を深めていくことができるだろう。また、微小音要素を物語に取り込むことや、逆

に、ほとんどの人が認知して物語にも取り込む要素を物語に取り込まないことについても、今後は客観的なデータをもとにより適切な解釈ができるようになる。こうした研究を重ねていくことで、APTの有用性や独自性についても明確にしていくことができるだろう。聴覚刺激の新奇性や侵襲性についても、今後、知見をより深めていく必要がある。

第七章のまとめ

本章では、第六章で選定した聴覚刺激の特徴を明らかにすることを目的とした。まず、音声や環境音、感情に関する先行研究から形容詞対を収集し、各刺激について印象評定を行い、因子分析により特徴を抽出した。その結果、「肯定的情緒性」「力動性」「簡明性」「異質性」「空間性」という5因子が抽出された。本章の聴覚刺激は全体的に、悲しみや不安・緊張、不快感といった否定的な感情を喚起し、迫力や変化する性質は低く、シンプルで、日常的で、臨場感のある刺激であることが示され、各刺激の特徴も明らかになった。印象評定と併せて、第三章～第五章において物語に取り込まれる割合が非常に低かった微小音要素が、実際に聴き取れるものであるかをチェックリストにより検討した。その結果、聴き取れるが物語に取り込まない微小音要素が多い可能性が示唆された。次に、上記の実験とは別に、各刺激について音響分析を行い、物理的な特徴も明らかになった。今後、これらの特徴に基づいた分析を行うことにより、解釈の客観性が増し、より適切で有効な解釈を導き出すことができるようになるだろう。

第八章

【研究 6】各聴覚刺激における反応の特徴

8-1 問題と目的

研究 5 では、研究 4 で再構成した 16 個の聴覚刺激に対して①形容詞対による印象評定、②微小音要素のチェックリスト、③音響分析を行い、刺激自体の特徴を明らかにした。①では因子分析により「肯定的情緒性」「力動性」「簡明性」「異質性」「空間性」という 5 因子が抽出され、③では「音の長さ」「音の大きさ」「音の高さ」の 3 側面から分析された。②では、聴覚刺激の音要素の中でも物語に取り込まれる割合が 10%に満たない微小音要素が、実際に聞き取られる程度が明らかになった。

被検者に刺激を提示して反応を求めるタイプの投映法において、刺激の特徴を明らかにすることと同様に、反応の特徴を明らかにすることも重要である。鈴木（1997）は、TAT の各図版における反応を分類し、それを熟知することによって、「正しい直観」により反応を解釈することができる」と述べている。片口（1987）もロールシャッハ法に関して「系列分析的な解釈に際して、基本的かつ不可欠の条件は、各図版の知覚的特性や、それに対してなされる反応の特徴を知ることである。換言すれば、系列的解釈は、各図版の諸特性に対する熟知の程度に応じて、臨床的有効性を発揮することとなる」と述べ、各図版の特徴について、SD 法や好嫌選択の結果に加え、反応（コード）の出現頻度などを整理している。このように特定の刺激における反応傾向が分かっていると、実際の被検者の反応がその傾向と同様であるかずれているか、ずれの背景として被検者はどのような体験をしていたかを読み取りやすく、より客観的で妥当性のある解釈の手がかりとなる。他方、本論の APT では、各刺激における反応の特徴についてまだ明らかになっていない。

そこで本研究では、APT の反応について内容面・形式面・認知面の指標により評定を行った結果から、各刺激における反応の特徴を明らかにすることを目

的とする。具体的には、研究 1 と研究 2 の評定データの中から、研究 4 で選定した 16 刺激のデータを抽出し、音声刺激と非音声刺激および各刺激においてどのような反応がどの程度見られるかという点から特徴を明確化する。また、研究 5 で明らかになった刺激の特徴をもとに、APT における刺激と反応の関係についても検討したい。

8-2 方法

以下に概略を示す 2 つの実験から評定データを抽出し、音声刺激と非音声刺激の種類ごと、および個々の刺激ごとに各指標の出現率や平均値、標準偏差を算出する。さらに、各微小音要素が物語に取り込まれた割合も改めて算出する。

(1) 音声刺激による APT (研究 1)

実験参加者 大学生・大学院生 60 名 (男女 30 名ずつ) を対象とした。

聴覚刺激 葛藤的な会話場面を中心とする 17 刺激を採用している。本研究では研究 4 で選定した 8 刺激を取り上げる (表 8-1)。

手続き 坪内 (1997) による TAT の手続きを参考にし、実験室において個別に実施した。

分析方法 1 つずつの反応について内容面・形式面・認知面の指標により評定した。この指標は TAT で用いられる指標 (たとえば鈴木, 1997) と APT 独自の指標から成っている (表 8-2, 8-3)。指標の詳細については研究 1 を参照されたい。

(2) 非音声刺激による APT (研究 2)

実験参加者 大学生・大学院生 60 名 (男女 30 名ずつ) を対象とした。

聴覚刺激 物音や環境音を中心とする 14 刺激を採用している。本研究では研究 4 で選定した 8 刺激を取り上げる (表 8-1)。

手続き 坪内 (1997) による TAT の手続きを参考にし、実験室において個別に実施した。

分析方法 1 つずつの反応について内容面・形式面・認知面の指標により評

定を行った。研究 1 で用いた指標に対し、非音声刺激による APT に適用できるように修正、追加および削除を行っている（表 8-2, 8-3）。指標の詳細に関しては研究 2 を参照されたい。

なお、「音要素の統合」は「音要素の取り込み」との差別化が難しいため、「実験者による質問回数」は純粋な実験参加者の反応以外の要素も含まれる可能性があるため、本研究では分析対象から除外した。また、音声刺激に対する反応と非音声刺激に対する反応の特徴を対比しやすいように、可能な限り評定値の算出方法を統一した。

表 8-1. 聴覚刺激の種類と内容（表 6-19 を再掲）

刺激	内容
1	都会の交差点で車や人々が往来する中、ハイヒールや革靴で歩く足音が聴こえてくる。最後にハイヒールで走る足音が近づいてきて、手前で立ち止まる。
2	静かな場所での会話: 男性 A「例の件, うまく行ったらしいな」, 男性 B「ああ, 少々てこずったがね」, 男性 A「ふん, さすがだ」, 男性 B「ありがとう。こっちもほっと一安心だよ」。
3	静かな場所で, 冷蔵庫の微かな唸り。電気のスイッチを操作する音がして, 木製の床を靴で歩く足音と共にゆっくり移動していく。衣擦れの音の後に, ベッドに倒れ込む音。
4	いくぶん静かな場所での会話: 女性「そんなことしちゃいけないって, いつも言ってるでしょ! ?」, 女の子「だって...」, 女性「もうしないって約束する?」, 女の子「はい」。
5	走行する電車内で, 乗客の小さなざわめきが聴こえる。(開始から約 20 秒後) 女性が 2 度深いため息をつく。最後に踏み切りの音がかすかに聴こえてくる。
6	土砂降りの雨の中, 1 台の車が通り過ぎ, 以下の会話へ: 女性「やっぱマズイって...」, 男性「お前, 今さら何弱気になってんだよ。もうやるしかないって分かっているだろ? さあ, 行くぞ!」, 女性「あ, ちょっと待ってよ...」。
7	静かな地下の廊下を歩く 2 人の足音が近づいてきて止まる。鍵を開け, 軋むドアを開閉した後, 再び鍵を閉める。
8	公園で子どもたちが遊んでいる中での会話: 男性「何ですかねてんの? ちゃんと言わなきゃ分かんないだろ?」, 男の子「別にすねて何かないよ...」, 男性「言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさい?」, 男の子「うん...」。
9	大勢の客で賑わっているレストランでの会話: 女性 A「...そっかあ... そりゃ辛かったね...」, 女性 B「うん...」, <携帯電話の着信音>, 女性 A「あ, ちょっとごめん」, <携帯電話に出る>, 女性 A「あ, はいはい, どうしたの?え, うっそお! ?へえー...うん...うん, うん分かった! じゃあ明日ねー」, <ブランク>。
10	地響きと荒々しい波の音が聴こえる。砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が途中で止まり, 動物の羽音や鳴き声が聴こえてくる。
11	静かな場所での会話: 男性 A「お前は何をしたのか分かっているのか! ?」, 男性 B「はい, でも, あれは...」, 男性 A「言い訳を聞きたいんじゃない! こんなことになって...お前どうするつもりなんだ! ?」, <ブランク>。
12	静かな場所で, 衣擦れの音が聴こえる。
13	高架下での会話: 女性 A「それよりさ, どこ行こっか?」, 女性 B「どっか遠いところ... どうせなら海がいいな」
14	静かな場所で, 心拍が聴こえる。
15	静かな場所での会話: 女性 A「あ, 私こっちだから」, 男性「あ, うん, じゃあねー」, 女性 B「またねー!」, 女性 A「また!」, <足音>。
16	ヒグラシや鳥の鳴き声と沢の音が聴こえる。

※ 参加者によっては, 必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない

※ 網掛け部分は音声刺激, それ以外は非音声刺激を示す

表 8-2. 反応の評定に用いた指標

	音声刺激に対する指標	非音声刺激に対する指標
内容面	自己の内界に向ける関心，自己に向ける感情 他者に向ける関心，他者に向ける感情 父親（的人物）に向ける感情，母親（的人物）に向ける感情 人物の導入，導入人物の性質，独特な人物設定 有音・無音の背景音の取り込み，背景音に対する情緒的意味づけ 結末の性質，攻撃的内容，自己言及，主観的印象	
	標準的年齢／性別設定からのずれ 明確な結末	主人公の導入 動物の導入 損傷内容，食物反応 衣服反応，性的内容 物質の導入，劇化反応 非現実的内容
形式面	初発反応時間，刺激の追加提示回数 語りの様式（移入形式／会話形式／物語形式），複数の物語	
		反応の失敗・拒否 前の刺激や物語との関連づけ
認知面	微小音要素の取り込み，音要素に対する標準的意味づけからのずれ 聴空間の拡大・縮小	
	登場人物の標準的位置関係からのずれ	音要素の取り込み 他の感覚への言及 触覚情報の性質

表 8-3. 各指標の評定値への変換方法

評定方法	数値への変換	該当する指標
時間や回数を計測	そのまま	初発反応時間, 刺激の追加提示回数
「ある／ない」「該当する／該当しない」の2件法	「ある／ない」「該当する／該当しない」を「1／0」に変換	自己の内界に向ける関心, 他者に向ける関心(非音声), 人物の導入, 主人公の導入, 標準的年齢／性別設定からのずれ, 独特な人物設定, 動物の導入, 有音／無音の背景音の取り込み, 明確な結末, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己言及, 主観的印象, 食物反応, 衣服反応, 性的内容, 物質の導入, 劇化反応, 非現実的内容, 反応の失敗・拒否, 語りの様式, 複数の物語, 前の刺激や物語との関連づけ, 微小音要素の取り込み, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, 登場人物の標準的位置設定からのずれ, 聴空間の拡大／縮小, 他の感覚への言及
	音要素ごとに「該当する／該当しない」を「1／0」に変換し, 1つの刺激の中で合計	音要素の取り込み
「肯定的(強い)／どちらでもない／否定的(弱い)」「両価的」「言及なし」の5件法	言及 「言及なし以外／言及なし」を「1／0」に変換	自己に向ける感情, 他者に向ける関心(音声), 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 導入人物の性質, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結末の性質, 触覚情報の性質
	性質 「肯定的／どちらでもない／否定的」を「1／0／-1」に変換	
	両価 「両価的／両価的以外」を「1／0」に変換	

8-3 結果

各反応に対する評定を表 8-3 に従って数値に変換し、「1/0」のデータは「1」の出現率を、時間や回数の計測値や「1/0/-1」のデータは平均値を算出した。同様に、音声刺激 8 個分と非音声刺激 8 個分についても出現率と平均値を算出した。音声刺激については表 8-4 および表 8-5 に、非音声刺激については表 8-6 および 8-7 に結果を示す。また、各微小音要素を取り込んだ参加者の割合について、研究 5 で明らかになった、各微小音要素が聞き取られる割合と併せて示す（表 8-8）。以下では、音声刺激全体と非音声刺激全体、次いで各刺激における結果について、特徴的であった部分を中心にまとめていく。

(1) 音声刺激全体について

内容面では、「自己の内界に向ける関心」も「自己に向ける感情（言及）」も約 50%の出現率で、「自己に向ける感情（性質）」の平均値は 0.02 であった。これに対し、「他者に向ける関心」の平均値は 0.13、「他者に向ける感情（言及）」の出現率は 97.7%、「他者に向ける感情（性質）」の平均値は-0.15 であった。他者を対象別に見ていくと、「父親（的人物）に向ける感情」や「母親（的人物）に向ける感情」は 20%に満たない出現率で、性質の平均値は前者が-0.15、後者が-0.34 であり、後者の方がやや否定的であった。また、環境という広義の他者に関連する「背景音に対する情緒的意味づけ」は 14.0%の出現率で、性質の平均値は-0.31 とやや否定的であった。「人物の導入」や「導入人物の性質（言及）」は約 30%の出現率で、「導入人物の性質（性質）」の平均値は-0.24 であった。「標準的年齢／性別設定からのずれ」は 10%前後の出現率で、特別な年齢設定をする方がやや多く、「独特な人物設定」の出現率は 42.3%であった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は 24.8%で、「結末の性質」の平均値は 0.07 であった。「攻撃的内容」は 15.8%、「自己言及」は 2.9%、「主観的印象」は 7.7%の出現率であった。形式面では、「初発反応時間」の平均値は 5.89 秒で、「刺激の追加提示回数」の平均値は 0.01 回であった。「語りの様式」の出現率では「移入形式」が 77.3%であったのに対し、「会話形式」は 7.7%、「物語形式」は 4.0%と低かった。「複数の物語」の出現率は 6.9%であった。認知面で

は、「微小音要素の取り込み」、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」、「登場人物の標準的位置設定からのずれ」の出現率は1~3%程度で低く、「聴空間の拡大・縮小」の出現率は11.7%であった。

(2) 非音声刺激全体について

内容面では、「自己の内界に向ける関心」の出現率は約50%であったのに対し、「自己に向ける感情(言及)」は24.2%の出現率であり、「自己に向ける感情(性質)」の平均値は-0.05であった。「他者に向ける関心」の出現率は46.0%、「他者に向ける感情(言及)」の出現率は69.4%、「他者に向ける感情(性質)」の平均値は0.02であった。他者を対象別に見ていくと、「父親(的人物)に向ける感情」や「母親(的人物)に向ける感情」は12%台の出現率で、性質の平均値は前者が0.03、後者が0.18であり、後者の方がやや肯定的であった。「背景音に対する情緒的意味づけ」は33.8%の出現率で、その性質の平均値は-0.15であった。また、「人物の導入」の出現率は49.0%で、「主人公の導入」はその半分に近い23.8%、「導入人物の性質」は37.3%の出現率で、性質の平均値は0.13であった。「動物の導入」の出現率は3.8%で非常に低かった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は33.1%で、「結末の性質(性質)」の平均値は0.11であった。「攻撃的内容」は8.1%、「自己言及」は1.5%、「主観的印象」は10.2%の出現率であった。形式面では、「反応の失敗・拒否」の出現率は2.3%、「初発反応時間」の平均値は10.73秒、「刺激の追加提示回数」の平均値は0.17回であった。「語りの様式」の出現率では「移入形式」が69.6%であったのに対し、「会話形式」は2.7%、「物語形式」は5.2%と低かった。「複数の物語」の出現率は6.0%であった。認知面では、「微小音要素の取り込み」の出現率は7.9%、「音要素の取り込み」の平均値は2.62、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」の出現率は5.8%であった。「触覚情報の性質(言及)」は30.0%の出現率で、「触覚情報の性質(性質)」の平均値は-0.19であった。

表 8-4. 音声刺激における各指標の出現率 (%)

APT 指標	全体	各刺激							
		2	4	6	8	9	11	13	15
自己の内界に向ける関心	55.0	30.0	68.3	60.0	76.7	55.0	60.0	43.3	46.7
自己に向ける感情(言及)	48.1	73.3	53.3	58.3	43.3	28.3	71.7	35.0	21.7
自己に向ける感情(両価)	0.6	1.7	0.0	1.7	0.0	1.7	0.0	0.0	0.0
他者に向ける感情(言及)	97.7	90.0	100.0	96.7	100.0	100.0	98.3	100.0	96.7
他者に向ける感情(両価)	7.9	1.7	3.3	1.7	13.3	3.3	11.7	25.0	3.3
父親(的人物)に向ける感情(言及)	19.4	0.0	5.0	8.3	88.3	1.7	31.7	16.7	3.3
父親(的人物)に向ける感情(両価)	0.4	0.0	0.0	0.0	1.7	0.0	1.7	0.0	0.0
母親(的人物)に向ける感情(言及)	16.5	0.0	100.0	5.0	20.0	1.7	1.7	16.7	3.3
母親(的人物)に向ける感情(両価)	0.2	0.0	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人物の導入	33.1	21.7	30.0	28.3	45.0	51.7	48.3	28.3	11.7
導入人物の性質(言及)	31.9	21.7	28.3	26.7	45.0	50.0	43.3	28.3	11.7
導入人物の性質(両価)	0.4	0.0	1.7	0.0	0.0	0.0	1.7	0.0	0.0
標準的年齢設定からのずれ	14.4	0.0	8.3	21.7	5.0	6.7	33.3	21.7	18.3
標準的性別設定からのずれ	8.5	0.0	28.3	1.7	28.3	0.0	0.0	10.0	0.0
独特な人物設定	42.3	43.3	31.7	38.3	43.3	40.0	85.0	28.3	28.3
有音・無音の背景音の取り込み	24.8	21.7	5.0	33.3	65.0	8.3	20.0	35.0	10.0
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	14.0	5.0	3.3	31.7	46.7	3.3	1.7	10.0	10.0
背景音に対する情緒的意味づけ(両価)	0.2	0.0	0.0	0.0	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0
結末の性質(両価)	2.9	1.7	1.7	5.0	3.3	3.3	3.3	1.7	3.3
攻撃的内容	15.8	6.7	21.7	20.0	18.3	8.3	33.3	13.3	5.0
自己言及	2.9	1.7	3.3	3.3	1.7	8.3	3.3	1.7	0.0
主観的印象	7.7	16.7	3.3	8.3	5.0	6.7	11.7	6.7	3.3
語りの様式(移入形式)	77.3	61.7	85.0	81.7	81.7	81.7	81.7	76.7	68.3
語りの様式(会話形式)	7.7	0.0	6.7	10.0	20.0	10.0	3.3	8.3	3.3
語りの様式(物語形式)	4.0	1.7	5.0	3.3	5.0	5.0	5.0	3.3	3.3
複数の物語	6.9	6.7	5.0	8.3	13.3	3.3	3.3	6.7	8.3
微小音要素の取り込み	1.0	—	3.3	—	—	1.7	—	0.0	—
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	3.5	3.3	0.0	1.7	0.0	6.7	5.0	8.3	3.3
登場人物の標準的位置設定からのずれ	3.3	0.0	0.0	0.0	1.7	6.7	0.0	1.7	16.7
聴空間の拡大・縮小	11.7	5.0	11.7	25.0	11.7	3.3	10.0	21.7	5.0

表 8-5. 音声刺激における各指標の平均値（標準偏差）

APT 指標	全体	各刺激							
		2	4	6	8	9	11	13	15
自己に向ける	0.02	0.57	0.00	- 0.20	0.00	- 0.12	- 0.23	- 0.10	0.08
感情(性質)	(0.68)	(0.55)	(0.57)	(0.63)	(0.57)	(0.70)	(0.68)	(0.62)	(0.76)
他者に向ける	0.13	- 0.03	0.18	0.23	0.32	0.05	0.23	0.03	0.00
関心	(0.49)	(0.49)	(0.39)	(0.46)	(0.54)	(0.43)	(0.56)	(0.45)	(0.52)
他者に向ける	- 0.15	0.31	- 0.50	- 0.29	- 0.24	- 0.53	- 0.41	0.15	0.34
感情(性質)	(0.79)	(0.72)	(0.68)	(0.62)	(0.88)	(0.72)	(0.70)	(0.73)	(0.71)
父親(的人物)	- 0.15	—	0.33	- 0.40	- 0.06	0.00	- 0.11	- 0.60	- 0.50
に向ける感情	(0.79)	—	(0.58)	(0.55)	(0.86)	—	(0.66)	(0.70)	(0.71)
母親(的人物)	- 0.34	—	- 0.33	- 0.33	- 0.08	0.00	0.00	- 0.60	- 0.50
に向ける感情	(0.66)	—	(0.63)	(0.58)	(0.79)	—	—	(0.70)	(0.71)
導入人物の性	- 0.24	- 0.31	0.00	- 0.50	- 0.04	- 0.30	- 0.23	- 0.59	0.29
質(性質)	(0.71)	(0.63)	(0.61)	(0.52)	(0.76)	(0.75)	(0.71)	(0.71)	(0.76)
背景音に対す	- 0.31	0.33	0.00	- 0.63	- 0.14	- 0.50	0.00	- 0.33	- 0.33
る情緒的意味	(0.63)	(0.58)	(0.00)	(0.50)	(0.65)	(0.71)	—	(0.82)	(0.52)
づけ(性質)									
結末の性質(性	0.07	0.22	- 0.12	- 0.15	0.40	- 0.27	- 0.08	0.48	0.10
質)	(0.72)	(0.72)	(0.58)	(0.68)	(0.72)	(0.69)	(0.83)	(0.65)	(0.54)
初発反応時間	5.89	5.52	7.25	9.33	3.63	6.75	7.28	4.05	3.30
(秒)	(11.85)	(8.03)	(16.64)	(9.86)	(4.77)	(23.15)	(8.26)	(4.71)	(4.48)
刺激の追加提	0.01	0.02	0.00	0.03	0.03	0.00	0.00	0.00	0.02
示回数	(0.11)	(0.13)	(0.00)	(0.18)	(0.18)	(0.00)	(0.00)	(0.00)	(0.13)

表 8-6. 非音声刺激における各指標の出現率 (%)

APT 指標	全体	各刺激							
		1	3	5	7	10	12	14	16
自己の内界に向ける関心	50.4	30.0	41.7	65.0	55.0	51.7	56.7	51.7	51.7
自己に向ける感情(言及)	24.2	11.7	25.0	31.7	35.0	18.3	23.3	41.7	6.7
自己に向ける感情(両価)	1.9	1.7	0.0	1.7	1.7	3.3	3.3	3.3	0.0
他者に向ける関心	46.0	58.3	38.3	26.7	68.3	30.0	45.0	50.0	51.7
他者に向ける感情(言及)	69.4	71.7	50.0	58.3	71.7	71.7	71.7	66.7	93.3
他者に向ける感情(両価)	4.0	1.7	1.7	1.7	3.3	10.0	3.3	0.0	10.0
父親(的人物)に向ける感情(言及)	12.9	0.0	11.7	15.0	15.0	8.3	10.0	15.0	28.3
父親(的人物)に向ける感情(両価)	0.4	0.0	1.7	0.0	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0
母親(的人物)に向ける感情(言及)	12.5	3.3	5.0	5.0	5.0	8.3	10.0	28.3	35.0
母親(的人物)に向ける感情(両価)	0.2	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人物の導入	49.0	38.3	33.3	33.3	31.7	45.0	50.0	65.0	95.0
主人公の導入	23.8	16.7	3.3	3.3	8.3	25.0	3.3	41.7	88.3
導入人物の性質(言及)	37.3	26.7	33.3	30.0	26.7	30.0	48.3	46.7	56.7
導入人物の性質(両価)	1.9	0.0	0.0	1.7	1.7	6.7	0.0	0.0	5.0
動物の導入	3.8	1.7	1.7	3.3	0.0	6.7	1.7	0.0	15.0
有音・無音の背景音の取り込み	33.1	20.0	20.0	41.7	21.7	61.7	23.3	20.0	56.7
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	33.8	20.0	20.0	31.7	18.3	55.0	30.0	30.0	65.0
背景音に対する情緒的意味づけ(両価)	1.7	0.0	0.0	0.0	1.7	3.3	1.7	0.0	6.7
結末の性質(両価)	3.3	1.7	3.3	1.7	0.0	11.7	5.0	1.7	1.7
攻撃的内容	8.1	1.7	13.3	1.7	13.3	20.0	5.0	6.7	3.3
自己言及	1.5	0.0	5.0	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3
主観的印象	10.2	11.7	13.3	10.0	8.3	18.3	10.0	5.0	5.0
反応の失敗・拒否	2.3	8.3	0.0	1.7	3.3	1.7	0.0	1.7	1.7
語りの様式(移入形式)	69.6	70.0	80.0	70.0	65.0	66.7	78.3	53.3	73.3
語りの様式(会話形式)	2.7	3.3	5.0	1.7	3.3	1.7	0.0	0.0	6.7
語りの様式(物語形式)	5.2	8.3	5.0	3.3	6.7	5.0	5.0	1.7	6.7
複数の物語	6.0	3.3	8.3	10.0	6.7	1.7	3.3	13.3	1.7
微小音要素の取り込み	7.9	3.3	5.0	13.3	1.7	6.7	8.3	1.7	13.3
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	5.8	0.0	16.7	6.7	5.0	10.0	5.0	1.7	1.7
触覚情報の性質(言及)	30.0	5.0	91.7	5.0	1.7	5.0	98.3	10.0	23.3
触覚情報の性質(両価)	2.7	0.0	3.3	0.0	0.0	0.0	16.7	1.7	0.0

表 8-7. 非音声刺激における各指標の平均値 (標準偏差)

APT 指標	全体	各刺激							
		1	3	5	7	10	12	14	16
自己に向ける	- 0.05	- 0.29	0.33	- 0.53	- 0.19	- 0.45	- 0.14	0.36	0.75
感情(性質)	(0.83)	(0.76)	(0.82)	(0.61)	(0.81)	(0.69)	(0.95)	(0.76)	(0.50)
他者に向ける	0.02	0.26	- 0.27	- 0.51	- 0.14	- 0.44	- 0.05	0.18	0.67
感情(性質)	(0.79)	(0.62)	(0.69)	(0.56)	(0.60)	(0.77)	(0.84)	(0.81)	(0.40)
父親(的人物) に向ける感情 (性質)	0.03 (0.72)	— (0.69)	- 0.14 (0.88)	- 0.56 (0.67)	- 0.22 (0.84)	- 0.20 (0.52)	0.67 (0.50)	0.00 (0.50)	0.41 (0.51)
母親(的人物) に向ける感情 (性質)	0.18 (0.68)	0.00 (0.00)	- 0.33 (0.58)	- 0.33 (1.15)	- 0.67 (0.58)	0.20 (0.84)	0.17 (0.75)	0.53 (0.51)	0.19 (0.60)
導入人物の性 質(性質)	0.13 (0.70)	0.25 (0.68)	- 0.25 (0.64)	- 0.39 (0.78)	0.06 (0.44)	0.00 (0.59)	0.14 (0.74)	0.21 (0.63)	0.59 (0.56)
背景音に対す る情緒的意味 づけ(性質)	- 0.15 (0.83)	0.00 (0.60)	- 0.33 (0.78)	- 0.58 (0.61)	- 0.45 (0.69)	- 0.55 (0.71)	- 0.50 (0.79)	- 0.06 (0.94)	0.59 (0.59)
結末の性質(性 質)	0.11 (0.65)	0.20 (0.63)	0.07 (0.58)	- 0.30 (0.72)	- 0.10 (0.57)	0.00 (0.55)	0.22 (0.61)	0.38 (0.64)	0.45 (0.57)
初発反応時間 (秒)	10.73 (15.74)	10.97 (10.21)	13.95 (16.96)	7.97 (10.66)	13.22 (18.37)	11.85 (19.71)	13.92 (21.13)	9.12 (14.56)	4.87 (6.93)
刺激の追加提 示回数	0.17 (0.38)	0.03 (0.18)	0.22 (0.42)	0.07 (0.25)	0.25 (0.44)	0.35 (0.52)	0.33 (0.48)	0.05 (0.22)	0.05 (0.22)
音要素の取り 込み	2.62 (1.46)	3.22 (1.04)	3.12 (0.74)	2.67 (0.77)	4.80 (1.16)	3.17 (1.34)	1.33 (0.54)	1.23 (0.46)	1.40 (0.67)
触覚情報の性 質(性質)	- 0.19 (0.64)	- 0.33 (0.58)	- 0.13 (0.58)	- 1.00 (0.00)	0.00 (—)	- 1.00 (0.00)	- 0.25 (0.63)	0.17 (0.98)	0.07 (0.62)

表 8-8. 微小音要素が聞き取られる割合と物語に取り込まれる割合（表 7-22 を再掲）

刺激	微小音要素	聞き取った参加者の割合 (%)	物語に取り込んだ参加者の割合 (%)*
1	人の笑い声	53.6	3.3
2	—	—	—
3	電気のスイッチ音	26.8	5.0
	冷蔵庫の電気音	32.1	0.0
4	テレビの音	21.4	1.7
	水の音	41.1	1.7
5	電車が建物などの傍を通過する音	75.0	1.7
	踏み切りの音	37.5	8.3
6	ドンドンと鳴っている音	51.8	3.3
	—	—	—
7	枯葉を踏むような音	5.4	1.7
8	—	—	—
9	周囲の客の会話内容	26.8	1.7
10	足音の不規則さ	42.9	5.0
	足音が突然に止まる	14.3	1.7
11	—	—	—
12	トントンと叩くような音	25.0	3.3
	音と音の間(動きが止まる)	67.9	5.0
13	車の音	50.0	0.0
14	心拍の不規則さ	60.7	1.7
15	—	—	—
16	カラスの鳴き声	30.4	5.0
	カラス以外の鳥の鳴き声	58.9	8.3

(3) 各刺激について

1) 第1刺激(非音声刺激) 内容面では、自己に関する2指標の出現率と平均値はいずれも非音声刺激全体の値より低かったのに対し、他者に関する2指標の出現率と平均値はいずれも非音声刺激全体の値以上であった。両親が登場することはほとんどなく、「背景音に対する情緒的意味づけ」の出現率は20.0%で、その性質の平均値は0.00であった。また、導入人物に関する3指標の出現率は非音声刺激全体の値より低く、「導入人物の性質(性質)」の平均値は0.25であった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は20.0%で、「結末の性質(性質)」の平均値は0.20であった。「動物の導入」や「攻撃的内容」、「自己言及」は出現しても1回のみで非常に少なく、「主観的印象」は11.7%の出現率であった。形式面では、「反応の失敗・拒否」の出現率は7.5%で、「初発反応時間」の平均値は10.97秒、「刺激の追加提示回数」の平均値は0.03回であった。「語りの様式」の出現率はいずれも非音声刺激全体の値とほぼ同様であったが、「物語形式」の出現率は非音声刺激の中でもっとも高かった。認知面では、「微小音要素の取り込み」や「音要素の取り込み」は非音声刺激全体とほぼ同様で、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」はまったくなかった。「触覚情報の性質」の出現率は5.0%で、その性質の平均値は-0.33であった。また、微小音要素の「人の笑い声」は全体の約半数の参加者に認知されるが、物語に取り込まれる割合は低かった。

2) 第2刺激(音声刺激) 内容面では、「自己の内界に向ける関心」の出現率は音声刺激の中でもっとも低いのに対し、「自己に向ける感情」の出現率は音声刺激の中でもっとも高く、その性質の平均値も0.57と非常に高かった。「他者に向ける関心」の平均値や「他者に向ける感情」の出現率は音声刺激全体より低かったのに対し、「他者に向ける感情」の性質の平均値は音声刺激全体より高かった。両親が登場することはなく、「背景音に対する情緒的意味づけ」の出現率は音声刺激全体よりも低かったが、性質の平均値はいずれも音声刺激全体よりも高かった。また、「人物の導入」や「導入人物の性質」の出現率は音声刺激全体に比べて低く、その性質の平均値は-0.31であった。「標準的年齢/性別設定からのずれ」はまったくなく、「結末の性質(性質)」の平均値は0.22であった。また、「攻撃的内容」の出現率は音声刺激全体より低く、「主観的印象」

の出現率は音声刺激の中でもっとも高かった。形式面では、「語りの様式」の出現率が 3 形式とも音声刺激全体より低かった。認知面では、「登場人物の標準的位置関係からのずれ」がまったくなく、「聴空間の拡大・縮小」の出現率が音声刺激全体より低かった。

3) 第 3 刺激 (非音声刺激) 内容面では、「自己の内界に向ける関心」の出現率が相対的に低く、「自己に向ける感情」の性質の平均値は非音声刺激全体より高かった。「他者に向ける関心」と「他者に向ける感情」の出現率も相対的に低く、その性質の平均値は非音声刺激全体より低かった。他者を対象別に見ると、「母親 (的人物) に向ける感情」や「背景音に対する情緒的意味づけ」の出現率は非音声刺激全体に比べて低く、両親や環境 (背景音) に向ける感情の性質の平均値はどちらも相対的に低かった。また、「人物の導入」や「主人公の導入」の出現率は相対的に少なく、「導入人物の性質 (性質)」の平均値はやや低かった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率も相対的に低く、「攻撃的内容」や「自己言及」、「主観的印象」の出現率は相対的に高かった。形式面では、「反応の失敗・拒否」はまったくなく、「初発反応時間」の平均値は 13.95 秒で非音声刺激の中でも特に長く、「語りの様式」の「移入形式」の出現率が非音声刺激の中でもっとも高かった。認知面では、「微小音要素の取り込み」の出現率は相対的にやや低く、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」や「触覚情報の性質」の出現率は相対的に非常に高かった。微小音要素の「電気のスイッチ音」は全体の約 4 分の 1 の参加者に認知されるが、物語に取り込まれることは少なかった。「冷蔵庫の電気音」は全体の約 3 分の 1 の参加者に認知されるが、物語にはまったく取り込まれなかった。

4) 第 4 刺激 (音声刺激) 内容面では、「自己の内界に向ける関心」と「自己に向ける感情」の出現率が音声刺激全体より高かった。「他者に向ける感情」に言及しない参加者はおらず、その性質の平均値は -0.50 と低かった。同様に、「母親 (的人物) に向ける感情」に言及しない参加者はおらず、その性質の平均値は -0.33 とやや低かったのに対し、「父親 (的人物) に向ける感情」の出現率は 5.0% で、その性質の平均値は 0.33 であった。「背景音に対する情緒的意味づけ」の出現率も非常に低かった。また、「導入人物の性質 (性質)」の平均は 0.00 で音声刺激全体よりも高かった。「標準的年齢設定からのずれ」と「独

特な人物設定」の出現率が音声刺激全体より低いのに対して、「標準的性別設定からのずれ」の出現率は音声刺激全体よりも高かった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は非常に低く、「結末の性質（性質）」の平均値は -0.12 で、「攻撃的内容」の出現率は音声刺激全体に比べてやや高めであった。形式面では、「初発反応時間」の平均値が7.25秒、「語りの様式」における「移入形式」の出現率が85.0%と音声刺激の中でもっとも高かった。認知面では、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」や「登場人物の標準的位置関係からのずれ」がまったくなかった。微小音要素の「テレビの音」は約20%、「水の音」は約40%の割合で参加者に認知されるが、どちらもほとんど物語には取り込まれなかった。

5) 第5刺激（非音声刺激） 内容面では、「自己の内界に向ける関心」と「自己に向ける感情」の出現率が非音声刺激全体に比べて高く、その性質の平均値は低かった。他方、「他者に向ける関心」や「他者に向ける感情」の出現率は相対的に低く、その性質の平均値は低かった。他者を対象別に見ると、「母親（的人物）に向ける感情」の出現率は低く、両親や環境（背景音）に向ける感情の性質の平均値は相対的に低かった。また、導入人物に関する3指標の出現率は非音声刺激全体に比べて低く、性質の平均値も低かった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は相対的にやや高く、「結末の性質（性質）」の平均値も「攻撃的内容」の出現率も相対的に低かった。形式面では、「初発反応時間」や「刺激の追加提示回数」の平均値が非音声刺激全体より低く、「複数の物語」の出現率は相対的にやや高かった。認知面では、「微小音要素の取り込み」の出現率が相対的に高く、「触覚情報の性質」の出現率は非常に低かったが、その性質はすべて否定的であった。3つの微小音要素は、全体の約3分の1から4分の3の参加者に認知されるのに対し、物語に取り込まれる割合はいずれも低かった。

6) 第6刺激（音声刺激） 内容面では、「自己に向ける感情」の出現率は音声刺激全体より高く、その性質の平均値はやや低めであった。「他者に向ける関心」の平均値も音声刺激全体よりやや高く、「他者に向ける感情」の性質の平均値はやや低めであった。他者を対象別に見ると、両親はあまり登場しなかったが、その性質の平均値はどちらも低かった。「背景音に対する情緒的意味づけ」

の出現率は音声刺激全体に比べて高く、その性質の平均値は非常に低かった。また、「導入人物の性質（性質）」の平均値も低く、「標準的年齢設定からのずれ」は音声刺激全体よりやや高かった。「結末の性質（性質）」の平均値は -0.15 で、「攻撃的内容」の出現率はやや高かった。形式面では、「初発反応時間」の平均値が9.33秒と音声刺激の中でもっとも長かった。認知面では、「聴空間の拡大・縮小」の出現率が音声刺激の中でもっとも高く、それ以外の指標への該当はほとんど見られなかった。

7) 第7刺激（非音声刺激） 内容面では、「自己に向ける感情」の出現率が非音声刺激全体より高く、その性質の平均値は相対的に低かった。「他者に向ける関心」の出現率は非音声刺激の中でもっとも高く、「他者に向ける感情」の性質の平均値は相対的に低かった。他者を対象別に見ていくと、「母親（的人物）に向ける感情」や「背景音に対する情緒的意味づけ」の出現率は非音声刺激の中でも特に低く、両親や環境（背景音）に対する感情の性質の平均値は低かった。また、導入人物に関する3指標の出現率も非音声刺激の中で特に低く、「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率や「結末の性質（性質）」の平均値は相対的に低かった。「攻撃的内容」の出現率は非音声刺激全体よりやや高かった。形式面では、「初発反応時間」と「刺激の追加提示回数」の平均値が相対的に高かった。認知面では、「音要素の取り込み」の平均値が非音声刺激の中でもっとも高く、「触覚情報の性質（言及）」はほとんど出現しなかった。微小音要素の「枯葉を踏むような音」は認知される割合も物語に取り込まれる割合も非常に低かった。

8) 第8刺激（音声刺激） 内容面では、「自己の内界に向ける関心」の出現率と「他者に向ける関心」の平均値が音声刺激の中でもっとも高く、「他者に向ける感情」に言及しない参加者はおらず、その性質の平均値は -0.24 で、両面的感情の出現率が相対的に高かった。「父親（的人物）に向ける感情」や「背景音に対する情緒的意味づけ」の出現率は音声刺激の中でもっとも高く、「人物の導入」や「導入人物の性質」の出現率も相対的に高く、両親や導入人物、環境（背景音）に向ける感情の性質の平均値も音声刺激全体に比べてやや高い値を示していた。また、「標準的年齢設定からのずれ」の出現率は低く、「標準的性別設定からのずれ」の出現率は音声刺激の中でもっとも高かった。「背景音の

取り込み」の出現率も高く、「結末の性質（性質）」の平均値は 0.40 と肯定的であった。形式面では、「初発反応時間」の平均値は 3.63 秒と短く、「語りの様式」の「会話形式」と「複数の物語」の出現率は音声刺激の中でもっとも高かった。

9) 第 9 刺激（音声刺激） 内容面では、「自己に向ける感情」の出現率が音声刺激全体より低く、その性質の平均値も低かった。「他者に向ける感情」に言及しない参加者はおらず、その性質の平均値は音声刺激の中でもっとも低かった。両親や環境（背景音）に対する感情への言及はほぼなかったのに対し、「人物の導入」と「導入人物の性質」の出現率は音声刺激の中でもっとも高く、その性質の平均値は -0.30 であった。「標準的年齢／性別設定からのずれ」や「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は音声刺激全体に比べると低く、「結末の性質（性質）」の平均値は -0.27 と音声刺激の中でもっとも低かった。「攻撃的内容」の出現率は音声刺激全体より低く、「自己言及」の出現率は 8.3% と音声刺激の中ではもっとも高かった。形式面では「複数の物語」の出現率が、認知面では「聴空間の拡大・縮小」の出現率が音声刺激の中でもっとも低かった。微小音要素の「周囲の客の会話内容」は 25%強の参加者に認知されるが、物語に取り込まれることはほとんどなかった。

10) 第 10 刺激（非音声刺激） 内容面では、「自己に向ける感情」の出現率が相対的にやや低く、その性質の平均値は低かった。「他者に向ける関心」の出現率は非音声刺激全体に比べて低く、「他者に向ける感情」の性質の平均値は低く、両面的感情の出現率も相対的に高かった。他者を対象別に見ると、両親に対する感情の出現率はどちらも 8.3%と低く、その性質の平均値は父親に関して -0.20、母親に関しては 0.20 であった。「背景音に対する情緒的意味づけ」の出現率は相対的に高く、その性質の平均値は相対的に低かった。また、「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は非音声刺激の中でもっとも高く、「結末の性質」の平均値は 0.00 で、両面的結末の出現率が非音声刺激の中でもっとも高かった。「攻撃的内容」や「主観的印象」の出現率も非音声刺激の中でもっとも高かった。形式面では、「刺激の追加提示回数」の平均値が非音声刺激の中でもっとも高く、「複数の物語」はほとんど出現しなかった。認知面では、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」の出現率が相対的に高く、「触覚情報の性質」の出現率は低く、その性質はすべて否定的であった。微小音要素の「足音

の不規則さ」は、参加者に認知される割合は半数に満たず、物語に取り込まれる割合も低かった。「足音が突然止まる」は認知される割合が 14.3%とさらに低く、物語にはほとんど取り込まれなかった。

1 1) 第 11 刺激 (音声刺激) 内容面では、「自己に向ける感情」の出現率は音声刺激全体より高く、その性質の平均値は音声刺激の中ではもっとも低かった。「他者に向ける関心」の平均値は相対的に高く、「他者に向ける感情」の性質の平均値は低く、両価的感情の出現率も比較的高かった。他者を対象別に見ていくと、「父親 (的人物) に向ける感情」の出現率が音声刺激全体より高く、「母親 (的人物) に向ける感情」はほとんど出現せず、「背景音に対する情緒的意味づけ」もほとんど出現しなかった。また、「人物の導入」や「導入人物の性質 (言及)」の出現率は音声刺激全体に比して高く、「標準的性別設定からのずれ」はまったくなく、「標準的年齢設定からのずれ」と「独特な人物設定」の出現率は音声刺激の中でもっとも高かった。「攻撃的内容」や「主観的印象」の出現率も音声刺激全体に比べると高かった。形式面では、「初発反応時間」の平均値が 7.28 と相対的に長めであった。

1 2) 第 12 刺激 (非音声刺激) 内容面では、自己と他者に関する 4 つの指標は、「自己の内界に向ける関心」の出現率が相対的にやや高かった点以外は、非音声刺激全体とほぼ同様の値であった。他者を対象別に見ると、「父親 (的人物) に向ける感情」の性質の平均値は高く、「背景音に対する情緒的な意味づけ」の平均値は低かった。また、「主人公の導入」の出現率は非常に低く、「導入人物の性質 (言及)」の出現率は相対的に高かった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は非音声刺激全体に比べて低く、「結末の性質 (性質)」の平均値は比較的高かった。形式面では、「反応の失敗・拒否」はまったくなく、「初発反応時間」と「刺激の追加提示回数」の平均値は非音声刺激全体に比べて高かった。「語りの様式」における「移入形式」の出現率は相対的に高く、「会話形式」はまったくなかった。認知面では、「音要素の取り込み」の平均値が非音声刺激全体より低く、「触覚情報の性質」の出現率は 98.3%と非常に高く、両価的性質の出現率が相対的に高かった。微小音要素の「トントンと叩くような音」は全体の 4 分の 1 の参加者が、「音と音の間 (動きが止まる)」は全体の 3 分の 2 の参加者が認知するが、どちらも物語にはほとんど取り込まれなかった。

13) 第13刺激(音声刺激) 内容面では、「自己の内界に向ける関心」と「自己に向ける感情」の出現率が相対的に低く、その性質の平均値も音声刺激全体より低かった。「他者に向ける関心」の平均値も相対的に低く、「他者に向ける感情」の出現率は100%で、その性質の平均値は0.15であったが、両価的感情の出現率が音声刺激の中でもっとも高かった。他者を対象別に見ると、両親に向ける感情の性質は否定的であり、「導入人物の性質(性質)」の平均値は音声刺激の中でもっとも低かった。「標準的年齢設定からのずれ」の出現率は音声刺激全体に比べて高かったのに対し、「独特な人物設定」の出現率は相対的に低かった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は相対的に高く、「結末の性質(性質)」の平均値は音声刺激の中でもっとも高かった。形式面では、「初発反応時間」の平均値が4.05秒と相対的に短めであった。認知面では、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」と「聴空間の拡大・縮小」の出現率が音声刺激全体より高かった。微小音要素の「車の音」は、半数の参加者に認知はされるものの、物語にはまったく取り入れられなかった。

14) 第14刺激(非音声刺激) 内容面では、「自己に向ける感情」の出現率が非音声刺激の中でもっとも高く、その性質の平均値は相対的に高かった。「他者に向ける感情」の性質の平均値も非音声刺激全体に比べて高く、対象別に見ていくと、「母親(的人物)に向ける感情」の出現率と平均値が非音声刺激の中でも特に高かった。また、導入人物に関する3指標の出現率はいずれも非音声刺激全体より高く、その性質の平均値は相対的に高めであった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は相対的に低く、「結末の性質(性質)」の平均値はやや高かった。「攻撃的内容」や「自己言及」、「主観的印象」の出現率は非音声刺激全体より低かった。形式面では、「初発反応時間」や「刺激の追加提示回数」の平均値は相対的に低く、「語りの様式」における3形式の出現率は非音声刺激の中でも特に低かったのに対し、「複数の物語」の出現率は非音声刺激の中でもっとも高かった。認知面では、「微小音要素の取り込み」の出現率も「音要素の取り込み」の平均値も低く、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」もほとんど出現しなかった。「触覚情報の性質」の出現率は相対的に低く、その性質の平均値は非音声刺激全体に比べて高かった。微小音要素の「心拍の不規則さ」は、全体の3分の2弱の参加者が認知するものの、物語にはほとん

ど取り込まれなかった。

15) 第15刺激(音声刺激) 内容面では、「自己の内界に向ける関心」と「自己に向ける感情」の出現率が相対的に低く、後者は音声刺激の中でもっとも低かった。「他者に向ける関心」の平均値も相対的に低く、「他者に向ける感情」の性質の平均値は音声刺激の中でもっとも高かった。他者を対象別に見ていくと、両親の登場は非常に少なく、また、「人物の導入」や「導入人物の性質」の出現率も非常に低く、その性質の平均値は相対的に高かった。「標準的性別設定からのずれ」はまったくなく、「独特な人物設定」や「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率は全体に比べて低かった。「攻撃的内容」も「自己言及」も「主観的印象」も出現率は相対的に低かった。形式面では、「初発反応時間」の平均値は3.30秒で音声刺激の中でもっとも短かった。認知面では、「登場人物の標準的位置関係からのずれ」の出現率が音声刺激の中でもっとも高く、「聴空間の拡大・縮小」の出現率は相対的に低かった。

16) 第16刺激(非音声刺激) 内容面では、「自己に向ける感情」の出現率は非常に低く、その性質は肯定的であった。他方、「他者に向ける感情」の出現率は非音声刺激の中でもっとも高く、その性質の平均値は高かったが、両面的感情の出現率も相対的に高かった。他者を対象別に見ていくと、両親に対する感情の出現率が非音声刺激の中でもっとも高く、特に「父親(的人物)に向ける感情」の性質の平均値が高かった。「背景音に対する情緒的意味づけ」の出現率も高く、その性質の平均値は高かった。また、人物や動物の導入に関する指標はいずれも非音声刺激の中で特に高く、「導入人物の性質」の平均値も高かった。「有音・無音の背景音の取り込み」の出現率も、「結末の性質(性質)」の平均値も高かった。「攻撃的内容」や「自己言及」、「主観的印象」の出現率はいずれも低かった。形式面では、「初発反応時間」と「刺激の追加提示回数」の平均値が非常に低かった。「語りの様式」では「会話形式」の出現率が相対的に高く、「複数の物語」はほとんど出現しなかった。認知面では、「音要素の取り込み」の平均値が低かったのに対して、「微小音要素の取り込み」の出現率は非音声刺激の中でも特に高く、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」はほとんど出現しなかった。微小音要素の「カラスの鳴き声」は全体の3分の1弱の参加者が、「カラス以外の鳥の鳴き声」は全体の2分の1強の参加者が認知す

るが、物語に取り込まれることは少なかった。

8-4 考察

以下では研究 5 で明らかになった各刺激の特徴（表 8-9）と結果を照らし合わせながら、2 種類の刺激および各刺激における反応の特徴について考察していく。

（1）全体的な反応の特徴について

まず音声刺激全体について見ていくと、これらの多くは葛藤的な会話場面を想定して作成されており、より否定的な情緒を喚起しやすく、会話という明快で、とても馴染みのある刺激であり、参加者に一定の聴空間を形成させるものであった（表 8-9, 表 8-10）。反応の特徴としては、内容面では、自己に関する指標では偏りがなく、他者に関する指標では偏りが見られた。音声刺激に想定される葛藤的な会話場面に基づいて作られる物語には、内的な葛藤よりも外的な葛藤がより強く映し出されるようである。他者の中でも、父親的人物よりも母親的人物に対する感情の方がより否定的で、環境（背景音）に対する感情はやや否定的であった。従って、「他者に向ける感情（性質）」がやや否定的に偏るのは、両親の中でも特に母親や環境に向ける感情が否定的になりがちであることが影響していると考えられる。また、導入人物は全体の約 3 分の 1 の割合で登場し、否定的な人物であることが多かった。刺激中の葛藤状況を解決してくれる人物よりも、葛藤状況を生み出した人物や、救済してくれない人物が導入されやすかったのだろう。「標準的年齢／性別設定からのずれ」は全体の約 10 分の 1、「独特な人物設定」は全体の約半数、「有音・無音の背景音の取り込み」は全体の 4 分の 1 の参加者が行っていた。人物に対する独特な意味づけが少なからず見られたことから、本研究の聴覚刺激も「人物の無規定性（水口・佃, 1955）」の特徴を備えていることが示された。物語の結末は肯定的なものも否定的なものも同じくらい語られていた。特殊な反応と考えられる「攻撃的内容」と「自己言及」と「主観的印象」に関しては、「攻撃的内容」のみ出現が少なくなく、「攻撃的内容」を引き出しやすい刺激が 8 つ中 3 つ（第 3, 4, 7

刺激) あることも示された。形式面では、「初発反応時間」も「刺激の追加提示回数」も値が小さく、音声刺激に対して参加者はある程度容易に物語を作ることができるようである。これは音声刺激における「簡明性」の高さによると考えられる。物語の語り方において「移入形式」になることが多かったのは、刺激自体が台詞で構成されているため、参加者も登場人物になりきる「移入形式」で語りやすかったのだろう。「複数の物語」を作るケースは非常に少なかった。認知面では、「微小音要素の取り込み」や「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」、「登場人物の標準的位置関係からのずれ」はほとんど出現せず、これらが非常に特殊な反応であることが示された。これらに比して「聴空間の拡大・縮小」が多く出現したことから、人物の位置関係を動かすよりも、空間を増やしたり区切ったりする方が容易であることが示唆された。

次に非音声刺激全体について見ていくと、これらは言語以外で人が発する音や環境音を組み合わせで作成されており、より否定的な情緒を喚起しやすく、あまり力強さはなく、何の音であるのかやや漠然としているがある程度聞き馴染みはあり、背景音と他の物音の組合せや移動する足音が多く含まれているため、参加者に遠近のある聴空間を形成させるものであった(表 8-9, 表 8-10)。反応の特徴としては、内容面では、自己に関する指標では、「自己に向ける感情(言及)」以外は大きな偏りはなかった。「自己に向ける感情(言及)」が全体の約 4 分の 1 と比較的少なかったのは、非音声刺激において導入人物を主人公にして傍観者的に物語を作る反応が相対的に多かったためと考えられる。そうした反応では外界の観察に重点が置かれ、内界の感情への言及は少なくなりがちであった。他者に関する指標でも、「他者に向ける感情(言及)」が全体の約 3 分の 2 の割合で出現した点以外は、大きな偏りは見られなかった。非音声刺激の中には 1 人の人物しか登場しないものが多いにもかかわらず、「他者に向ける関心」は全体の約半数で出現していた。これらは導入人物も全体の約半数の割合で出現していたことによると考えられる。他者の中でも、父親的人物よりも母親的人物に対する感情の方がより肯定的で、環境(背景音)に対する感情はやや否定的であった。したがって、「他者に向ける感情(性質)」ではこれらの偏りが互いに打ち消されていた。また、導入人物は全体の約半数の割合で出現し、「主人公の導入」はそのさらに半分に近い出現率であった。これは参加者

が 8 つ中 2 つの刺激において導入人物を主人公として物語を作ることの意味し、参加者 - 刺激の関係性が反映されると考えられ、非常に興味深い。導入人物は肯定的人物であることが比較的多かった。「有音・無音の背景音の取り込み」は全体の約 3 分の 1 の割合で出現し、結末は肯定的なものがやや多かった。特殊な反応と考えられる「攻撃的内容」と「自己言及」と「主観的印象」に関しては、「主観的印象」がやや多かった。非音声刺激が全体的に漠然とした印象を与えることから、参加者が戸惑いを感じやすかったためと考えられる。形式面では、「反応の失敗・拒否」や「初発反応時間」、「刺激の追加提示回数」が比較的低く、非音声刺激においても、参加者は物語作成にそこまで困難を示さないようである。物語の語り方においては「移入形式」をとることが多かった。人物の台詞が含まれていない非音声刺激においても「移入形式」が多くなるのは興味深い結果であり、聴覚刺激は予想以上に「移入形式」での語りを引き出しやすい可能性がある。「複数の物語」を作るケースは非常に少なかった。認知面では、「音要素の取り込み」は平均 2.62 個で、8 刺激の音要素の中から微小音要素を差し引いた平均個数は 3.13 であり、参加者は主要な音要素をほとんど取り込んで物語を作成していた。「微小音要素の取り込み」や「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」は出現率が低く、特殊な反応であることが示された。

「触覚情報の性質（言及）」の出現率が比較的高くなっているのは、衣擦れが含まれる刺激が 2 つ（第 10, 14 刺激）あることと、温感を評定対象に含めたためと考えられる。温感については、その意味合いも含めてさらなる検討が必要である。「触覚情報の性質」が否定的な方に偏っていたのは、非音声刺激が寂しさや不安、暗さなどの否定的な「情緒性」を備えているためと考えられる。

音声刺激と非音声刺激を比較すると、内容面では、「自己に向ける感情」への言及は音声刺激の方が約 2 倍多かった。他者や父親的人物、母親的人物に対する感情への言及も音声刺激の方が多く、それらの性質はより否定的であった。他方、「背景音の取り込み」や「背景音に対する情緒的意味づけ」への言及は非音声刺激の方が多く、その性質は音声刺激の方がより否定的であった。また、導入人物は非音声刺激の方が多く、その性質も音声刺激の方がより否定的であった。「攻撃的内容」は音声刺激の方が約 2 倍多かった。総じて、音声刺激では葛藤的な会話場面の刺激であることから対人関係の否定的な側面を強く映し

出すのに対し、非音声刺激でも導入人物の多さによって対人関係は映し出されるものの、音声刺激ほどの葛藤はなく、環境（背景音）との関係性に焦点があたり比重が高くなるといえよう。形式面では、「初発反応時間」は非音声刺激の方が2倍近く長く、「刺激の追加提示回数」も非音声刺激の方が多かった。音声刺激の方が「簡明性」が高く、物語作成がより容易であったためと考えられる。物語の語り方における「移入形式」が音声刺激の方でやや多く見られたのは、刺激中に人物の台詞が含まれているためであろう。認知面では、「微小音要素の取り込み」は非音声刺激の方が多く見られた。非音声刺激の方がそもそも微小音要素の個数が多く、また、より漠然としている非音声刺激に対し、それが何の音であるか参加者が注意深く聴く傾向があるためと考えられる。

表 8-9. 印象評定の平均値（標準偏差）

刺激	印象評定				
	肯定的情緒性	力動性	簡明性	異質性	空間性
全体	3.26▽ (0.90)	3.32▽ (0.83)	3.57▲ (0.86)	2.88▽ (1.12)	3.92▲ (0.91)
音声	3.25▽ (0.82)	3.56 (0.72)	3.75▲ (0.73)	2.63▽ (0.95)	3.80▲ (0.84)
非音声	3.27▽ (0.98)	3.09▽ (0.87)	3.38▽ (0.94)	3.12▽ (1.21)	4.03▲ (0.96)
1	3.55 (0.56)	3.80▲ (0.58)	2.89▽ (0.56)	2.05▽ (0.68)	4.32▲ (0.83)
2	3.36 (0.82)	3.57 (0.67)	4.03▲ (0.63)	3.24▽ (0.89)	3.32 (0.73)
3	2.59▽ (0.56)	3.31▽ (0.69)	3.22▽ (0.79)	3.85▲ (1.02)	3.71▲ (0.76)
4	3.44 (0.76)	3.58 (0.66)	4.40▲ (0.55)	1.96▽ (0.63)	3.77▲ (0.75)
5	2.69▽ (0.58)	3.18▽ (0.47)	2.69▽ (0.66)	3.05▽ (1.00)	3.78▲ (0.81)
6	2.54▽ (0.56)	4.11▲ (0.60)	3.60 (0.66)	3.67 (0.78)	3.90▲ (0.73)
7	2.55▽ (0.61)	3.72▲ (0.61)	4.09▲ (0.68)	3.33 (0.98)	3.83▲ (0.88)
8	3.33 (0.72)	3.14▽ (0.55)	3.36 (0.67)	2.33▽ (0.86)	4.24▲ (0.77)
9	3.52 (0.62)	3.48 (0.53)	3.17▽ (0.64)	2.21▽ (0.72)	4.03▲ (0.84)
10	2.74▽ (0.79)	3.48 (0.78)	2.80▽ (0.70)	4.15▲ (1.11)	4.59▲ (0.72)
11	2.54▽ (0.56)	4.35▲ (0.51)	4.19▲ (0.74)	2.80▽ (0.78)	3.11▽ (0.63)
12	3.43 (0.61)	2.73▽ (0.64)	2.89▽ (0.77)	3.67 (0.96)	3.23▽ (0.70)
13	3.29 (0.78)	3.19▽ (0.61)	3.41 (0.49)	2.92▽ (0.71)	4.21▲ (0.84)
14	3.75▲ (0.75)	2.56▽ (0.80)	4.29▲ (0.69)	3.13▽ (1.01)	3.70 (0.86)
15	3.99▲ (0.60)	3.02▽ (0.50)	3.81▲ (0.46)	1.90▽ (0.60)	3.85▲ (0.75)
16	4.90▲ (0.47)	1.96▽ (0.53)	4.22▲ (0.66)	1.77▽ (0.57)	5.09▲ (0.71)

※ 網掛け部分は音声刺激に関するデータである

※ 平均が中点(3.5)に比して有意に大きかったものは▲, 有意に小さかったものは▽で示している

表 8-10. 印象評定と音響分析の平均値（標準偏差）

刺激	音の長さ (seconds)	音の大きさ(dB)		音の高さ(Hz)		
		平均	最大値	平均	最小値	最大値
全体	23.66 (8.15)	68.11 (9.25)	80.43 (7.31)	248.62 (109.11)	105.22 (51.86)	447.23 (155.87)
音声	17.67 (7.74)	72.67 (2.82)	83.63 (3.48)	236.51 (83.83)	105.98 (52.98)	477.23 (134.21)
非音声	29.66 (0.31)	63.54 (11.31)	77.22 (8.89)	260.72 (134.71)	104.46 (54.36)	417.23 (178.86)
1	29.44	64.40 (4.57)	79.62	152.82 (108.27)	74.57	485.52
2	10.73	70.85 (9.95)	80.47	147.37 (83.10)	80.84	563.63
3	29.35	55.13 (5.82)	77.51	99.34 (4.37)	75.96	146.23
4	14.95	75.09 (11.03)	88.82	258.43 (60.08)	92.64	450.68
5	29.70	69.29 (5.34)	77.61	211.16 (76.43)	77.72	307.61
6	14.77	74.88 (7.08)	88.09	173.67 (78.11)	87.06	513.49
7	30.00	57.79 (6.55)	79.59	334.38 (140.90)	85.16	600.37
8	15.98	69.76 (9.47)	84.73	264.49 (173.37)	72.22	633.23
9	33.92	69.47 (5.52)	78.89	259.24 (86.65)	84.16	504.41
10	29.84	79.23 (4.05)	85.77	410.25 (203.47)	74.98	600.52
11	12.45	73.14 (12.84)	82.09	145.89 (28.34)	81.88	229.10
12	30.00	43.32 (5.87)	57.90	320.92 (156.15)	148.78	464.26
13	24.58	77.16 (8.42)	83.61	401.69 (111.91)	233.20	583.07
14	29.14	73.41 (8.71)	86.24	112.86 (32.01)	74.95	194.40
15	13.98	71.03 (9.02)	82.31	241.31 (59.81)	115.85	340.24
16	29.78	65.78 (3.93)	73.55	444.04 (101.39)	223.57	538.92

※ 網掛け部分は音声刺激に関するデータである

※ すべての刺激にフェイドインとフェイドアウトを施しているため、「音の大きさ」の最小値は省略している

(2) 各刺激の特徴について

1) 第1刺激(非音声刺激) 雑踏の中でいろんな足音が登場する刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」は中程度で、「力動性」はやや高く、「簡明性」と「異質性」は低く、「空間性」は高かった。反応の特徴としては、刺激中に雑踏として複数の人物が登場することから、自己よりも他者や対人関係に焦点が当てられやすいようである。刺激中の足を引き摺って歩いている印象を受ける人物に同一化して、自己に対して否定的な感情を向けることもある一方で、「待ち合わせをして街でウィンドウショッピングをする予定で、うきうきしている」という物語に代表されるように、他者や環境(背景音)に肯定的感情が向けられることも多かった。総じて、本刺激では自己と大都会や社会の人々との対比があり、その対比を巡る態度が肯定的にも否定的にも反映されやすいと考えられる。また、本刺激は非音声刺激の中でも最初の刺激であり、参加者の緊張や戸惑いなどがより強く反映されたためか、「反応の失敗・拒否」が相対的に多く見られた。この点は他の投映法の最初の刺激に対する反応と重なる。

2) 第2刺激(音声刺激) 2人の男性が何かの成功を喜び合う刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」と「力動性」と「空間性」は中程度で、「簡明性」は高く、「異質性」はやや低かった。反応の特徴としては、刺激中の難しい案件を成功させた男性の喜びや自信が前面に出て、自己に対する肯定的な感情が語られることが多かった。物語はたいてい刺激中の二者関係だけで完結し、その関係性は表面的とされることも多いが、他者に対する感情は肯定的であることが多かった。環境(背景音)に対する感情への言及は少なく、その感情は肯定的なものが多かったが、「周囲に誰もいない安全な場所で秘密の話をしている」のように完全に肯定的とはいえない反応が多かった。また、「主観的印象」の出現率の高さが目立つが、これは刺激の「胡散臭い雰囲気」に対するものが多く、刺激から少し距離を取って反応しようとする参加者の態度が表れやすかったのだろう。「語りの様式」の「移入形式」が比較的少なかったことも、刺激に対する距離と関連していると考えられる。

3) 第3刺激(非音声刺激) 静かな屋内で1人の人物が一連の動作をする刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」は低く、「力動性」と「簡明性」はやや低く、「異質性」と「空間性」はやや高かった。反応の特徴としては、自己

を肯定的に捉える物語が多かった。これは、本刺激には硬い靴で木製の床を歩く足音が含まれているため、「アメリカの有能なビジネスマン」のような人物設定が多く、そうした有能感による。他方、「他者に向ける感情」への言及は非音声刺激の中でもっとも少なく、性質は否定的なものが多かった。対象別に見ても、両親、導入人物、環境（背景音）のすべてに否定的感情が向けられることが多く、「自己に向ける感情」とは対照的であった。また、導入人物は少なく、刺激中の足音の人物1人だけの物語が展開されることが多かった。背景音への意味づけも相対的に少なかった。「攻撃的内容」や「主観的印象」はやや多く、窃盗や殺人などの犯罪を連想する参加者もいた。「初発反応時間」は長く、刺激中の人物が一連の動作の中で何をしているのか吟味・判断することに時間がかかったと推測される。また、「語りの様式」の「移入形式」の出現率が非音声刺激の中でもっとも高かった。無機質とも思われるような本刺激でも、参加者の生き生きとした語りを引き出しうるのは興味深い。「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」が多かったのは、刺激中の最後に出てくる「人がベッドに倒れ込むような音」の意味づけが多様だったためであり、「触覚情報の性質」への言及は非常に多かったのは、刺激中に衣擦れの音が含まれているためである。

4) 第4刺激（音声刺激） 女の子が母親に怒られている刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」と「力動性」は中程度で、「簡明性」は全刺激中でもっとも高く、「異質性」は低く、「空間性」はやや高かった。反応の特徴としては、本刺激の子どもの発話のニュアンスが、心の中では別の気持ちであることを印象づけやすいためか、思考過程が語られることが多かった。母子間での苛立ちや不満、あるいは、女の子の気分を害した同胞や友人などの第三者への苛立ちや不満によって、他者に対する感情は否定的になることが多かった。また、「標準的性別設定からのずれ」が多かったのは、刺激中の女の子を男の子とする反応が比較的多かったことによる。背景音への言及が少ないのは、前景である母子の会話の刺激価が大きく、物語の作成過程がその会話に焦点化されるためであろう。女の子が何かを壊してしまったために母親に怒られているという物語もあり、「攻撃的内容」はやや高くなっていた。「初発反応時間」は少し長く、本刺激の刺激価からショックを受ける場合もあると考えられる。

5) 第5刺激（非音声刺激） 電車内で女性が2度ため息をつく刺激であり、

印象評定では「肯定的情緒性」は低く、「力動性」と「異質性」はやや低く、「簡明性」は全刺激中でもっとも低く、「空間性」はやや高かった。反応の特徴としては、自己の思考過程への言及が非音声刺激の中でもっとも高く、自己は否定的に捉えられていた。他方、対人関係の描写は非常に少なく、他者は否定的に捉えられていた。対象別に見ても、両親や導入人物、環境（背景音）のすべてにおいて否定的感情を向けられることが多かった。導入人物は相対的に少なく、刺激中のため息をついている女性に同一化して物語が作られることが多かった。物語の結末は否定的なものが多く、「攻撃的内容」は非常に少なかった。また、「初発反応時間」や「刺激の追加提示回数」は相対的に低かった。ため息は刺激の後半に入って突然出てくるため参加者を驚かせることが多いものの、ため息という明確な手がかりがあるため物語の構成がしやすかったのだろう。「複数の物語」はやや多く、女性がため息をつくに至る出来事が、複数思い浮かびやすかったようである。「微小音要素の取り込み」は非音声刺激の中でもっとも多く、「触覚情報の性質」は非常に少なかった。3つの微小音要素において、認知される割合と物語に取り込まれる割合が反比例するかのような値を示していたのは興味深く、1つの刺激の中でも各微小音要素の解釈に微妙な差異が生じうることを示していた。

6) 第6刺激（音声刺激） 土砂降りの中、1組の男女がこれからすることを巡って葛藤的会話をする刺激で、印象評定では「肯定的情緒性」は全刺激中でもっとも低く、「力動性」と「空間性」は高く、「異質性」と「簡明性」は中程度であった。反応の特徴としては、刺激中の男女が犯罪行為をして罪悪感を持つという反応が多く、自己に対する否定的な感情が語られることが多かった。「他者に向ける関心」はやや高く、「他者に向ける感情」は否定的なものが多く、対象別に見ると、環境（背景音）や導入人物に否定的な感情を向けることが多かった。雨や夜という環境への不安や不満、あるいは、本刺激においてよく話される、「これから大事な人のために報復をしに行く」という物語を反映していると考えられる。結末は否定的なものが多く、「攻撃的内容」が語られることも多かった。また、「初発反応時間」は音声刺激の中でもっとも長く、本刺激から物語を作成するのは相対的に難しいようである。「聴空間の拡大・縮小」も多く見られ、刺激中の男女が車の中にいるとされたり家の中にいるとされたりする

など、設定の仕方は様々であった。

7) 第7刺激（非音声刺激） 音が反響する廊下を2人の人物が歩いてきて古めかしい扉とその鍵を開閉する刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」は低く、「力動性」と「空間性」はやや高く、「簡明性」は高く、「異質性」は中程度であった。反応の特徴としては、自己に対する感情への言及が相対的に多く、否定的に捉えられていた。「刺激中の人物が何か罪を犯して監獄に入れられるところで、罪悪感を持っている」など反応が多かったためだろう。対人関係に関する描写は非音声刺激の中でもっとも多く、他者は否定的に捉えられることが多かった。対象別に見ていくと、看守などとして父親的人物について語られることがあるのに対して母親的人物はあまり登場せず、父親的人物や母親的人物、環境（背景音）に対する感情は否定的なものが多かった。導入人物に関する3指標や背景音に対する意味づけの出現率は非音声刺激の中でも特に低かった。物語の結末は否定的なものが多く、「攻撃的内容」もやや多かった。総じて、本刺激は非音声刺激の中で唯一、二者関係が含まれており、地下の暗いイメージを喚起させやすい刺激状況の中で、その二者関係をどのように処理するかが反映されるようである。また、「初発反応時間」は相対的に長く、参加者にとっては対処が難しい刺激の1つだったようである。「音要素の取り込み」が高いのは、本刺激が一連の動作音であり、音要素が他の刺激よりも多く分割されたことによる。参加者にとってはそれぞれの音要素を物語に統合することが難しくなり、このことが「初発反応時間」の長さにつながった可能性もある。「触覚情報の性質」への言及は非常に少なかった。

8) 第8刺激（音声刺激） 公園ですねている男の子に父親が話しかける刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」と「簡明性」は中程度で、「力動性」はやや低く、「異質性」も低く、「空間性」は高かった。反応の特徴としては、自己の思考過程への言及が音声刺激の中でもっとも多くあった。刺激中の男の子が思っていることを言えずにいる状況にあり、参加者はその内的な葛藤に触れやすかったのだろう。「他者に向ける関心」も高く、「他者に向ける感情」は否定的なものや両価的なものが多かった。対象別に見ると、両親や導入人物、環境（背景音）に対する感情はあまり否定的ではなく、背景音への言及や導入人物が相対的に多かった。総じて、「背景の公園で遊んでいるきょうだいたちとケ

ンカした男の子がすねていて、たまの休日に母親から子どもの相手を頼まれた父親が心配して声をかけている」というように関係性が複雑で、それぞれの人物に対して異なる感情を抱く物語が作られやすいようである。結末は肯定的なものが多かった。「標準的性別設定からのずれ」が多かったのは、第 4 刺激と同様に、子どもの性別設定によるものであった。また、「初発反応時間」は短く、参加者は本刺激を聴いてすぐに物語を構成できるようであった。本刺激は音声刺激の中でも終盤に提示される刺激であり、参加者が APT に慣れた結果とも考えられる。「語りの様式」の「会話形式」や「複数の物語」が多いのも特徴的で、参加者は登場人物たちに感情移入しやすく、短時間で多くの物語の筋書きを思い浮かべられるようである。

9) 第 9 刺激 (音声刺激) レストランで何か相談事をしていた女性 2 人のうち 1 人が電話で楽しそうに話す刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」と「力動性」は中程度で、「簡明性」はやや低く、「異質性」も低く、「空間性」は高かった。反応の特徴としては、自己に対する感情への言及は相対的に少なく、否定的なものが多かった。ここには刺激中の相談事を「誰かに嫌われた話」にしたり、携帯電話に出た女性がうっかり明るく話してしまったことに申し訳なさを感じたりする物語が反映されている。他者に対する感情が非常に否定的であったのは、電話に出た女性に対する不満からきている。また、刺激中の相談事の内容を語る上で、導入人物が登場することが多かった。また、背景音への意味づけは少なく、結末は否定的であり、「自己言及」は音声刺激の中でもっとも多かった。参加者が「自分だったらそういうときには電話に出ない」、「自分だったらそういうことをする友達に相談事をしない」などと苛立ちを言語化することもあった。

10) 第 10 刺激 (非音声刺激) おどろおどろしい雰囲気のある海岸を 1 人の人物が足を引き摺りながら歩く刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」と「簡明性」は低く、「力動性」は中程度で、「異質性」は全刺激中でもっとも高く、「空間性」も高かった。反応の特徴としては、自己に対する否定的感情が語られることが多かった。これは刺激中の人物の死への言及が多かったことを反映している。対人関係の描写は相対的に少なく、他者は否定的あるいは両価的に捉えられることが多かった。対象別に見ると、両親に対する感情への言及は

少なく、背景音への意味づけは非音声刺激の中でも特に多く、その性質は否定的なものが非常に多かった。物語の結末は両価的なものが相対的に多く、内容面でも特殊な反応である「攻撃的内容」や「主観的印象」は非音声刺激の中でもっとも多かった。総じて、本刺激では刺激中の人物と漠然と押し掛かってくるような異質な環境との対比があり、そうした対比への態度などが反応に反映されると考えられる。また、「刺激の追加提示回数」は非音声刺激の中でもっとも多く、複雑な本刺激を物語に統合する難しさがうかがわれる。「複数の物語」や「触覚情報の性質」の出現率は低かった。

11) 第 11 刺激（音声刺激） 上司が部下の失敗を責める刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」は全刺激中でもっとも低く、「力動性」は全刺激中でもっとも高く、「簡明性」も高く、「異質性」は低く、「空間性」も全刺激中でもっとも低かった。反応の特徴としては、自己に対する感情への言及が相対的に高く、音声刺激の中でもっとも否定的であった。刺激中で失敗をした部下は上司に反論しようとしているものの、自分を責める気持ちもあることが反映されたのだろう。「他者に向ける関心」は相対的に高く、「他者に向ける感情」は否定的なものと同価的なものが多かった。対象別に見ると、刺激中の上司に当たる人物への否定的感情がやや多く語られ、環境（背景音）に対する感情はほとんど語られなかった。前景の会話が非常にインパクトのあるものだったためと考えられる。また、導入人物は多く、「標準的年齢設定からのずれ」は音声刺激の中でもっとも多かった。刺激中の男性 2 人を父子とする反応が代表的であるが、全体の 3 分の 1 の出現率であったため、評定基準を見直す必要があるだろう。「独特な人物設定」も非常に多く、刺激中の葛藤に対して身分や社会的な属性を付与することで中和する操作も含まれていた。「攻撃的内容」は音声刺激の中でもっとも多く、部下に当たる男性が犯した失敗を破壊や傷害とする反応が代表的であった。「初発反応時間」は比較的長めで、本刺激の刺激価によるショックがあったことが推測される。

12) 第 12 刺激（非音声刺激） 衣擦れのための刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」と「異質性」は中程度で、「力動性」と「簡明性」は低く、「空間性」もやや低かった。反応の特徴としては、自己は肯定的に捉えられることが相対的に多かった。両親に対する感情が語られることは少なかったが、その

性質は、特に父親的人物に関して、肯定的なものが多かった。「主人公の導入」は少なく、導入人物は肯定的人物として語られることがやや多かった。こうした傾向は、「休日に子どもが父親にどこかに遊びに連れて行ってもらうことになり、その子どもが早朝に目が覚めて布団の中でウキウキしている」「その父親が疲れていてなかなか布団から出られないが、子どものためにとまって遊びに行く」などの物語が反映されている。この点は、物語の結末がより肯定的であったことにもつながる。その一方で、登場人物が刺激中の人物1人で、背景音が静かであることに寂しさや憂うつを感じる反応も比較的多かったと考えられる。また、「初発反応時間」は長く、「刺激の追加提示回数」も相対的に多めであった。本刺激は漠然としている上に音量が全刺激の中でもっとも小さく、参加者にとって対処が難しかったと考えられる。他方では、「反応の失敗・拒否」がまったくなく、「語りの様式」における「移入形式」が多く、参加者は生き生きと物語を語っていた。本刺激は非音声刺激の中でも終盤に出てくる刺激であり、これらはAPTへの慣れの影響も少なくないだろう。本刺激では音要素自体が少なく、「音要素の取り込み」は非常に少なかった。「触覚情報の性質」への言及の多さは刺激が衣擦れであることによるもので、その性質は両価的なものが比較的多かった。

13) 第13刺激(音声刺激) 2人の女性があてのない旅について話す刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」と「簡明性」は中程度で、「力動性」はやや低く、「異質性」も低く、「空間性」は高かった。反応の特徴としては、自己に関する指標の出現率や平均値はいずれも相対的に低かった。自己に対する否定的感情については、刺激中の女性が自殺しようとする物語があったことと関連している。「他者に向ける感情」は両価的なものが非常に多かった。対象別に見ると、両親に対しては否定的感情が多く、「導入人物の性質」も非常に否定的であった。「他者に向ける感情」が両価的となるのが多かったのは、複数の人物に向ける感情が複雑であったためと考えられる。こうした感情的な複雑さがある一方で、物語の結末は音声刺激の中でもっとも肯定的なものが多かった。登場人物が大きな悩みを抱えながらも明るい未来が描かれることが多いのは、非常に印象的であった。また、「初発反応時間」は短めで、本刺激は比較的物語を作りやすかったようである。「聴空間の拡大・縮小」は相対的に多く、刺激中

の女性 2 人が電車内や車内,あるいは家の中にいると設定される場合があった。

14) 第 14 刺激 (非音声刺激) 心拍のみの刺激であり,印象評定では「肯定的情緒性」はやや高く,「力動性」は低く,「簡明性」は高く,「異質性」はやや低く,「空間性」は中程度であった。反応の特徴としては,自己に対する感情への言及が非音声刺激の中でもっとも多く,肯定的に捉えられることが多かった。「何かの発表会の前に緊張しながらも,これまでの練習などを振り返り,自信を持ってやり遂げる」という物語が多かったためと考えられる。他者は肯定的に捉えられることが多く,対象別に見ると,「母親(的人物)に向ける感情」の出現率が高く,性質は非常に肯定的であった。この点では,出産を控えた女性が胎児の元気な鼓動に喜び,生まれてくる赤ちゃんを迎える物語や,胎児が母親の鼓動を聴いて安心する物語が代表的であった。導入人物に関する指標はいずれも相対的に高く,「有音・無音の背景音の取り込み」は相対的に少なく,物語の結末は肯定的なものが多かった。また,「語りの様式」では「移入形式」が非音声刺激の中でもっとも少なかった。母親や胎児という同一化して話しにくい対象が比較的多かったためであろう。「複数の物語」は非音声刺激の中でもっとも多かった。本刺激は非常に単純で,物語作成を制限する要素は持続時間くらいであり,参加者は心拍からの連想でいろんな物語の可能性が浮かびやすかったのだろう。第 12 刺激と同様に,本刺激は音要素自体が少なく,「音要素の取り込み」も「微小音要素の取り込み」も非常に少なかった。「触覚情報の性質」への言及は少なかったが,性質は肯定的なものが多かった。本刺激では胎児が母親の温かいお腹の中で安心しているという物語も作られ,そうした温かさなどが評定対象となっていた。

15) 第 15 刺激 (音声刺激) 男性 1 人と女性 2 人が分かれ道で別れて歩いていく刺激であり,印象評定では「肯定的情緒性」と「簡明性」と「空間性」はやや高く,「力動性」は低く,「異質性」も低かった。反応の特徴としては,自己に対する感情に言及することが少なく,他者に関する描写もやや少なく,他者を肯定的に捉えていた。他者を対象別に見ていくと,両親に対する感情の出現率は非常に低く,また,導入人物も非常に少なく,肯定的人物として語られることが多かった。「独特な人物設定」も「攻撃的内容」も音声刺激の中でもっとも低かった。「初発反応時間」は非常に短かった。本刺激は音声刺激の中で

も最後の刺激であり APT に対する参加者の慣れもあったと思われるが、本刺激は明確で身近で肯定的な性質を持っており、物語を作りやすい刺激と考えられる。「登場人物の標準的位置関係からのずれ」の多さは、刺激中の男女 3 人がどのように別れて歩いていくか、その設定の多様性を反映していた。

16) 第 16 刺激 (非音声刺激) ヒグラシや沢の音のみで、全刺激の中で唯一人物が登場しない刺激であり、印象評定では「肯定的情緒性」と「空間性」は全刺激中でもっとも高く、「簡明性」も高く、「力動性」と「異質性」は全刺激中でもっとも低かった。反応の特徴としては、自己に対する感情への言及は非常に少なく、肯定的に捉えられることが多かった。「他者に向ける感情」の出現率は非音声刺激の中でもっとも高く、非常に肯定的に捉えられていたが、両価的なものも比較的多かった。対象別に見ると、両親に対する感情への言及が非常に多く、特に父親的人物が肯定的に捉えられることが多かった。これは「田舎のおじいちゃんと森で楽しく遊ぶ」という物語が比較的多かったことによる。人物や動物の導入に関する指標はいずれも非常に高く、導入人物は肯定的人物として語られることが非常に多かった。「有音・無音の背景音の取り込み」も非常に多く、「背景音に対する情緒的意味づけ」は肯定的なものが多かった。物語の結末も肯定的なものが多かった。また、「初発反応時間」や「刺激の追加提示回数」は低かった。本刺激は非音声刺激の中でも最後の刺激であり、参加者が APT の課題に慣れたことも考えられるが、本刺激は複雑でなく親しみやすいものであり取り組みやすかったとも考えられる。第 12, 14 刺激と同様に、本刺激も音要素自体が少なく、「音要素の取り込み」は少なかったのに対し、「微小音要素の取り込み」は相対的に多かった。本刺激には前景に当たる要素がなく、参加者の注意が刺激全体に及んだ結果と考えられる。総じて、大半の参加者は自由に明るい物語を作っており、本刺激は一連の刺激の最後に配置される、いわゆる「お口直し」の刺激として相応しいといえよう。

(3) まとめと今後の課題

本研究では、音声刺激と非音声刺激 8 個ずつの評定を整理し直すことで各聴覚刺激における反応傾向を明らかにし、刺激ごとの質的差異も確認することができた。たとえば、攻撃的内容が語られやすい刺激に対して攻撃的な物語が語

られるのと、攻撃的内容が語られにくい刺激に対して攻撃的な物語が語られるのとでは、その反応解釈が異なってくる。また、たとえば「父親（的人物）に向ける感情」が、刺激中に父親的人物が登場するときに語られるのと、刺激中に父親的人物が登場せず、参加者が導入人物として父親的人物を登場させた場合に語られるのとでも反応解釈は異なる。本研究で整理されたデータには、このような刺激中の手がかりの明確さの程度も反映されており、個別の反応の意味や差異を読み取るための基準として役割を果たすだろう。刺激中の手がかりの明確さに関しては、音声刺激と非音声刺激における「簡明性」の差にもつながり（表 8-9, 表 8-10）、今後両者における反応の質の違いについて検討する必要があるだろう。

ただし、本研究は大学生・大学院生 60 名分のデータであることからくる限界がある。また、本研究は音声刺激と非音声刺激を別々に用いた実験研究のデータから、それぞれ 8 刺激ずつ抜き出して整理し直したものであるため、表 8-1 のように 2 種類の刺激を混ぜて用いた場合には、順序効果の影響も加わり、異なる結果が得られる可能性もある。今後、第六章で再構成した刺激セットでの実施を行い、本研究で得られた知見を確認する必要がある。さらに、指標の精緻化も今後の課題である。「聴空間の拡大・縮小」の分類法の整理や、「音要素の取り込み」や「微小音要素の取り込み」においては、要素の区分についてさらなる検討が必要である。「触覚情報の性質」に関しては、もともと刺激に含まれている衣擦れなどの触覚情報に基づくものと、刺激に含まれていないが物語の展開の中で現れた触覚情報に基づくものとの区分や、温感の取り扱いなどについて整理する必要がある。

（４）本論における完成版 APT について

ここまでの研究において、Big Five およびロールシャッハ法との関連から有効な聴覚刺激を選定し（研究 4）、各刺激や反応の特徴を明らかにしてきた（研究 5, 6）。まだ検討すべき点や研究を重ねて確認していくべき点は残っているが、本論では音声刺激と非音声刺激を組み合わせたこの APT を完成版とする（完成版 APT の聴覚刺激や実施マニュアル、評定マニュアル、評定用紙を巻末に資料 8～11 として掲載）。なお、研究 4, 5 においては音声刺激と非音声刺激が交

互に配置されていたが、研究 5 の印象評定において実験参加者から「刺激ごとの差が大きくて負担になる」という感想が聞かれたため、音声刺激は前半に、非音声刺激は後半に提示順序を変更した。この際、音声刺激の中に第一刺激に適したものがなかったため非音声刺激を採用した。刺激の提示順序に関しては今後再考する必要があるだろう。刺激の提示順序の変更に伴い、第 2 刺激の提示前に「ここからしばらくは人の会話が入った音になります」、第 10 刺激の提示前に「ここからは人の会話が入っていない音になります」という教示を追加した。

また、指標は音声刺激と非音声刺激で統一的なものになるよう変更・修正したが、ここまでの研究において音声刺激と非音声刺激はその刺激や反応に質的な差が認められているため、別々に評定値を算出することとした。具体的な指標の変更・修正点は以下の通りである。まず、「主題の性質」という指標を新たに追加した。これは評定者から見た物語の主題について「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」の 5 件法で評定を行う指標である。たとえば、「仲間の助けを得て、脅威の対象からうまく逃げのびる」という内容の物語では、「他者に向ける感情」は「仲間」と「脅威の対象」で中和されるか「両価的」となり、「結末の性質」では「肯定的」と評定されるのに対し、本指標では「脅威の対象からの逃避」という主題から「否定的」と評定される。本指標には実験参加者の内的世界や対象関係の性質が反映されると考えられる。「標準的年齢／性別設定からのずれ」は非音声刺激に適用できないため除外した。次に、「明確な結末」はどちらかといえば結末が曖昧なまま物語を終える方に解釈の着眼点があるため、「曖昧な結末」と指標の方向性を逆転させた。「主観的印象（対刺激）」と「主観的印象（対人物）」は内容も解釈も類似しているため、「主観的印象（対刺激）」にまとめた。「音要素の取り込み」に関しては、音声刺激も音要素への分割を試み、非音声刺激は研究 2 において一緒に取り込まれやすかった音要素を 1 つにまとめ、よりコンパクトになるよう修正した。

第八章のまとめ

本章では、研究 4 で選定した 16 刺激に対する反応の特徴を明らかにすることを目的とした。具体的には、研究 1 と研究 2 の実験データから、研究 4 で再

構成した 16 刺激に対する評定値を整理し、刺激ごとに各指標の出現率や平均値を算出した。その結果、音声刺激では葛藤的な会話場面の刺激であることから対人関係の否定的な側面を強く映し出すのに対し、非音声刺激でも導入人物の多さによって対人関係は映し出されるものの音声刺激ほど否定的な側面は表れず、また、非音声刺激は漠然としているため、実験参加者は背景音を含めて刺激の細部まで注意深く聴き取り、時間をかけて慎重に反応することが示唆された。さらに、音声刺激全体および非音声刺激全体と各刺激における数値を比較し、各刺激に対する反応の相対的な特徴も明らかになった。これらの特徴は、今後、本論の APT で量的分析や質的分析を行う際の基準として活用できるだろう。本論では、**Big Five** およびロールシャッハ法との関連から有効な聴覚刺激を選定し（研究 4）、各刺激や反応の特徴を明らかにした（研究 5, 6）、この APT を完成版とした。

第三部

聴覚投映法の応用

第九章

【研究 7】聴覚投映法と自己関係づけの関連

9-1 問題と目的

ここまでの研究では、独自に作成した音声刺激と非音声刺激について、主に Big Five やロールシャッハ法との関連に基づいて選定を行い、APT の開発を行ってきた（研究 1~4）。また、より客観的で妥当性のある反応分析および解釈を行うことが可能になるよう、選定した聴覚刺激や反応の特徴を明確化した（研究 5, 6）。本論では、この音声刺激と非音声刺激による APT を完成版と位置づけ、以降ではその完成版 APT の応用に関する研究を行うこととする。

その 1 つ目の研究として、本研究では、心理臨床で出会う可能性のあるパーソナリティの中から自己関係づけを取り上げ、本論の完成版 APT と自己関係づけがどのように関連するかを検討する。自己関係づけとは、「他者の何でもない仕草を自己に被害的に関連づける傾向（金子，2000）」であり、一般青年に見られる被害妄想的観念とされている。DSM-5（American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014）によると、妄想とは「相反する証拠があっても変わることのない固定した信念」であり、従来は統合失調症等に特有のもので、妄想的観念とは区別して考えられてきた。これに対して、臨床的に統合失調症者であっても妄想の確信度などは変化し、健常者であっても妄想的な思考や認知が少なからず見られることが報告されてきた経緯もあり、近年では、妄想と妄想的観念は連続したものとして捉えられるようになってきている（たとえば Fenigstein & Venable, 1992；丹野・石垣・杉浦，2000；山内・須藤・丹野，2008）。本研究の視点も同様である。APT と自己関係づけの関連を検討することにより、APT が青年期の被害妄想的観念をどのように映し出すが明らかになり、心理臨床の現場で用いる際の有用性についても示唆が得られるだろう。

一般に、妄想や妄想的観念は主題的側面（被害・微小・誇大など）や形式的

側面（確信度・訂正可能性・内容の正誤など）（丹野ら，2000），さらに認知的側面（バイアスなど）（金子，2001）など様々な次元で捉えられる。自己関係づけは妄想的観念に包含されると考えられ，主題的側面では，被害観念や疎外観念（丹野ら，2000），DSM-5における「関係妄想（すなわち，あるしぐさや言葉，身のまわりのちょっとしたことなどが自分に向けられている，という信念）」に関連すると推察される。自己関係づけの形式的側面や認知的側面に焦点をあてた研究は少ないが，津田（2011）は自己関係づけを「ネガティブな関係妄想的認知」と捉えている。自己関係づけを測定するために開発された自己関係づけ尺度（金子，2000）の項目には，「友達が内緒話をしていると，自分の悪口を言われているのではないかと気になる」のように容易にイメージできる日常場面が設定されており，内的な対象関係などではなく外的刺激に対する認知の在り様に焦点があてられていることが見て取れる。したがって，自己関係づけは，妄想的観念の中でも，被害妄想的観念や関係妄想的観念という比較的多く見られる内容と，外的刺激に対する認知に焦点があてられた概念ということができよう。

自己関係づけや被害妄想的観念と他の性格特性との関連を検討する研究も多く行われている。金子（2000）は，大学生212名を対象に自己関係づけ尺度と自己意識尺度（辻，1993）を実施し，自己関係づけは公的自己意識と中程度の正の関連を示し，私的自己意識とは無関連であったことを報告している。つまり，自己が他者にどう見られているか気にするほど，自己関係づけも高まると考えられる。被害妄想的観念と否定的評価への懸念に中程度の正の相関が見られたという研究もある（山内・須藤・丹野，2009）。金子（2000，1999）は自己関係づけと他者意識の正の関連も示し，自己関係づけは他者に対する強い関心の表れであると考察している。また，金子ら（2003）は，高校生487名を対象に自己関係づけ尺度と対人恐怖心性尺度（堀井・小川，1997）を実施し，中程度の正の相関を報告している。金子（2000）では自己関係づけと社会的不安および不信感との間でも中程度の正の相関が見られ，被害妄想的観念と特性不安およびBig Fiveにおける情緒不安定性（神経症傾向）との間にも中程度の正の相関が得られている（山内ら，2009；山内ら，2008）。これらの研究から，自己関係づけの高い人は対人場面において強く不安を感じ，他者に対して不信

感を抱きやすいことが推測される。それによって必ずしも集団生活に馴染めないとは限らないが、自己関係づけが高いほど個性を尊重しつつ自身の内的な基準に従って行動する傾向が弱いという報告や（金子，2000），被害妄想的観念が高いほど Big Five における調和性が低い（山内ら，2008）という報告もある。さらに，自己関係づけや被害妄想的観念と自尊心の負の関連も多くの研究で報告されている（金子，2000；山内ら，2009；津田，2011；津田・伊藤，2012）。他者からの否定的評価を過度に気にする傾向は，自尊心の低さと表裏の関係にあると推察される。

本研究では，自己関係づけが本論の完成版 APT の反応としてどのように表れるかを明らかにすることを目的とする。上記の先行研究をもとに考えると，自己関係づけが高い人ほど，①他者に強く注目して，その様子や行動を自己に引きつけて捉え，②他者に対する不信感や被害感が強く，③自尊心が低いことが予想される。これらは完成版 APT の指標に当てはめると以下の 3 つの仮説にまとめられる。この仮説検討に加えて，他の APT 指標についても自己関係づけとの関連を探索的に検討する。

仮説 1：自己関係づけと「他者に向ける関心」の間には正の相関がある。

仮説 2：自己関係づけと「他者に向ける感情（性質）」の間には負の相関がある。

仮説 3：自己関係づけと「自己に向ける感情（性質）」の間には負の相関がある。

9-2 方法

（1）質問紙調査

実施時期 2011 年 7～9 月

対象者 大学生・大学院生 392 名（男性 189 名，女性 197 名，性別不明 6 名，平均年齢 19.43 歳 ($SD=1.34$)）を対象とした。

質問紙 自己関係づけ尺度（金子，2000）を採用した。金子に倣って 12 項目の質問に 7 つのダミー項目を加え，「非常にあてはまる」～「全然あてはま

らない」の 5 件法で回答を求めた（資料 12）。なお、研究 8 における対人恐怖心性尺度 II（堀井，2006）も同時に実施した。

手続き 大学の講義終了後の時間に調査協力を依頼した。個人情報の取り扱いについて説明した上で、実験への協力を呼びかけ、協力可能な者には質問紙の所定欄に名前と連絡先を記入してもらった。

（2）実験

実施時期 2011 年 10～12 月の日中 9:00～18:00 の間に実施した。

実験参加者 質問紙調査において実験に協力可能と意思表示をした、大学生・大学院生 63 名（男性 22 名，女性 41 名，平均年齢 19.42 歳($SD=1.57$))を対象とした。

聴覚刺激 本論の完成版 APT の 16 刺激（表 9-1，資料 8）を採用した。音声刺激 8 つと非音声刺激 8 つから成り，概ね音声刺激が前半に，非音声刺激が後半に配置されている。

手続き 実施マニュアル（資料 9）に従って APT を実施した。なお，後で詳しく分析するため，参加者の了承を得た上で，IC レコーダーで実験の様子を録音した。

倫理的配慮 最初に実験の概要や個人情報保護に関して説明し，インフォームドコンセントに十分な配慮を行い，実験参加同意書に署名を得た上で実験を開始した。また，実験中に体調に変化が生じたときにはいつでも実験を中断・中止できることを伝えた。実験終了後には感想や体調について聴き，実験に対する質問を受け付けるなどディブリーフィングを簡潔に行った。さらに，後になって気分や体調に異変が生じた際の相談先として，大学内の相談窓口の情報を提供した。なお，本研究は事前に教育学研究科における研究倫理委員会の承認を得ている（承認 ID：11-2-001）。

分析方法 内容面・形式面・認知面の指標を用いて，評定マニュアル（資料 10，11）に従い，各反応について評定を行った。指標とその評定値の算出方法について表 9-2 および表 9-3 に示す。ここまでの章で音声刺激と非音声刺激はその刺激や反応に質的な差が認められているため，別々に評定値を算出した。

表 9-1. 聴覚刺激の提示順序と内容

刺激	内容
1	都会の交差点で車や人々が往来する中、ハイヒールや革靴で歩く足音が聴こえてくる。最後にハイヒールで走る足音が近づいてきて、手前で立ち止まる。
2	静かな場所で、男性 A「例の件、うまく行ったらしいな」、男性 B「ああ、少々てこずったがね」、男性 A「ふん、さすがだ」、男性 B「ありがとう。こっちもほっと一安心だよ」。
3	いくぶん静かな場所で、女性「そんなことしちゃいけないって、いつも言ってるでしょ!?', 女の子「だって...」、女性「もうしないって約束する?」、女の子「はい」。
4	土砂降りの雨の中、1 台の車が通り過ぎ、女性「やっぱマズイって...」、男性「お前、今さら何弱気になってんだよ。もうやるしかないって分かっているだろ? さあ、行くぞ!」、女性「あ、ちょっと待ってよ...」。
5	公園で子どもたちが遊んでいる中で、男性「何ですかねてんの? ちゃんと言わなきゃ分かんないだろ?」、男の子「別にすねて何かないよ...」、男性「言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさい?」、男の子「うん...」。
6	大勢の客で賑わっているレストランで、女性 A「...そっかあ...そりゃ辛かったね...」、女性 B「うん...」、<携帯電話の着信音>、女性 A「あ、ちょっとごめん」、<携帯電話に出る>、女性 A「あ、はいはい、どうしたの?え、うっそお!?へえー...うん...うん、うん分かった! じゃあ明日ねー」、<ブランク>。
7	静かな場所で、男性 A「お前は何をしたのか分かっているのか!?', 男性 B「はい、でも、あれは...」、男性 A「言い訳を聞きたいんじゃない! こんなことになって...お前どうするつもりなんだ!?', <ブランク>。
8	高架下で、女性 A「それよりさ、どこ行こっか?」、女性 B「どっか遠いところ...どうせなら海がいいな」。
9	静かな場所で、女性 A「あ、私こっちだから」、男性「あ、うん、じゃあねー」、女性 B「またねー!」、女性 A「また!」、<足音>。
10	静かな場所で、冷蔵庫の微かな唸り。電気スイッチを操作する音がして、木製の床を靴で歩く足音と共にゆっくり移動していく。衣擦れの音の後に、ベッドに倒れ込む音。
11	走行する電車内で、乗客の小さなざわめきが聞こえる。(開始から約 20 秒後) 女性が 2 度深いため息をつく。最後に踏み切りの音がかすかに聴こえてくる。
12	静かな地下の廊下を歩く 2 人の足音が近づいてきて止まる。鍵を開け、軋むドアを開閉した後、再び鍵を閉める。
13	地響きと荒々しい波の音が聞こえる。砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が途中で止まり、動物の羽音や鳴き声が聴こえてくる。
14	静かな場所で、衣擦れの音が聞こえる。
15	静かな場所で、心拍が聞こえる。
16	ヒグラシや鳥の鳴き声と沢の音が聞こえる。

※ 参加者によっては、必ずしもこの通りに聞こえるとは限らない

※ 網掛け部分は音声刺激、それ以外は非音声刺激である

表 9-2. 本研究で用いた APT の指標

	指標
内容面	主題の性質, 自己の内界に向ける関心, 自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 人物の導入, 主人公の導入, 導入人物の性質, 独特な人物設定, 動物の導入, 有音/無音の背景音の取り込み, 背景音に対する情緒的意味づけ, 曖昧な結末, 結末の性質, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己言及, 主観的印象(対刺激/対物語)
形式面	反応の失敗・拒否, 初発反応時間, 刺激の追加提示回数, 語りの様式(移入形式/会話形式/物語形式), 複数の物語
認知面	微小音要素の取り込み, 音要素の取り込み, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, 登場人物の標準的位置関係からのずれ, 聴空間の拡大・縮小, 他の感覚への言及, 触覚情報の性質

※ 「主題の性質」を追加し, 「音要素の統合」「標準的年齢/性別設定からのずれ」「実験者による質問回数」は除外した。

※ 「明確な結末」は「曖昧な結末」と逆転させて名称を改め, 「主観的印象(対人物)」は「主観的印象(対刺激)」に統合した。

※ 「音要素の取り込み」は音声刺激にも適用を試み, 音要素の分割がよりコンパクトになるよう全体的に修正した。

表 9-3. 各指標の評定値の算出方法

評定方法	評定値の算出方法	該当する指標
時間や回数を計測	物語 8 個(参加者 1 人分)に対する評定をそのまま合計	初発反応時間, 刺激の追加提示回数
「ある／ない」 「該当する／ 該当しない」 の 2 件法	「ある／ない」「該当する／ 該当しない」を「1／0」に 変換後, 物語 8 個分を合 計	自己の内界に向ける関心, 人物の導 入, 主人公の導入, 独特な人物設定, 動物の導入, 背景音の取り込み, 曖昧 な結末, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己 言及, 主観的印象, 反応の失敗・拒 否, 語りの様式, 複数の物語, 微小音 要素の取り込み, 音要素に対する標準 的意味づけからのずれ, 登場人物の 標準的位置関係からのずれ, 聴空間 の拡大・縮小, 他の感覚への言及
	音要素ごとに「該当する／ 該当しない」を「1／0」に 変換後, 物語 8 個分を合 計	音要素の取り込み
「肯定的(強 い)／どちらで もない／否定 的(弱い)」「両 価的」「言及な し」の 5 件法	言及 「言及なし以外／言 及なし」を「1／0」に変換 後, 物語 8 個分を合計	主題の性質, 自己に向ける感情, 他者 に向ける関心, 他者に向ける感情, 父 親(的人物)に向ける感情, 母親(的人 物)に向ける感情, 導入人物の性質, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結 末の性質, 触覚情報の性質
	性質 「肯定的(強い)／ どちらでもない／否定的 (弱い)」を「1／0／-1」 に変換後, 物語 8 個分を 合計	
	両価 「両価的／両価的 以外」を「1／0」に変換 後, 物語 8 個分を合計	

※ 音声刺激と非音声刺激で別々に分析するため, 物語 16 個分ではなく物語 8 個分
を合計して評定値を算出した。

9-3 結果

(1) APT の評定値算出

各反応について、評定マニュアルに従って、参加者 63 名分について筆者を含む臨床心理士 2 名で独立して評定を行なった。Cohen の κ 係数により一致率を算出したところ $\kappa = .81$ であり、十分な信頼性が確認された。評定が一致しなかった部分については合議により最終的な評定を決定し、指標ごとに音声刺激 8 個分、非音声刺激 8 個分の評定値を算出した。音声刺激と非音声刺激の評定値の差について Mann-Whitney の U 検定により検討したところ、半数以上の指標で有意差が認められたため、以下では別々に検討する。音声刺激および非音声刺激における評定値の平均と標準偏差を表 9-5 に示す。なお、「主人公の導入」と「触覚情報の性質」は音声刺激において該当する反応がなかったため、非音声刺激のみで検討する。また、「動物の導入」や「自己言及」、「主観的印象（対刺激）」、「主観的印象（対物語）」、「反応の失敗・拒否」、「語りの様式（会話形式）」、「語りの様式（物語形式）」、「登場人物の標準的位置関係からのずれ」は、音声刺激と非音声刺激の両方で、8 刺激を通して 1 回以上該当した参加者数が 10 名に満たなかったため、分析対象から外した。「主題の性質」、「自己に向ける感情」、「他者に向ける感情」、「父親（的人物）に向ける感情」、「母親（的人物）に向ける感情」、「導入人物の性質」、「背景音に対する情緒的意味づけ」、「結末の性質」、「触覚情報の性質」における「両価」の評定も同様に該当数が小さかったため分析対象から外した。

(2) 自己関係づけの得点算出

実験参加者 63 名分について金子（2000）に準じて得点を算出したところ、平均値は 39.46、標準偏差は 12.54 であった。金子の研究では男子大学生 83 名で平均値 34.36、標準偏差 10.9、女子大学生 117 名で平均値 35.30、標準偏差 10.5 であったことから、本研究の参加者は自己関係づけが比較的高い学生が多いと考えられる。

(3) 順位相関係数の算出

APT の評定値と自己関係づけ尺度の得点について順位相関係数を算出し、無相関検定を行った結果、以下の有意な相関が認められた (表 9-6)。まず、仮説に関わる指標を見て行くと、「他者に向ける関心」と自己関係づけの間には、音声刺激でも非音声刺激でも弱い正の相関が見られた (順に $r=.35, p<.01$; $r=.30, p<.05$)。「他者に向ける感情 (性質)」と自己関係づけの間には、音声刺激でも非音声刺激でも有意な相関は見られなかった (順に $r=-.11, n.s.$; $r=-.07, n.s.$)。「自己に向ける感情 (性質)」と自己関係づけの間には、音声刺激では弱い負の相関が見られたのに対し ($r=-.26, p<.05$)、非音声刺激では有意な相関は見られなかった ($r=-.03, n.s.$)。

次に、探索的に他の指標を見て行くと、内容面の指標では、「主題の性質」では音声刺激において弱い負の相関が見られた ($r=-.25, p<.05$)。「自己の内界に向ける関心」は音声刺激でも非音声刺激でも弱い～中程度の正の相関が見られた (順に $r=.33, p<.01$; $r=.51, p<.001$)。「自己に向ける感情 (言及)」は音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r=.37, p<.01$)。「他者に向ける感情 (言及)」は非音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r=.36, p<.01$)。「父親 (的人物) に向ける感情 (言及)」は音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r=.28, p<.05$)。「母親 (的人物) に向ける感情 (言及)」は音声刺激と非音声刺激の両方で弱い～中程度の正の相関が (順に $r=.26, p<.05$; $r=.42, p<.001$)、 「母親 (的人物) に向ける感情 (性質)」は音声刺激と非音声刺激の両方で弱い負の相関が (順に $r=-.39, p<.01$; $r=-.26, p<.05$) それぞれ見られた。「人物の導入」と「主人公の導入」は非音声刺激において中程度の正の相関が見られた (順に $r=.42, p<.001$; $r=.51, p<.001$)。「導入人物の性質」は音声刺激において強い負の相関が見られた ($r=-.73, p<.001$)。「独特な人物設定」は非音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r=.28, p<.05$)。「有音の背景音の取り込み」は音声刺激において弱い負の相関が見られた ($r=-.36, p<.01$)。「背景音に対する情緒的意味づけ (言及)」は非音声刺激において中程度の正の相関が見られた ($r=.46, p<.001$)。「損傷内容」は音声刺激でも非音声刺激でも弱い～中程度の正の相関が見られた (順に $r=.54, p<.001$; $r=.25, p<.05$)。形式面の指標では、「初発反応時間」は音声刺激において弱い正の相関が見られた

($r=.25, p<.05$)。「語りの様式 (移入形式)」は音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r=.26, p<.05$)。「複数の物語」は音声刺激においても非音声刺激においても弱い負の相関が見られた (順に $r=-.32, p<.05$; $r=-.25, p<.05$)。認知面の指標では、「音要素の取り込み」は音声刺激において弱い負の相関が見られた ($r=-.27, p<.05$)。「聴空間の拡大」は音声刺激において弱い正の相関が ($r=.25, p<.05$)、「聴空間の縮小」は非音声刺激において弱い正の相関が ($r=.30, p<.05$) 見られた。「触覚情報の性質 (性質)」は非音声刺激においてのみ出現し、中程度の負の相関が見られた ($r=-.46, p<.001$)。

表 9-5. APT 指標の平均および標準偏差 (SD)

APT 指標	音声刺激		非音声刺激	
	平均	SD	平均	SD
内容面				
主題の性質	-3.84	3.17	-1.46	2.73
自己の内界に向ける関心	-1.35	2.71	-2.49	3.24
自己に向ける感情(言及)	1.83	1.14	1.59	1.28
自己に向ける感情(性質)	-0.38	1.13	0.13	1.07
他者に向ける関心	1.92	3.16	-2.27	3.83
他者に向ける感情(言及)	7.62	0.91	4.29	2.32
他者に向ける感情(性質)	-0.63	2.82	0.05	3.08
父親(的人物)に向ける感情(言及)	2.14	1.00	0.95	0.83
父親(的人物)に向ける感情(性質)	-0.19	1.15	0.38	1.01
母親(的人物)に向ける感情(言及)	1.63	0.70	0.89	0.70
母親(的人物)に向ける感情(性質)	-0.83	0.89	-0.06	0.84
人物の導入	4.11	1.45	3.97	1.90
主人公の導入	—	—	2.00	1.34
導入人物の性質	-1.08	1.62	0.25	2.14
独特な人物設定	4.01	1.56	3.48	2.31
有音の背景音の取り込み	3.68	1.18	4.25	0.84
無音の背景音の取り込み	0.32	0.59	1.51	1.19
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	0.94	0.67	3.46	1.38
背景音に対する情緒的意味づけ(性質)	-0.44	0.50	-0.81	1.49
曖昧な結末	4.16	2.29	4.71	1.93
結末の性質	0.43	2.66	1.00	3.09
攻撃的内容	1.33	0.80	0.73	0.95
損傷内容	0.51	0.56	1.17	1.33
形式面				
初発反応時間	100.16	121.50	111.32	71.29
刺激の追加提示回数	0.32	0.59	0.56	0.62
語りの様式(移入形式)	4.10	2.11	3.30	2.15
複数の物語	1.27	1.68	0.75	1.16
認知面				
微小音要素の取り込み	0.54	0.75	1.41	1.22
音要素の取り込み	36.73	2.05	23.56	4.32
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	0.63	0.69	0.72	0.54
聴空間の拡大	0.51	1.35	0.57	1.48
聴空間の縮小	0.44	0.59	0.76	0.84
他の感覚への言及	1.57	1.65	4.63	2.11
触覚情報の性質(言及)	—	—	2.67	0.67
触覚情報の性質(性質)	—	—	-0.92	1.24

※「主人公の導入」と「触覚情報の性質」は音声刺激では出現しなかった

表 9-6. APT の評定値と自己関係づけ尺度得点の順位相関係数

APT 指標	音声刺激	非音声刺激
内容面		
主題の性質	-.25*	-.14
自己の内界に向ける関心	.33**	.51***
自己に向ける感情(言及)	.37**	-.05
自己に向ける感情(性質)	-.26*	-.03
他者に向ける関心	.35**	.30*
他者に向ける感情(言及)	.23	.36**
他者に向ける感情(性質)	-.11	-.07
父親(的人物)に向ける感情(言及)	.28*	.18
父親(的人物)に向ける感情(性質)	-.17	.22
母親(的人物)に向ける感情(言及)	.26*	.42***
母親(的人物)に向ける感情(性質)	-.39**	-.26*
人物の導入	.20	.42***
主人公の導入	—	.51***
導入人物の性質	-.73***	.12
独特な人物設定	.20	.28*
有音の背景音の取り込み	-.36**	.15
無音の背景音の取り込み	.21	-.14
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	.14	.46***
背景音に対する情緒的意味づけ(性質)	-.18	.02
曖昧な結末	-.07	-.16
結末の性質	-.08	-.09
攻撃的内容	.03	.05
損傷内容	.54***	.25*
形式面		
初発反応時間	.25*	-.02
刺激の追加提示回数	.17	-.09
語りの様式(移入形式)	.26*	.18
複数の物語	-.32*	-.25*
認知面		
微小音要素の取り込み	-.24	-.16
音要素の取り込み	-.27*	.05
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	.03	-.04
聴空間の拡大	.25*	-.19
聴空間の縮小	-.25	.30*
他の感覚への言及	.07	.17
触覚情報の性質(言及)	—	-.15
触覚情報の性質(性質)	—	-.46***

※ 「主人公の導入」と「触覚情報の性質」は音声刺激では出現しなかった
 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

9-4 考察

(1) 仮説検討

まず、音声刺激と非音声刺激の両方において、自己関係づけが高いほど「他者に向ける関心」も高いという結果が得られ、仮説 1 は支持された。「他者に向ける関心」が高いということは、他者および対人関係についての描写が多い、あるいは複雑であることを意味する。音声刺激は葛藤的な対人場面を含んでおり、その音声刺激において他者や対人関係を詳細に語ることは、他者に対する関心の強さに加えて、対人関係に関する理解を示唆する可能性もある。金子 (1999, 2000) は自己関係づけと他者意識の正の関連と、他者意識と共感性の正の関連から、自己関係づけが高い人は他者の視点から物事を見ることができ、他者を共感的に理解しやすいという適応的側面もあることを示唆している。本結果はこの点においても一致する可能性があるだろう。これに対して、非音声刺激は葛藤的な対人場面を含んでおらず、第 1, 11, 12 刺激以外では刺激中の登場人物が 1 人以下である (表 9-1)。非音声刺激における「他者に向ける関心」の平均値は音声刺激よりも有意に低く -2.27 であり、大まかにいえば 8 個中 2, 3 個の物語では他者が登場しないか登場しても描写が乏しかったことを示している (表 9-5)。その非音声刺激において他者や対人関係を詳細に語ることは、刺激外の人物を物語に登場させることとの関連が考えられ、「他者に向ける関心」と「人物の導入」の順位相関係数を算出すると強い正の相関が見られた ($r=.77$, $p<.001$)。非音声刺激に対する物語にあえて想像上の人物を登場させて他者や対人関係を描写することは、他者に対する関心に加えて、他者や対人関係のイメージの強さを示唆する。自己関係づけは他者の何でもない仕草からの過度な想像やイメージと捉えることもでき、本結果はこの点でも一致すると考えられる。

次に、自己関係づけと「他者に向ける感情 (性質)」に有意な相関は認められず、仮説 2 は支持されなかった。自己関係づけが高い人であっても、必ずしも他者を否定的に表現するとは限らないようである。ただし、音声刺激において「導入人物の性質 (性質)」と自己関係づけの間で強い負の相関が見られた。TAT において導入人物は「語り手にとってとくに重要な存在であることが多い

(山本, 1992)」とされ, 参加者の他者イメージを色濃く反映すると考えられる。また, 音声刺激の多くは二者間の葛藤場面であり, 導入人物は第三者として登場することが多い。たとえば, 第7刺激において「生徒が悪事を働いて教師がそれを責めているが, 実は悪事の黒幕は別の生徒(導入人物)で, 教師も黒幕がいることを薄々感じている」という物語があった。この反応のように, 第三者を導入することによって二者間の葛藤は程度の差はあれ中和されることがある。「他者に向ける感情(性質)」はこうした複数の他者に向けられる感情を総合的に評定しているため, 登場人物が多いと特徴がぼやけてしまう点で限界がある。これに対して非音声刺激では, 音声刺激と同様に導入人物は平均すると8個中4個程度の物語に登場するが, 「主人公の導入」の平均値が2.00であり, 4個中2個の物語で導入人物は主人公, つまり他者ではなく自己であった(表9-5)。したがって, 非音声刺激においては「導入人物の性質(性質)」には「自己に向ける感情(性質)」も含まれているため, 音声刺激と同様の関連が見られなかったと考えられる。仮説2については「他者」や「導入人物」を分類するなどしてより詳細に検討する必要があるだろう。

最後に, 自己関係づけと「自己に向ける感情(性質)」は音声刺激において弱い負の相関が見られたが, 非音声刺激においては有意な相関が認められなかった。つまり, 仮説3は音声刺激においてのみ支持された。音声刺激では刺激中の他者の存在が明確であるのに対し, 非音声刺激では既述の通り, 8個中5個は刺激中の登場人物が1人以下で, 他者の存在は不明確であり, 他者を登場させなくても物語を作成することが可能である。自己関係づけは「他者のなんでもないしぐさを自己に被害的に関連づける傾向(金子, 2000)」であり, 他者の存在が希薄な非音声刺激においては, 被害的に感じて自尊心が低まることが現れにくかったと考えられる。また, 「自己に向ける感情(性質)」の低さと関連する可能性がある指標に「損傷内容」が挙げられる。「損傷内容」はロールシヤッフ法における損傷内容(Morbid Content)に類似した指標であり, 自己の傷つきに関連すると考えられ, 音声刺激においても非音声刺激においても自己関係づけと正の関連が見られた。したがって, 自己関係づけは自尊心の低さよりも傷つきとして表現される可能性が示唆された。

(2) 探索的検討

1) **主題の性質** 音声刺激において、自己関係づけが高い人ほど、人間関係の決裂や喪失、犯罪、被害など否定的な主題を語ることが多いという結果が得られた。本指標は参加者の対象関係の全体的な性質を反映すると想定され、自己関係づけの高い人が否定的な他者イメージを持つことと重なるだろう。非音声刺激においては登場人物が少なく、本指標で評定されるような対人関係的な主題が現れにくかったと考えられる。

2) **自己の内界に向ける関心** 音声刺激においても非音声刺激においても、自己関係づけが高い人ほど登場人物の思考や感情、その変化の過程に言及することが多かった。自己関係づけは私的自己意識とは関連しないが、公的自己意識とは正の関連が報告されている(金子, 2000)。これに対して、本指標は参加者の内向性や内省を反映し(研究1, 研究2)、私的自己意識に関連すると考えられるため、本結果と一致しない。先行研究から以下の2点で捉えられるかもしれない。第一に、津田(2011)は自己関係づけと、不確実な対人場面での相手の本心について反すうし続ける傾向との間に正の相関を見出し、自己の内部での反すう(情報補完)が行き過ぎると自己関係づけ(関係妄想的認知)が生じ得ると考察している。反すうは内省や内向性とも関連すると考えられ、この視点に立つと、本指標と自己関係づけとの関連は了解可能と考えられる。非音声刺激は音声刺激よりも漠然とした印象を有しており(研究5)、その非音声刺激において相対的に強い関連が見られたことも、この視点での解釈に合致するだろう。第二に、そもそも被害妄想的観念には、自己関係づけが測定する外的刺激の取り込みの側面に加えて、敵意や不安の投影の側面も含まれている。後者は自己関係づけ尺度の前身である被害妄想的心性尺度(金子, 1999)の第二因子「猜疑心」に相当し、「猜疑心」は公的自己意識とは関連しないが、私的自己意識とは正の関連が見出されている。自己関係づけも「猜疑心」も被害妄想的観念という点では一致し、「猜疑心」と「自己の内界に向ける関心」は私的自己意識の点で一致する可能性があるため、自己関係づけと本指標との関連が見られたのかもしれない。

3) **自己に向ける感情(言及)** 音声刺激において、自己関係づけが高い人ほど自己に対する感情に言及することが多かった。本指標は物語の主人公の自

信や社会的地位の高低に言及されるほど値が高くなり、私的自己意識も公的自己意識も関連する可能性がある。自己関係づけは公的自己意識と関連するため（金子，2000），本指標との関連は了解可能である。また，葛藤的な対人場面における自己注目の強さも反映されると考えられ，対人場面において些細な情報を自己に関連づける自己関係づけとは概念的にも一致する部分があるだろう。非音声刺激において関連が見られなかったのは，音声刺激に比べて刺激中に対人関係の要素があまり含まれておらず，本指標がより私的自己意識の側面を反映したためと考えられる。

4) 他者に向ける感情（言及） 非音声刺激において，自己関係づけが高い人ほど他者に向ける感情に言及することが多かった。本指標は「他者に向ける関心」と比べると，対人関係に関する描写の複雑さを含まない点で異なる。しかし，非音声刺激においては対人関係に関する描写の幅が小さく，本指標と「他者に向ける関心」の順位相関係数は強い正の相関を示していた（ $r=0.86$ ）。このため，本結果は「他者に向ける関心」と同様の視点から了解できるだろう。他方，音声刺激においては対人関係に関する描写に幅があるため，本指標と「他者に向ける関心」の順位相関係数は相対的に低かった（ $r=0.66$ ）。自己関係づけは他者や対人関係の複雑な認知を捉える概念であり，そのことを本研究のAPTが映し出した可能性がある。

5) 父親（的人物）に向ける感情（言及） 音声刺激において，自己関係づけが高い人ほど父親やそれに近い人物を物語に登場させることが多かった。本研究の音声刺激では，平均すると8つ中2つの刺激において父親やそれに近い人物が物語に登場する（表9-5）。つまり，父子の会話場面である第5刺激の他に，上司（先生）が部下（生徒）を叱っている場面とされることが多い第7刺激，あるいは他の刺激で導入人物として父親が登場する可能性が考えられる。本指標には父親イメージや父子関係の強さが反映されると考えられ，自己関係づけとの関連は了解が難しい。上記の父親やそれに近い人物が登場する刺激は諭されたり叱られたりする内容であり，いわゆる超自我に起因する不安に関連する可能性もある。そのような不安に対する感度を本指標が反映しているとしたら，対人場面の些細なことで自分が責められていると感じる自己関係づけとの関連も了解できるかもしれない。この解釈にかかわらず，本指標の評定対象

が、どの刺激において、どのような人物として登場しているか、詳細な検討が必要であろう。

6) 母親(的人物)に向ける感情(言及) 音声刺激と非音声刺激の両方で、自己関係づけが高い人ほど母親やそれに近い人物を物語に登場させることが多かった。本研究の刺激中で母親やそれに近い人物の存在が明確なのは第3刺激のみであり、第15刺激が胎内の音とされる場合があることを除けば、本指標の値が高くなるのは導入人物として母親が登場したときである。本指標には母親イメージや母子関係の強さが反映されると考えられ、自己関係づけとの関連は了解が難しい。「父親(的人物)に向ける感情(言及)」と同様に、本指標の評定対象が、どの刺激において、どのような人物として登場しているか、詳細な検討が必要であろう。

7) 母親(的人物)に向ける感情(性質) 音声刺激と非音声刺激の両方で、自己関係づけが高い人ほど母親やそれに近い人物を否定的な人物として語ることが多かった。本指標には、母親イメージや母子関係、アタッチメントの質が反映されると考えられる。第四章と第三章では、本指標の否定群は肯定群よりもBig Fiveの協調性が低く、第五章では、非音声刺激において、本指標の否定群はロールシャッハ法のHVI陽性に該当することが多かった。協調性の低さもHVIへの該当も自己関係づけと重なる部分があり、本結果は了解可能と考えられる。

8) 主人公の導入 本研究ではこの指標に該当する反応は非音声刺激においてのみ出現し、自己関係づけが高い人ほど、導入人物を主人公にして物語を作成することが多かった。TATにおいても「主人公の導入」は見られるが、「例外的な場合であり、大多数のTATの物語では、中心的な扱いを受けるのは、絵に描かれた人物である(鈴木, 1997)」。本研究の非音声刺激においても、刺激中に登場人物がいない第16刺激を除けば、刺激中の人物の足音が聴き取りにくい第13刺激や、往来する人々の足音が聞こえるため固定点に存在する主人公をイメージしやすい第1刺激など、誘因が考えられる刺激で出現が見られる程度であった。このように、何もないところに重要な視点を置くことは先述の「猜疑心」と重なるため、自己関係づけとの間にも関連が見られた可能性がある。ただし、APTにおいては導入人物を主人公とする反応が多いことも指摘さ

れている（熊倉，1989）。本研究では，ほとんどの非音声刺激が音声刺激の後に配列されており，その順序効果によって「主人公の導入」が少なくなった可能性も考えられる。APTにおける本指標の意味合いについては，今後も知見を積み重ねて明らかにしていく必要があるだろう。

9) 独特な人物設定 非音声刺激において，自己関係づけが高い人ほど登場人物に外見や社会的属性，性格などを設定することが多かった。本指標には自己の内面（性格）および外面（外見や社会的属性）に対する関心の強さを反映していると考えられ，これは私的自己意識と公的自己意識に関連すると考えられる。他方，自己関係づけは公的自己意識との間には中程度の正の相関があるとされており（金子，2000），この点から本結果は了解可能である。音声刺激において有意な関連が見られなかったのは，刺激中に台詞があることによって人物設定が規定される部分があるため，差が生じにくかった可能性が考えられる。

10) 有音の背景音の取り込み 音声刺激において，自己関係づけが高い人ほど有音の背景音を物語に取り込まなかった。本指標には周囲の環境に対する関心や敏感さ，注意深さ，および刺激全体を取り込もうとする努力などが反映されると考えられる。他方，自己関係づけの高い人は他者の何気ない行動が気になり被害的に受け止めると，それを別の視点から眺めることが難しいと考えられる。つまり，刺激の前景にある対人場面に注目すると視野が狭まり，周囲の環境にあまり注意を向けられなかった可能性がある。この観点当てはまる限りにおいて，本結果も了解可能と考えられる。なお，音声刺激においてのみ関連が見られたのは，音声刺激では台詞や人物つまり前景と，場についての情報つまり後景が明確に聞き分けられるのに対し，非音声刺激ではその境界が曖昧であるためと考えられる。非音声刺激では，前景と後景が逆転したり，主人公の導入により前景が増えたりすることが実際に生じており，この点については詳細に検討する余地がある。

11) 背景音に対する情緒的意味づけ（言及） 非音声刺激において，自己関係づけが高い人ほど背景音に対して情緒的に意味づけを行うことが多かった。TATにおける背景と同様に，非音声刺激における背景音は広義の他者と考えられ，本指標には他者や周囲の環境に対する関心や注意の程度が反映されると考

えられる。つまり、「他者に向ける感情（言及）」や「他者に向ける関心」と同様の視点から本結果も了解可能であろう。なお、音声刺激では登場人物が多く、対人関係そのものが前面に出て、背景音はあくまで場の情報として処理されやすかったため、同様の関連が見られなかったと考えられる。

1 2) 背景音に対する情緒的意味づけ（性質）、攻撃的内容 これらの指標では有意な関連は見られなかった。前者については、社会・環境に対する安心・不安を映し出す可能性のある指標であり、自己関係づけも社会的不安との間に正の関連が報告されているため（金子，2000）、本指標と自己関係づけには正の関連が予測されたが、それとは一致しない結果が得られた。本研究においては、背景音は有音，無音にかかわらず，有音の中でも自然の音だけであるか人が発する音が含まれているかにかかわらず，本指標の評定対象としていた。他の APT 指標にもいえることではあるが，肯定的な意味づけと否定的な意味づけのバランスだけではなく，個々の反応の質に関してより詳細に検討する必要がある。後者については，攻撃性を映し出す可能性のある指標であったのに対し，被害妄想的観念と怒りの正の関連を報告する研究はあるものの（例えば，山内ら，2009），自己関係づけと周囲に対する怒りや敵意との関連を示す研究は見当たらない。自己関係づけと怒りの関連も含めて，本結果にも今後検討の余地がある。

1 3) 初発反応時間 音声刺激において，自己関係づけが高い人ほど刺激提示後から物語を語り始めるまでの時間が長かった。音声刺激において初発反応時間が長いことは，慎重さや刺激中の葛藤を抱え吟味できる力に関連すると考えられる。他方，自己関係づけが高い人は他者や被害感には敏感であるが，それを感じつつも対人場面で適応的に行動できるところがある（金子・本城・高村，2003）。また，他の APT 指標との関連をふまえると，自己関係づけが高い人は刺激外の人物を想像して物語に登場させ，より多様で複雑な対人関係について語ることが多く，このような物語作成には時間がかかると考えられる。これらの視点から，本結果は了解可能であろう。

1 4) 語りの様式（移入形式） 音声刺激において，自己関係づけが高い人ほど，登場人物になりきり，その台詞を交えて物語を展開することが多かった。このような語りがなされるとき，参加者は登場人物に一時的にであれ強く同一

化していると考えられ、情緒性の豊かさも反映される（鈴木，1997）。一方、自己関係づけが高い人は、他者のなんでもないしぐさに対して、その他者の心中を想像し、自己に被害的に関連づけ、感情的に反応する（金子，2000）。このような同一化や情緒性の観点から、本指標と自己関係づけには重なる部分があると考えられよう。

15) 複数の物語 音声刺激においても非音声刺激においても、自己関係づけが高い人ほど、複数の物語を作成することが少なかった。参加者が1つではなく複数の物語や筋も思い浮かんだことを言語化するとき、参加者の反応に対する関与の度合いは低まり、参加者と物語の心理的距離は大きくなることが多いと考えられる。複数の物語が独立して詳細に語られる場合は例外であるが、それは非常に希少である。一方、自己関係づけが高い人は、刺激と自己の心理的距離が近くなり、他の視点に立つことが難しいため、複数の物語を作成することが少なかったのは了解可能である。

16) 音要素の取り込み 音声刺激において、自己関係づけが高い人ほど音要素をあまり取り込まなかった。本指標は、課題に取り組む際に情報をより多く取り込むことで対処しようとするか、情報の取り込みは最小限で内的作業により対処しようとするかという観点から、向性を反映すると考えられる。このため本結果は「自己の内界に向ける関心」と同様の視点から解釈することもできるだろう。また、音声刺激において音要素を多く取り込むということは、刺激中の会話は取りこぼされることがほとんどないため、会話の周辺的な情報および背景音を多く取り込んでいることを示す。つまり、本指標は情報処理における繊細さや警戒の程度も反映されることが考えられる。自己関係づけが高い人も繊細さや警戒心が強いと考えられるが、「有音の背景音の取り込み」の考察でも述べたように、視野が背景まで広がるよりも前景の対人関係に狭まる性質の繊細さや警戒心を持っている可能性がある。結果として、本指標と自己関係づけの間には負の関連が見られたと考えることができよう。

17) 聴空間の拡大／縮小 音声刺激において、自己関係づけが高い人ほど、聴覚刺激が構成する空間とは別の空間を想像して物語を展開させることが多かった。本指標への該当は、たいてい物語の過去あるいは未来の場面を展開する空間を想像し、詳しく語る場合に生じる。このため、本指標には想像性が反映

され、物語の現在、つまり聴覚刺激の場面への言及が少ない場合には、刺激の回避も読み取ることができるだろう。自己関係づけが高い人は、創造性の高さも刺激からの回避傾向も当てはまるところがあり、本結果は了解可能である。これに対して、非音声刺激では、自己関係づけが高い人ほど聴空間を小さく加工して物語を展開することが多かった。本指標は、物語の現在の場面において壁や建物、乗り物などを設定することで空間を区切った場合に評定された。非音声刺激は全体的に漠然とした刺激であり（第七章）、その刺激空間を明確化し安定させる加工を行うことから、本指標には状況の曖昧さに由来する不安や、不安な状況に枠組みを設定する対処が読み取れるだろう。他方、自己関係づけの高い人は、対人場面における曖昧な情報をそのままにしておけず、自己に関連づけ、意味づけを行う傾向があり、本指標と重なる部分があると考えられよう。

18) 触覚情報の性質（性質） 触覚情報への言及は非音声刺激のみで出現し、自己関係づけが高い人ほど触覚情報を不快なものとして語るが多かった。本指標の評定値は、触覚に関する描写が不快感や冷たさなど否定的特徴を備えている場合に低くなり、逆に、心地よさや温かさなど肯定的特徴を備えていけば高くなる。ロールシャッハ法における材質反応（T）のように、他者と触れ合うような親密な関係性に対する感覚を反映することを仮定した、APT独自の指標である。一方、自己関係づけの高い人は、対人場面で被害感を感じやすいため、対人場面では適応的に振舞うことができても、親密な関係性には躊躇を示す可能性が高い。この点からすると、自己関係づけが高い人ほど触覚に関連した描写が否定的であるという本結果は了解可能と考えられる。

（3）APTにおける特殊指標の検討

「自己言及」「主観的印象（対刺激）」「主観的印象（対物語）」は、聴覚刺激をもとに物語の作成を行うというAPT課題において、実験参加者が自らの体験や印象に言及する特殊な反応を評定する指標である。刺激やAPT課題という対象と自己の心理的距離にも関連すると考えられるため、自己関係づけとの関連も検討したかったが、該当数が非常に少なかった。本研究では実際の反応例からその特徴について言及するにとどめておき、詳細な検討は今後の課題とした

い。

1) **自己言及** 第5刺激で「私きょうだいが多いから、こういうのよくあった」と同胞葛藤に関する物語を作り、第7刺激で「高校のとき〇〇部で、こんなふうに些細なミスで先輩からキレられたことがある」とそのときのエピソードを交えて物語を作った女性参加者は、自己関係づけ尺度の得点が12であり非常に低かった。鈴木(1997)によると、本指標は未来よりも過去に向かう態度や抽象化能力の低さ、未熟な自己中心性を意味する。また、初対面の実験者に個人的体験を話す警戒の低さにも関連すると考えられる。他方、自己関係づけの高い人は他者にどう見られているかを気にし、個性を尊重しつつ内的基準に従って行動する傾向が弱い(金子, 2000)。自己関係づけの低い人はその逆であり、他者の目を過度に気にせず自分の思うように振る舞い、個性や独自性を発揮すると考えられ、このために自己体験への言及が多くなる可能性がある。

2) **主観的印象(対刺激)** 第6刺激で「最後にもものすごく間がありませんでしたか・・・この音は大嫌い」と反応した女性参加者、および、第11刺激で「電車の音が長くて、変化している感じもしないのでおかしい」と、線路沿いの屋台で酒を飲む人の物語を作った男性参加者の自己関係づけ尺度得点はそれぞれ12と18であり、いずれも非常に低かった。本指標はこのように参加者が生の感情を露わにするときに評定される(鈴木, 1997)。他方、自己関係づけの高い人は、他者にどう見られているかを気にし、内的基準に従って行動する傾向が弱い(金子, 2000)、生の感情を露わにすることはあまりないと考えられる。自己関係づけの低い人はその逆と考えられ、上記のような反応を産出したのだろう。

3) **主観的印象(対物語)** 第11刺激で、雑踏の音を食べて生きている口のお化けの話をして「ありえない話ですけど」と反応した男性参加者、および、第14刺激で、後ろめたい気持ちで女性とホテルに宿泊していた男性が翌朝何も言わずいなくなるという話をして「おかしい表現になりますけど」と反応した男性参加者の自己関係づけ尺度得点はそれぞれ56と50であり、共に非常に高かった。本指標は、このように参加者自身が作成した物語を対象化して印象を述べるときに評定される。このような反応を示すとき、参加者は実験者が物語をどのように聞いているかを強く気にしていると考えられる。この点は自己

関係づけの定義とも重なる可能性がある。

(4) まとめと今後の課題

本研究の目的は、自己関係づけが本論の完成版 APT の反応にどのように表れるかを明らかにすることであった。3つの仮説のうち仮説1は音声刺激と非音声刺激の両方で支持されたが、仮説2は両方で支持されず、仮説3は音声刺激でのみ支持された。仮説2については「他者に向ける感情」の評定対象が拡散した影響が考えられ、今後、指標について見直し、評定対象を分類するなどして詳細に検討する必要がある。仮説3については、音声刺激が対人状況を提示するのに対して非音声刺激が非対人状況を提示するという刺激の差を反映した結果と考えられ、自己関係づけが対人状況における認知傾向であること本論の APT が特徴的に映し出したといえよう。これらの仮説検討と、その他の指標の探索的検討の結果から、自己関係づけが高い人ほど、APT においては自他や対人関係について多く複雑に描写し、脅威や不安感を与える想像上の人物を導入し、自尊心の低さや傷つきを表現することが示唆された。また、自己関係づけの高い人ほど何もないところに重要な視点を置く傾向や、実験者にどのように思われるかを気にして抑制的に語る傾向が推察された。APT では刺激が目の前に残らないことから、参加者からすると刺激との心的距離の取り方が難しく、物語作成における自我関与の度合いが高く感じられる可能性がある。自己関係づけの高い人はその点において葛藤を感じやすい傾向を持っており、APT はそうした傾向を特徴的に映し出す可能性があると考えられる。このように、APT と自己関係づけの関連について一定の了解可能な結果が得られたことから、今後の臨床の場での利用可能性が示唆された。

今後の課題としては、本研究では実験参加者が大学生 63 名に限られており、3つの特殊指標において十分な検討を行うことができなかった。金子 (2000) や金子ら (2003) によると自己関係づけは男性より女性の方が有意に高いため、今後、参加者の人数を増やし、性差の視点からも検討する必要がある。また、自己関係づけが被害妄想的観念や関係妄想的観念の認知的側面に焦点をあてた概念であることを考えれば、APT 指標の中でも認知面の指標と関連が多く見られることも予想できたが、実際にはそのような特徴的な関連は見られなかった。

これは多くの先行研究が示しているように、自己関係づけが認知的側面以外の他のパーソナリティ指標と関連しているためと考えられるが、反応について質的に検討する余地がある。被害妄想的観念において自己関係づけとは異なる側面とされる猜疑心やパラノイド傾向（金子，1999）が，APTの反応にどのように表れるかも併せて検討を行うとより明確になる可能性があるだろう。さらに，他の病理に関わるパーソナリティとの関連も検討し，APTの臨床的な可能性について探求していきたい。

第九章のまとめ

本章では，本論の完成版 APT の応用に関する 1 つ目の研究を行った。具体的には，大学生 63 名（男性 22 名，女性 41 名）を対象に，APT における反応と，心理臨床で出会う可能性のある被害妄想的観念を測定する自己関係づけがどのように関連するかを検討した。APT の反応については諸指標により評定を行い，自己関係づけ尺度（金子，2000）との順位相関係数を算出した。その結果，APT においては，自己関係づけの高い人ほど 1) 自他や対人関係について多く複雑に描写し，2) 脅威や不安感を与える想像上の人物を導入し，3) 自尊心の低さや傷つきを表現することが示唆された。また，自己関係づけの高い人ほど何も音がないところに注目する傾向や，他者にどのように思われるかを気にして抑制的に語る傾向があると推察された。APT と自己関係づけの関連について概ね了解可能な結果が得られたことから，本論の完成版 APT の心理臨床における利用可能性も示唆された。

第十章

【研究 8】聴覚投映法と対人恐怖心性の関連

10-1 問題と目的

(1) 対人恐怖心性について

本研究では、研究 7 に続き、本論の完成版 APT の応用に関して検討を行う。比較対象としては、心理臨床で接する可能性のある対人恐怖心性を取り上げ、APT 反応とどのように関連するかを検討する。DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014) によると、対人恐怖症は「社会的交流において、自己の外見や動作が他者に対して不適切または不快であるという思考、感情、または確信によって、対人状況についての不安および回避が特徴である文化症候群である」と定義される。対人恐怖は「主として恐怖や不安のために対人関係の在り方に関して困難を抱える状態 (北山, 2002)」を意味し、恥や罪悪感などとの関連から日本文化に特有の問題として研究されてきた (大西, 2008 ; 永井, 1998)。近年では、この対人恐怖症に類似した青年期における一般的傾向として対人恐怖心性が取り上げられ、対人恐怖心性に関しても数多くの研究がなされてきている (向井, 2001)。

永井 (1998) によると、対人恐怖心性は、極端でない限りは青年期における健全な自己意識の分化であり、「対人状況における態度や行動の問題」「関係的自己意識の問題」「内省的自己意識の問題」という 3 つの次元で捉えられるという。「対人状況における態度や行動の問題」には集団にとけこめない、対人場面での気恥ずかしさなどが、「関係的自己意識の問題」には他者の評価や視線が気になるなどの悩みが、「内省的自己意識の問題」には不安や劣等感の強さなどが含まれる。この 3 次元について永井 (1998) は、Fenigstein & Venable (1992) による自己意識の構造、つまり、社会的不安、公的自己意識、私的自己意識との類似性を指摘している。この中でも、私的自己意識よりも公的自己意識において、対人恐怖心性との間に強い正の相関が認められることが多くの研究者に

よって報告されてきた（堀井，2001；堀井・小川，1996；菅原，1984）。対人恐怖という字義通りに考えると，自分の内面や感情など，他者から直接観察されにくい自己の側面に注意を向ける私的自己意識よりも，自分の服装や他者に対する言動など，他者から直接観察できる自己の側面に注意を向ける公的自己意識の方が関連が強いのは当然と考えられよう。

対人恐怖心性の対人的側面を扱った研究では，例えば，高倉・横田（2010）は社会的スキルと対人恐怖心性の間に負の相関が見られたことを示している。渡部（2003）は，自己呈示への動機づけが高いほど対人不安が喚起されやすいことと，自己呈示における効力感（自己呈示が成功するかどうかについての主観的確率）が低いほど対人不安が喚起されやすいことを明らかにしている。厳密には渡部のいう対人不安はいわゆる感情状態であり，一種のパーソナリティ特性ともいえる対人恐怖心性とは異なるが，自己呈示における効力感は社会的スキルによって高まることが予想され，高倉・横田（2010）の知見と符合する。さらに，益子（2009）は，対人恐怖心性と過剰適応傾向の下位尺度「自己抑制」との間に中程度の正の相関（ $r=.58$ ）を報告している。この自己抑制は「自分自身が思っていることは，外に出さない」などの項目から成っており，自己呈示との関連が予想される。対人恐怖心性の高い人は，否定的な他者評価をあまり吟味することなく受け入れる傾向が見られたという報告もある（調・高橋，2002）。

一方，対人恐怖心性と内省的自己意識や私的自己意識，およびそれに関連するパーソナリティとの関連を検討する研究も行われてきた。岡田・永井（1990）は「対人状況における態度や行動」「関係的自己意識」「内省的自己意識」の3側面と自己評価の関連を調査し，3側面すべてで弱い～中程度の負の相関が確認されている（ $r=-.69\sim-.38$ ）。青年期では現実自己と理想自己のギャップが強く意識され，かつ，そのギャップを埋めるのが困難であるため，低い自己評価のもとで対人恐怖的心性が生じやすくなると考察している。対人恐怖心性と自尊心の間に強い負の相関（ $r=-.67$ ）が見られたこと（調・高橋，2002）や，劣等感との間に中程度の正の相関（ $r=.60\sim.62$ ）が見られたこと（堀井・小川，1997；堀井，2006）を示す研究もある。益子（2009）は，対人恐怖心性と過剰適応傾向の下位尺度「自己不全感」との間に中程度の正の相関（ $r=.69$ ）

を報告している。この自己不全感は「自分に自信がない」などの項目から成り、自尊心との負の関連が予想される。また、堀井・小川（1996）は、対人恐怖心性尺度の下位尺度と、非社会的自尊心および社会的自尊心との間に弱い～強い負の相関（ $r = -.22 \sim -.78$ ）を報告しており、この社会的自尊心は自己愛とも関連すると考えられる。さらに、清水らは対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2次元モデルを提案し、一連の研究を行っている（清水・海塚，2002；清水・川邊・海塚，2006；清水・岡村，2010 など）。その中では、2次元モデルの種類の1つである「誇大 - 過敏特性両向型」に対人恐怖（森田，1953）と過敏型自己愛（Gabbard, 1994 館監訳 1997）が布置されており、対人恐怖心性と自己愛傾向の関連が整理されている。

この自己愛との関連もあり、幼少期の対人関係、特に親子関係が対人恐怖心性に与える影響について臨床的見地から指摘され、研究もなされてきている。例えば、稲垣（2007）は、自己愛的甘え尺度の3つの下位尺度と、対人恐怖心性尺度（永井，1991）の下位尺度である「関係的自己意識」との間に、弱い～中程度の正の相関（ $r = .21 \sim .49$ ）が見られたことを示し、自己愛的な甘えが満たされず自己愛が傷つけられる体験と対人恐怖心性の発生を結びつけて考察している。久保（2000）は、過去の父親・母親との関係認識（質問紙法）と回想動的家族画法（投映法）から、異なる水準で親子関係像を測定し、対人恐怖心性との比較を行った。その結果、対人恐怖心性の高い人は、質問紙では母親に対して親密さも不信も強いという二面性を示し、家族画では交流し難い両親像を描いた。このことから、久保は対人恐怖心性を愛着の不安定型として位置づけられると考察している。嶋野・鈴木・菅原（2004）は、内的作業モデル尺度（託摩・戸田，1988）の3つの下位尺度を説明変数、対人不安意識尺度（林・小川，1981）を基準変数として重回帰分析を行った結果、内的作業モデルのアンビバレント型の得点がかつとも強い影響力を持っていたことを示している。このアンビバレント型は久保（2000）のいう不安定型の1つであり、概ね一致した結果が得られている。

（2）自己関係づけとの関連について

研究7で取り上げた自己関係づけや被害妄想観念との関連もこれまでに指摘

されて来ている。松下・越川（2010）は、山下（1997）が妄想的か否かという観点から対人恐怖を確信型と緊張型に分類したことに着目し、その2種類の比較を行った結果、緊張型よりも確信型の方が自尊感情は低く、自己関係づけおよび加害観念は強かったことを報告している。さらに松下（2011）は、確信型における3種の妄想的認知（笠原，2005）、つまり、自己の身体的特徴や行動に欠点があると認識する身体欠点認知、その欠点のために他者に不快感を与えると認識する加害的認知、その欠点のため他者に避けられていると認識する被忌避的認知と、完全主義傾向や自己意識および内省の関連について検討している。その結果、女性においてのみ、妄想的認知と完全主義傾向や自己意識および内省との間に多くの正の相関が得られ、両者の関連が強いことが示された。高倉・横田（2010）は、妄想観念チェックリスト（丹野ら，2000）で測定した否定的な妄想様観念と、対人恐怖心性尺度（堀井・小川，1997）の下位尺度すべての間に、中程度の正の相関（ $r=.43\sim.63$ ）が見られたことを報告している。また、清水（2009）は対人恐怖心性を対自的側面と対他的側面に分けて自己関係づけとともにクラスター分析に投入し、4クラスターの特徴について考察している。対人恐怖心性と自己関係づけの直接的な関連については示されていないが、両者に相似点と相違点があることが前提にされている。本研究では、APTに表れる対人恐怖心性と自己関係づけの異同についても検討する。

（3）ロールシャッハ法やTATとの関連について

対人恐怖心性とロールシャッハ法の関連を量的分析から検討した研究は少ない。対人恐怖心性の程度は人間運動反応（M）など内的資質に関する変数の差として現れることはあるものの、人間に関連した反応内容（Human Content）や対象間の交流など対人関係に関する変数の差としては現れにくい（永井，1998；神谷，1999，2000；野崎，2007）。他方、ロールシャッハ法における顔反応は対人不安の指標とされており、相河（2003，2004）は、主に、対人恐怖心性の高群が低群よりも顔反応および人間運動反応（M）や動物運動反応（FM）が高かったことから、「対人恐怖心性の高い者は外界に主観的なイメージを投影しやすく、そのため、他者との適切な距離を取りにくい」と考察している。

対人恐怖心性とTATの関連を量的分析から検討した研究はさらに少ない。た

たとえば、木村（1983）は TAT 物語を主題や他者との関わりの観点から分類し、対人恐怖心性との関連について検討を行っている。その結果、対人恐怖心性の高群は低群に比べて、自我同一性の確立に努力し、他者に対して一個人として関わろうと努力しながらも、対人距離が不適切で抜き差しならないコミットか、さもなければ引きこもるという対人パターンが見られたという。しかし、これ以後の研究は行われていないか、あるいは参照することができず、対人恐怖心性が高い人に特徴的な反応といえるのか、その反応を分析・解釈するための視点として妥当であるかなど、検討すべき点は多く残された状態といえよう。

（４）本研究の目的について

本研究では、本論の完成版 APT における反応に対人恐怖心性がどのように表れるかを検討することを目的とする。ここまでに概観してきた先行研究から、対人恐怖心性が高い人には、①他者への被害感や不信感、②自尊心や自己愛の低さ、③両親に対する否定的あるいは両価的感情が予測される。これらを本研究で用いる APT の指標にあてはめると以下の仮説が立てられる。その他の指標についても探索的に検討を行い、自己関係づけとの差異に関しても考察する。

仮説 1：対人恐怖心性と「他者に向ける感情（性質）」の間には負の相関がある。

仮説 2：対人恐怖心性と「自己に向ける感情（性質）」の間には負の相関がある。

仮説 3：対人恐怖心性と「父親（的人物）に向ける感情（性質）」の間には負の相関がある。

仮説 4：対人恐怖心性と「母親（的人物）に向ける感情（性質）」の間には負の相関がある。

なお、対人恐怖心性は青年期における健全な自己意識の分化であり（永井，1998）、対人恐怖症をもう一方の極においたスペクトラムとして捉えられる。松下（2011）も、非臨床群においても対人恐怖の特徴がみられるとする先行研究を挙げ、「対人恐怖については臨床群と非臨床群の間に連続性を仮定できる」

としている。本研究もこれらと同じ視点に立ち、APT と対人恐怖心性の関連を検討することは、APT の臨床的活用の可能性を検討することにもつながると考える。

10-2 方法

(1) 質問紙調査（研究7と同時に実施）

実施時期 2011年7～9月

対象者 大学生・大学院生 392名（男性189名，女性197名，性別不明6名，平均年齢19.43歳($SD=1.34$)) を対象とした。

質問紙 対人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井，2006）を採用した。堀井は対人恐怖心性の本質が「恥」から「おびえ」へと時代的に変遷して来ていることを鑑み、「おびえ」の心性に基づく現代的な対人恐怖心性を測定する本尺度を作成している。本尺度は、5つの下位尺度（劣等恐怖，被害恐怖，自己視線・醜形恐怖，孤立・親密恐怖，加害恐怖）を含む25項目から成る。堀井に準じ，各項目について「非常にあてはまる」～「全然あてはまらない」の7件法で回答を求めた（資料13）。なお，研究7における自己関係づけ尺度（金子，2000）も同時に実施した。

手続き 大学の講義終了後の時間に調査協力を依頼した。個人情報取り扱いについて説明した上で，実験への協力を呼びかけ，協力可能な者には質問紙の所定欄に名前と連絡先を記入してもらった。

(2) 実験（研究7と同時に実施）

実施時期 2011年10～12月の日中9:00～18:00の間に実施した。

実験参加者 質問紙調査において実験に協力可能と意思表示をした，大学生・大学院生63名（男性22名，女性41名，平均年齢19.42歳($SD=1.57$)) を対象とした。

聴覚刺激 本論の完成版APTの16刺激（表10-1，資料8）を採用した。

手続き 実施マニュアル（資料9）に従ってAPTを実施した。なお，後で詳しく分析するため，参加者の了承を得た上で，ICレコーダーで実験の様子を録

音した。

倫理的配慮 最初に実験の概要や個人情報保護に関して説明し、インフォームドコンセントに十分な配慮を行い、実験参加同意書に署名を得た上で実験を開始した。また、実験中に体調に変化が生じたときにはいつでも実験を中断・中止できることを伝えた。実験終了後には感想や体調について聴き、実験に対する質問を受け付けるなどディブリーフィングを簡潔に行った。さらに、後になって気分や体調に異変が生じた際の相談先として、大学内の相談窓口の情報を提供した。なお、本研究は事前に教育学研究科における研究倫理委員会の承認を得ている（承認 ID：11-2-001）。

分析方法 評定マニュアル（資料 10, 11）に従い、内容面・形式面・認知面の諸指標により各反応について評定を行った。指標とその評定値の算出方法について表 10-2 および表 10-3 に示す。ここまでの章で音声刺激と非音声刺激はその刺激や反応に質的な差が認められているため、別々に評定値を算出した。

表 10-1. 聴覚刺激の提示順序と内容（表 9-1 を再掲）

刺激	内容
1	都会の交差点で車や人々が往来する中、ハイヒールや革靴で歩く足音が聴こえてくる。最後にハイヒールで走る足音が近づいてきて、手前で立ち止まる。
2	静かな場所で、男性 A「例の件、うまく行ったらしいな」、男性 B「ああ、少々てこずったがね」、男性 A「ふん、さすがだ」、男性 B「ありがとう。こっちもほっと一安心だよ」。
3	いくぶん静かな場所で、女性「そんなことしちゃいけないって、いつも言ってるでしょ!？」、女の子「だって...」、女性「もうしないって約束する?」、女の子「はい」。
4	土砂降りの雨の中、1 台の車が通り過ぎ、女性「やっぱマズイって...」、男性「お前、今さら何弱気になってんだよ。もうやるしかないって分かっているだろ? さあ、行くぞ!」、女性「あ、ちょっと待ってよ...」。
5	公園で子どもたちが遊んでいる中で、男性「何ですかねてんの?ちゃんとと言わなきゃ分かんないだろ?」、男の子「別にすねて何かないよ...」、男性「言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさい?」、男の子「うん...」。
6	大勢の客で賑わっているレストランで、女性 A「...そっかあ...そりゃ辛かったね...」、女性 B「うん...」、<携帯電話の着信音>、女性 A「あ、ちょっとごめん」、<携帯電話に出る>、女性 A「あ、はいはい、どうしたの?.....え、うっそお!?.....へえー...うん...うん、うん分かった!じゃあ明日ねー」、<ブランク>。
7	静かな場所で、男性 A「お前は何をしたのか分かっているのか!？」、男性 B「はい、でも、あれは...」、男性 A「言い訳を聞きたいんじゃない!こんなことになって...お前どうするつもりなんだ!？」、<ブランク>。
8	高架下で、女性 A「それよりさ、どこ行こっか?」、女性 B「どっか遠いところ...どうせなら海がいいな」。
9	静かな場所で、女性 A「あ、私こっちだから」、男性「あ、うん、じゃあねー」、女性 B「またねー!」、女性 A「また!」、<足音>。
10	静かな場所で、冷蔵庫の微かな唸り。電気スイッチを操作する音がして、木製の床を靴で歩く足音と共にゆっくり移動していく。衣擦れの音の後に、ベッドに倒れ込む音。
11	走行する電車内で、乗客の小さなざわめきが聴こえる。(開始から約 20 秒後)女性が 2 度深いため息をつく。最後に踏み切りの音がかすかに聴こえてくる。
12	静かな地下の廊下を歩く 2 人の足音が近づいてきて止まる。鍵を開け、軋むドアを開閉した後、再び鍵を閉める。
13	地響きと荒々しい波の音が聴こえる。砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が途中で止まり、動物の羽音や鳴き声が聴こえてくる。
14	静かな場所で、衣擦れの音が聴こえる。
15	静かな場所で、心拍が聴こえる。
16	ヒグラシや鳥の鳴き声と沢の音が聴こえる。

※ 参加者によっては、必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない

※ 網掛け部分は音声刺激、それ以外は非音声刺激である

表 10-2. APT 指標の内容 (表 9-2 を再掲)

	指標
内容面	主題の性質, 自己の内界に向ける関心, 自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 人物の導入, 主人公の導入, 導入人物の性質, 独特な人物設定, 動物の導入, 有音/無音の背景音の取り込み, 背景音に対する情緒的意味づけ, 曖昧な結末, 結末の性質, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己言及, 主観的印象(対刺激/対物語)
形式面	反応の失敗・拒否, 初発反応時間, 刺激の追加提示回数, 語りの様式(移入形式/会話形式/物語形式), 複数の物語
認知面	微小音要素の取り込み, 音要素の取り込み, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, 登場人物の標準的位置関係からのずれ, 聴空間の拡大・縮小, 他の感覚への言及, 触覚情報の性質

表 10-3. 各指標の評定値の算出方法（表 9-3 を再掲）

評定方法	評定値の算出方法	該当する指標
時間や回数を計測	物語 8 個(参加者 1 人分)に対する評定をそのまま合計	初発反応時間, 刺激の追加提示回数
「ある／ない」「該当する／該当しない」の 2 件法	「ある／ない」「該当する／該当しない」を「1／0」に変換後, 物語 8 個分を合計	自己の内界に向ける関心, 人物の導入, 主人公の導入, 独特な人物設定, 動物の導入, 背景音の取り込み, 曖昧な結末, 攻撃的内容, 損傷内容, 自己言及, 主観的印象, 反応の失敗・拒否, 語りの様式, 複数の物語, 微小音要素の取り込み, 音要素に対する標準的意味づけからのずれ, 登場人物の標準的位置関係からのずれ, 聴空間の拡大・縮小, 他の感覚への言及
	音要素ごとに「該当する／該当しない」を「1／0」に変換後, 物語 8 個分を合計	音要素の取り込み
「肯定的(強い)／どちらでもない／否定的(弱い)」「両価的」「言及なし」の 5 件法	言及 「言及なし以外／言及なし」を「1／0」に変換後, 物語 8 個分を合計	主題の性質, 自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 導入人物の性質, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結末の性質, 触覚情報の性質
	性質 「肯定的(強い)／どちらでもない／否定的(弱い)」を「1／0／-1」に変換後, 物語 8 個分を合計	
	両価 「両価的／両価的以外」を「1／0」に変換後, 物語 8 個分を合計	

10-3 結果

(1) APT の評定値算出

研究7と同様に、各反応について、評定マニュアルに従って、参加者63名分について筆者を含む臨床心理士2名で独立して評定を行なった。Cohenの κ 係数により一致率を算出したところ $\kappa = .81$ であり、十分な信頼性が確認された。評定が一致しなかった部分については合議により最終的な評定を決定し、指標ごとに音声刺激8個分、非音声刺激8個分の評定値を算出した。音声刺激および非音声刺激における評定値の平均と標準偏差を表10-4に示す。なお、本研究では「主人公の導入」と「触覚情報の性質」は音声刺激において該当する反応がなかったため、非音声刺激のみで検討する。また、「動物の導入」や「自己言及」、「主観的印象（対刺激）」、「主観的印象（対物語）」、「反応の失敗・拒否」、「語りの様式（会話形式）」、「語りの様式（物語形式）」、「登場人物の標準的位置関係からのずれ」は、音声刺激と非音声刺激の両方で、8刺激を通して1回以上該当した参加者数が10名に満たなかったため、分析対象から外した。「主題の性質」、「自己に向ける感情」、「他者に向ける感情」、「父親（的人物）に向ける感情」、「母親（的人物）に向ける感情」、「導入人物の性質」、「背景音に対する情緒的意味づけ」、「結末の性質」、「触覚情報の性質」における「両価」の評定も同様に該当数が小さかったため分析対象から外した。

(2) 対人恐怖心性の得点算出

堀井（2006）に準じて、5つの下位尺度および合計得点を算出した。平均および標準偏差を表10-5に示す。下位尺度の劣等恐怖が相対的に高く、自己視線・醜形恐怖や孤立・親密恐怖、被害恐怖が相対的に低かった。堀井（2014）はこの5つの下位尺度得点を用いて因子分析（主因子法）を行い1因子が抽出されたことを示し、この1因子を対人恐怖心性と命名して、対人恐怖心性尺度Ⅱの合計得点と大学生の不登校傾向との関連を検討している。本研究においても、下位尺度得点の傾向をふまえた上で、合計得点を分析対象とした。

(3) 順位相関係数の算出

APT の評定値と対人恐怖心性尺度の得点について順位相関係数を算出し、無相関検定を行なった結果、以下の有意な相関が認められた (表 10-6)。

まず、仮説検討に関わる指標では、「他者に向ける感情 (性質)」は音声刺激と非音声刺激の両方において中程度の負の相関が認められた (順に $r = -.41$, $p < .001$; $r = -.40$, $p < .01$)。「自己に向ける感情 (性質)」は音声刺激において中程度の負の相関が見られたのに対し ($r = -.49$, $p < .001$)、非音声刺激においては有意な相関は見られなかった ($r = -.02$, $n.s.$)。「父親 (的人物) に向ける感情 (性質)」は音声刺激において弱い負の相関が見られたのに対し ($r = -.37$, $p < .01$)、非音声刺激においては弱い正の相関が見られた ($r = .29$, $p < .05$)。「母親 (的人物) に向ける感情 (性質)」は音声刺激において弱い負の相関が見られたのに対し ($r = -.30$, $p < .05$)、非音声刺激においては有意な相関は見られなかった ($r = -.17$, $n.s.$)。

次に、探索的検討に関わる指標では、内容面の指標を見ていくと、「主題の性質」は、音声刺激においても非音声刺激においても、対人恐怖心性との間に弱い～中程度の負の相関が見られた (順に $r = -.48$, $p < .001$; $r = -.38$, $p < .01$)。「自己の内界に向ける関心」は非音声刺激において弱い正の相関が見られ ($r = .38$, $p < .01$)、「自己に向ける感情 (言及)」は音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r = .31$, $p < .05$)。「父親 (的人物) に向ける感情 (言及)」は非音声刺激において弱い正の相関が見られ ($r = .25$, $p < .05$)、「母親 (的人物) に向ける感情 (言及)」も非音声刺激において中程度の正の相関が見られた ($r = .40$, $p < .01$)。「導入人物の性質」は音声刺激において弱い負の相関がみられ ($r = -.25$, $p < .05$)、「独特な人物設定」は音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r = .31$, $p < .05$)。「無音の背景音の取り込み」は、音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r = .33$, $p < .01$)。「背景音に対する情緒的意味づけ (言及)」は、非音声刺激において中程度の正の相関が見られ ($r = .47$, $p < .001$)、「背景音に対する情緒的意味づけ (性質)」は、音声刺激において中程度の負の相関が見られた ($r = -.41$, $p < .01$)。「損傷内容」は非音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r = .32$, $p < .05$)。形式面の指標では、「語りの様式 (移入形式)」は、音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r = .29$, $p < .05$)。「複

数の物語作成」は、非音声刺激において中程度の負の相関が見られた ($r = -.49$, $p < .001$)。認知面の指標では、「音要素の取り込み」は、非音声刺激において弱い正の相関が見られた ($r = .35$, $p < .01$)。「聴空間の拡大」は、非音声刺激において弱い負の相関が見られたのに対し ($r = -.33$, $p < .01$)、「聴空間の縮小」は、非音声刺激において中程度の正の相関が見られた ($r = .54$, $p < .001$)。「触覚情報の性質」は、非音声刺激のみで出現し、「触覚情報の性質 (言及)」は弱い負の相関が、「触覚情報の性質 (性質)」は中程度の負の相関が見られた (順に $r = -.25$, $p < .05$; $r = -.50$, $p < .001$)。

表 10-4. APT 指標の平均および標準偏差 (SD) (表 9-4 を再掲)

APT 指標	音声刺激		非音声刺激	
	平均	SD	平均	SD
内容面				
主題の性質	-3.84	3.17	-1.46	2.73
自己の内界に向ける関心	-1.35	2.71	-2.49	3.24
自己に向ける感情(言及)	1.83	1.14	1.59	1.28
自己に向ける感情(性質)	-0.38	1.13	0.13	1.07
他者に向ける関心	1.92	3.16	-2.27	3.83
他者に向ける感情(言及)	7.62	0.91	4.29	2.32
他者に向ける感情(性質)	-0.63	2.82	0.05	3.08
父親(的人物)に向ける感情(言及)	2.14	1.00	0.95	0.83
父親(的人物)に向ける感情(性質)	-0.19	1.15	0.38	1.01
母親(的人物)に向ける感情(言及)	1.63	0.70	0.89	0.70
母親(的人物)に向ける感情(性質)	-0.83	0.89	-0.06	0.84
人物の導入	4.11	1.45	3.97	1.90
主人公の導入	—	—	2.00	1.34
導入人物の性質	-1.08	1.62	0.25	2.14
独特な人物設定	4.01	1.56	3.48	2.31
有音の背景音の取り込み	3.68	1.18	4.25	0.84
無音の背景音の取り込み	0.32	0.59	1.51	1.19
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	0.94	0.67	3.46	1.38
背景音に対する情緒的意味づけ(性質)	-0.44	0.50	-0.81	1.49
曖昧な結末	4.16	2.29	4.71	1.93
結末の性質	0.43	2.66	1.00	3.09
攻撃的内容	1.33	0.80	0.73	0.95
損傷内容	0.51	0.56	1.17	1.33
形式面				
初発反応時間	100.16	121.50	111.32	71.29
刺激の追加提示回数	0.32	0.59	0.56	0.62
語りの様式(移入形式)	4.10	2.11	3.30	2.15
複数の物語	1.27	1.68	0.75	1.16
認知面				
微小音要素の取り込み	0.54	0.75	1.41	1.22
音要素の取り込み	36.73	2.05	23.56	4.32
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	0.63	0.69	0.72	0.54
聴空間の拡大	0.51	1.35	0.57	1.48
聴空間の縮小	0.44	0.59	0.76	0.84
他の感覚への言及	1.57	1.65	4.63	2.11
触覚情報の性質(言及)	—	—	2.67	0.67
触覚情報の性質(性質)	—	—	-0.92	1.24

※ 「主人公の導入」と「触覚情報の性質」は音声刺激では出現しなかった

表 10-5. 対人恐怖心性尺度Ⅱの得点の平均および標準偏差

	劣等恐怖	被害恐怖	自己視線・ 醜形恐怖	孤立・ 親密恐怖	加害恐怖	合計得点
平均	19.11	13.38	12.06	13.02	15.30	72.87
標準偏差	5.67	8.18	6.64	7.09	5.38	27.43

表 10-6. APT の評定値と対人恐怖心性尺度Ⅱの合計得点の順位相関係数

APT 指標	音声刺激	非音声刺激
内容面		
主題の性質	-.48***	-.38**
自己の内界に向ける関心	.19	.38**
自己に向ける感情(言及)	.31*	.06
自己に向ける感情(性質)	-.49***	-.02
他者に向ける関心	.12	.23
他者に向ける感情(言及)	.06	.14
他者に向ける感情(性質)	-.41***	-.40**
父親(的人物)に向ける感情(言及)	.02	.25*
父親(的人物)に向ける感情(性質)	-.37**	.29*
母親(的人物)に向ける感情(言及)	-.03	.40**
母親(的人物)に向ける感情(性質)	-.30*	-.17
人物の導入	.10	.16
主人公の導入	—	.01
導入人物の性質	-.25*	-.10
独特な人物設定	.31*	.14
有音の背景音の取り込み	-.16	.02
無音の背景音の取り込み	.33**	.19
背景音に対する情緒的意味づけ(言及)	.09	.47***
背景音に対する情緒的意味づけ(性質)	-.41**	-.17
曖昧な結末	-.13	.01
結末の性質	-.21	-.23
攻撃的内容	.00	.15
損傷内容	.08	.32*
形式面		
初発反応時間(秒)	-.06	-.12
刺激の追加提示回数	-.25	-.21
語りの様式(移入形式)	.29*	.21
複数の物語	-.15	-.49***
認知面		
微小音要素の取り込み	-.02	-.09
音要素の取り込み	-.13	.35**
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	.00	.01
聴空間の拡大	-.03	-.33**
聴空間の縮小	-.09	.54***
他の感覚への言及	-.16	.15
触覚情報の性質(言及)	—	-.25*
触覚情報の性質(性質)	—	-.50***

※ 「主人公の導入」と「触覚情報の性質」は音声刺激では出現しなかった

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

10-4 考察

(1) 仮説検討

まず、「他者に向ける感情（性質）」は音声刺激と非音声刺激の両方で、対人恐怖心性との間に中程度の負の相関が認められ、仮説1は支持された。本指標は、物語における主人公以外の登場人物を脅威や不快感を与えるような否定的人物として語るほど値が低くなり、周囲に対する信頼 - 不信や対象関係、対人関係の質を反映すると考えられる。他方、対人恐怖心性の高い人は周囲に対して不安や怯えを感じやすく（堀井，2006）、本指標と負の相関が見られたのは了解可能である。この点は第九章の自己関係づけと異なっており、また、本指標と同様に他者に関連する指標である「他者に向ける関心」においても、第九章とは異なり有意な相関が得られなかった。堀井（2014）は対人恐怖心性尺度Ⅱを用いて、大学生の不登校傾向への影響を検討し、登校回避行動への直接的影響と、登校回避感情を介した間接的影響が認められたことを示している。DSM-5における対人恐怖症も「対人状況についての不安および回避が特徴である」とされており、対人恐怖心性には人と関わる場面を避ける傾向も含まれている。この視点からすると、「他者に向ける関心」と対人恐怖心性に関連が見られなかったのは了解可能であろう。つまり、自己関係づけの場合と異なり、対人恐怖心性が高くても他者や対人関係に関する描写は多くならず、本指標の評定対象が複数になって「他者に向ける感情（性質）」の評定値がぼやけてしまうことも少なかったため、自己関係づけと異なる結果が得られたと考えられる。

次に、「自己に向ける感情（性質）」は、音声刺激においては対人恐怖心性と中程度の負の相関が認められたが、非音声刺激においては有意な相関が見られず、仮説2は音声刺激の場合のみ支持された。対人恐怖心性尺度Ⅱには劣等恐怖や醜形恐怖が含まれており、その得点が高い人ほど物語の主人公の劣等感や自責感などの否定的感情に言及する人が多かったという本結果は十分に了解できよう。非音声刺激において同様の関連が見られなかったのは、非音声刺激で刺激中に複数の人物が存在することが明らかなのが第1刺激と第11刺激のみであることと関連するだろう。つまり、劣等恐怖や醜形恐怖は他者の存在によって刺激されるものであるが、非音声刺激では対人的な要素が少なく、他者との接

触を回避することも可能であり、劣等感の高さが反応の中に表れにくかったと考えられる。本指標に関しては、第九章の自己関係づけと同様の結果であった。

「父親（的人物）に向ける感情（性質）」は、音声刺激では対人恐怖心性と弱い負の相関が得られたのに対し、非音声刺激では弱い正の相関が見られ、仮説 3 は音声刺激においてのみ支持された。本指標は父親やそれに近い人物を脅威や不快感を与えるような否定的人物として語るほど値が低くなり、父親イメージや父子関係の質を反映すると考えられる。他方、対人恐怖心性の高い人は交流し難い両親像やアンビバレント型の愛着スタイルと関連するとされ（久保，2000），音声刺激における結果はこの視点から解釈することが可能であろう。また、音声刺激では第 5 刺激で父親が登場し、第 7 刺激においても男性 A が年配の上司など父親に近い人物とされることがあるのに対し、非音声刺激では刺激中に父親の存在が明確なものではなく（表 10-1），第 16 刺激において少年と父親あるいはお爺さんが導入され、夏の森の中で一緒に遊ぶという物語が比較的良好に語られた。この点は物語の分類を行って確認する必要があるが、第 16 刺激は本研究の APT の中でもっとも肯定的で穏やかな刺激であり（第七章），その特徴に影響を受けた標準反応といえるかもしれない。この点についての詳細な検討は今後の課題としたい。

最後に、「母親（的人物）に向ける感情（性質）」は、音声刺激において対人恐怖心性と弱い負の相関が見られたのに対し、非音声刺激においては有意な相関が得られず、音声刺激の場合のみ仮説 4 は支持された。前者については、「父親（的人物）に向ける感情（性質）」と同様に、母親イメージや母子関係の質の視点から了解可能である。後者については、非音声刺激では刺激中に母親の存在が明確なものではなく（表 10-1），第 15 刺激において母親が導入され、お腹の中の赤ちゃんを産んで幸せに暮らす物語が比較的良好に語られた。この点もやはり物語の分類を行って詳細に検討する必要があるが、上記の物語が標準反応のようになり、本指標の負の値が打ち消されてしまった可能性も考えられる。その場合は数量的分析のみでは限界があり、質的分析により検討する必要があるだろう。

(2) 探索的検討

以下では有意な相関が見られた指標について考察していく。

1) **主題の性質** 音声刺激と非音声刺激の両方で、対人恐怖心性が高いほど物語の主題が否定的であるという結果が得られた。否定的な主題には人間関係の決裂や喪失、犯罪、被害などが含まれ、本指標には参加者の対象関係の全体的な性質が反映されると考えられる。他方、対人恐怖心性の高い人は否定的な他者イメージを持っているため、本指標の評定値が低まったと考えられる。

2) **自己の内界に向ける関心** 非音声刺激において、対人恐怖心性が高い人ほど物語の主人公の思考や内面、感情の変化の過程に言及することが多かった。非音声刺激においては刺激中の人物も少なく、葛藤的な対人場面の要素も少ないため、本指標には内向性が反映されると考えられる。他方、松下(2011)は対人恐怖心性の高い人に特有とされる認知、つまり、身体欠点認知・加害的認知・被忌避的認知と内向性の間に正の相関が見られたことを報告している。この松下の知見は女性被験者に限られたものであったが、対人恐怖心性と内省的自己意識の関連を示す研究もあり(岡田・永井, 1990)、対人恐怖心性は内向性と関連すると考えられる。この視点から、本結果も了解可能であろう。

3) **自己に向ける感情(言及)** 音声刺激において、対人恐怖心性が高いほど物語の主人公の自信や自尊心、劣等感、自責感などに言及することが多かった。このような感情への言及自体が私的自己意識や公的自己意識の強さと関連すると考えられ、対人恐怖心性との関連も了解可能である。

4) **父親(的人物)に向ける感情(言及)** 非音声刺激において、対人恐怖心性が高い人ほど父親やそれに近い人物を物語に登場させることが多く、「父親(的人物)に向ける感情(性質)」から、肯定的人物とされることが多かった。本指標には父親イメージや父子関係の強度が反映されると考えられる。他方、対人恐怖心性は交流し難い両親像やアンビバレント型の愛着スタイルと関連するとされ(久保, 2000)、本指標との関連は了解が難しい。「父親(的人物)に向ける感情(性質)」のところでも述べたように、該当する人物がどの刺激において、どのような人物として登場するのか、質的分析を行うことで本結果に対する理解が深まる可能性があり、今後の課題である。

5) **母親(的人物)に向ける感情(言及)** 非音声刺激において、対人恐怖

心性が高い人ほど母親やそれに近い人物を物語に登場させることが多かった。本指標には母親イメージや母子関係の強度が反映されると考えられるのに対し、対人恐怖心性は母親に対する親密さと不信の二面性や、アンビバレント型の愛着スタイルと関連するとされる（久保，2000）。この母親に対する二面性は、母親に向ける関心の強さとも考えられ、この視点から本結果は了解できるだろう。

6) 導入人物の性質 音声刺激において、対人恐怖心性が高いほど、導入人物を脅威や不快感を与えるような否定的人物として語る事が多かった。導入人物は参加者自身の想像によって登場するものであり、本指標には「他者に向ける感情（性質）」よりも他者イメージや対象関係の質が色濃く反映されると考えられる。対人恐怖心性の高い人も否定的な他者イメージを持っており、本結果は了解可能である。

7) 独特な人物設定 音声刺激において、対人恐怖心性が高いほど、登場人物の外見や社会的属性、性格などを明細化することが多かった。本指標は自己や他者の内面（性格）および外面（外見や社会的属性）に対する関心の強さを反映しており、私的自己意識と公的自己意識の両方に関連すると考えられる。他方、対人恐怖心性の高い人も公的自己意識と私的自己意識が強いとされており、本指標と正の関連が見られたことは了解可能と考えられる。

8) 無音の背景音の取り込み 音声刺激において、無音の背景音を多く物語に取り込む人ほど対人恐怖心性は高かった。本指標は、音のないところにあえて反応する意味で、ロールシャッハ法における空白反応にも類似し、反発や猜疑心などに関連する側面と、無音であることを心地よく感じる場合には静けさや孤独への親和性などを反映する側面があると考えられる。これに対して、対人恐怖心性は Y-G 性格検査における攻撃性との関連は見られず、社会的外向と中程度の負の関連が見られたことが報告されており（堀井・小川，1997）、静けさや孤独への親和性からの解釈が当てはまる可能性がある。なお、音声刺激においてのみ有意な関連が見られたのは、音声刺激では台詞や人物つまり前景と、場についての情報つまり後景がより明確に聞き分けられるのに対し、非音声刺激ではその境界が曖昧であるためと推測される。非音声刺激では、前景と後景が逆転したり、導入人物を物語に登場させることにより前景が増えたりす

ることもある。非音声刺激における本指標の意味合いに関しては、今後、詳細に検討する余地がある。

9) 背景音に対する情緒的意味づけ (言及) 非音声刺激において、対人恐怖心性が高いほど、背景音に対して安心 - 不安や快 - 不快などの意味づけを行うことが多かった。非音声刺激における背景音は広義の他者と考えられ、本指標には他者や周囲の環境に対する関心や注意の程度が反映されると考えられる。「他者に向ける関心」や「他者に向ける感情 (言及)」に比べると対人的な要素が薄く、対人恐怖心性の高い人の回避の対象にはならなかったのだろう。逆の視点からすると、本指標との関連は、対人恐怖心性の高い人の潜在的な他者への関心を映し出している可能性もあるだろう。

10) 背景音に対する情緒的意味づけ (性質) 音声刺激において、対人恐怖心性が高いほど、背景音 (環境) を不安や不快感をもたらすものとして語ることが多かった。音声刺激においては刺激中に明確な他者が存在するため、非音声刺激に比べて背景音は周囲の環境としての側面が強く、本指標には周囲の環境に対するイメージの質が反映されると考えられる。他方、対人恐怖心性尺度Ⅱの項目には「周りには何を考えているかわからない人がいて怖い」など漠然とした周囲に対する不安を尋ねるものが含まれている。このため、対人恐怖心性の高さとは本指標の低さには一致する部分があると考えられよう。

11) 損傷内容 非音声刺激において、対人恐怖心性が高いほど、物語中の人や動物、物が傷つけられたり強い不快感や悲しみを覚えたりする内容が語られることが多かった。本指標には自己の傷つきが反映されると考えられ、対人恐怖心性が高い人の自尊心や自己評価の低さと重なるだろう。仮説3の「自己に向ける感情 (性質)」の検討では見られなかった関連が本指標で見られたのは、興味深い結果であった。

12) 語りの様式 (移入形式) 音声刺激において、対人恐怖心性が高い人ほど、登場人物になりきり、その台詞を交えて物語を語ることが多かった。このような語りになされるとき、参加者は登場人物に一時的にであれ強く同一化していると考えられ、演技能力や感情生活の活発さや流動性 (不安定さ) が反映される (鈴木, 1997)。これに対して、対人恐怖心性は Y-G 性格検査における神経質と中程度の正の関連が報告されており (堀井・小川, 1997)、本結果

は感情の流動性（不安定さ）の点から了解可能であろう。

1 3) 複数の物語 非音声刺激において、複数の物語を作成することが多い人ほど対人恐怖心性は低かった。この反応は、物語を「ひとつ作ってはみたが、緊張が解消しないときに起こる（太田，1995）」ものであり、いくつかの可能性の中から1つに絞る思い切りのよさや決断力も関連する（鈴木，1997）。また、1つの刺激に対して複数の物語を少しずつ語るとき、参加者の物語に対する自我関与の度合いは薄まり、参加者と物語の心的距離が大きくなることもあり得る。これに対して、対人恐怖心性は、自分の考えや想像を他者に呈示することを躊躇う傾向があると考えられ、複数の物語の可能性に言及することで、1つの物語への自我関与を低めようとした可能性がある。なお、非音声刺激においてのみ有意な関連が得られたのは、音声刺激は比較的明確で物語作成もある程度方向づけられるのに対し、非音声刺激は漠然としており（第七章）、参加者にとってはより物語作成に対する自我関与の度合いが強くと感じられ、本結果のような特徴として表れた可能性が考えられる。

1 4) 音要素の取り込み 非音声刺激において、音の要素を多く物語に取り込む人ほど対人恐怖心性は高かった。本指標には、情報の取りこぼしを少なくしようとする意味合いから、情報処理における繊細さや警戒の強さが反映されると考えられる。これに対して、対人恐怖心性が高い人も警戒が強いと推測され、この警戒の視点から本結果は了解可能であろう。なお、非音声刺激においてのみ有意な関連が見られたのは、音声刺激では台詞が中心になっており音要素の取り込みの選択幅が小さいのに対し、非音声刺激においては選択幅が大きく、差異が表れやすかった可能性が考えられる。

1 5) 聴空間の拡大・縮小 両者とも非音声刺激において有意な関連が見られた。聴覚刺激が設定する空間とは別の空間を想像し物語を展開させる人ほど対人恐怖心性は低く、刺激が設定する空間内に建物や乗物などを設定して空間を区切る人ほど対人恐怖心性は高かった。「聴空間の拡大」は別の空間を産み出す創造性や、刺激からの回避、独断的傾向なども反映されると考えられる。これに対して、対人恐怖心性は Y-G 性格検査における支配性や社会的外向と中程度の負の関連が見出されており（堀井・小川，1997）、対人恐怖心性が高い人は、本指標に該当するような積極的でやや独断的ともいえる反応を示さなかつ

たと考えられる。他方、「聴空間の縮小」は、外界に対する壁を作り出すこととも関連すると考えられ、上述の社会的内向の点からも、対人恐怖心性と重なるだろう。なお、非音声刺激においてのみ有意な関連が認められたのは、非音声刺激においては参加者が反応を産出する際の聴空間の処理にかかる比重が大きいのに対し、音声刺激においては、刺激中の台詞や対人葛藤の処理にかかる比重が大きいことが影響を及ぼしている可能性がある。

16) 触覚情報の性質(言及), 触覚情報の性質(性質) 本指標に該当する反応は非音声刺激のみで出現し、対人恐怖心性が高い人ほど、触覚情報に言及せず、かつ、触覚情報を冷たく不快であるなど否定的なものとして捉えていた。本指標は、ロールシャッハ法における材質反応(T)のように、他者と触れ合うような親密な関係性に対する感覚を反映することを仮定した、APT独自の指標である。他方、対人恐怖心性尺度Ⅱには孤立・親密恐怖が含まれている(堀井, 2006)。このため、対人恐怖心性の高い人は親密な対人関係を想起させ得る触覚情報に言及せず、それを否定的なものとして捉えていたという本結果は了解可能と考えられる。

(4) まとめと今後の課題

本研究の目的は、APTと自己関係づけの関連(研究7)と比較しつつ、本論の完成版APTにおける反応に対人恐怖心性がどのように表れるかを検討することであった。4つの仮説のうち仮説1は音声刺激と非音声刺激の両方で支持されたのに対し、残りの3つの仮説は音声刺激でのみ支持された。仮説2に関しては、対人状況を提示する音声刺激と非対人状況を提示する非音声刺激という刺激の差を反映した結果と考えられ、劣等恐怖など対他的側面が大きい対人恐怖心性の特徴を本論のAPTが特徴的に映し出したといえよう。仮説3と仮説4に関しては、非音声刺激における標準反応の影響など、他の視点からの検討が必要と考えられた。また、刺激の種類から見ると、音声刺激においてはすべての仮説が支持され、先行研究と同様の傾向を読み取ることができた。つまり、APTの中でも音声刺激の場合、対人恐怖心性が高い人の反応には、他者への被害感や不信感、自尊心や自己愛の低さ、両親に対する否定的感情が反映されていた。APTの場合は、さらに反応を質的に分析することでこれらをよ

り深く理解することができる可能性がある。これに対して、非音声刺激において支持されたのは仮説 1 のみであった。逆に「自己の内界に向ける関心」や「損傷内容」は非音声刺激でのみ有意な関連が見られ、音声刺激に比べて非音声刺激が対人状況を含んでいないことから、これらは非対人状況における自己に関する特徴を反映していると考えられる。つまり、対人恐怖心性の高い人は、対人状況を提示する音声刺激と非対人状況を提示する非音声刺激とで異なる反応傾向を示し、音声刺激における反応は「関係的自己意識」を、非音声刺激における反応は「内省的自己意識」を反映している可能性が考えられる。また、対人恐怖心性は対人状況からの回避傾向を含んでおり、特に物語中の他者や対人関係の描写において、自己関係づけとは異なる形で APT の反応に表れていた。この点も、音声刺激と非音声刺激の両方を用いることにより明らかになったと考えられる。さらに、認知面の指標においても有意な関連が認められ、本研究の APT がパーソナリティの認知的側面を映し出す可能性が示された。音声刺激よりも非音声刺激において多くの関連が見られたことや、APT 独自の指標である「聴空間の拡大・縮小」と「触覚情報の性質」において有意な関連が見られたことは興味深い結果であった。これらの指標について、今後さらに研究を進めていくことによって、本論の APT の独自性がより明確になるだろう。

今後の課題としては、まず、対人恐怖心性尺度Ⅱの 5 つの下位尺度と APT の関連を検討することが挙げられる。本研究では対人恐怖心性における加害的側面が APT においてどのように表れるかを検討することができなかったが、下位尺度の「加害恐怖」と APT 指標の関連を検討することによって明らかになる可能性がある。APT 指標の方でも、「攻撃的内容」の他に、「主題の性質」の中に攻撃性に関する内容が含まれている可能性があり、対人恐怖心性と APT の両面からの詳細な検討が必要であろう。次に、清水（2009）が対人恐怖心性や自己関係づけなどの組み合わせから、パーソナリティを包括的な視点で考察しているように、本論においても、対人恐怖心性と自己関係づけと APT という 3 つの側面から、それぞれの一致・不一致も含めて、包括的に検討を行う必要がある。それによって、APT の量的分析から参加者のパーソナリティの全体像を描き出すことができるかどうか、そして、どのように描き出すことができるかがより明確になるだろう。また、本研究では参加者の人数が少なく、検討を行

うことができなかつた APT 指標もあつた。対人恐怖心性には性差や学年差も指摘されているため（堀井，2014），今後，データ数を増やしてこれらの点についても検討する必要がある。さらに，他のパーソナリティとの関連も検討していくことで，本論の APT がパーソナリティをどのように映し出すかをより明確にしていくことも今後の課題である。

第十章のまとめ

本章では，研究 7 に続いて完成版 APT の応用に関して検討し，心理臨床において出会うパーソナリティの 1 つであり，青年期一般に見られる心性でもある対人恐怖心性との関連に焦点をあてた。大学生・大学院生 63 名を対象とし，対人恐怖心性尺度 II（堀井，2006）と APT を実施した。後日，APT の反応について評定を行い，対人恐怖心性との関連を検討した。その結果，対人状況を提示する音声刺激に対する反応と，非対人状況を提示する非音声刺激に対する反応を対比することで，対人恐怖心性の特徴が映し出されることが示唆された。非音声刺激において認知面の指標も対人恐怖心性と関連が見られ，本論の APT がパーソナリティの認知的側面を映し出す可能性も示された。また，2，3 の指標を除いて，概ね了解可能な結果が得られたことから，本研究の APT の妥当性も一定程度示された。今後さらに研究を蓄積することによって，これらの知見をより確かなものにしていく必要があるだろう。

第四部

総合考察

第十一章

考察と展望

11-1 各研究の総括

本論では、Skinner (1936) によって最初に考案された APT の、現代における有用性や可能性、および妥当性を検討した。まず、今日の心理臨床において活用されている投映法の歴史や特徴について整理を行った。投映法は、量的分析では必ずしも十分な妥当性や信頼性が示されているとはいえないが、非意識的な心理過程を映し出せることから心理臨床においては広く活用され、事例研究も積み重ねられて臨床的妥当性が示されてきている。次に、本論で取り上げる APT の歴史を概観し、先行研究において採用されることが多かった物語作成の実施法による APT の特徴をまとめた。聴覚刺激の提示中と提示後で反応過程に移行があるのが特徴的であった。さらに、知能・発達検査や知覚心理学、イメージ心理学の観点から、APT の利用可能性について考察した。APT には、視覚障害者への適用に加えて、視覚を介した投映法と比較して被検者のより原始的で内的な心理過程を映し出す可能性や、聴覚優位者のより豊かな反応を引き出す可能性が秘められていると考えられた。

次に、APT が用いられなくなっていった歴史から、APT 研究において考慮すべき問題について整理した。APT の有用性や可能性を検討する上では、実施手続きの工夫や、一定の刺激や実施法による APT 研究の蓄積が重要であると考えられた。本論では、被検者のパーソナリティを包括的に映し出し、かつ、病理に関連するパーソナリティをも映し出すことができる APT を想定し、パーソナリティに関して得られる情報の豊かさから、物語作成を求める実施法を採用することにした。聴覚刺激に関しては、曖昧性や多義性と物語の作成可能性のバランスに配慮して作成し、他のパーソナリティとの関連から有用性にもとづき選定を行うこととした。また、反応（物語）を分析する指標としては、量的分析の限界をふまえつつ、内容面・形式面・認知面の指標を採用した。これに

は TAT 指標を APT 用に変更・修正したものや、APT 独自の指標が含まれ、それぞれ他のパーソナリティとどのように関連するか検討することとした。

(1) 研究 1 (第三章)

研究 1 では、葛藤を喚起しやすい会話場面を中心とする音声刺激を独自に録音・作成し、予備実験により 17 個の刺激を選定した。その音声刺激による APT の反応に、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性という全般的なパーソナリティを測定する Big Five がどのように表れるか探索的に検討することを目的とし、本実験を行った。実験参加者は大学生・大学院生 60 名（男女とも 30 名）で、実験室において個別に APT と主要 5 因子性格検査（村上・村上，2001）を実施した。後日、参加者の反応を内容面・形式面・認知面の指標を用いて分析し、Big Five との関連を検討した。その結果、APT 指標と Big Five の各因子の間に関連が見られ、特に情緒安定性（神経症傾向）との間に特徴的な関連が認められた。神経症傾向は Big Five の中でも病理や症状に関連する因子であり、本研究の APT は参加者の自己や他者，対人関係に加えて、病理に関連するパーソナリティを映し出すことが示唆された。

(2) 研究 2 (第四章)

研究 2 では、有意味の音声を含まない、効果音や環境音を中心とする非音声刺激を独自に録音・作成し、予備実験により 14 個の刺激を選定した。その非音声刺激による APT の反応に、研究 1 と同様に Big Five がどのように表れるか探索的に検討するため、本実験を行った。参加者は大学生・大学院生 60 名（男女とも 30 名）で、実験室で個別に APT と主要 5 因子性格検査（村上・村上，2001）を実施した。実験後、各反応を内容面・形式面・認知面の指標を用いて分析し、Big Five との関連を検討した。その結果、APT 指標と Big Five の各因子の間に関連が見られ、特に外向性との間に特徴的な関連が認められた。Big Five における外向性は社交性に近いが、神経症傾向と並んで古くからパーソナリティの基本的次元として捉えられてきた向性とも重なる部分がある。非音声刺激による APT は参加者の自己や他者，対人関係に加えて基本的なパーソナリティを映し出し、音声刺激と比べて、認知的側面を映し出す可能性が示唆

された。

(3) 研究3 (第五章)

研究3では、研究2で作成した非音声刺激によるAPTと、心理臨床においてしばしば活用され、投映法の中でも特に非意識的水準を映し出すといわれるロールシャッハ法の比較検討を行った。APTはパーソナリティを測定するのに有効な道具であるか、有効であるとしたらパーソナリティのどのような側面を映し出すか、APTの反応を分析する指標としてはどのようなものが有効か、探索的に検討することが目的であった。研究2と同じ大学生・大学院生60名に対してロールシャッハ法を実施し、APTの指標とロールシャッハ法の鍵変数の関連を検討した。その結果、本研究のAPTは状況関連ストレスや統制力(D<Adj D, Adj D<0)、基本的な行動様式(反射反応あり、体験型内向型・外拡型、HVI陽性)を広く映し出すことが示唆された。APTの反応を分析する指標としては、参加者の投映をより多く含みやすい導入人物に関連する指標や、「主観的印象(対物語)」「劇化反応」「語りの様式(会話形式)」など特殊な反応を評定する内容・形式・認知の指標が有用であることが示唆された。

(4) 研究4 (第六章)

研究4では、ここまでの研究の結果から音声刺激と非音声刺激に想定される特徴を整理し、ともにAPTの刺激として有用であることと、さらなる研究の積み重ねが必要であることを再確認した。そして、今後の研究の効率を考え、音声刺激と非音声刺激の両方から刺激を選定し、新たな刺激セットを構成することを目的とした。具体的には、Big Fiveの各因子やロールシャッハ法の鍵変数と関連が認められた指標を抜粋し、有用な指標の該当率が0%となることが多かった刺激と、有用な指標の評定値の標準偏差が小さかった刺激を、パーソナリティに関する情報を幅広く引き出しにくい刺激と捉え、消去法の要領で除外した。さらに、刺激中の人物の属性やその組み合わせの多様性、最初と最後の刺激など刺激全体の流れやバランスの観点から調整を行い、音声刺激8個と非音声刺激8個から成る、計16個の刺激セットを構成した。

(5) 研究 5 (第七章)

研究 5 では、研究 4 で選定した聴覚刺激の特徴を明らかにすることを目的とした。まず、音声や環境音、感情に関する先行研究から形容詞対を収集し、各刺激について印象評定を行い、因子分析により特徴を抽出した。その結果、「肯定的情緒性」「力動性」「簡明性」「異質性」「空間性」という 5 因子が抽出された。本研究の聴覚刺激は全体的に、悲しみや不安・緊張、不快感といった否定的な感情を喚起し、迫力や変化する性質は低く、シンプルで、日常的で、臨場感のある刺激であることが示され、各刺激の特徴も明らかになった。印象評定と併せて、研究 1~3 において物語に取り込まれる割合が低かった微小音要素が、実際に聴き取れるものであるかをチェックリストにより検討した。その結果、聴き取れるが物語に取り込まない微小音要素が多い可能性が示唆された。次に、上記の実験とは別に、各刺激について音響分析を行い、物理的な特徴も明らかになった。今後、これらの特徴に基づいた分析を行うことにより、解釈の客観性が増し、より適切で有効な解釈を導き出すことができるようになると思われる。

(6) 研究 6 (第八章)

研究 6 では、研究 4 で選定した 16 刺激に対する反応の特徴を明らかにすることを目的とした。具体的には、研究 1 の音声刺激と研究 2 の非音声刺激の実験データから、再構成した 16 刺激に対する評定値を整理し、刺激ごとに各指標の出現率や評定値の平均を算出した。その結果、音声刺激では葛藤的な会話場面の刺激であることから対人関係の否定的な側面を強く映し出すのに対し、非音声刺激でも導入人物の多さによって対人関係は映し出されるものの音声刺激ほど否定的な側面は表れず、また、非音声刺激は漠然としているため、実験参加者は背景音を含めて刺激の細部まで注意深く聴き取り、時間をかけて慎重に反応することが示唆された。さらに、音声刺激全体および非音声刺激全体と各刺激における数値を比較し、各刺激に対する反応の相対的な特徴も明らかになった。これらの特徴は、今後、反応を分析・解釈する際の基準として活用できると考えられた。本論では刺激と反応の特徴が明らかになった、音声刺激と非音声刺激によるこの APT を完成版とした。

(7) 研究7 (第九章)

研究7では、研究1~6で開発した完成版APTにおける反応に、青年期心性の中でも被害妄想的観念を測定する自己関係づけがどのように表れるか、大学生・大学院生63名(男性22名, 女性41名)を対象に検討した。評定マニュアルに従ってAPTの反応を分析し、自己関係づけ尺度(金子, 2000)との順位相関係数を算出した。その結果、APTにおいては、自己関係づけの高い人ほど1) 自他や対人関係について多く複雑に描写し、2) 脅威や不安感を与える想像上の人物を導入し、3) 自尊心の低さや傷つきを表現することが示唆された。また、自己関係づけの高い人ほど何も刺激がないところに注目する傾向や、他者にどのように思われるかを気にして抑制的に語る傾向がある可能性が示された。APTと自己関係づけの関連について了解可能な結果が得られたことから、完成版APTの妥当性や今後の臨床での利用可能性が示唆された。

(8) 研究8 (第十章)

研究7に続き、研究1~6で開発した完成版APTにおける反応に、青年期心性の1つとされる対人恐怖心性がどのように表れるかを検討した。研究7と同一の大学生・大学院生63名(男性22名, 女性41名)を対象とし、対人恐怖心性尺度II(堀井, 2006)と完成版APTを実施した。後日、評定マニュアルに従ってAPTの反応を分析し、対人恐怖心性との順位相関係数を算出した。その結果、対人状況を提示する音声刺激に対する反応と、非対人状況を提示する非音声刺激に対する反応を対比することで、対人恐怖心性の特徴が映し出されることが示唆された。非音声刺激において認知面の指標も対人恐怖心性と関連が見られ、パーソナリティの認知的側面を映し出す可能性も示された。また、2, 3の指標を除いて概ね了解可能な結果が得られたことから、本論の完成版APTの妥当性や心理臨床での利用可能性が示唆された。

(9) 本論の聴覚刺激およびAPTの特徴

研究1, 2, 3において、APT指標とロールシャッハ法における状況ストレスとの関連など検討の余地が残った部分もあったが、概ね了解可能な関連が得られ、本論のAPTの妥当性が示された。また、神経症傾向や向性、ロールシャッ

ハ法の鍵変数に加えて、研究 7, 8 において自己関係づけや対人恐怖心性という心理臨床において出会う可能性のあるパーソナリティとの関連が認められたことから、本論の APT の臨床での利用可能性も一定程度示されたといえよう。ただし、これらの知見については今後も研究の蓄積が必要であり、聴覚刺激の内容や提示順序、および実施法については今後も改良する余地があるだろう。

このような限界をふまえつつ、本論で作成した 2 種類の刺激を対比して見ると、本論の APT には以下のような有用性や可能性があると考えられる(表 11-1)。まず、音声刺激は葛藤的な会話場面を想定して作成した(研究 1)、比較的明確な刺激であり(研究 5)、TAT が葛藤場面での対処を、P-F Study が欲求不満場面での対処を映し出すように、映し出す対象が限定されやすいと考えられる。Big Five や自己関係づけ、対人恐怖心性との関連から、親子関係や同性・異性関係という多様な対人状況における他者や対人関係、自己に関わるパーソナリティの側面に加えて、不安や葛藤、および葛藤場面での内省などの対処様式が反応に表れることが示唆された(研究 1, 7, 8)。このため、音声刺激による APT は、対人関係に問題を抱えるクライアントの心理アセスメントに有効であると考えられる。これに対して、非音声刺激は葛藤的な会話場面を含まない(研究 2)、漠然とした、異質な刺激であり(研究 5)、参加者は「何の音であるか」を注意深く聴いて物語作成を行うと考えられる(研究 6)。ただし、鈴木(2004)がロールシャッハ法と比較して TAT の反応過程について論じているように、本論の聴覚刺激もロールシャッハ法の図版のように偶然できたものではなく、何かしら意図して作成された刺激であることが伝わるため、参加者はその意図を推し量ろうとすると考えられる。その一方で、物語に人物や動物を導入しやすく(研究 6, 7, 8)、反応の自由度は比較的高いといえよう。Big Five や自己関係づけ、対人恐怖心性との関連から、非音声刺激は対人状況の要素が少ないため、自己に関するパーソナリティの側面が多く映し出され、「音要素の取り込み」や内向性に関連した結果が比較的多く得られたことから、認知や向性などのパーソナリティの基本的な次元が反応に表れやすいことが示唆された(研究 2, 7, 8)。このため、非音声刺激による APT は、自己の内面に関わる問題を抱えているクライアントの心理アセスメントに有効と考えられる。さらに、音声刺激と非音声刺激の両方を用いることで、パーソナリティの対他的側面と対自的側

面を対比することができ、多面的なパーソナリティ理解が可能になると考えられる（研究 7, 8）。特に本論の非音声刺激において人物や動物の導入が生じやすいことは1つの独自性とも捉えられ、対他的志向を持つ者と対自的志向を持つ者の差を明確に反映する可能性がある（研究 7, 8）。

音声刺激と非音声刺激の差から、それぞれの APT における反応過程にも差が生じると考えられる（図 11-1）。音声刺激においては、刺激内容が非音声刺激よりも明確であり、知覚や記憶にかかる負荷は比較的小さく済み、同一化対象（主人公）も決定しやすいと考えられるのに対し、葛藤場面を処理して物語を作成する点で負荷が大きいと考えられる。他方、非音声刺激においては、刺激内容が音声刺激に比べて曖昧であり、知覚や記憶にかかる負荷が相対的に大きく、同一化対象（主人公）も決定しにくいと考えられるのに対して、葛藤は喚起されにくいいため物語作成にかかる負担は比較的小さい可能性がある。これらの反応過程のモデルにおいて特にどの部分がどのようなパーソナリティと関連するのか、今後、研究を蓄積してモデルの修正および精緻化を図っていく必要があるだろう。また、音声刺激においても非音声刺激においても、聴覚刺激は提示後には消えてしまうため、被検者にとっては視覚刺激の場合のように刺激を介して反応を語る、あるいは「刺激に語らせる」ことが難しいと考えられる。あたかも目の前に聴覚刺激があるような前提で反応を進めることも可能ではあるが、相当のイメージ能力を要するだろう。反応を検査者に語る際には、被検者と検査者の中に一定程度共通する聴覚刺激の作業記憶がある前提で物語を共有していくことになる。このため、APT においては、被検者には刺激や物語との心理的距離を調整することが求められると考えられる（図 11-2）。たとえば、刺激に対して心理的距離を大きくとるために「主人公の導入」や「主観的印象（対刺激）」が生じ、物語に対して心理的距離を大きくとるために「主観的印象（対物語）」や「複数の物語」が生じ得ると考えられ、このために APT では TAT よりもそれらの反応が多く出現したと考えられる（研究 1, 2, 3, 7, 8）。TAT においてはこれらの指標の出現率は低く、一度でも該当すると重みづけのある解釈が適用されるのに対し、APT においてはこれらの指標の出現率はそれほど低くなく、本論ではその評定値の差にパーソナリティが反映されていた。この点は APT の独自性の1つと考えてもよいだろう。

表 11-1. 本論の完成版 APT における 2 種類の刺激の対比

視点	音声刺激	非音声刺激
刺激	8 個〔研究 4〕	8 個〔研究 4〕
	長さにはばらつきあり(10~34 秒) 〔研究 5〕	長さにはばらつきなし(30 秒) 〔研究 5〕
	会話場面が中心〔研究 1〕	物音や環境音が中心〔研究 2〕
	多様な対人状況〔研究 7, 8〕	非対人状況〔研究 7, 8〕
	葛藤場面を想起させやすい〔研究 1〕	葛藤場面を想起させるにくい〔研究 2〕
	印象評定の因子分析より〔研究 5〕 「肯定的情緒性」が低い 「力動性」が高い 「簡明性」が高い 「異質性」が低い 「空間性」が低い	印象評定の因子分析より〔研究 5〕 「肯定的情緒性」が低い 「力動性」が低い 「簡明性」が低い 「異質性」が高い 「空間性」が高い
	(視覚的に)明るいイメージを 想起させやすい〔研究 5〕	(視覚的に)暗いイメージを 想起させやすい〔研究 5〕
	選択的に知覚しにくい (音要素が少ない)〔研究 7, 8〕	選択的に知覚しやすい (音要素が多い)〔研究 7, 8〕
	物語作成の自由度が低い可能性	物語作成の自由度が高い可能性
	反応・解釈	初発反応時間が短め〔研究 6〕
他者, 対人関係, 自己〔研究 1〕		自己, 他者, 対人関係〔研究 2〕
Big Five の神経症傾向〔研究 1〕		Big Five の外向性〔研究 2〕
人物や動物の導入が生じにくい 〔研究 6, 7, 8〕		人物や動物の導入が生じやすい 〔研究 6, 7, 8〕
認知面の測定には不向き 〔研究 6〕		認知面の測定にも可能性あり 〔研究 6〕
他の投映法 との関連	TAT と P-F Study の中間	TAT とロールシャッハ法の間

[]内は関連する本論の研究を示す

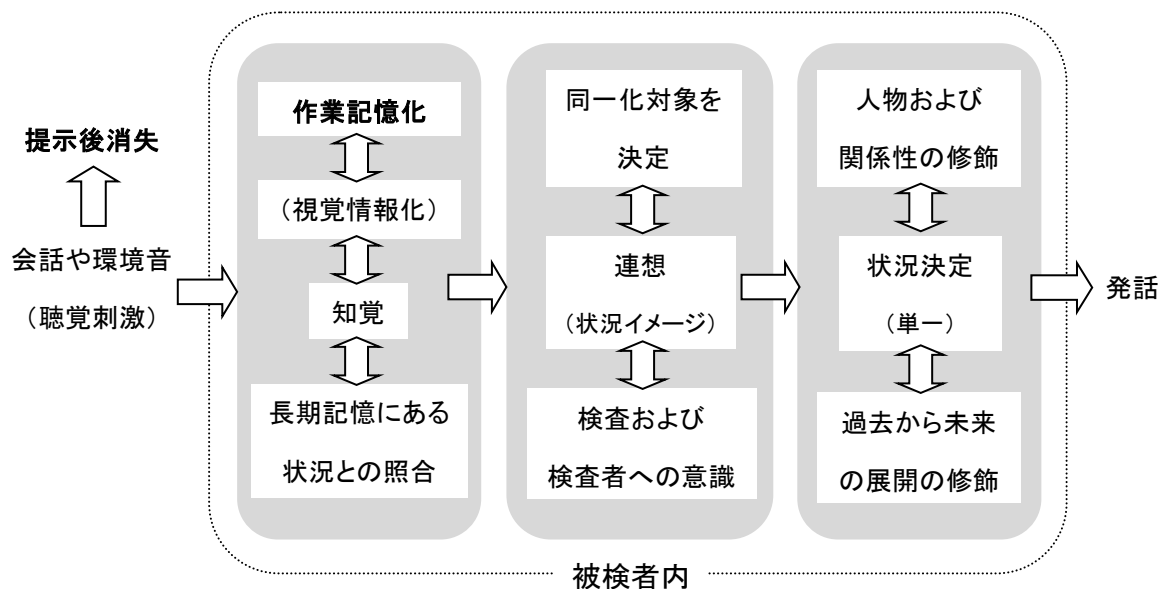


図 11-1. 本論の APT において想定される反応過程 (図 1-4 を再掲)

- ※ 聴覚刺激は提示後に聴こえなくなるため、提示中から提示後に反応過程の変化が想定される。つまり、刺激提示後には、被検者の中に残った刺激の作業記憶をもとに連想 - 状況決定 - 物語の修飾という過程が進行すると考えられる。
- ※ 音声刺激は「簡明性」が高いため知覚過程よりも連想過程にかかる負荷が大きいと考えられるのに対し、非音声刺激は「簡明性」が低いため、知覚過程にかかる負荷が音声刺激よりも相対的に大きいと考えられる。
- ※ このモデルは今後さらに研究を蓄積して精緻化していく必要がある。

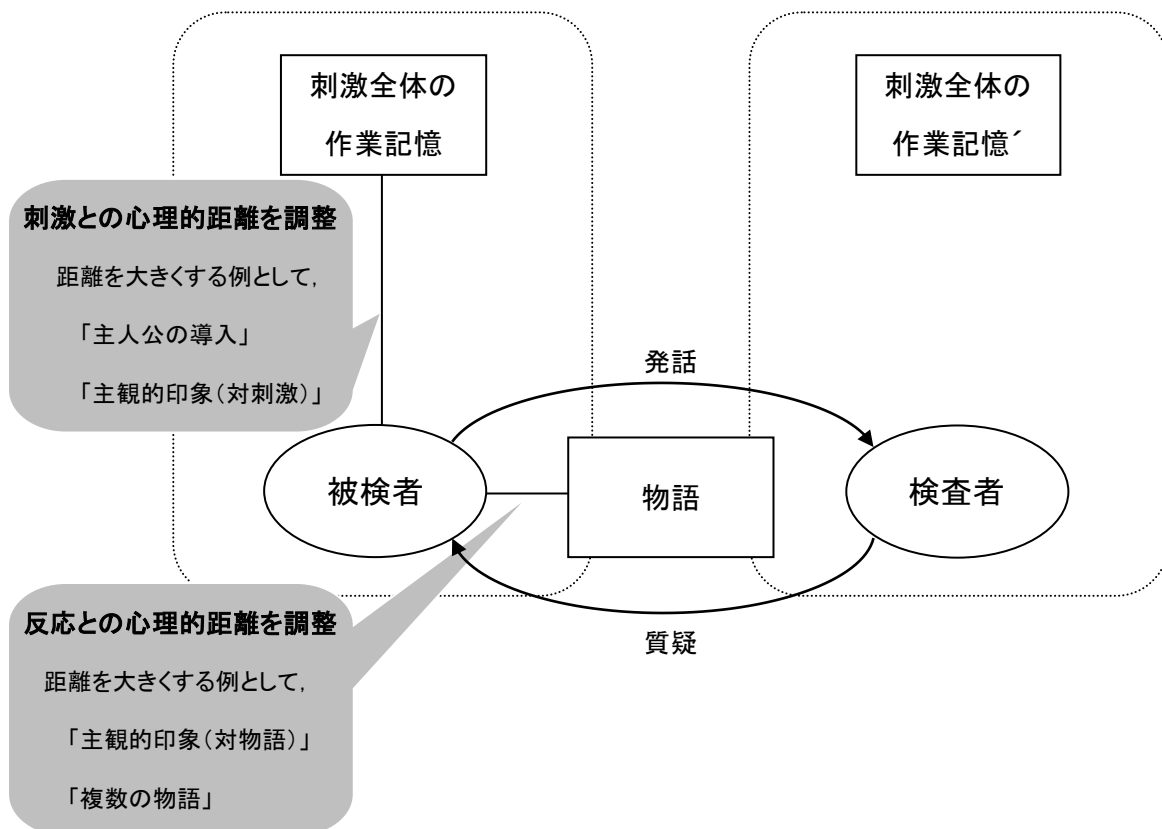


図 11-2. 聴覚刺激提示後に想定される被検者と刺激や物語との関係性

※ 被検者は刺激全体の作業記憶をもとに物語を作成し，検査者と共に刺激を聴いたことから，検査者の方にも刺激全体の作業記憶がある前提で発話する。ただし，この被検者の作業記憶と検査者の作業記憶は，内容が完全には一致しないことが多いと考えられる。APTにおける被検者の刺激や物語との心理的距離の在り様は，視覚による投映法と異なると考えられるが，その差異が被検者の反応にどのように影響を及ぼすのかなど，今後さらなる検討が必要である。

(10) 本論の指標の特徴

本論の完成版 APT で取り上げた指標の解釈について、各研究の結果をもとに整理する。

1) **主題の性質** 本指標は、物語の主題について「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的」に分類する指標である。音声刺激では、「主題の性質(性質)」と自己関係づけおよび対人恐怖心性との間にそれぞれ負の相関が見られた(研究 7, 8)。これに対して非音声刺激では、「主題の性質(性質)」と対人恐怖心性の間にのみ負の相関が見られ(研究 8)、より具体的な対人状況における認知傾向と、より漠然とした対人状況における不安や怯えとの差が表れた結果と考えられた。本指標には否定的な他者イメージや否定的な対象関係が反映されると考えられる。

2) **自己の内界に向ける関心** 本指標は、参加者が特に同一化した対象(主人公)の内的過程や思考過程に言及があれば「ある」、言及がなければ「ない」に評定する指標である。音声刺激では、本指標の高さと Big Five の協調性や勤勉性、および自己関係づけとの関連が見られた(研究 1, 7)。これに対して非音声刺激では、本指標の高さと Big Five の内向性、および自己関係づけや対人恐怖心性との関連が見られ(研究 2, 7, 8)、刺激の種類によって反映する側面が異なっていた。音声刺激においては葛藤的な対人場面における内省や対処能力が反映され、非音声刺激においてはユング的な内向性が反映されると考えられる。

3) **自己に向ける感情** 本指標は、参加者が特に同一化した対象(主人公)に向ける感情について「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」に分類する指標である。音声刺激では、「自己に向ける感情(言及)」と自己関係づけや対人恐怖心性との間に正の相関が見られ(研究 7, 8)、「自己に向ける感情(性質)」の肯定度と Big Five の知性の低さ、および自己関係づけや対人恐怖心性の低さとの間に関連が見られた(研究 1, 7, 8)。音声刺激における本指標には、対人状況における自己意識の強さや、自尊心の程度が反映されると考えられる。ただし、自尊心に関しては Big Five の知性の低さが相反する結果となっており、さらなる検討が必要である。これに対して非音声刺激では、「自己に向ける感情(性質)」の肯定群が否定群より Big Five の外向性や協調性、

勤勉性、知性が高く（研究 2）、一定の解釈を行うにはさらなる研究の積み重ねが必要と考えられる。

4) 他者に向ける関心 本指標は、自己以外の対象や対人関係に関する描写について「多い／どちらでもない／少ない」に分類する指標である。音声刺激では、本指標の高さと Big Five における外向性や協調性、および自己関係づけとの間に関連が見られた（研究 1, 7）。これに対して非音声刺激では、本指標と自己関係づけの間に正の相関が見られた（研究 7）。これらの結果から、本指標には社交性や他者への関心が反映されると考えられるが、非音声刺激において外向性や協調性との関連が見られなかった点など、検討の余地が残っている。

5) 他者に向ける感情 本指標は、自己以外の対象に向ける感情について「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」に分類する指標である。音声刺激では、「他者に向ける感情（性質）」の肯定度と Big Five の勤勉性、および対人恐怖心性の低さとの間に関連が見られた（研究 1, 8）。これに対して非音声刺激では、「他者に向ける感情（言及）」と自己関係づけの間に正の相関が見られ（研究 7）、「他者に向ける感情（性質）」の肯定度と Big Five の協調性や内向性、および対人恐怖心性の低さに関連が見られ（研究 2, 8）、刺激の種類によって関連するパーソナリティが異なっていた。音声刺激においては葛藤的な対人場面における他者イメージや適応能力が反映され、非音声刺激においては非葛藤的場面での他者や周囲への関心や不安が反映されると考えられる。ただし、本指標には評定対象を分類するなど改良の余地があり、解釈についてもさらに検討を行う必要があるだろう。

6) 父親（的人物）に向ける感情 本指標は、父親やそれに近い人物に向ける感情について「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」に分類する指標である。音声刺激では、「父親（的人物）に向ける感情（言及）」と自己関係づけの間に正の相関が見られ（研究 7）、「父親（的人物）に向ける感情（性質）」と対人恐怖心性の間に負の相関が見られた（研究 8）。これに対して非音声刺激では、「父親（的人物）に向ける感情（言及）」の高さと Big Five の協調性、および対人恐怖心性との間に関連が見られ（研究 2, 8）、「父親（的人物）に向ける感情（性質）」の肯定度と Big Five の協調性、ロールシャッハ法の $D < Adj D$ に該当する頻度、および対人恐怖心性との間に関連が見られた

(研究 2, 3, 8)。本指標には父親イメージやアタッチメントの強さや性質が反映されると考えられるが、了解が難しい関連も多く、解釈に関してはさらなる検討が必要である。

7) 母親 (的人物) に向ける感情 本指標は、母親やそれに近い人物に向ける感情について「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」に分類する指標である。音声刺激では、「母親 (的人物) に向ける感情 (言及)」の高さと **Big Five** の外向性, および自己関係づけとの間に関連が見られ(研究 1, 7), 「母親 (的人物) に向ける感情 (性質)」の肯定度と **Big Five** の協調性, および自己関係づけの低さや対人恐怖心性の低さとの間に関連が見られた (研究 1, 7, 8)。これに対して非音声刺激では、「母親 (的人物) に向ける感情 (言及)」の高さと **Big Five** の協調性や、勤勉性の低さ, および自己関係づけや対人恐怖心性との間に関連が見られ (研究 2, 7, 8), 「母親 (的人物) に向ける感情 (性質)」の肯定度と **Big Five** の協調性や勤勉性, ロールシャッハ法の **HVI** に該当する頻度の低さ, および自己関係づけの低さとの間に関連が見られた (研究 2, 3, 7)。本論の **APT** 指標の中でも、他のパーソナリティともっとも多く関連が見られ、概ね母親イメージやアタッチメントの強さや性質の観点から解釈することが可能と考えられる。

8) 人物の導入 本指標は、刺激中に存在しない人物を導入して物語を展開している場合に「ある」、導入していない場合に「ない」に評定する指標である。音声刺激では他のパーソナリティとの関連は得られなかったのに対し、非音声刺激では、本指標の高群は低群よりも **Big Five** の外向性が高いことが示された (研究 2)。本指標には、導入人物によって物語の登場人物を増やす点から社交性が反映されると考えられるが、導入人物の多さは **APT** の特徴の 1 つであり、参加者の他者イメージが色濃く反映されていると考えられることから、導入人物の分類や質的な検討を行う必要がある。

9) 主人公の導入 本指標は、導入人物が物語の主人公とされる場合に「ある」、導入人物以外の人物が主人公とされる場合に「ない」と評定する指標である。この反応は本論では非音声刺激でのみ見られ、本指標の高さは **Big Five** の情緒安定性や知性, および自己関係づけとの間に関連が見られた (研究 2, 7)。刺激中の人物に同一化しないことから刺激に対する心理的距離が反映され、ま

た、何も刺激がないところに主人公の視点を置くことから猜疑心も反映される可能性がある。

10) 導入人物の性質 本指標は、他の登場人物にとって導入人物がどのような人物であるかを「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」に分類する指標である。音声刺激では、本指標の肯定度と **Big Five** の勤勉性や知性、および自己関係づけの低さや対人恐怖心性の低さとの間に関連が見られた（研究 1, 7, 8）。これに対し非音声刺激では、本指標の肯定群は否定群よりも **Big Five** の協調性が高く、ロールシャッハ法における $D < Adj D$ に該当する頻度も高かった（研究 2, 3）。ロールシャッハ法との関連については今後の検討課題であるが、本指標は概ね他者イメージや対人関係イメージの性質を反映すると考えられる。

11) 独特な人物設定 本指標は、物語の登場人物に身分や職業、性格などを付与している場合に「ある」、付与していない場合に「ない」と評定する指標である。音声刺激では本指標と対人恐怖心性の間に正の相関が見られ（研究 8）、非音声刺激では本指標と自己関係づけの間に正の相関が見られた（研究 7）。本指標には公的自己意識と私的自己意識の両方が反映されると考えられ、評定対象を分類することで両者を分けて抽出することも可能であろう。

12) 動物の導入 本指標は、刺激中に存在しない動物を導入して物語を展開した場合に「ある」、動物を導入しなかった場合に「ない」と評定する指標である。音声刺激では他のパーソナリティとの関連は見られず、非音声刺激では、本指標のあり群は **Big Five** の協調性が低く、ロールシャッハ法の $p > a+1$ に該当する頻度も低かった（研究 2, 3）。本指標には対人関係における消極性が反映されると考えられる。

13) 有音／無音の背景音の取り込み 本指標は、背景音（背景に音がない場合を無音の背景音とする）を物語に取り込んでいる場合に「ある」、取り込んでいない場合に「ない」と評定する指標である。音声刺激では、「有音の背景音の取り込み」と自己関係づけの間に負の相関が見られ、「無音の背景音の取り込み」と対人恐怖心性の間に正の相関が見られた（研究 7, 8）。これに対して非音声刺激では、「有音の背景音の取り込み」の高群が低群よりも **Big Five** の協調性が高いことが示された（研究 2）。これらの結果から、本指標には賑やかな

環境への親和性と静かな環境への親和性が反映されると考えられる。

14) 背景音に対する情緒的意味づけ 本指標は、背景音に付与された情緒的意味づけに関して「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」に分類する指標である。音声刺激では、「背景音に対する情緒的意味づけ(言及)」の高群が低群よりも **Big Five** の勤勉性や情緒安定性、知性が低く(研究1)、「背景音に対する情緒的意味づけ(性質)」と対人恐怖心性の間に負の相関が見られた(研究8)。これに対して非音声刺激では、「背景音に対する情緒的意味づけ(言及)」の高さは **Big Five** の協調性、ロールシャッハ法の $D < Adj D$ に該当する頻度、および自己関係づけや対人恐怖心性と関連し(研究2, 3, 7, 8)、「背景音に対する情緒的意味づけ(両価)」の高群は低群よりも **Big Five** の知性が高かった(研究2)。これらの結果から、本指標には周囲の環境や状況に対する注意や敏感さ、漠然とした不安が反映されると考えられる。

15) 曖昧な結末 本指標は、物語の結末が明らかに曖昧である場合に「ある」、それ以外の場合に「ない」と評定する指標である。本論では、本指標と他のパーソナリティとの関連は得られなかった。ただし、本指標は **TAT** の量的分析でも取り上げられる指標であり、**APT** においては何を反映しているのか、さらなる検討が必要であろう。

16) 結末の性質 本指標は、特に主人公にとっての物語の結末に関して「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的」に分類する指標である。音声刺激では他のパーソナリティとの関連は得られず、非音声刺激では、本指標の肯定群は否定群よりも **Big Five** の勤勉性と協調性が高いことが示された(研究2)。この結果からは、本指標には物事の達成や社会的適応が反映されると考えられるが、「曖昧な結末」と同様に、本指標の解釈については今後も検討が必要と考えられる。

17) 攻撃的内容 本指標は、攻撃的行動や強い怒りの感情に言及があった場合に「ある」、言及がなかった場合に「ない」と評定する指標である。音声刺激では本指標の高群は低群よりも **Big Five** の勤勉性と知性が低く(研究1)、非音声刺激では本指標の高群は低群よりも **Big Five** の協調性が低かった(研究2)。これらの結果から、本指標は、非音声刺激では攻撃性や敵対心として表れるのに対し、音声刺激では社会的望ましさとして表れる可能性がある。

18) 損傷内容 本指標は、「傷つけられた」「非常に気分が落ち込んだ」などの表現があった場合に「ある」、そのような表現がなかった場合に「ない」に評定する指標である。音声刺激では本指標と自己関係づけの間に正の相関が見られ（研究7）、非音声刺激では本指標と自己関係づけや対人恐怖心性の間に正の相関が見られた（研究7, 8）。音声刺激においても非音声刺激においても、本指標は自己の傷つきとして解釈が可能と考えられる。

19) 自己言及 本指標は、反応の中で参加者自身の経験に言及した場合に「ある」、そのような言及がない場合に「ない」と評定する指標である。音声刺激では本指標のあり群はなし群よりも **Big Five** の情緒安定性が低く（研究1）、非音声刺激では本指標の高群は低群よりも **Big Five** の勤勉性が低く、外向性が高かった（研究2）。また、研究7では反応例から、本指標の高さは自己関係づけの低さと関連する可能性が示された。つまり、本指標には他者の目を気にせずに自分の考えや体験を話す傾向が反映されると考えられる。

20) 主観的印象（対刺激／対物語） 本指標は、参加者の主観的印象が語られた場合に「対刺激／対物語」に分類する指標である。音声刺激では「主観的印象（対刺激）」の高群は低群よりも **Big Five** の情緒安定性が低く（研究1）、非音声刺激でも「主観的印象（対刺激・対物語）」の高群は低群よりも **Big Five** の情緒安定性が低く、ロールシャッハ法の $D < Adj D$ に該当する頻度は低く、**CDI** に該当する頻度は高かった（研究2, 3）。また、研究7では反応例から、「主観的印象（対刺激）」は自己関係づけの低さと、「主観的印象（対物語）」は自己関係づけの高さと関連する可能性が示された。これらの結果から、本指標には、他者（検査者）からどう思われるかという不安と、その不安への対処を反映すると考えられる。

21) 反応の失敗・拒否 本指標は、過去や未来、登場人物の気持ちを含む物語を作成できない場合や、物語の作成自体を拒む場合に「ある」、それ以外の場合に「ない」と評定する指標である。音声刺激では他のパーソナリティとの関連は見られず、非音声刺激では「反応の失敗・拒否」の高群は低群よりも **Big Five** の協調性が低く、勤勉性が高かった（研究2）。本指標には **APT** に対する非協力的姿勢や、反応に対する慎重さ、柔軟性の低さが反映されると考えられる。ただし、本指標に該当する反応は未だ十分に得られているとはいえ、

敗」と「拒否」も本来的には分類して解釈する必要があるが実現できていない。この点については今後研究を積み重ねていくことで検討していく必要がある。

2 2) 初発反応時間 本指標は、刺激提示後から参加者が物語を話し始めるまでの時間を秒単位で計測する指標である。音声刺激では本指標と自己関係づけの間に正の相関が見られ(研究 7)、非音声刺激では本指標の高群は低群よりも Big Five の外向性が低く、勤勉性が高く、ロールシャッハ法の HVI に該当する頻度が高かった(研究 2, 3)。本指標には、音声刺激においては対人関係を複雑に捉える傾向が反映され、非音声刺激においては思考による対処や慎重さが反映されると考えられる。

2 3) 刺激の追加提示回数 本指標は、参加者が聴覚刺激の再提示を求めた回数を数える指標である。非音声刺激では他のパーソナリティとの関連は見られず、音声刺激では、本指標のあり群はなし群より Big Five の協調性が高かった(研究 1)。この結果からは、本指標には APT に対する協力的姿勢が反映されると考えられるが、1 つの関連しか得られていないため根拠としては弱い。この点については、今後質的に分析を行うなどして確認する必要があるだろう。

2 4) 語りの様式(移入形式/会話形式/物語形式) 本指標は、特徴的な様式で物語が語られた場合に「移入形式/会話形式/物語形式」に分類する指標である。音声刺激では、「語りの様式(移入形式)」の高さと Big Five の知性、および自己関係づけや対人恐怖心性との間に関連が見られ(研究 1, 7, 8)、「語りの様式(会話形式)」の高群は低群より Big Five の情緒安定性が低かった(研究 1)。これに対して非音声刺激では、「語りの様式(移入形式)」の高群は低群より Big Five の情緒安定性が高く(研究 2)、「語りの様式(会話形式)」の高群は低群よりロールシャッハ法の $D < Adj D$ に該当する頻度が高かった(研究 3)。「語りの様式(移入形式)」には物語の登場人物に同一化して語る想像力や感情の活発さが反映され、「語りの様式(会話形式)」には演技性や感情の流動性がさらに強く反映され、不安定さにも関連する可能性がある。「語りの様式(物語形式)」に関しては出現頻度が非常に低く、本論では解釈を検討できなかった。

2 5) 複数の物語 本指標は、1 つの刺激に対して 2 つ以上の物語が語られた場合に「ある」、1 つの物語だけが語られた場合に「ない」と評定する指標である。音声刺激では、本指標の高さは Big Five の情緒安定性の低さ、および自

己関係づけの低さとの関連が見られ（研究 1, 7）、これに対して非音声刺激では、本指標の高さは Big Five の協調性の低さや勤勉性の低さ、ロールシャッハ法の体験型内向型に該当する頻度の低さ、および自己関係づけの低さや対人恐怖心性の低さとの関連が見られた（研究 2, 3, 7, 8）。これらの結果から、本指標には、①1 つの物語に絞り込むことへの不安、②教示に従う姿勢、③他の視点に立つことの難しさなど、複数の解釈が当てはまる可能性が考えられる。今後、これらの解釈についても質的分析を行うなどしてより明確にする必要がある。

26) 微小音要素の取り込み 本指標は、本論の実験参加者のうち 10%未滿しか物語に取り込まなかった音要素を微小音要素とし、その微小音要素を物語に取り込んだ場合に「ある」、取り込まなかった場合に「ない」と評定する指標である。音声刺激では他のパーソナリティとの関連は見られず、非音声刺激では、本指標の高群は低群よりも Big Five の協調性が低いことが示された（研究 2）。この結果からは、本指標には過度な注意深さや警戒心が反映される可能性が考えられるが、1 つしか関連が見られず根拠が弱い。本指標の解釈についても、今後の検討課題としたい。

27) 音要素の取り込み 本指標は、聴覚刺激を細分化したものを音要素とし、その音要素をいくつ物語に取り込んだかを数える指標である。音声刺激では本指標と自己関係づけの間に負の相関が見られ（研究 7）、非音声刺激では本指標の高さと Big Five の外向性、および対人恐怖心性との間に関連が見られた（研究 2, 8）。これらの結果から、本指標には、対人状況や非対人状況における注意の方向性や、ユング的向性が反映される可能性が考えられる。

28) 音要素に対する標準的意味づけからのずれ 本指標は、資料 8 に示した意味づけを「標準」とし、その意味づけから明確にずれている場合に「ある」、それ以外の場合に「ない」と評定する指標である。音声刺激では他のパーソナリティとの関連は見られず、非音声刺激では、本指標の高群は低群よりも体験型内向型に該当する頻度が高いことが示された（研究 3）。ロールシャッハ法における内向型の人のように、本指標の高群も、聴覚刺激を知覚してから物語を作成する過程において、外的刺激や感情よりも観念活動や想像力を優位に働かせるため、もとの音要素から意味づけがずれてしまう可能性が考えられる。し

かし、この解釈に関しても今後他の根拠を検索することが必要であろう。

29) 登場人物の標準的位置関係からのずれ 本論では、本指標と他のパーソナリティ指標との関連は認められなかった。本指標は聴覚刺激の特徴の1つである「空間の無規定性」にもとづく独自の指標であり、ここまで利用可能性を検討してきた。本指標における「標準的位置関係」の基準は刺激作成時に想定した位置関係を広く捉えたものであり(資料8)、その基準から明確にずれただけを評定対象としている。今後、反応の類型化など質的に分析し、その基準をより明確にすることも可能であろう。また、本指標に該当するほどのずれが生じている場合、既に対人関係に関する他の指標に反映されている可能性もある。本指標を採用していくか否かも含めて、今後の検討課題である。

30) 聴空間の拡大／縮小 本指標は、聴覚刺激によって参加者の中に形成される聴空間について、それとは別に空間を想像して物語を展開している場合を「拡大」とし、逆に、聴空間を何かしらの方法で区切って物語を展開している場合を「縮小」とする指標である。音声刺激では、「聴空間の拡大・縮小」の高群は低群よりもBig Fiveの知性が低く(研究1)、「聴空間の拡大」と自己関係づけの間に正の相関が見られた(研究7)。これに対して非音声刺激では、「聴空間の拡大」と対人恐怖心性の間に負の相関が見られ、「聴空間の縮小」と自己関係づけや対人恐怖心性との間に正の相関が見られた(研究7, 8)。これらの結果から、本指標には刺激からの回避傾向が反映され、聴空間の「拡大」と「縮小」には回避における積極・消極の程度が表れると考えられる。

31) 他の感覚への言及 本論では、本指標と他のパーソナリティとの関連は得られなかった。この指標に関しても解釈や今後の採否について検討する必要があるが、1つの展望としては、「視覚情報への言及」に限定して、反応過程における聴覚刺激の視覚情報化に関する1つの指標とすることも考えられよう。

32) 触覚情報の性質 本指標は、触覚に関連する表現について「肯定的／どちらでもない／否定的／両価的／言及なし」に分類する指標である。本論において、この反応は音声刺激では出現が認められなかった。非音声刺激では、「触覚情報の性質(言及)」の高さはロールシャッハ法の反射反応ありに該当する頻度、および対人恐怖心性の低さと関連が見られ(研究3, 8)、「触覚情報の性質(性質)」は自己関係づけや対人恐怖心性との間に負の相関が見られた(研

究 7, 8)。これらの結果から、本指標には親密な対人関係への親和性や、親密な対人関係に対するイメージが反映されると考えられる。

1 1 - 2 聴覚投映法の投映法としての位置づけ

下山 (2008) は、心理アセスメントの目的を、①臨床過程においてクライアントを全体として理解する上で役立つ資料を提供すること、②問題を引き起こし、さらに維持させる要因を分析するのに貢献すること、③その後の介入を適切なものにするための基盤を提供すること、という三点にまとめ、「臨床心理学の対象となる問題への介入が成功する鍵は、総合的なアセスメントを通して適切な機能分析ができるかどうかにある」と述べている。また、村瀬 (2015) は、心理アセスメントを「有効な諸決定を下す際に必要な、患者 (クライアント) についての理解を臨床家が獲得していく過程」と定義し、①クライアント (被査定者) の客観的状态とその暮らしている状況を把握する、②クライアント (被査定者) の体験世界を想像し、把握につとめる、③クライアントを時間軸と空間軸に沿って理解しようとする、現実の生活の実態をイメージしようとする (どういう繋がりの中でどういう気持ちで暮らしているのか想像する)、という 3 つの視点からの理解を含むことが必要であると述べている。このように立場の異なる臨床家であっても、心理アセスメントは心理面接をより効果的にするために必要なものであり、様々な視点を含む総合的な理解が必要であるとする点で共通している。本論の APT は、この多面的な理解における 1 つの道具として活用され得る可能性を秘めている。

馬場 (1997) は、心理アセスメントの技法の一種である性格検査について、被検者にとって①検査の目的は分かりやすいか分かりにくい、②刺激は具体的か抽象的か、③検査場面は被検者が単独で自主的に回答するものか、検査者との対人場面で回答するものか、④自身の反応を意図的に操作することが可能であるか否か、そして、⑤反応に被検者の精神内界や対社会的態度が反映される程度やバランスはどれくらいか、という視点から各検査の位置づけを示している。この枠組みに本論の APT をあてはめると、以下のように位置づけられるだろう (表 11-2, 図 11-3)。前提として、TAT は対人状況のカードが中心の前

半シリーズはより SCT 側に、具象的な絵が多い後半シリーズはよりロールシャッハ法の側に細分化を行った。また、P-F Study は、SCT よりも視覚的・言語的に刺激が多く、統計的に信頼性や妥当性が確認され、標準化も行われていることから、SCT と質問紙法の間位置づけられると考えられた。その上で、音声刺激による APT は、葛藤的な対人場面の刺激である点で TAT の前半シリーズに相似点があり、かつ、言語により葛藤場面が描写され、言語による刺激文（台詞）が提示される点から、TAT と SCT の間に位置づけられるだろう。他方、非音声刺激による APT は、葛藤的な対人場面ではない点で TAT の後半シリーズに近く、かつ、実際に参加者の多くが「これは何の音のように聴こえるか」という点にも言及していたことから、ロールシャッハ法と多少重なる部分もあると考えられる。このため、非音声刺激による APT は TAT とロールシャッハ法の間位置づけられる可能性がある。ただし、この APT の位置づけは現時点での推測であり、今後 TAT や SCT、P-F Study などとの比較検討を行うことによって明確化する必要がある。

なお、本論の APT の聴覚刺激は、日常生活においても聴くことがあるような、現実的な音が多く含まれていた。このことから刺激の曖昧性が十分に備わっていないと指摘される可能性もなくはない。鈴木（2006）は TAT の刺激に関して、「投映法について書かれたものを読むと、あいまいな、あるいは多義的な刺激を提示して云々と書かれていることがよくあるが、ここでの『あいまい』が絵のあいまいな描き方、つまり人や物の形をはっきり描かないことを指すように理解されているのであったら、それはまちがいである。いくらはっきり描かれていても、いろいろな受け取り方が可能なのである」と述べており、この点は本論の APT にも当てはまると考えられる。また、聴覚刺激の内容が日常的で現実的であったとしても、視覚刺激がなく聴覚刺激だけが知覚されるという状況そのものは、ラジオドラマに馴染みのある人でもなければ、多くの人にとって非日常的で非現実的であろう。このことが APT における反応にどのような影響をもたらすのかについては、今後の検討課題の 1 つである。また、検査状況は TAT と同様に検査者との対人場面であるが、TAT とは異なり刺激が一度知覚するとなくなってしまうため、対人的な要素が相対的に強く表れると考えられる。吉村（2015）は「心理検査は、コミュニケーションそのものである」と

明言し、「コミュニケーションとしての検査だからこそ治療的なかかわりが映し出される」と述べている。APTにおける対人的な要素は慎重に扱う必要があるが、適切に扱うことが可能になれば、心理面接に還元できる部分が大きくなる可能性もあるだろう。

表 11-2. 各性格検査の特徴と本論の APT の位置づけ

検査法	<目的>	<刺激>	<場面>	<被検者の意識的操作>
質問紙法	明瞭	具体的	単独 自主的	可能
P-F Study	ほぼ明瞭	具体的	単独 自主的	表面的可能
SCT	ほぼ明瞭	具体的	単独 自主的	表面的可能
APT (音声刺激)	不明	具体的	テスターとの 対人場面	表面的可能
TAT (前半 10 枚)	不明	具体的	テスターとの 対人場面	表面的可能
TAT (後半 10 枚)	不明	具象的	テスターとの 対人場面	表面的可能
APT (非音声刺激)	不明	具象的	テスターとの 対人場面	表面的可能
ロールシャッハ法	不明	非具象的	テスターとの 対人場面	困難

※ 馬場（1997）の表を改変

※ TAT 図版の前半 10 枚は具体的な対人状況の絵が多く、後半 10 枚は抽象的な非対人状況の絵が多いことから、この 2 種類で細分化を行った

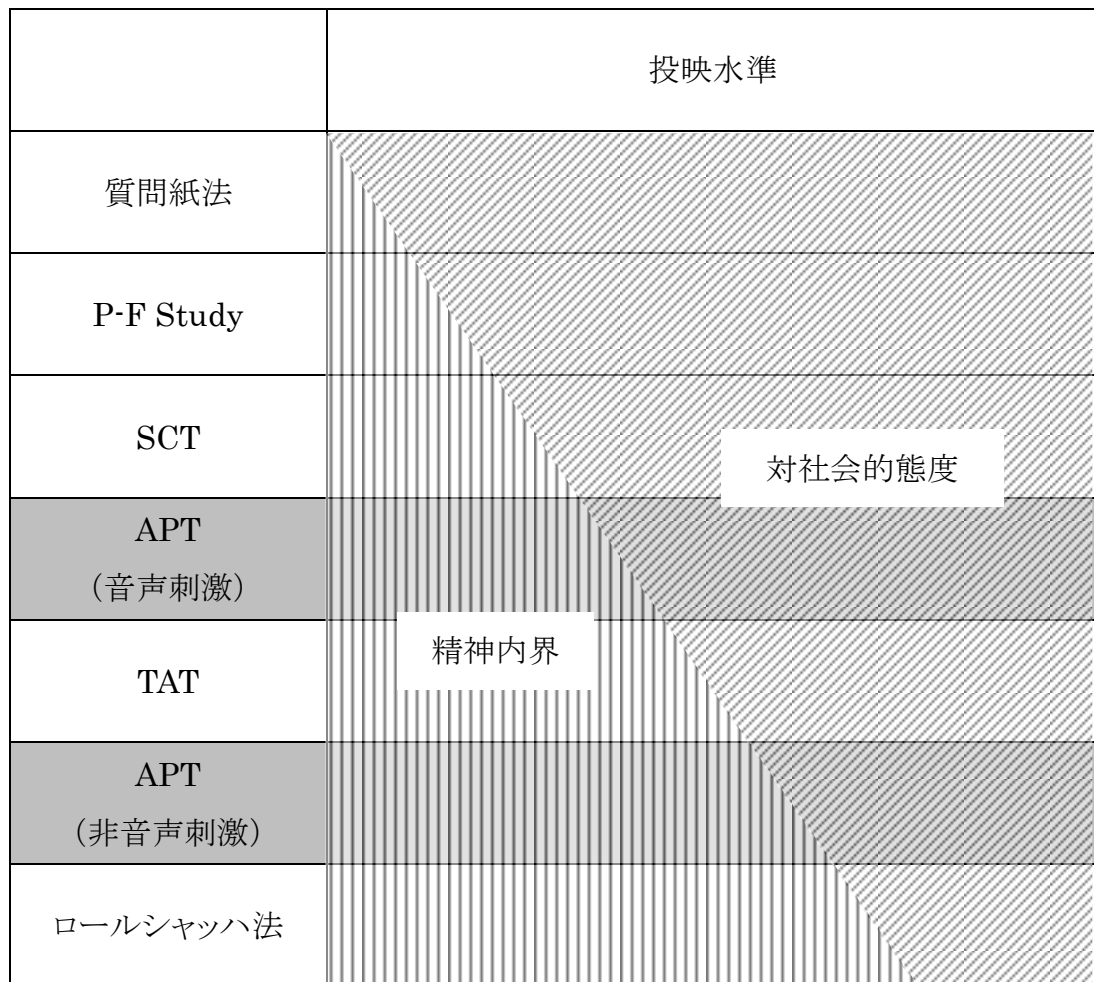


図 11-3. 各性格検査の投映水準と本論の APT の位置づけ

※ 馬場（1997）が各性格検査において対社会的態度と精神内界が投映される割合を便宜的に図示したものを改変。

1 1 - 3 心理臨床における聴覚投映法の意義

ここまで 2 種類の聴覚刺激や指標の観点から本論の APT の特徴をまとめ、投映法としての位置づけについて考察してきた。本論ではまだ実証できていない部分や、さらなる検討を要する部分も多く残されているが、他の投映法と比較すると、人物や動物の導入の多さや、一度知覚すると消失する聴覚刺激をどのように取り込み、作業記憶の中でどの程度自我を関与させて物語を形成するかが反応に表れやすい点が本論の APT の独自性として考えられた。これらは被検者の他者イメージや対象関係および内的過程に強く関連する可能性があり、個人の内的な問題に焦点をあてた心理療法やカウンセリングにおける心理アセスメントに有効と考えられよう。また、山本（1992）が心理療法やカウンセリングの過程で TAT を実施しているように、本論の APT もクライアントとセラピストがイメージを広げたり、内的世界に対する理解を深めたりするための 1 つの道具として活用できる可能性がある。

以下の 2 つの点についても、今後の実証が必要であるが、APT の心理臨床的な意義として挙げられよう。第一に、APT には聴覚優位者の豊かな反応を引き出す可能性が考えられる。たとえば WISC や WAIS などの知能検査を実施した後、視覚的能力より聴覚的能力が優れていた被検者に対する性格検査として、本論の APT をテスト・バッテリーに加えられる可能性がある。このような多面的な心理アセスメントやパーソナリティ理解を促進する点においても、本論の APT に意義を見出すことができるだろう。第二に、APT には視覚障害者に対する心理アセスメントおよび心理的支援の実践に役立てられる可能性もある。今日広く活用されている投映法では P-F Study や SCT を口頭で実施するなどの工夫が考えられるが、筆者の知る限りでは、そのような変法を行った場合の解釈の基準が十分に整備されていない。これに対して、本論の APT であれば、心理的侵襲性などについてさらなる検討を行った上でという限定付きではあるが、大きな変更なく実施することが可能であろう。

今後、これらの APT の独自性を明確化する研究が必要である。特に本論の APT にもっとも近い投映法である TAT との比較は、聴覚刺激を用いる根拠の明確化のためにも欠かせない。WISC や WAIS などの知能検査における視覚的

能力と聴覚的能力の差や、視覚と聴覚におけるイメージ能力の差が、APT の反応上にどのように表れるかを検討することにより、聴覚的能力が優れた人に APT を用いることの意義も明確化されるだろう。これらの差は、APT の反応過程において聴覚刺激を視覚イメージに変換する過程と関連する可能性もあり、被検者および反応過程における認知的側面の理解を深めることにもつながると考えられる。

1 1 - 4 今後の課題と展望

(1) 他のパーソナリティとの関連

まず、本論の各研究において検討の余地が残った部分があった。第三章と第四章では APT と Big Five の各因子との関連を個別に検討したが、Big Five には 5 因子中 2 因子の高低を組み合わせた、2 ポイントコードによる類型もある(村上・村上, 2001)。第五章では APT とロールシャッハ法の鍵変数との関連を検討したが、ロールシャッハ法には他にも多くの有用な変数があり、それらの変数との関連を検討する必要がある。本論では、音声刺激による APT とロールシャッハ法との関連も検討していない。第十章では APT と対人恐怖心性の関連を検討したが、対人恐怖心性尺度 II (堀井, 2006) には 5 つの下位尺度があり、より詳細な検討を行う余地が残されている。この他にも、他のパーソナリティや臨床群との比較を通して、APT の妥当性を検討していくことが求められよう。

(2) 本論の APT 自体の改良

次に、APT で用いる聴覚刺激の修正や変更も検討する必要があるだろう。第九章や第十章のように音声刺激と非音声刺激を別々に量的に分析・解釈する場合、TAT の前半・後半シリーズやロールシャッハ法などのように、刺激が各 10 個ずつになるよう増やすことも考えられるだろう。また、第九章と第十章では、第 1 刺激として採用できる音声刺激がなかったことから、音声刺激と非音声刺激を変則的な配列にせざるを得なかった。質的分析を行うことを考えれば、できる限り早期に刺激の提示順序を固定した方がよく、この点も今後の検討課題の 1 つである。聴覚刺激と同様に、APT 指標も修正・変更していく必要がある。

「独特な人物設定」などの評定対象を細分化することに加えて、特定のパーソナリティ理論や因子分析的なアプローチから、いくつかの指標を統合して分析を行った方が有効なものも出てくる可能性がある。より効果的で効率的な分析を行うためにも、この点は今後検討する価値があるだろう。反応の分析データを蓄積していくことによって、特に認知面の指標の評定基準を精緻化していくことも重要な課題である。また、鈴木（1997）のように、APTで語られた物語の類型化を行うことも考えられる。本論ではAPTの反応を諸指標に分解して取り上げたが、心理臨床における実際の解釈においては、反応をいくつかの要素を含んだ、まとまりのあるものとして捉えることで有効な解釈を導くことも少なくない。

（3）APTの質的分析

最後に、事例研究などにより、APTの反応に関する質的な分析・解釈を行うことが考えられる。APTの解釈と他の投映法や質問紙法の解釈がどのように異なるのか、その差異をふまえてAPTをテスト・バッテリーに加える利点にはどのようなものがあるか、詳細に検討する必要がある。なお、本論の実証研究において、APTの実施中に体調を崩したり気分が悪くなったりして中断する例は見られなかったが、これをもってAPTの心理的侵襲性の懸念がすっかりなくなる訳ではない。今後、特に臨床群への実施を行う際には、この点に十分注意する必要がある。

（4）今後の展望

以上のような課題を検討した上で、APTの臨床的活用への道が開けていくことが期待される。先行研究において指摘されてきたように、被検者の視覚に何らかの障害があり視覚を介する心理検査の実施が困難である場合に、APTが選択され得る。被検者に視覚障害がない場合でも、従来の視覚的側面からのパーソナリティ理解に加えて、聴覚的側面も含めたより多面的なパーソナリティ理解が可能になるだろう。本研究のAPTには、物語に人や動物の導入が表れやすく、対人状況と非対人状況における差を検討しやすい特徴があり、そこに焦点をあてた心理アセスメントが必要な際に活用可能性を見出すことができるだろう。

う。

また、山本（1992）の「TAT かかわり分析」や、吉村（2015）の「コミュニケーションとしての心理検査」のように、心理面接に近い位置づけでの活用も考えられる。特に APT は、聴覚刺激の一過性という特徴から、TAT 以上に被検者自身の内面への焦点化を促進する可能性がある。イメージに重点を置く心理療法においては、イメージのアセスメントとしても、心理療法への導入としても、活用できるかもしれない。いずれにしても、投映法としての APT 研究が十分に行われた結果として、このような応用的な活用も検討され得るだろう。

第十一章のまとめ

本章では、まず、本論の各研究を概観し総括を行った。実証研究において概ね了解可能な結果が得られたことから、本論の APT の妥当性が示唆され、精神病理や症状に関連するパーソナリティとの関連が認められたことから、臨床的な利用可能性も示された。また、音声刺激は明確な対人状況であり、対人場面での葛藤や不安に対する対処様式を映し出すのに対し、非音声刺激は漠然とした非対人状況であり、向性や認知的側面などを映し出し、さらに音声刺激と非音声刺激の対比にパーソナリティが反映されると考えられた。次に、他の投映法における本論の APT の位置づけについて考察した。ここでも音声刺激と非音声刺激を分けて考え、音声刺激は TAT と SCT の中間に、非音声刺激は TAT とロールシャッハ法の中間に、それぞれ位置づけられると考えた。最後に、APT の臨床的な意義や、今後の課題および展望について言及した。APT には、視覚障害者に対する心理アセスメントおよび心理的支援の実践に役立てられる可能性がある。また、APT は被検者のより原始的な、深層の心理過程を映し出す可能性があり、内的な問題に焦点をあてた心理療法やカウンセリングにおいて有用な心理アセスメントの道具の 1 つとなり得るだろう。さらに、APT は聴覚優位者のより豊かな反応を引き出す可能性があり、WISC や WAIS などの実施後、視覚的能力より聴覚的能力が優れていた被検者に対する性格検査の選択肢として加えられる可能性が考えられた。

引用文献

- 安倍幸治・小澤賢司・鈴木陽一・曾根敏夫 (1998). 音色表現語, 感情表現語
及び音情報関連語による環境音評価 日本音響学会誌, **54**, 343-350.
- 相河和佐 (2003). 青年期における対人恐怖心性とロールシャッハ反応 金城
学院大学大学院人間生活学研究科論集, **3**, 1-10.
- 相河和佐 (2004). 女子大生の対人恐怖心性と「顔反応」 ロールシャッハ法
研究, **8**, 33-41.
- 安香宏 (1992). 人格力動の理解と投映技法 安香宏・大塚義孝・村瀬孝雄 (編)
臨床心理学大系 6—人格の理解 2— 金子書房, pp.1-23.
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual
of Mental Disorders. 5th ed.*
(高橋三郎・大野裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニ
ュアル 医学書院)
- 青木省三・三浦恭子・和辻健太・吉武亜紀・月田美佳・原田まき・村上伸治・
山田了士 (2012). 心理臨床におけるアセスメントを考える 村瀬嘉代子・
津川律子 (編) 事例で学ぶ臨床心理アセスメント入門 金剛出版,
pp.20-27.
- 馬場禮子 (1997). 心理療法と心理検査 日本評論社
- 馬場禮子 (2006). 投映法—どう理解しどう使うか— 氏原寛・岡堂哲雄・亀
口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子 (編) 心理査定実践ハンドブ
ック 創元社, pp.220-230.
- Ball, T. S., & Bernardoni, L. C. (1953). The application of an auditory
apperception test to clinical diagnosis. *Journal of Clinical Psychology*, **9**,
54-58.
- Braverman, S., & Chevigny, H. (1952). *The Auditory Projective Test:
Records and manual*. New York: American Foundation for the Blind.
- Davids, A., & Murray, H. A. (1955). Preliminary appraisal of an auditory
projective technique for studying personality and cognition. *American*

- Journal of Orthopsychiatry*, **25**, 543-554.
- 遠藤公久 (1989). 開示状況における開示意图と開示規範からのズレとについて—性格特徴との関連— 教育心理学研究, **37**, 20-28.
- 遠藤公久・堀洋道 (1988). 自己開示の適切さの判断に及ぼす状況要因の影響 筑波大学心理学研究, **10**, 119-125.
- Exner, J. E. (2000). *A primer for Rorschach interpretation*. Asheville : Rorschach Workshops.
- (エクスナー, J. E. 中村紀子・野田昌道 (監訳) (2002). ロールシャッハの解釈 金剛出版)
- Fenigstein, A., & Vanable, P. A. (1992). Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 129-138.
- Frank, L. K. (1939). Projective Methods for the Study of Personality. *Journal of Psychology*, **8**, 389-413.
- 湧上康幸・中村紀子・津川律子・佐藤豊 (2004). 5 因子性格検査 NEO-FFI と包括システムによるロールシャッハ・テスト変数との関連 心理臨床学研究, **22**, 561-565.
- 藤岡淳子 (2004). 包括システムによるロールシャッハ臨床—エクスナーの実践的応用— 誠信書房
- 藤岡喜愛 (1992). ロールシャッハ法 氏原寛他 (編) 心理臨床大事典 培風館, pp.519-527.
- 藤田和弘・前川久男・大六一志・山中克夫 (編) (2011). 日本版 WAIS-III の解釈事例と臨床研究 日本文化科学社
- 藤田宗和 (2001). TAT の情報分析枠 (the Frame of Information Analysis) の提案—TAT プロトコル分析のための新しい枠組み— 犯罪心理学研究, **39**, 1-16.
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing.
- (ギャバード, G. O. 舘哲朗 (監訳) (1997). 精神力動的な精神医学—その臨床実践 DSM-IV版臨床篇 ; II 軸障害 岩崎学術出版社)
- Grace, T. C. (2003). *Development of stimuli for a projective test of auditory*

perception and personality. Dissertation.

- 林洋一・小川捷之 (1981). 対人不安意識尺度構成の試み 横浜国立大学保健管理センター年報, **1**, 29-45.
- 堀井俊章 (2001). 青年期における自己意識と対人恐怖心性との関係 山形大学紀要 (教育科学), **12**, 85-100.
- 堀井俊章 (2006). 対人恐怖心性尺度Ⅱの開発—対人関係におけるおびえの心性を測定する試み— 学生相談研究, **26**, 221-232.
- 堀井俊章 (2012). 大学生における古典的対人恐怖心性の発達的变化 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学, **14**, 63-70.
- 堀井俊章 (2014). 大学生の不登校傾向と対人恐怖心性との関連 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学, **16**, 135-143.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55-65.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) 上智大学心理学年報, **21**, 43-51.
- 包括システムによる日本ロールシャッハ学会 (編) (2005). ロールシャッハとエクスナー—ロールシャッハ・テストの起源と発展— 金剛出版
- Husni-Palacios, M., & Palacios, J. R. (1964). Auditory perception of personality patterns of blind adults. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, **28**, 284-292.
- 池田豊應 (1995). 投映法とは 池田豊應 (編) 臨床投映法入門 ナカニシヤ出版, pp.9-16.
- 稲垣実果 (2007). 自己愛的甘え尺度の作成に関する研究 パーソナリティ研究, **16**, 13-24.
- Izard, C. E., Libero, D. Z., Putnam, P., & Haynes, O. M. (1993). Stability of Emotion Experiences and Their Relations to Traits of Personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 847-860.
- 泉清人・佐藤哲身 (1983). 音の心理的属性に関する因子分析 日本建築学会論文報告集, **332**, 75-81.
- Jung, C. G. (1910). The association method. *American Journal of Psychology*,

21, 219-269.

- 神谷美里 (1999). 対人恐怖的心性とロールシャッハ人間反応 中京大学文学部紀要, **34**, 17-26.
- 神谷美里 (2000). 対人恐怖心性とロールシャッハ反応 ロールシャッハ法研究, **4**, 11-19.
- 金子一史 (1999). 被害妄想的心性と他者意識および自己意識との関連について 性格心理学研究, **8**, 12-22.
- 金子一史 (2000). 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, **48**, 473-480.
- 金子一史 (2001). 妄想的観念および妄想に関する研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, **48**, 163-173.
- 金子一史・本城秀次・高村咲子 (2003). 自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連 パーソナリティ研究, **12**, 2-13.
- 笠原敏彦 (2005). 対人恐怖と社会不安障害—診断と治療の指針— 金剛出版
- 片口安史 (1987). 改訂 新・心理診断法—ロールシャッハ・テストの解説と研究— 金子書房
- 片口安史 (1992). カロ・インクブロット・テスト図版 金子書房
- 河原達也・小川一・堂下修司 (1995). 声質に関する印象評価および心理的類似性と音響的類似性について 信学技報, **SP95-38**, 7-13.
- 川井敬二・小島隆矢・平手小太郎・安岡正人 (2004). 環境音の印象評定構造に関する研究—被験者自身の言葉に基づいた評価構造の抽出— 日本音響学会誌, **60**, 249-257.
- 数井みゆき・遠藤利彦 (編) (2005). アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房
- 香月菜々子・小野瑠美子・上芝功博・横山恭子 (2003). 星と波テストのパーソナリティ・テストとしての独自性について—「不適応」の見解をめぐっての, ロールシャッハ・テストとの比較を通じて— 上智大学心理学年報, **27**, 73-85.
- 木村法子 (1983). 対人恐怖についての一考察—TAT に表された自己と他者を通して— 京都大学教育学部紀要, **29**, 134-144.

- Kirk, S. A., & Kirk, W. D. (1972). *Psycholinguistic learning disabilities: diagnosis and remediation*. Univ of Illinois Pr.
- (カーク, S. A. & カーク, W. D. 三木安正・上野一彦・越智啓子 (共訳)
(1984). ITPA による学習能力障害の診断と治療 日本文化科学社)
- 北山修 (2002). 対人恐怖 小此木啓吾・北山修 (編) 精神分析事典 岩崎
学術出版社, pp.320.
- 久保恵 (2000). 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像—内的ワーキング
モデルの観点からの検討— 教育心理学研究, **48**, 182-191.
- 熊倉敬子 (1989). 音の投影法の研究 慶応義塾大学大学院社会科学研究所紀
要, **30**, 21-28.
- 槇田仁・中野敬子・伊藤隆一 (1990). 絵画空想法入門—PRT 図版による新し
い TAT— 金子書房
- 益子洋人 (2009). 高校生の過剰適応傾向と、抑うつ、強迫、対人恐怖心性、
不登校傾向との関連—高等学校 2 校の調査から— 学校メンタルヘルス,
12, 69-76.
- 松原由枝 (2005). ソンディ・テスト研究 1 川村学園女子大学研究紀要, **16**,
1-26.
- 松原由枝 (2000). 深層心理学者 Lipot(Leopold) Szondi の生涯と業績
(1893-1986)—Schicksalspsychologie のハンガリーにおける萌芽, そして
スイスにおける発展まで— 川村学園女子大学研究紀要, **11**, 115-152.
- 松井裕子 (1980). 聴覚投映法による精神分裂病者の現実検討測定を試み—幻
覚生起の心理的要因に関する検討— 日本心理学会大会発表論文集, **44**,
551.
- 松下健 (2011). 対人恐怖傾向者の確信型における 3 種の妄想的認知と完全主
義や内向性の関連 早稲田大学大学院文学研究科紀要 第 1 分冊, **57**,
45-57.
- 松下健・越川房子 (2010). 大学生における対人恐怖の確信型と緊張型の比較
検討—自尊感情, 共感性, 妄想様観念に着目して— 日本教育心理学会総
会発表論文集, **52**, 752.
- 水口芳明・佃範夫 (1955). 音の TAT についての研究 香川大学学芸学部研究

報告第1部, 6, 77-88.

Morgan, C. D., & Murray, H. A. (1935). A method of investigating fantasies. *Archives of Neurology and Psychiatry*, 34, 289-306.

森田正馬 (1953). 赤面恐怖の治し方 白揚社

森田美弥子・高橋靖恵・高橋昇・杉村和美・中原睦美 (2010). 実践ロールシャッハ法—思考・言語カテゴリーの臨床的適用— ナカニシヤ出版

向井靖子 (2001). 対人不安の生起・維持プロセスの理論モデルに関する展望—回避的行動と自己愛, 他者への関心の葛藤という観点から— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 319-326.

村上宣寛 (2005). 「心理テスト」はウソでした。—受けたみんなが馬鹿を見た— 日経 BP 社

村上宣寛・村上千恵子 (2001). 主要 5 因子性格検査ハンドブック—性格測定の基礎から主要 5 因子の世界へ— 学芸図書

村瀬嘉代子 (2015). 心理アセスメントが治療・支援に役立つために 青木省三・宮岡等・福田正人(監修) ころの科学 184 日本評論社, pp.22-27.

Murstein, B. I. (1963). *Theory and Research in Projective Techniques: emphasizing the TAT*. New York: John Wiley & Sons.

永井徹 (1991). 対人恐怖的心性の構造について 聖セシリア女子短期大学紀要, 16, 50-55.

永井徹 (1998). 対人不安における心理的・認知的アセスメント 季刊精神科診断学, 9, 479-488.

永井徹・岡田努 (1987). 対人恐怖的心性の構造に関する研究 日本心理学会第 51 回大会発表論文集, 534.

中島由恵 (1959). 音 TAT のころみ—音 TAT の妥当性について— 教育心理学研究, 7, 18-23.

野崎知子 (2007). 青年期女子における対人恐怖的心性とロールシャッハ反応についての研究 臨床心理学: 福岡女学院大学大学院紀要, 4, 31-42.

岡田努・永井徹 (1990). 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.

大西将史 (2008). 青年期における対人恐怖的心性と対人不安の差異—罪悪感

- による両概念の弁別— 心理学研究, **79**, 351-358.
- 太田宣子 (1995). TAT 池田豊應 (編) 臨床投映法入門 ナカニシヤ出版, pp.72-89.
- Rapaport, D., Gill, M., & Schafer, R. (1968). *Diagnostic psychological testing (revised ed.)*. New York: International Universities Press.
- Rorschach, H. (1921, 1954). *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungs-diagnostischen Experiments*. Bern: Ernst Bircher.
- (ロールシャッハ, H. 鈴木睦夫 (訳) (1998). 新・完訳 精神診断学—付 形態解釈実験の活用— 金子書房)
- Rutherford, A. (2003). B. F. Skinner and the Auditory Inkblot: The Rise and Fall of the Verbal Summator as a Projective Technique. *History of Psychology*, **6**, 362-378.
- 斎藤久美子・林勝造 (1979). 人格理解の方法(2) 藤永保他 (編) テキストブック心理学(7)臨床心理学 有斐閣
- 坂上裕子 (1999). 感情に関する認知の個人差—感情特性と曖昧刺激における感情の解釈との関連— 教育心理学研究, **47**, 411-420.
- 佐々木裕子 (2003). Dr. Wagner を訪ねて—ハンドテストの創始者から学んだこと— ロールシャッハ法研究, **7**, 114-121.
- 佐藤徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, **9**, 138-139.
- 佐藤順・森島繁生 (1997). 音声に込められた感情の意味次元に関する検討 信学技報, HCS97-4, 21-28.
- Schafer, R. M. (1977). *The Tuning of the World*. Random House.
- (シェーファー, R. M. 鳥越けい子他 (訳) (1986). 世界の調律—サウンドスケープとは何か— 平凡社)
- 関山徹 (2001). Social Cognition and Object Relations Scale 中京大学版 (SCORS-C) 評定マニュアル 中京大学心理学部紀要, **1**, 69-78.
- Shakow, D., & Rosenzweig, S. (1940). The use of the tautophone (“verbal summator”) as an auditory apperceptive test for the study of personality.

Character and Personality, **8**, 216-226.

重野純 (2003). 音の世界の心理学 ナカニシヤ出版

嶋野重行・鈴木志穂子・菅原正和 (2004). 青年期における IWM (Internal Working Model) と対人不安 岩手大学教育学部研究年報, **63**, 105-118.

清水健司 (2009). 青年期における対人恐怖心性と自己関係づけの関連 人文科学論集人間情報学科編, **43**, 65-75.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2006). 対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデル尺度における短縮版作成の試み パーソナリティ研究, **15**, 67-70.

清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデルにおける認知特性の検討—対人恐怖と社会恐怖の異同を通して— 教育心理学研究, **58**, 23-33.

清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**, 54-64.

下山晴彦 (2008). 心理アセスメントとは何か 下山晴彦・松澤広和 (編) 実践心理アセスメント 日本評論社, pp.2-8.

調優子・高橋靖恵 (2002). 青年期における対人不安意識に関する研究—自尊心, 他者評価に対する反応との関連から— 九州大学心理学研究, **3**, 229-236.

Skinner, B. F. (1936). The verbal summator and a method for the study of latent speech. *Journal of Psychology*, **2**, 71-107.

Stone, D. R. (1950). A recorded auditory apperception test as a new projective technique. *Journal of Psychology*, **29**, 349-353.

菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.

鈴木睦夫 (1997). TAT の世界—物語分析の実際 誠信書房

鈴木睦夫 (2004). TAT とロールシャッハ・テスト—相似点と相違点— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **4**, 11-25.

鈴木睦夫 (2006). 物語分析 氏原寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子 (編) 心理査定実践ハンドブック 創元社, pp.256-259.

鈴木睦夫 (2011). TAT 日本心理臨床学会 (編) 心理臨床学事典 丸善出

- 版, pp.110-111.
- 田中富士夫 (1991). 心理アセスメントの基礎理論 安香宏・田中富士夫・福島章 (編) 臨床心理学大系 5—人格の理解 1— 金子書房, pp.1-31.
- 丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典 (2000). 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成 心理学研究, **71**, 379-386.
- 高橋雅春・西尾博行 (1994). 包括システムによるロールシャッハ・テスト入門—基礎編— サイエンス社
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (1998). 包括システムによるロールシャッハ解釈入門 金剛出版
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2002). ロールシャッハ形態水準表—包括システムのわが国への適用— 金剛出版
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2006). ロールシャッハ・テスト実施法 金剛出版
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2007). ロールシャッハ・テスト解釈法 金剛出版
- 高倉佑紀子・横田正夫 (2010). 妄想様観念と対人恐怖心性・社会的スキルとの関連 日本大学心理学研究, **31**, 17-21.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, **196**, 1-6.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.
- 坪内順子 (1997). TAT アナリシス—生きた人格診断 垣内出版
- 津田恭充 (2011). 不確実な対人場面における他者の本心についての反すうと関係妄想的認知の関連—自尊感情を統制した場合— カウンセリング研究, **44**, 10-18.
- 津田恭充・伊藤義美 (2012). 潜在的自尊心および顕在的自尊心とパラノイア—イニシャル選好課題と星座選好課題を用いた検討— 対人社会心理学研究, **12**, 103-109.
- 辻平治郎 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房
- 上野一彦・松田修・小林玄・木下智子 (2015). 日本版 WISC-IVによる発達障

- 害のアセスメント—代表的な指標パターンの解釈と事例紹介— 日本文化科学社
- 上里一郎（監修）（2001）. 心理アセスメントハンドブック 第2版 西村書店
- 氏原寛（2005）. ロールシャッハ・テストと TAT の解釈読本—臨床的理解を深めるために— 培風館
- Van den Daele, L. (1967). A Music Projective Technique. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, **31**, 47-57.
- 渡部敦子（2003）. 対人不安と自己呈示—さまざまな対人場面における自己呈示動機付けと効力感について— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **51**, 187-196.
- Wood, J. M., Nezworski, M. T., Lilienfeld, S. O., & Garb, H. N. (2003). *What's Wrong with the Rorschach: Science Confronts the Controversial Inkblot Test*. Jossey-Bass.
- （ウッド, J. M., ネズースキ, M. T., リリエンフェルド, S. O., & ガーブ, H. N. 宮崎謙一（訳）（2006）. ロールシャッハテストはまちがっている—科学からの異議— 北大路書房）
- 山本和郎（1992）. 心理検査 TAT かかわり分析—ゆたかな人間理解の方法— 東京大学出版会
- 山下格（1997）. 対人恐怖の病理と治療 精神科治療学, **12**, 9-13.
- 山下京子（2004）. TAT とロールシャッハ・テストに示された対象関係 広島女学院大学論集, **54**, 1-19.
- 山下京子（2005）. ロールシャッハ・テストの体験型と TAT 反応の関係 広島女学院大学論集, **55**, 15-38.
- 山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦（2008）. 被害妄想観念と性格特性 5 因子モデルおよび帰属スタイルとの関連 カウンセリング研究, **41**, 161-168.
- 山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦（2009）. 日本語版パラノイア・チェックリストの因子構造および妥当性の検討 パーソナリティ研究, **17**, 182-193.
- 吉村聡（2011）. 投映法心理検査 日本心理臨床学会（編） 心理臨床学事典 丸善出版, pp.102-103.
- 吉村聡（2015）. コミュニケーションとしての心理検査 青木省三・宮岡等・

福田正人（監修）　こころの科学 184　日本評論社， pp.22-27.

出典

- ビクター効果音ライブラリー4 自然 (1997). ビクターエンタテインメント
- ビクター効果音ライブラリー6 家庭 (1997). ビクターエンタテインメント
- ビクター効果音ライブラリー7 街 (1997). ビクターエンタテインメント
- デジタル最新録音&マスタリングによる効果音大全集(31) 群集がやのいろいろ (1994). キングレコード
- デジタル最新録音&マスタリングによる効果音大全集(35) 人の足音のいろいろ (1994). キングレコード
- デジタル最新録音&マスタリングによる効果音大全集(41) 身近な生活効果音 (1996). キングレコード
- デジタル最新録音&マスタリングによる効果音大全集(43) 人体の発する音とイメージ音各種 (1996). キングレコード
- デジタル最新録音&マスタリングによる効果音大全集(44) 時計と時報鐘 破壊音・衝撃音 (1996). キングレコード
- 効果音ベスト (2006). キングレコード
- 効果音大全集 12 雨風／花火／雪上／焚き火 (1999). キングレコード
- 効果音大全集 41 身近な生活効果音 (1996). キングレコード
- 効果音大全集 43 人体の発する音とイメージ音各種 (1996). キングレコード
- 効果音大全集 45 屋内ノイズII (1996). キングレコード
- Paul,B. & David,W. (2011). <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>
- 新・効果音大全集 4 都市・交通 (2001). キングレコード
- Sound Effect Library—効果音ベスト—生活 (1998). 日本コロムビア
- Sound Effect Library—効果音ベスト—自然 (1998). 日本コロムビア

謝 辞

「音を使った心理検査を研究できたらおもしろいだろうな」という「思いつき」から出発した本研究が、約 12 年の時を経てようやく一つの形になったことに今は安堵の気持ちで胸が一杯です。研究を始めて数年が経った頃には、臨床心理学を学び始めて間もない私には荷が重いテーマであることが分かり始め、このテーマで研究を続けるべきか迷いながらも、周囲の方々の支えがあつてここまでやり遂げることができました。この場を借りて感謝を申し上げます。

指導教員である東北大学大学院教育学研究科の安保英勇准教授には、非音声刺激の内容についてアイデアをいただいたり、実際に刺激を録音していただいたりというところから、各研究の分析方法や論文の書き方、そして進路に関するところまで幅広くご指導をいただきました。私のマイペースさに対しても根気強く接し、ここまで導いていただいたことに感謝してもし尽くせません。また、同研究科の加藤道代教授には、研究および心理臨床に関してご指導をいただきました。特に心理臨床については、私が駆け出しの頃に心理面接および心理アセスメントに関して定期的にご指導をいただき、そのときに身につけた心理臨床の感覚が研究を進める上での土台になりました。その経験がなければ、本研究も実感のない絵空事に終わってしまっていたらと思います。さらに、同研究科の上埜高志教授には、私の将来も見据えた温かいご指導をいただきました。先々の見通しを立てて研究を進めていくことが不得意な私にとって、上埜先生のご助言は道標になり、安心してここまで進めてくることができました。改めまして深くお礼申し上げます。

本研究を始めた当時には、吉村聡准教授（上智大学）や先輩の大島進吾さん（東北福祉大学せんだんホスピタル）、内田美子さん（静岡医療センター）、同期の元木良洋君（静岡少年鑑別所）をはじめとする吉村研究室のメンバーとともに投映法の魅力に触れ、その奥深さを学ぶことができました。そのときの体験がなければ、本研究をここまで継続することもできなかったと思います。その後、アセスメント研究会を定期的で開催する中で、東北大学学生相談・特別支援センターの池田忠義教授から投映法の枠を超えた幅広い心理アセスメント

や、それに基づく心理的支援の実践について地に足の着いた視点を学ぶことができました。振り返ると、このように心理アセスメントや心理臨床の実践について学ぶ機会に恵まれたことによって、荷が重いと感じていた本研究を推し進める力を得ることができたのだらうと思います。

また、現在の職場の理解なしには本論文を書き進めることはできませんでした。博士論文への取り組みについて我が身のように真剣に考えてくださった学生相談・特別支援センター長の安藤晃教授や吉武清實教授、池田忠義教授に感謝いたします。特に昨年末以降は、本論文の執筆に時間を割く必要が生じ、その間の仕事を支えてくださった中島正雄准教授、長友周悟講師、佐藤静香助手、佐々木真理助手、そして体調面も含めて心配りをいただきました高橋君子さん、嶺岸幸子さん、池田文香さんに心より感謝申し上げます。

本研究の刺激の作成にご協力をいただいたサークルやクラブの方々、そして調査および実験にご協力いただいた多くの方々にもこの場を借りて厚く御礼申し上げます。実験や評定、本論文の執筆においては、東北大学大学院教育学研究科臨床心理コースの方々にも格段の協力をいただきました。実験と評定にご協力いただきました同期の元木良洋君、評定にご協力いただきました先輩の内田美子さん、同期の横谷謙次君、後輩の三船奈緒子さん、東海林渉君、齊藤英俊君に感謝申し上げます。また、後輩の竹ヶ原靖子さんと千葉柊作君には論文執筆に関して力を貸していただきました。急な依頼だったにもかかわらず、快く引き受けてくださってありがとうございました。

そして、10年以上の長い間、父と母も根気強く見守ってくれました。他のきょうだいも就職・結婚してそれぞれの家庭を築いていく中で、中途半端な状態だった私をときに厳しく、ときに優しく励ましてくれたことは、本論文執筆への取り組みを後押ししてくれました。また、私の妻望には、数ヶ月の間家のことをほぼ任せっきりで大変な苦勞をかけました。そのような状況にもかかわらず、本論文への取り組みに理解を示し、最後まで応援してくれたことは、この上ない支えになりました。心より感謝の気持ちを伝えたいと思います。

2016年3月

松川 春樹

資 料

本論で用いた尺度

【研究 1】

資料 1. 主要 5 因子性格検査 (村上・村上, 2001)

資料 2. 音声刺激 APT の評定マニュアル

資料 3. 音声刺激 APT の評定用紙

【研究 2】

資料 1. 主要 5 因子性格検査 (村上・村上, 2001)

資料 4. 非音声刺激 APT の評定マニュアル

資料 5. 非音声刺激 APT の評定用紙

【研究 3】

資料 4. 非音声刺激 APT の評定マニュアル

資料 5. 非音声刺激 APT の評定用紙

【研究 5】

資料 6. 印象評定用紙

資料 7. 音要素チェックリスト

【研究 6】

資料 8. 完成版 APT の刺激内容と提示順序

資料 9. 完成版 APT の実施マニュアル

資料 10. 完成版 APT の評定マニュアル

資料 11. 完成版 APT の評定用紙

【研究 7】

資料 12. 自己関係づけ尺度 (金子, 2000)

【研究 8】

資料 13. 对人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井，2006）

資料1. 主要5因子性格検査 (村上・村上, 2001)

以下の文章を読んで、あてはまる方の数字を○で囲んで下さい。

	はい	いいえ
1. 問題を綿密に検討しないで、実行に移すことが多い。	1	2
2. どちらかというと言情な方です。	1	2
3. ほかに人と比べると話し好きです。	1	2
4. どちらかというと言味でめだたない方です。	1	2
5. 思いやりがある方です。	1	2
6. 親しい仲間でも、本当に信用することはできません。	1	2
7. 将来のことを見通すことができる方です。	1	2
8. どうでもいいことを、気に病む傾向があります。	1	2
9. 疲れやすくはありません。	1	2
10. 軽率に物事を決めたり、行動してしまいます。	1	2
11. どちらかというと言、にぎやかな性格です。	1	2
12. 仕事や勉強には精力的に取り組めます。	1	2
13. 自分で悩む必要のないことまで心配してしまうのは確かです。	1	2
14. 人前で話すのは苦手です。	1	2
15. だれにでも親切にするように心がけています。	1	2
16. あまり心配症ではありません。	1	2
17. ほかに人と同様に、神経質ではないと信じています。	1	2
18. どちらかというと言、気持ちが動揺しやすい。	1	2
19. 積極的に人と付き合う方です。	1	2
20. 特に人前を気にする方ではありません。	1	2
21. どちらかというと言徹底的にやる方です。	1	2
22. 難しい問題にぶつかると、頭が混乱することが多い。	1	2
23. どちらかというと言引っ込み思案です。	1	2
24. ほかに人と比べると、あれこれ悩んだり、思いわずらったりする方です。	1	2
25. みんなで決めたことは、できるだけ協力しようと思います。	1	2
26. 物事を難しく考えがちです。	1	2
27. どちらかというと言飽きっぽい方です。	1	2
28. 物事がうまくいかないと、すぐに投げ出しなくなります。	1	2
29. いつも何か気がかりです。	1	2
30. いろいろな分野の言葉をたくさん知っています。	1	2
31. 人から親切にされると、何か下心がありそうで警戒しがちです。	1	2
32. 問題を分析するのは苦手な方です。	1	2
33. 自分にはそれをする力がないと思って、あきらめてしまったことが何回かあります。	1	2
34. 機会さえあれば、大いに世の中に役立つことができると言思います。	1	2
35. どちらかというと言おとなしい性格です。	1	2

以下の文章を読んで、あてはまる方の数字を○で囲んで下さい。

	はい	いいえ
36. 何かに取り組んでも、中途半端でやめてしまうことが多い。	1	2
37. あまり自分の意見を主張しない方です。	1	2
38. ほかに人と同じように、すぐに友達ができる方です。	1	2
39. 私はたしかに自信に欠けています。	1	2
40. いろいろな問題や事柄から共通した性質を見つけだすのは、ほかに人より得意です。	1	2
41. 機会さえ与えられれば、皆のよいリーダーになれると思います。	1	2
42. 私は重要人物です。	1	2
43. ほとんどの知人から好かれています。	1	2
44. いつも気がかりなことがあって、落ち着きません。	1	2
45. みんなで決めたことでも、自分に不利になる場合は協力したくありません。	1	2
46. ひろく物事を知っている方です。	1	2
47. いつもと違ったやり方を、なかなか思いつきません。	1	2
48. どちらかというと人情があつい方です。	1	2
49. 誠実に仕事をして、あまり得にはなりません。	1	2
50. 自信に満ちあふれています。	1	2
51. 筋道を立てて物事を考える方です。	1	2
52. すぐに、まごまごします。	1	2
53. ほかに人と比べると活発に行動する方です。	1	2
54. 大抵の人が動揺するような時でも、落ち着いて対処することができます。	1	2
55. はっきりとした目標を持って、適切なやり方で取り組みます。	1	2
56. くよくよ考え込みます。	1	2
57. 元気がよいと人に言われます。	1	2
58. 学校ではクラスの人たちの前で話すのがひどく苦手でした。	1	2
59. ほかに人より洗練された考え方をする方です。	1	2
60. どちらかというとなり口です。	1	2
61. ほかに人と比べると、物事の本質が見抜ける方です。	1	2
62. こまごまとしたことまで気になってしまいます。	1	2
63. 人の言葉には裏があるので、そのまま信じない方がよいと思います。	1	2
64. どちらかというとなり坊主で、根気がない方です。	1	2
65. いつも人の立場になって考えるように心がけています。	1	2
66. 緊張してイライラすることがよくあります。	1	2
67. 旅行などでは、あらかじめ細かく計画を立てることが多い。	1	2
68. 人助けのためなら、やっかいなことでもやります。	1	2
69. 初対面の人と話をするのは骨が折れるものです。	1	2
70. 子供や老人の世話をするのが好きです。	1	2

I 内容面

(1) 自己の内界に向けた関心

自己（主人公）の内的過程や思考過程への言及があるかないか

→ もともと台詞にある言葉をなぞるだけのものや、明らかに表面的なもの、全く情緒を伴わないものは「ない」に評価。また、登場人物の心中に葛藤を見た場合で、かつ、その葛藤について描写が十分になされている場合には「ある」に評価する（ここでの葛藤とは、個人内で異なる態度や思考、感情等が相対立して併存している状態をいう）。

(2) 自己に向けた感情

自己に向けた感情は肯定的か否定的か、そのどちらでもないか、あるいはそうした感情自体に言及されていないか

→ 肯定的感情と否定的感情のどちらもある場合、より顕著な方を評価する。あるいは、それらの情緒が拮抗している場合には「どちらでもない」に評価する。また、否定的なものが最終的に肯定的になる場合（かつ、その肯定的感情について十分に記述されている場合）には、余程否定的な情緒が強く描写されていない限りは、「肯定的」に評価する。その逆（肯定的なものが最終的に否定的になる場合）も同様である。

※ 自殺や自殺企図・未遂が語られた場合には、原則として、自己に対する感情は「否定的」と考える

※ ここでは自尊心の「高 - 低」も「肯定的 - 否定的」に対応するものとする

(3) 他者に向けた関心

他者や対人関係について音声の内容と比較してより多く描写されているかどうか

→ もともと刺激内に対人関係が描写されているため、それを基準として多くの描写が追加されている場合には「強い」、音声の内容から期待される対人関係にさえ及ばないものには「弱い」、これら以外には「どちらでもない」を評価する。

※ 対人的な葛藤や軋轢が見られている場合には「強い」に評価する

→ ここでの対人的な葛藤や軋轢とは、対人関係の中での個人内や人物間において、異なる態度や思考、感情等が相対立して併存している状態を指す。

※ 登場人物が 1 人しかいない物語については「弱い」に評価する

(4) 他者に向けた感情

他者や周囲の環境に向けた感情の性質は肯定的か否定的か、そのどちらでもないか、あるいは、そうした感情自体に言及されていないか

→ 肯定的感情と否定的感情のどちらもある場合、より顕著な方を評価する。あるいは、それらの情緒が拮抗している場合には「どちらでもない」に評価する。しかし、異なる対象に相反する感情が向けられている場合には、「肯定的」と「否定的」の両方に評価する。これらは以下の下位項目でも同様とする。また、下位項目と評価が重なることもあり得る。

ex. 父親に対して「否定的」で、かつ、母親に対して「肯定的」である場合、他者に対しての評価は「肯定的」と「否定的」の両方となる

(5) 父親（的人物）に向けた感情、(6) 母親（的人物）に向けた感情

父や母（あるいはそれに近い人物）に向けた感情の性質は肯定的か否定的か、そのどちらでもないか、あるいは、そうした感情自体に言及されていないか

→ これらの指標の評価法は(4)に準ずる

→ どちらも、死について語られた場合には「否定的」に評価することとする。

(7) 人物の導入

もともと聴覚刺激に登場していない人物を導入して物語を展開しているか否か

(8) 導入人物の性質

導入人物がいる場合、その人物は他の登場人物（特に主人公）にとって肯定的か否定的か、そのどちらでもないか、あるいはそうした性質自体に言及されていないか

→ 導入人物がいない場合には「言及なし」に評定する。

→ ex. 肯定的：登場人物を助けてくれる、否定的：登場人物に脅威をもたらすなど、はっきりしたもの。

(9) 標準的人物設定からのずれ

(9a) 年齢設定

人物の年齢設定を標準的でないものに行っているか否か

→ 子どもの声が成人の声とされたり、成人の声が子どもの声とされた場合「ある」に評定（ここでは暫定的に0歳～高校生を子ども、それ以降を成人とする）。

(9b) 性別設定

人物の性別設定を標準的でないものに行っているか否か

(10) 独特な人物設定

身分や性格、容貌などの属性を付与しているか否か

→ ここでは貧困等の社会経済的な属性も含む。

(11) 背景音の取り込み

(11a) 有音の背景音の取り込み

有音の背景音を物語に取り込んでいるか否か

※ 第 10 刺激では背景が有音の刺激と無音の刺激の 2 つを 1 セットに行っているため、(11a) と(11b) の両方で評定され得る。

(11b) 無音の背景音の取り込み

無音の背景音に対して意味づけがなされているか否か

(12) 背景音に対する情緒的意味づけ

有音・無音にかかわらず、背景音は登場人物にとって肯定的か否定的か、そのどちらでもないか、あるいはそうした情緒的意味づけ自体に言及されていないか

(13) 結末の性質

(13a) 明確さ

結末は明確であるか否か

→ 物語にいわゆる「オチ」があるかないか。もう一悶着ありそうな場合や、もともと劇的な展開がない物語の場合に「ない」に評定され得る。

(13b) 性質

登場人物（特に主人公）にとって、結末は明るい（肯定的）か暗い（否定的）か、あるいはそのどちらでもないか

(14) 攻撃的内容

攻撃的行動や破壊行動に言及するかしらないか

→ 自傷他害を含める。つまり、自殺など攻撃が自分に向けられる場合も「ある」に評定する。

(15) 自己言及

参加者が自分の経験等に言及したか否か

→ 直接的に自己のことが語られたもの。さらに、「映画や小説等の場面が思い浮かんだ」ということを明言している場合もここに含める。

(16) 主観的印象

以下の 3 つのような主観的印象が述べられたかどうか

①聴覚刺激そのものに対するもの (ex. 「(刺激が) 嘘っぽい」などの批評的言辭, 登場人物が演技をしているとするもの, 刺激をテレビやラジオの番組とするもの)

②聴覚刺激に登場する人物に対するもの (ex. 「(登場人物のことが) 嫌い」などといった好悪の感情)

③参加者自身が語った物語に対するもの (ex. 「こんな話あり得ないですね」などの批評的言辭)

II 形式面

(17) 初発反応時間 (秒)

物語を話し始めるまでの時間 (秒単位で記入)

→ それまでの間投詞等は考慮せず, 物語に関する発話が始める時点までの時間を測る。

(18) 実験者による質問回数

実験者が教示に則した質問をした回数

(19) 刺激の追加提示回数

参加者が刺激の再度提示を求めた回数

(20) 語りの様式

以下の 3 つの様式に該当するかしらないか

①移入形式: 登場人物の 1 人になりきり, その内界 (独り言も含む) を生き生きと語るもの
→ 独白形式もここに含める。

②会話形式: 複数の登場人物になりきり, その対話を組み込んで物語を進めていくもの
→ 2 人以上の話者が 1 度でもターンテイキングし, 会話が続いた場合に「ある」と評定する。

③物語形式: 物語口調で語られるもの

→ 参加者がナレーターの役割を担うもの。

※ これらの評定は重複することもあり得る。また, 刺激内の言葉をそのまま繰り返すだけのものはここでの評定対象としない。

(21) 複数の物語

1 つの刺激に対して, 2 つ以上の物語を語るか否か

→ 以下の 3 種類を含む;

①思い浮かんだ物語に少しだけ触れるもの

②物語が途中で分岐するもの

③独立した複数の物語を語るもの

Ⅲ 認知面

(22) 微小音要素の取り込み

微小音要素を物語に取り込んでいるか否か

→ 微小音要素とは、参加者の 10%未満しか取り込まない音要素を指す（下表）。

刺激	微小音要素
2	周囲の客の会話内容（デパート）
4, 14	テレビの音, 水の音
9	車の音
11, 12	周囲の客の会話内容（レストラン）

(23) 音要素に対する標準的意味づけからのずれ

台詞の意味内容や台詞の話者について、刺激から明らかにずれているか否か

→ 暫定的に、刺激作成時の意味づけを「標準」とする（表 3-1）。

(24) 登場人物の標準的位置関係からのずれ

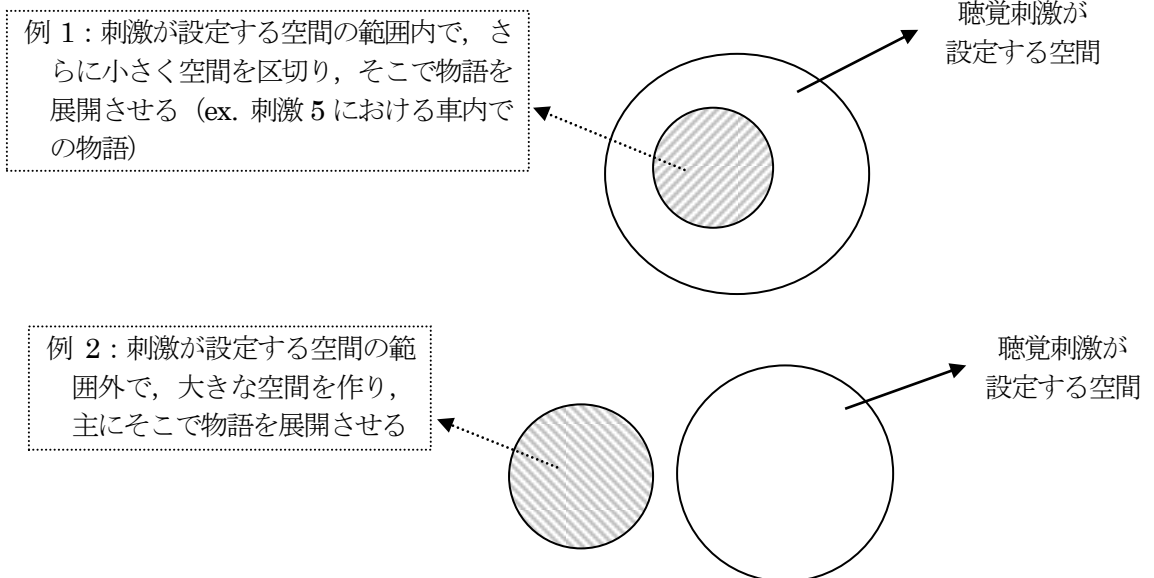
登場人物の位置関係について、刺激から明らかにずれているか否か

→ 導入人物は評価対象から除外する。「標準的位置関係」とは、台詞のある登場人物たち（実験者が録音したもの）が 1 つの「場」を共有している状態を指す。つまり、その登場人物たちが遠くに離れていたり、あるいは、その登場人物たちとそれ以外の特定の人物（導入人物ではない）が同じ「場」を共有している場合に「ある」と評価される。

(25) 聴空間の拡大／縮小

参加者が空間を新たに追加したり区切ったりしているか否か

→ 例えば；



～指標～				
I 内容面				
<対 自己>				
自己の内界に向ける関心	ある	ない		
自己に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
<対 他者>				
他者に向ける関心	強い	どちらでもない	弱い	
他者に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
父親(的人物)に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
母親(的人物)に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
人物の導入	ある	ない		
導入人物の性質	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
標準的人物設定からのずれ	年齢	性別	該当なし	
独特な人物設定	ある	ない		
<その他>				
背景音の取り込み	有音	無音	該当なし	
背景音に対する情緒的意味づけ	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
明確な結末	ある	ない		
結末の性質	肯定的	どちらでもない	否定的	
攻撃的内容	ある	ない		
自己言及	ある	ない		
主観的印象	音声について	人物について	物語について	該当なし

～指標～				
Ⅱ 形式面				
初発反応時間	秒			
実験者による質問回数	回			
刺激の追加提示回数	回			
語りの様式	移入(1人)	会話(複数)	物語	なし
複数の物語	言及	分岐	独立	
Ⅲ 認知面				
微小音要素の取り込み	ある	ない		
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	ある	ない		
登場人物の標準的位置関係からのずれ	ある	ない		
聴空間の拡大／縮小	拡大	縮小	該当なし	
メモ				

I 内容面

(1) 自己の内界に向ける関心

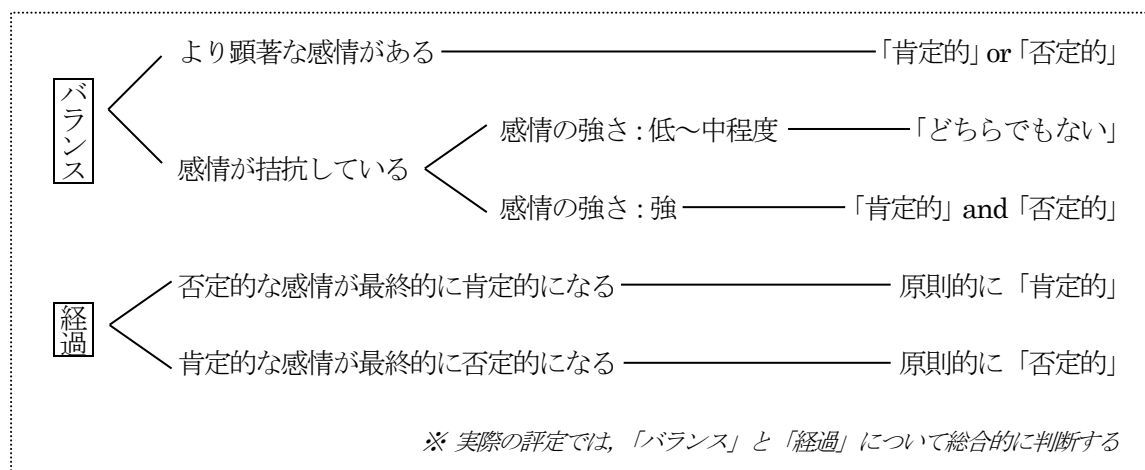
自己の内的過程や思考過程への言及があるかないか

- 明らかに表面的なものや、全く情緒を伴わないものは「ない」に評定する。また、感情のみに触れて思考に触れない場合も「ない」に評定する。
- 登場人物の心中に葛藤を見た場合で、かつ、その葛藤について描写が十分になされている場合には「ある」に評定する（ここでの葛藤とは、個人内で異なる態度や思考、感情等が相対立して併存している状態をいう）。

(2) 自己に向ける感情

自己に向ける感情は肯定的か否定的か、両面的か、そのどちらでもないか、あるいはそうした感情自体に言及されていないか

- 自殺や自殺企図・未遂が語られた場合原則として自己に対する感情は「否定的」と考える。
- 自尊心の「高 - 低」もここでの「肯定的 - 否定的」に対応するものとする。
- 肯定的感情と否定的感情のどちらもある場合、下図を参考に評定する；



(3) 他者に向ける関心

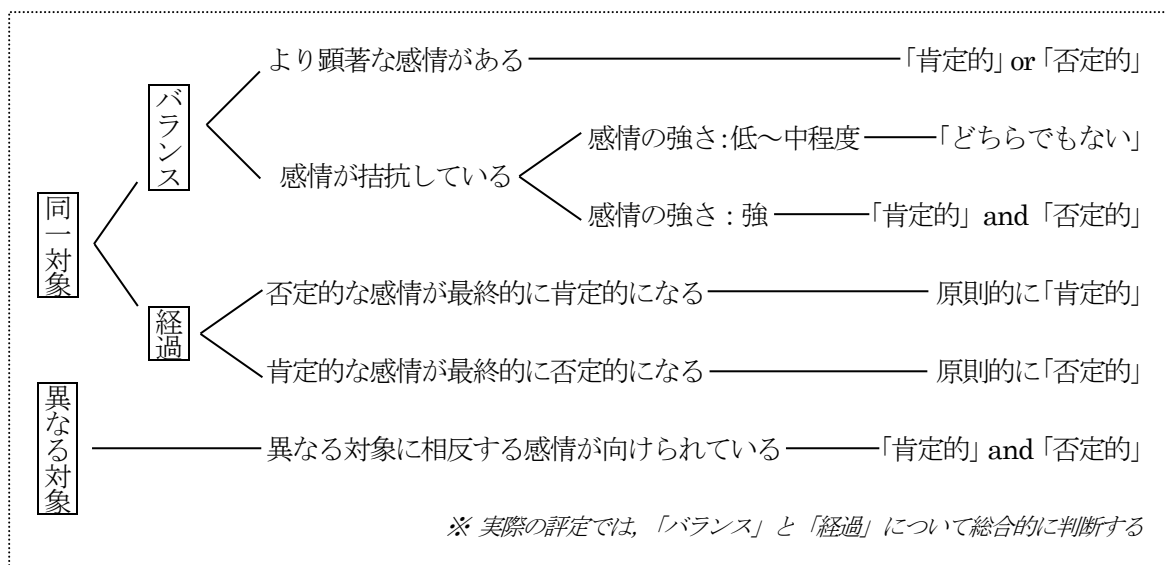
他者や対人関係についての描写があるかないか

- 物語に他者は登場するが直接的に交流がなく、間接的に交流がある場合 (ex. 直接声を掛けたりはしないが、お互いに気を遣い合っている 等), その交流の強弱や粗密によって総合的に評定する。その際、その交流が「間接的」であることを欄内に明記する。

(4) 他者に向ける感情

他者に向ける感情は肯定的か否定的か、両面的か、そのどちらでもないか、あるいはそうした感情自体に言及されていないか

- 他者が複数登場したり、肯定的/否定的のどちらの感情もある場合は、下図を参考する；



(5) 父親 (的人物) に向ける感情, (6) 母親 (的人物) に向ける感情

- 父や母 (あるいはそれに近い人物) に対する感情は肯定的か否定的か, 両面的か, そのどちらでもないか, あるいはそうした感情自体に言及されていないか
- 父親でも母親でも, 死について語られた場合には原則的に「否定的」と評価する。
- 肯定的/否定的のどちらの感情もある場合の評価は, (4)と同様の基準に従う。

(6) 人物の導入

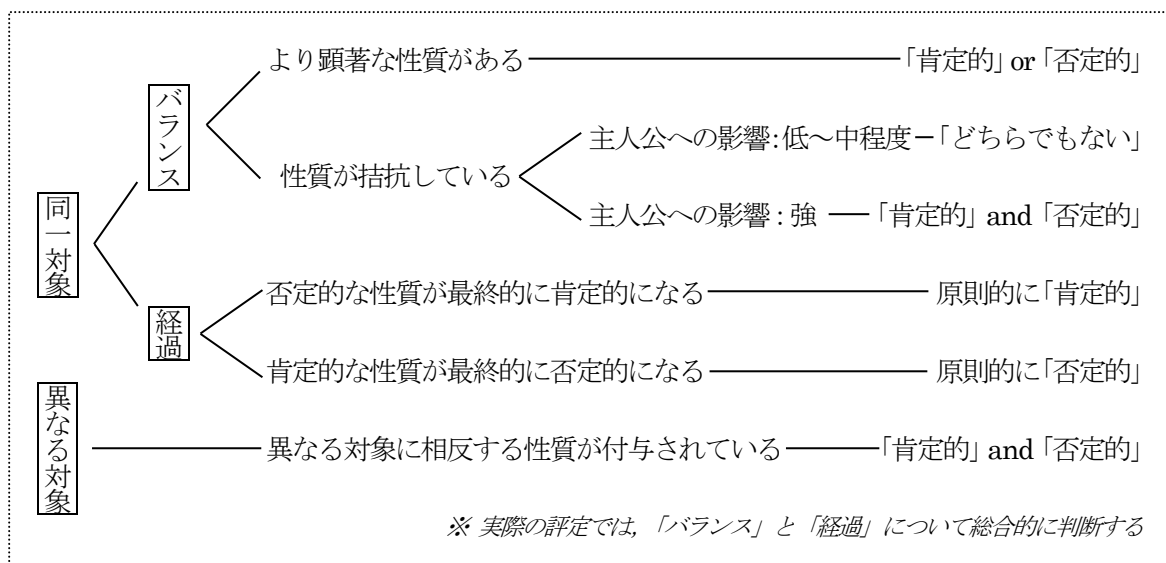
- もともと聴覚刺激に登場していない人物を導入して物語を展開しているか否か
- 動物や物質が導入され, かつ, それらが擬人化されている場合, その動物や物質も評価の対象とする。

(7) 主人公の導入

- 物語に刺激外の人物が導入され, かつ, その人物が主人公となっているか否か

(8) 導入人物の性質

- 導入人物は主人公 (あるいは他の登場人物) にとって肯定的か否定的か, 両面的か, そのどちらでもないか, あるいはそうした性質自体に言及されていないか
- ex. 肯定的: 他の登場人物を思い遣ったり, 助けてくれる, いわゆる「良い対象」
- 否定的: 他の登場人物に攻撃したり, 脅威をもたらす, いわゆる「悪い対象」
- 導入人物が複数登場したり, 肯定的/否定的のどちらの性質もある場合;



(9) 独特な人物設定

人物に身分や職業、性格等の属性を、あるいは容貌や服装等の視覚情報を付与しているか否か
 → 貧困等の社会経済的な属性も含める。

(10) 動物の導入

もともと聴覚刺激に含まれていない動物を導入して物語を展開しているか否か
 → その動物が擬人化されている場合は(6)に含め、ここでは評価しない。
 → 刺激中の音から動物の存在が推測されるもの、つまり、音に対する解釈として動物がいるとされるもの (ex. 「物音がしたから何か動物がいる」) については、導入の概念から外れるため評価の対象としない。

(11)a 有音の背景音の取り込み

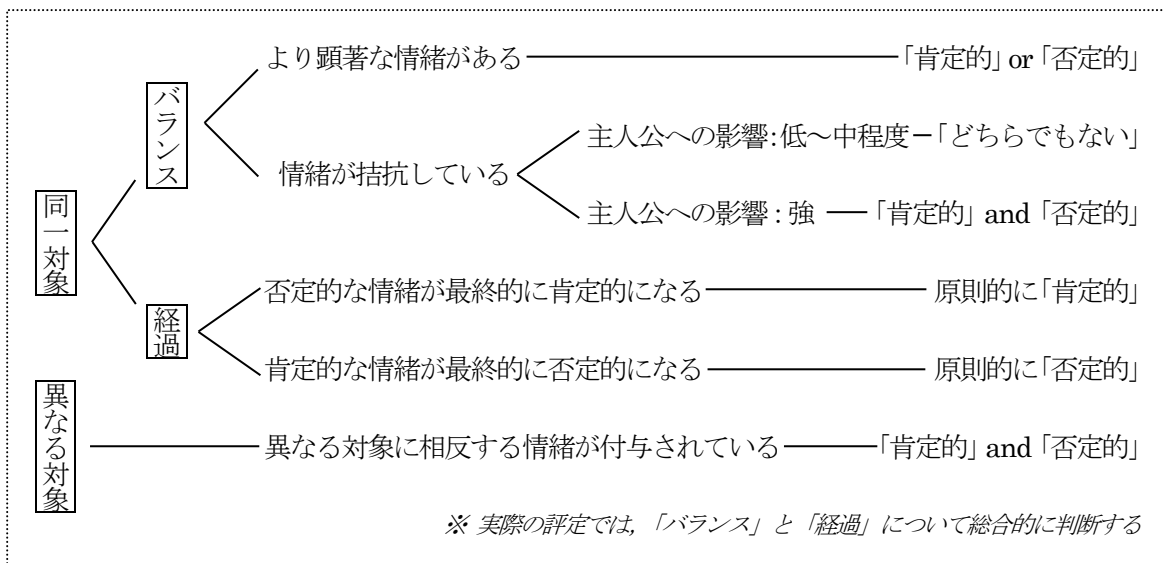
有音の背景音を物語に取り込んでいるか否か

(11)b 無音の背景音の取り込み

無音の背景音を物語に取り込んでいるか否か

(12) 背景音に対する情緒的意味づけ

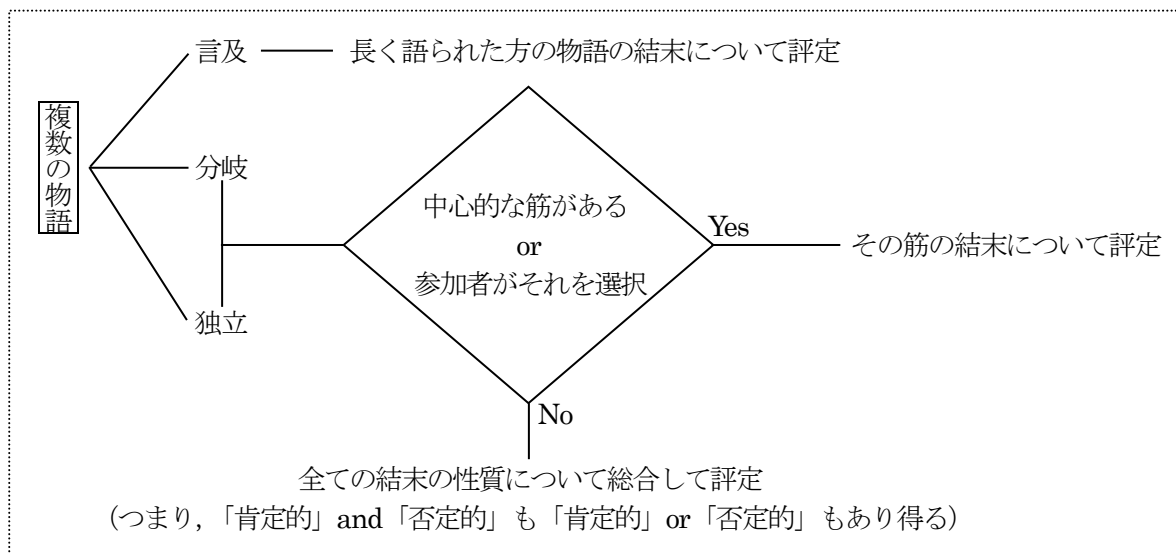
有音・無音にかかわらず、背景音は登場人物にとって肯定的か否定的か、両面的か、そのどちらでもないか、あるいはそうした意味づけ自体に言及されていないか
 → ex. 肯定的：海の背景音に対して、「よく晴れた日の綺麗な風景で、見ていて落ち着く」
 否定的：海の背景音に対して、「波が荒れていて、嵐がきそうで落ち着かない」
 → 肯定的/否定的のどちらの情緒もある場合；



(12) 結末の性質

特に主人公にとって、結末は明るい（肯定的）か暗い（否定的）か、両価的か、あるいはそのどちらでもないか

- 移入対象が複数存在する場合、参加者の同一化の程度をもとに評価を行う。つまり、他よりも同一化の程度が高い人物がいたらその人物を基準に評価し、同一化の程度に差がない場合はそれらの人物を基準にして評価する。
- また、移入対象が時系列によって変わる場合は、原則として、物語の「未来」において参加者が同一化している人物を基準にして評価する。物語の未来において移入対象が複数いる場合には、上記の基準によって評価する。
- 「複数の物語」に該当する場合；



(13) 攻撃的内容

攻撃的行動や破壊行動に言及するかしないか

- 自傷他害を含む。つまり、自殺など、攻撃が自分に向けられる場合も「ある」に評価。
- 強い「怒り」の感情に言及される場合も「ある」に評価。

(14) 損傷内容

人物や動物、物質などの傷つきや不快感、強い悲しみが語られるか否か

(15) 自己言及

参加者が自分の経験等に言及したか否か

→ 実験者の質問によって引き出された自己言及は原則的に評価の対象とせず、参加者が自発的にそうした発言をした際に評価する。

(16) 主観的印象

以下のような主観的印象が述べられたか否か

- ①聴覚刺激そのものに対するもの (ex. 「(刺激が) 嘘っぽい」等の批評的言辞)
- ②聴覚刺激に登場する人物に対するもの (ex. 「(登場人物のことが) 嫌い」等の好悪の感情)
- ③参加者自身が語った物語に対するもの (ex. 「こんな話あり得ないですね」等の批評的言辞)

(17) 食物反応

食べ物に関する言及があるか否か

(18) 衣服反応

衣服や靴など身につけるものに関する言及があるか否か

(19) 性的内容

性的な内容が語られるか否か

(20) 物質の導入

もともと聴覚刺激に含まれていない物質を導入して物語を展開するもの

→ その物質が擬人化されている場合は(6)に含め、ここでは評価しない。

→ 刺激中の音から物質の存在が推測されるもの、つまり、音に対する解釈として物質があるとされるもの (ex. 「何かが落ちる音がしたから、おそらく靴か何かを持っていたのだろう」とするもの) については、導入の概念から外れるため評価の対象としない。

(21) 劇化反応

登場人物が演技をしているとしたり、テレビやラジオ、映画、漫画の一場面とするか否か

(22) 非現実的内容

現実性を欠いた内容が語られるか否か

→ 空想的な話や、夢の内容を語るものもここに含める。

→ 擬人化された動物や物質が登場する場合もここでの評価の対象とする。ただし、それが映画や漫画のキャラクターとされた場合には劇化反応の方に評価する。

(23) 歴史的内容

特殊な文化や人間の歴史に関係のある内容が語られるか否か

→ ex. 第 2 刺激：「第二次世界大戦の焼け野原を歩いている」「縄文時代の人が儀式の準備をしている」

II 形式面

(24) 反応の失敗・拒否

以下のような反応が見られるか否か

- ①聴覚刺激を聴いても物語を作れない／作らない
- ②現在の状況（刺激の内容）については語れても、過去や未来については語れない／語らない
→ 実験者が質問しても上記のような反応になる場合に評価する。

(25) 初発反応時間（秒）

聴覚刺激を提示し終わってから、参加者が物語を語り始めるまでの時間

→ 秒単位で記入。間投詞等は考慮せず、物語に関する発話が始まる時点までの時間を測る。

(26) 実験者による質問回数

実験者が教示に則した質問をした回数

→ ①過去、②未来、③登場人物の感情や思考の 3 種の質問のみを評価の対象とする。それら
の内容について参加者が自発的に述べていない場合に限り、質問の回数をカウントする。

(27) 刺激の追加提示回数

参加者が聴覚刺激の再度提示を求めた回数

(28) 語りの様式

以下の 3 つの様式に該当するかしないか

- ① 移入形式：登場人物の 1 人になりきり、その発話や内界について生き生きと語るもの
→ 独白形式もここに含める。
- ② 会話形式：複数の登場人物になりきり、その会話を織り交ぜて物語を進めていくもの
→ 2 人以上の登場人物が短い時間に 1 度でもターンテイキングし、会話が続いた場合に「あ
る」と評価する。
- ③ 物語形式：物語口調で語られるもの
→ 参加者がナレーターの役割を担うもの (ex. 「昔々あるところに…」)。

(29) 複数の物語

1 つの刺激に対して、2 つ以上の物語を語るか否か

→ 以下の 3 種類を含む；

- ① 思い浮かんだ物語に少しだけ言及するもの
- ② 物語が途中で分岐するもの
- ③ 独立した複数の物語を語るもの

(30) 前の刺激や物語との関連づけ

それまでに聴いた聴覚刺激や、それまでに語った物語と関連づけて物語を語ったか否か

Ⅲ 認知面

(31) 微小音要素の取り込み

微小音要素を物語に取り込んでいるか否か

→ 微小音要素とは、参加者の 10%未満しか取り込まない音要素を指す（下表）。

刺激	要素	刺激	要素
1	・人の笑い声	8	・枯葉を踏むような音
2	・カラスの鳴き声	9	・砂利道を足を引き摺りながら歩く足音 ・足音が止まる
3	・赤ちゃんの言葉の内容 ・赤ちゃんのお腹の音	10	・走り回る音
4	・電車が建物などの傍を通過する音 ・ドンドンと鳴っている音 ・踏み切りの音	11	・トントんと叩くような音 ・音と音の間（動きが止まる）
5	・冷蔵庫の電気音 ・電気のスイッチ音	12	・草の根が千切れるような音
6	—	13	・心拍の不規則さ
7	—	14	・カラス以外の鳥の鳴き声 ・カラスの鳴き声

(32)a 音要素の取り込み

音要素をどれくらい取り込んでいるか

→ 各刺激を下表の要素に分け、参加者によって言及された要素をすべてカウントする。

刺激	要素
1	①交差点の音(車が行き来する音を含む), ②周囲の人々の足音や話し声, ③1人目の足音(ハイヒール, ゆっくり歩く), ④2人目の足音(革靴, 早歩き), ⑤3人目の足音(ハイヒール, 走る), ⑥車のクラクション, ⑦人の笑い声
2	①火の音(パチパチいう音), ②足音, ③カラスの鳴き声, ④背景の静かさ
3	①赤ちゃんの声, ②赤ちゃんの人数, ③赤ちゃんの言葉の内容, ④赤ちゃんのお腹が鳴る音, ⑤背景の静かさ
4	①電車の音, ②(車内の)ざわめき, ③女性のため息, ④女性のため息の数や深さ, ⑤電車が建物などの傍を通過する音, ⑥踏み切りの音, ⑦ドンドンと鳴っている音
5	①足音, ②衣擦れ, ③ベッドに倒れ込む音, ④電気のスイッチ音, ⑤冷蔵庫の電気音, ⑥背景の静かさ
6	①時計の音, ②ガラスが割れる音, ③背景の静かさ
7	①波の音, ②カモメやウミネコの鳴き声, ③足音, ④後半の足音の速さ
8	①音の反響, ②足音, ③足音の人数や性別, ④枯葉を踏むような音, ⑤開錠する音, ⑥ドアの開閉, ⑦施錠する音, ⑧ドアが軋む音, ⑨背景の静かさ
9	①轟音, ②波の音, ③足音, ④動物の羽音(1つ目), ⑤動物の羽音(2つ目), ⑥動物の鳴き声(1つ目), ⑦動物の鳴き声(2つ目)
10	①家中を荒らすような音, ②走り回る音
11	①衣擦れ, ②トントんと叩くような音, ③音と音の間(動きが止まる), ④背景の静かさ
12	①風の音, ②スコップで土を掘る音, ③草の根が千切れるような音
13	①心拍, ②心拍の不規則さ, ③背景の静かさ
14	①ヒグラシの鳴き声, ②鳥の鳴き声, ③カラスの鳴き声, ④沢の音

※ 刺激の意味づけは必ずしも上記の通りになるとは限らない

(32)b 音要素の統合

音要素をどれくらい物語に統合しているか

→ 物語に統合された音要素をすべてカウントし、単に音要素に言及しただけで物語に統合しないものは除外する。

(33) 音要素に対する標準的意味づけからのずれ

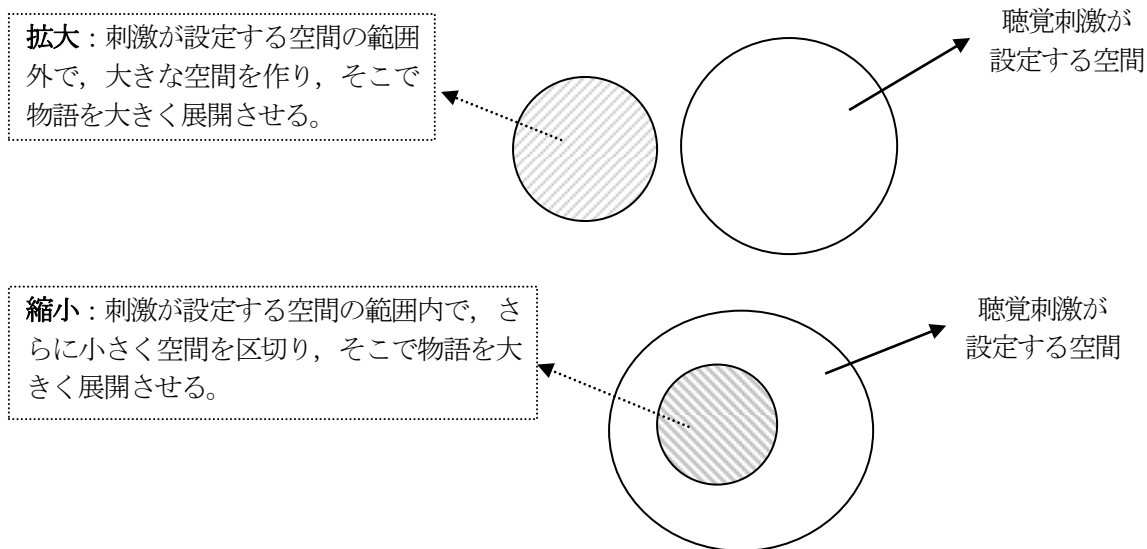
音要素に対して明らかに標準的でない意味づけがされているか否か

→ 上表を参考に、明確にずれを判断できるもののみ「ある」と評定する。

→ ex. 音の衝撃を極端に低めたり (ex. 第 5 刺激: 「ベッドに倒れ込む音」を「極端に軽いものが落ちた音」とするもの)、足音の移動を否認したりといったように、明らかに現実を歪めている場合には「ある」と評定する。

(34) 聴空間の拡大／縮小

聴覚刺激によって設定される空間とは別に新たな空間を想像して物語を展開させているか否か (拡大)、また、建物や乗物などを設定してももとの空間を区切り、より小さな空間だけで物語が収まっているか否か (縮小)



(35) 他の感覚への言及

視覚や触覚等の聴覚以外の感覚への言及があるか否か

→ 色彩、人物の服装・容貌への言及や物の材質感への言及があった際に「ある」と評定する。

(36) 触覚情報の性質

触覚に関する表現は肯定的 (快, 柔らかい, 温かい) か否定的 (不快, 硬い, 冷たい) か, 両価的か, そのどちらでもないか, あるいはそうした性質自体に言及されていないか

→ もし評定対象が複数あったり, 触覚情報が豊富に描写されている場合は「他者に向ける感情」などの基準を参考にする。

～指標～				
I 内容面				
<対 自己>				
自己の内界に向ける関心	ある	ない		
自己に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
<対 他者>				
他者に向ける関心	ある	ない		
他者に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
父親(的人物)に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
母親(的人物)に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
<その他>				
人物の導入	ある	ない	⇒ 内容:	
主人公の導入	ある	ない		
導入人物の性質	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
独特な人物設定	ある	ない	⇒ 内容:	
動物の導入	ある	ない		
有音の背景音の取り込み	ある	ない	⇒ 内容:	
無音の背景音の取り込み	ある	ない	⇒ 内容:	
背景音に対する情緒的意味づけ	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
結末の性質	肯定的	どちらでもない	否定的	
攻撃的内容	ある	ない	⇒ 内容:	
損傷内容	ある	ない	⇒ 内容:	
自己言及	ある	ない		
主観的印象	刺激について	人物について	物語について	該当なし
<補足 >				
(該当するものがあれば○で囲む)				
食物反応	衣服反応	性的反応	物質の導入	
劇化反応	非現実的内容	歴史的内容		

～指標～				
Ⅱ 形式面				
反応の失敗／拒否	失敗	拒否	該当なし	
初発反応時間	秒			
実験者による質問回数	過去	未来	気持ち	⇒計____回
刺激の追加提示回数	回			
語りの様式	移入形式	会話形式	物語形式	該当なし
複数の物語	言及	分岐	独立	該当なし
前の刺激や物語との関連づけ	ある	ない	⇒ 内容:No.	
Ⅲ 認知面				
微小音要素の取り込み	ある	ない	⇒ 内容:	
音要素の取り込み	個			
音要素の統合	個			
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	ある	ない	⇒ 内容:	
聴空間の拡大／縮小	拡大	縮小	該当なし	
他の感覚への言及	視覚	触覚	嗅覚・味覚	該当なし
触覚情報の性質	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし

①今聴いた音はどんな音に感じられましたか？

以下の各項目で該当する箇所（1～6の番号）に○をつけてください。

全体的な音の印象についてご回答ください。

	非常に あてはまる	あては まる	やや あては まる	やや あては まる	あては まる	非常に あてはまる	
ゆっくりした	1	2	3	4	5	6	勢いのある
奥行きのある	1	2	3	4	5	6	平面的な
落ち着いた	1	2	3	4	5	6	苛々した
臨場感がない	1	2	3	4	5	6	臨場感がある
暗い	1	2	3	4	5	6	明るい
単純な	1	2	3	4	5	6	複雑な
気が抜けた	1	2	3	4	5	6	緊張した
うきうきした	1	2	3	4	5	6	憂うつな
ざらざらした	1	2	3	4	5	6	なめらかな
生気のない	1	2	3	4	5	6	いきいきとした
軽やかな	1	2	3	4	5	6	重い
広がりのある	1	2	3	4	5	6	窮屈な
曖昧な	1	2	3	4	5	6	明瞭な
快い	1	2	3	4	5	6	不快な
変化のある	1	2	3	4	5	6	安定した
非日常的な	1	2	3	4	5	6	日常的な
腹が立った	1	2	3	4	5	6	気が和んだ
柔らかい	1	2	3	4	5	6	硬い
情景が思い浮かぶ	1	2	3	4	5	6	情景が思い浮かばない
不安な	1	2	3	4	5	6	安心した
自然な	1	2	3	4	5	6	人工的な
眠くなるような	1	2	3	4	5	6	目が覚めるような
親しみのある	1	2	3	4	5	6	親しみのない
嬉しい	1	2	3	4	5	6	悲しい
静かな	1	2	3	4	5	6	騒々しい
冷たい	1	2	3	4	5	6	暖かい
ばらばらな	1	2	3	4	5	6	まとまった
印象に残らない	1	2	3	4	5	6	インパクトのある
長さを感じる	1	2	3	4	5	6	瞬間的な
濁った	1	2	3	4	5	6	澄んだ

ページをめくらずにお待ちください。

②今聴いた音の中で、次のような音は聴こえましたか？

あるいは、次のような状況に気がつきましたか？

音の聴こえ方は人それぞれですから、似たような音や状況があったと思ったら、それを○で囲んでください。

(1) 人の笑い声

記入が終わったら、1ページめくってお待ちください。

提示順序	内容
1	都会の交差点で車や人々が往来する中、ハイヒールや革靴で歩く足音が聴こえてくる。最後にハイヒールで走る足音が近づいてきて、手前で立ち止まる。
2	静かな場所で、男性 A「例の件、うまく行ったらしいな」、男性 B「ああ、少々てこずったがね」、男性 A「ふん、さすがだ」、男性 B「ありがとう。こっちもほっと一安心だよ」。
3	いくぶん静かな場所で、女性「そんなことしちゃいけないって、いつも言ってるでしょ!?', 女の子「だって...」, 女性「もうしないって約束する?」, 女の子「はい」。
4	土砂降りの雨の中、1 台の車が通り過ぎ、女性「やっぱマズイって...」, 男性「お前、今さら何弱気になってんだよ。もうやるしかないって分かっているだろ? さあ、行くぞ!」, 女性「あ、ちょっと待ってよ...」。
5	公園で子どもたちが遊んでいる中で、男性「何ですってんの? ちゃんと言わなきゃ分かんないだろ?」, 男の子「別にすねて何かないよ...」, 男性「言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさい?」, 男の子「うん...」。
6	大勢の客で賑わっているレストランで、女性 A「...そっかあ...そりゃ辛かったね...」, 女性 B「うん...」, <携帯電話の着信音>, 女性 A「あ、ちょっとごめん」, <携帯電話に出る>, 女性 A「あ、はいはい、どうしたの?え、うっそお! ?へえー...うん...うん, うん分かった! じゃあ明日ねー」, <ブランク>。
7	静かな場所で、男性 A「お前は何をしたのか分かっているのか! ?」, 男性 B「はい、でも、あれは...」, 男性 A「言い訳を聞きたいんじゃない! こんなことになって...お前どうするつもりなんだ! ?」, <ブランク>。
8	高架下で、女性 A「それよりさ、どこ行こっか?」, 女性 B「どっか遠いところ...どうせなら海がいいな」。
9	静かな場所で、女性 A「あ、私こっちだから」, 男性「あ、うん、じゃあねー」, 女性 B「またねー!」, 女性 A「また!」, <足音>。
10	静かな場所で、冷蔵庫の微かな唸り。電気スイッチを操作する音がして、木製の床を靴で歩く足音と共にゆっくり移動していく。衣擦れの音の後に、ベッドに倒れ込む音。
11	走行する電車内で、乗客の小さなざわめきが聴こえる。(開始から約 20 秒後) 女性が 2 度深いため息をつく。最後に踏み切りの音がかすかに聴こえてくる。
12	静かな地下の廊下を歩く 2 人の足音が近づいてきて止まる。鍵を開け、軋むドアを開閉した後、再び鍵を閉める。
13	地響きと荒々しい波の音が聴こえる。砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が途中で止まり、動物の羽音や鳴き声が聴こえてくる。
14	静かな場所で、衣擦れの音が聴こえる。
15	静かな場所で、心拍が聴こえる。
16	ヒグラシや鳥の鳴き声と沢の音が聴こえる。

※ 参加者によっては、必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない

※ 網掛け部分は音声刺激、それ以外は非音声刺激である

【実施前】**準備する道具**

- ・音源の再生 (MD ウォークマン (SONY Hi-MD WALKMAN MZ-RH1), スピーカー (ONKYO WAVIO GX-D90))
- ・記録 (バインダー, A4 の紙, 鉛筆, IC レコーダー)

検査室の設定

- ・できる限り外部からの音が入って来ない, 程よい広さの部屋を選択する
- ・検査者と被検者が机を挟んで 90° で向かい合って座るよう, 机と椅子を配置する
- ・刺激の再生機器は画面が被検者に見えないように設置し, スピーカーは被検者の方に向けて置く
- ・刺激の音量は微小音要素が十分に聞き取れる大きさに設定し, 一定の音量にする

【実施】**ラポール形成**

- ・リラックスした雰囲気になるよう会話する
- ・検査の目的や内容について説明する

教示

- ・<これからスピーカーを通して, あなたにいろいろな人や場面の音を聞いていただきます。その音を聞いて思い浮かぶ物語を作って, 私に話して下さい。その場面の中の人は, 今, 何を感じていて, どうしているのか, その場面の前にはどのようなことがあって, その場面の後にはどうなっていくのかということ織り交ぜながらお話し下さい。ちょうど, 物語の一場面が先にできてしまって, それに短いお話しをつけなくてはならなくなった小説家やラジオ作家のような気持ちでやってみて下さい。音は全部で 16 個あります。これから 1 つずつあなたにお聞かせしていきますから, 1 つの音に対して 1 つずつ物語を作して下さい。これには正しい答えのようなものはないので, 思ったようにお話し下さい。音をもう一度聞きたいときには, こちらにそう言って下されば何度でもお聞かせしますので, 遠慮なく言って下さい。何かご不明な点がありますか?>

録音の承諾を得る

- ・<私はあなたがお話になったことを紙に書きとめながら進めていきます。ただ, 途中で聞き漏らすこともあるかもしれないので, お話を録音させていただきたいのですが, よろしいでしょうか?>
- ⇒ 承諾が得られない場合は, 書きとめられるスピードで話してもらうよう依頼する

実施中の対応

- ・第 1 刺激の提示後<この音をもとに 1 つの物語を作して下さい>
- ・第 2 刺激の提示前<ここからしばらくは人の会話が入った音になります>
- ・第 10 刺激の提示前<ここからは人の会話が入っていない音になります>
- ・第 16 刺激の提示前<次で最後の音になります>
- ・検査者は被検者の語りに興味を持って耳を傾ける
- ・教示の内容 (過去・未来・気持ち) に関して被検者が自発的に語らない場合には質問をして促す

【実施後】

- ・検査の終了を告げ, レコーダーを止め, 被検者の感想を聞く
- ・もっとも好きな音 () や, もっとも嫌いな音 () があれば聞く
- ・被検者からの質問があれば, 可能な限り応える

I 内容面

(1) 主題の性質

物語の主題は肯定的か否定的か、そのどちらでもないか

- たとえ結末が肯定的であったとしても、主題そのものが否定的であれば「否定的」と評定する (ex. 「主人公がその身を脅かされる事件に巻き込まれるが、仲間助けられて事なきを得る」という物語が語られた場合、主題は「否定的」で、結末は「肯定的」となる)。
- 両価的な主題であった場合は、「肯定的」と「否定的」の両方に評定する。

< 対 自己 >・・・実験参加者が同一化した対象（主人公）を「自己」とする

(2) 自己の内界に向ける関心

自己の内的過程や思考過程への言及があるかないか

- 表面的なものや全く情緒を伴わないものは「ない」に評定し、感情のみに触れて思考に触れない場合も「ない」に評定する。ただし、葛藤感情について十分に言及されている場合には「ある」に評定する。
- 導入人物も評定の対象とする。

(3) 自己に向ける感情

自己に向ける感情は肯定的か否定的か、そのどちらでもないか、あるいは言及されていないか

- 自殺に関わる内容が語られた場合は原則として「否定的」と評定する。また、社会的地位について明確に述べられた場合も評定の対象とする（基本的には、地位の「高 - 低」が「肯定的 - 否定的」に対応）。
- 肯定的感情と否定的感情の両方に言及があった場合は、その強度や物語中での経過を基準に総合的に判断する。両価的であった場合は、「肯定的」と「否定的」の両方に評定する。
- 導入人物も評定の対象とする。

< 対 他者 >・・・自己以外の対象を「他者」とする。

(4) 他者に向ける関心

他者や対人関係についての描写が多いか少ないか、そのどちらでもないか

- 物語に他者は登場するが直接的に交流がなく、間接的に交流がある場合 (ex. 直接声を掛けたりはしないが、お互いに気を遣い合っている)、その交流の強弱や粗密によって総合的に評定する。その際、その交流が「間接的」であることを欄内に明記する。
- 導入人物も評定の対象とする。

(5) 他者に向ける感情

他者に向ける感情は肯定的か否定的か、そのどちらでもないか、あるいは言及されていないか

- (3)と異なり、ここでの他者には「環境」を含める（特に、物語に他者が登場しない、あるいは、他者が登場していても自己との関わりが薄い場合）。
- 他者が複数登場したり、肯定的感情と否定的感情の両方に言及があった場合は、その強度や物語中での経過を基準に総合的に判断する。両価的であった場合は、「肯定的」と「否定的」の両方に評定する。
- 導入人物も評定の対象とする。

(5)a 父親 (的人物) に向ける感情, (5)b 母親 (的人物) に向ける感情

- 父や母 (あるいはそれに近い人物) に対する感情は肯定的か否定的か, そのどちらでもないか, あるいは言及されていないか
- 死について語られた場合には原則として「否定的」と評定する。
 - 肯定的感情と否定的感情の両方に言及があった場合は, その強度や物語中での経過を基準に総合的に判断する。両価的であった場合は, 「肯定的」と「否定的」の両方に評定する。
 - 導入人物も評定の対象とする。

< その他 >

(6) 人物の導入

- 聴覚刺激の中に存在していない人物を導入して物語を展開しているか否か
- 物語の展開に関係しない人物は評定の対象としない (ex. 通行人)。
 - 動物や物質が導入され, かつ, それらが擬人化されている場合, その動物や物質も評定の対象とする。

(6)a 主人公の導入

- 物語に刺激外の人物が導入され, かつ, その人物が主人公となっているか否か
- 時系列によって主人公が変わる場合でも, その導入人物が主人公の 1 人になっていれば「ある」に評定する。

(6)b 導入人物の性質

- 導入人物は肯定的な存在か, 否定的な存在か, それらのどちらでもないか
- ex. 肯定的: 他の登場人物を思い遣ったり, 手助けをする, いわゆる「良い対象」
否定的: 他の登場人物に攻撃したり, 脅威をもたらす, いわゆる「悪い対象」
 - 導入人物が複数登場したり, 肯定的と否定的の両方に言及があった場合は, その強度や物語中での経過を基準に総合的に判断する。両価的であった場合は, 「肯定的」と「否定的」の両方に評定する。
 - 導入人物がない場合は「言及なし」に評定する。

(7) 独特な人物設定

- 人物に身分や職業, 性格などの属性を付与しているか否か
- 貧困等の社会経済的な属性も評定の対象とする。
 - 導入人物も評定の対象とする。

(8) 動物の導入

- 聴覚刺激の中に存在していない動物を導入して物語を展開するもの
- その動物が擬人化されている場合は「人物の導入」として扱う。

(9) 背景音に対する意味づけ

- 背景音とは, 主に登場人物 (あるいはそれに近い動物や物質) がいる物語においてその背景に流れる音のことを指すが, ここではさらに広く, 有音のものも無音のものも, そして「環境」も含める。そのため, 風景描写のみで人物 (あるいはそれに近い動物や物質) が 1 人も登場しない物語についても評定の対象とする。

(9)a 有音の背景音の取り込み

有音の背景音を取り込み、物語に関連付けているか否か

(9)b 無音の背景音の取り込み

無音の背景音を取り込み、物語に関連付けているか否か

→ 以下の 2 種のうち、後者が生じたときには個別に欄内に記入する。

- ① 無音であること自体に何らかの意味づけをするもの
- ② 有音の背景を想定することにより意味づけをするもの

(9)c 背景音に対する情緒的意味づけ

背景音は肯定的か否定的か、そのどちらでもないか、あるいは言及されていないか

→ ex. 肯定的：海の背景音に対して、「よく晴れた日の綺麗な風景で、見ていて落ち着く」

否定的：海の背景音に対して、「波が荒れていて、嵐がきそうで落ち着かない」

→ 背景音の 2 つ以上の部分に異なる意味づけがなされたり、肯定的と否定的の両方に言及があった場合は、その強度や物語中での経過を基準に総合的に判断する。両価的であった場合は、「肯定的」と「否定的」の両方に評定する。

(10) 結末の特徴

(10)a 曖昧な結末

物語の結末を曖昧にしているか否か

(10)b 結末の性質

物語の結末は（特に物語の主人公にとって）肯定的か否定的か、あるいはそのどちらでもないか

→ 両価的であった場合は、「肯定的」と「否定的」の両方に評定する。

→ 物語を複数語った場合は、より中心的な物語の方を評定の対象とする。ただし、いずれの物語も詳細に語られた場合には、それらを総合して評定を行なう。

(11) 攻撃的内容

攻撃的行動や破壊行動に言及があるか否か

→ 自傷他害を含み、強い怒りの感情に言及される場合も「ある」に評定する。

→ 聴覚刺激に破壊が含まれている場合、その破壊の主体に同一化が見られれば「ある」に、見られなければ「ない」に評定する。

(12) 損傷内容

「傷つけられた」「気分が落ち込んだ」などの内容について言及があるか否か

(13) 課題から逸脱した表現

(13)a 自己言及

反応中に参加者自身の経験に言及したか否か

→ 実験者の質問によって引き出されたものは評定せず、参加者が自発的にそうした発言をしたときに評定する。

(13)b 主観的印象

以下の 2 種のような主観的印象が述べられたかどうか

①聴覚刺激や刺激中の登場人物に対するもの (ex. 「(刺激が) 嘘っぽい」等の批評的言辞、

- 「(登場人物が) 嫌い」等の好悪の感情)
②参加者が語った物語に対するもの (ex. 「こんな話あり得ないですね」等の批評的言辞)

< 補足 >

探索的に、以下のような反応が生じたら○で囲む。

i. 食物反応

- 食べ物に関する言及
→ 「食事に行く」という表現も評価対象とする

ii. 衣服反応

- 衣服や靴など身に着けるものに関する言及

iii. 性的内容

- 性的な内容への言及

vi. 物質の導入

- 聴覚刺激の中に存在していない物質を導入して物語を展開するもの
→ その物質が擬人化されている場合は「人物の導入」として扱う (ex. トイストーリーの人形)。

vii. 劇化反応

- 登場人物が演技をしているとするものや、テレビやラジオの番組、映画、漫画の一場面とするもの
→ 「映画みたいに」「ドラマみたいに」という弱い表現のみであれば評価対象にならないが、それを評価用紙に記録しておく。

viii. 非現実的内容

- 空想や夢など、現実性を欠いた内容が語られるもの
→ 擬人化された動物や物質が登場した場合も評価の対象とするが、それが映画や漫画のキャラクターとされた場合には劇化反応の方で評価する。

ix. 歴史的 content

- 特殊な文化や人間の歴史に関係のある内容が語られるもの

II 形式面

(14) 反応の失敗・拒否

物語を語るのを拒んだり，物語をうまく作れなかったりするか否か

→ 現在の状況（聴覚刺激の内容）については語ったものの，実験者が促しても過去や未来について語らない／語れない場合も評定の対象とし，その様子を評定用紙に記録する。

(15) 初発反応時間

聴覚刺激を提示し終わってから，参加者が物語を語り始めるまでの時間（秒単位）

(16) 刺激の追加提示回数

参加者が聴覚刺激の再提示を求めた回数

(17) 語りの様式

物語の語り方が以下の 3 つの様式に該当するか否か

① 移入形式：登場人物の 1 人になりきり，その発話や内界について生き活きと語るもの

→ 独白形式もここに含める。

② 会話形式：（同時に）複数の登場人物になりきり，その会話を織り交ぜて物語を進めていくもの

→ 2 人以上の登場人物が短い時間に 1 度でもターンテイキングし，会話が続いた場合に「ある」と評定する。

③ 物語形式：物語口調で語られるもの

→ 参加者がナレーターの役割を担うもの（ex. 「昔々あるところに…」）。

(18) 複数の物語

1 つの刺激に対して，2 つ以上の物語が語られるか否か

→ 思い浮かんだ物語に少しだけ言及する場合（ex. 「最初に思い浮かんだのは〇〇だけど…」）や，物語が途中で分岐する場合，独立した複数の物語を語る場合を評定対象とする。

(19) 前の刺激や物語との関連づけ

前に聴いた聴覚刺激や，それまでに語った物語を，新たな物語に取り込むか否か

→ 前の刺激や物語に言及するだけで物語に取り込まない場合は評定の対象とならないが，その言及内容を評定用紙に記録しておく。

Ⅲ 認知面

(21) 音要素の取り込み

(21)a 微小音要素の取り込み

聴覚刺激の中の微小音要素を取り込み、物語に関連付けているか否か

→ 微小音要素とは、全体の 10%未満の参加者にしか物語に取り入れられない音要素を指す。
このため、注意深く耳を澄まさないで聴こえない要素だけでなく、比較的大きな音でも、たいていの人には聴き流されて意味づけられない要素も評定の対象となる（下表参照）

表 1. 各刺激の微小音要素

刺激	要素	刺激	要素
1	・人の笑い声	9	—
2	—	10	・電気のスイッチ音 ・冷蔵庫の電気音
3	・テレビの音 ・水の音	11	・電車が建物などの傍を通過する音 ・踏み切りの音 ・ドンドンと鳴っている音
4	—	12	・枯葉を踏むような音
5	—	13	・足音の不規則さ ・足音が突然止まる
6	・周囲の客の会話内容	14	・トントンと叩くような音 ・音と音の間（動きが止まる）
7	—	15	・心拍の不規則さ
8	・車の音	16	・カラスの鳴き声 ・カラス以外の鳥の鳴き声

※ この他に、ほとんどの参加者が言及しない刺激の細かい部分に言及した場合は評定用紙に詳細を記入

(21)b 音要素の取り込み

聴覚刺激の中の音要素をどれくらい取り込み、物語に関連付けているか

→ 各刺激を要素に分け（下表参照）、参加者によって言及された要素を数える。たとえ刺激の歪曲が激しい場合でも、参加者がどの音に反応しているのかが分かればカウントする。

表 2. 各刺激の音要素

刺激	要素
1	①雑踏の音（人々の足音や話し声）、②車が行き交う音、③車のクラクション、④走って近づいてくるハイヒールの足音 / ⑤人の笑い声
2	①男性A「例の件、うまく行ったらしいな」、②男性B「ああ、少々てこずったがね」、③男性A「ふん、さすがだ」、④男性B「ありがとう。こっちもほっと一安心だよ」、⑤背景の静かさ
3	①女性「そんなことしちやいけないうって、いつも言ってるでしょ!？」、②女の子「だって...」、③女性「もうしないって約束する?」、④女の子「はい」、⑤背景の静かさ / ⑥水の音、⑦テレビの音
4	①雨音、②車の通過音、③女性「やっぱマズイって」、④男性「お前、今さら何弱気になってんだよ。もうやるしかないって分かっているだろ? さあ、行くぞ」、⑤女性「あ、ちょっと待ってよ」
5	①男性「何ですてんの? ちゃんと言わなきゃ分かんないだろ?」、②男の子「別に、すてななかないよ」、③男性「言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさい?」、④男の子「うん...」、⑤公園で遊ぶ子どもたちの声（後景）
6	①賑わっているレストランの音、②女性A「そっかあ、そりゃ辛かったね...」、③女性B「うん...」、④携帯電話の着信音、⑤女性A「あ、ちょっとごめん」、⑥女性A「あ、はいはい、どうしたの?...え、うっそお!?...へえー...うん...うん、うん分かった、じゃあ明日ねー」、⑦沈黙 / ⑧周囲の客の会話内容
7	①男性A「お前は、何をしたのか分かっているのか!？」、②男性B「はい、でも、あれは...」、③男性A「言い訳を聞きたいんじゃない! こんなことになって...お前どうするつもりなんだ!？」、④沈黙、⑤背景の静かさ
8	①高架下の電車の音、②女性A「それよりさ、どこ行こっか?」、③女性B「どっか遠いところ...どうせなら海がいいな」 / ④車の音
9	①女性A「あ、私こっちだから」、②男性「あ、うん、じゃあねー」、③女性B「またねー」、④女性A「またー」、別々の方向に歩いていく⑤女性Aと⑥男性と⑦女性Bの足音、⑧背景の静かさ
10	①ゆっくり移動する足音、②衣擦れの音、③ベッドに倒れ込む音、④背景の静かさ / ⑤冷蔵庫の電気音、⑥電気のスイッチ音
11	①電車の音、②人々の話し声、③女性のため息 / ④一定間隔でドンドンと鳴っている音、⑤電車が建物などの傍を通過する音、⑥踏み切りの音
12	①歩く足音（一人目）、②一人目より少し遅れて歩く足音（二人目）、③開錠する音、④ドアの開閉、⑤ドアの軋み、⑥施錠する音、⑦背景の静かさ、⑧音の反響 / ⑨枯葉を踏むような音
13	①波の荒れた海岸の音、②轟音、③歩く足音、④動物の羽音（1つ目）、④動物の鳴き声（1つ目：ネコ様）、⑤動物の羽音（2つ目）、⑥動物の鳴き声（2つ目：クジラ様） / ⑦足音の不規則さ、⑧足音が突然止まる
14	①衣擦れ、②背景の静かさ / ③何かをトントンと叩くような音、④音と音の間（動きが止まる）
15	①心拍、②背景の静かさ / ③心拍の不規則さ
16	①ヒグラシの鳴き声、②沢の音 / ③カラス以外の鳥の鳴き声、④カラスの鳴き声

※ 音要素の意味づけは必ずしも上記の通りになるとは限らない。

※ ここで挙げた他にも音要素について明確な言及があれば、それもカウントする。ただし、音要素の微妙なニュアンスへの言及は、原則としてここでは取り上げない。

(22) 音要素に対する標準的意味づけからのずれ

音要素に対する意味づけが標準的なものからずれているか否か

→ 表 2 に示した意味づけを「標準」とし、その意味づけから極端にずれているものを「ある」と評定する。刺激の歪曲も含める（例えば、音の衝撃を極端に低めたり、足音の移動を否定したりするなど、明らかに刺激内容を歪めているもの）。

(23) 空間の配置・設定

(23)a 登場人物の標準的位置関係からのずれ

聴覚刺激によって規定される、登場人物の標準的な位置関係からずれているか否か

→ 表 2 に示した人物の位置関係を「標準」とし、その位置関係からのずれが明確な場合のみ評定する。例えば、聴覚刺激の中で話していた 2 人のうち一方が瞬間的に移動していることになったり、あるいは、もともとお互い遠く離れた地において電話で話していることになったりした場合に、「ある」と評定する。

(23)b 聴空間の拡大／縮小

聴覚刺激によって被検者の中に形成される聴空間について、物語の中で新たに空間を追加しているか否か、あるいは、もともとの空間を何かしらの形で区切っているか否か

→ 聴覚刺激が設定する空間の外に別の大きな空間を作り、そちらが物語展開の中心となっている場合には「拡大」に評定する（物語の過去や未来も評定対象とする）。逆に、聴覚刺激が設定する空間の中に、さらに限定された空間を作っている場合には「縮小」に評定する（物語の現在のみを評定対象とし、物語展開の中心となるかどうかは不問とする）。

(24) 他の感覚への言及

視覚や触覚など、聴覚以外の感覚情報への言及があるか否か

→ 内容を評定用紙に記録しておく。

(25) 触覚情報の性質

触覚に関する表現は肯定的（快、柔らかい、温かい）か否定的（不快、硬い、冷たい）か、そのどちらでもないか、あるいは言及されていないか

→ 第 10, 14 刺激では、衣擦れの音が否認されていない限りは評定の対象とする。

→ 肯定的と否定的の両方に言及があった場合は、その強度や物語中での経過を基準に総合的に判断する。両価的であった場合は、「肯定的」と「否定的」の両方に評定する。

～指標～				
I 内容面				
主題の性質	肯定的	どちらでもない	否定的	
<対 自己>				
自己の内界に向ける関心	ある	ない		
自己に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
<対 他者>				
他者に向ける関心	多い	どちらでもない	少ない	
他者に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
父親(的人物)に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
母親(的人物)に向ける感情	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
人物の導入	ある	ない	⇒ 内容:	
主人公の導入	該当する	該当しない		
導入人物の性質	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
独特な人物設定	ある	ない	⇒ 内容:	
動物の導入	ある	ない		
<その他>				
背景音の取り込み	有音	無音(有音想定)	取り込みなし	⇒ 内容:
背景音に対する情緒的意味づけ	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし
曖昧な結末	該当する	該当しない		
結末の性質	肯定的	どちらでもない	否定的	
攻撃的内容	ある	ない	⇒ 内容:	
損傷内容	ある	ない	⇒ 内容:	
自己言及	ある	ない	⇒ 内容:	
主観的印象	刺激について	物語について	⇒ 内容:	
<補足>				
(該当するものがあれば○で囲む)				
食物反応	衣服反応	性的反応	物質の導入	
劇化反応	非現実的内容	歴史的 content		

～指標～				
Ⅱ 形式面				
反応の失敗・拒否	失敗	拒否	⇒ 様子:	
初発反応時間	秒			
刺激の追加提示回数	回			
語りの様式	移入形式	会話形式	物語形式	該当なし
複数の物語	言及	分岐	独立	該当なし
前の刺激や物語との関連づけ	ある	ない	⇒ 刺激／物語 : No.	
Ⅲ 認知面				
微小要素の取り込み	ある	ない	⇒ 内容:	
音要素の取り込み	個			
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	ある	ない	⇒ 内容:	
登場人物の標準的位置関係からのずれ	ある	ない		
聴空間の拡大／縮小	拡大	縮小	該当なし	
他の感覚への言及	視覚	触覚	嗅覚	味覚
触覚情報の性質	肯定的	どちらでもない	否定的	言及なし

資料12. 自己関係づけ尺度 (金子, 2000)

以下の各項目について、当てはまる番号に○をつけてください

	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	あてはまらない
(1) 計画を立てるよりも、実行する方が好きである。	5	4	3	2	1
(2) 友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる。	5	4	3	2	1
(3) 話している集団と目が合うと、自分の事を言われているのではないかと気になる。	5	4	3	2	1
(4) 陽気なパーティー(集まり)では、夢中になって楽しむ方である。	5	4	3	2	1
(5) 友人が悪口を言っているのを聞くと、自分の事を言っているのではないかと思う時がある。	5	4	3	2	1
(6) 周囲の笑い声が、自分を笑っているように思える時がある。	5	4	3	2	1
(7) 社交的な活動に大変満足を感じる。	5	4	3	2	1
(8) 隣に座っている人が他の席へ移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある。	5	4	3	2	1
(9) 自分の近くにしゃべっている集団がいて、自分の事を言われているのではないかと思う時がある。	5	4	3	2	1
(10) 細かいところに注意を集中しなければならない仕事が好きである。	5	4	3	2	1
(11) 知人が挨拶してくれなかった時に、無視されたと思うことがある。	5	4	3	2	1
(12) 恥ずかしいことをした後、自分のことが陰で噂されているに違いないと思う。	5	4	3	2	1
(13) 済んだことはくよくよ考えない方である。	5	4	3	2	1
(14) 人が自分の方を見てしゃべっていると、自分の事を言っているのではないかと思う時がある。	5	4	3	2	1
(15) 部屋に入って急に静かになると、自分の事を話題にしていたのではないかと思うことがある。	5	4	3	2	1
(16) たいした理由もなく、楽しくなったり、悲しくなったり、気分が変わったことがある。	5	4	3	2	1
(17) 会話や電話で沈黙が続くと、相手に嫌われているのではないかと気になる。	5	4	3	2	1
(18) いつも行動を共にしている友人が自分を誘わなかった時、自分は嫌われているのではないかと思うことがある。	5	4	3	2	1
(19) 今の自分と昔の自分は、同じ人間でないかもしれないという奇妙な感じを持ったことがある。	5	4	3	2	1

資料13. 対人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井，2006）

以下の各項目について、当てはまる番号に○をつけてください

	非常に あてはまる	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	あてはまらない	全然あてはまらない
(1) 周りに自分より実力のある人がいて不安である	6	5	4	3	2	1	0
(2) 周囲に感情むきだしの人がいて怖い	6	5	4	3	2	1	0
(3) 自分の目つきは悪い	6	5	4	3	2	1	0
(4) 裏切られると思って人と深くかかわらないようにしている	6	5	4	3	2	1	0
(5) いつか人を傷つけてしまうのではないかと思う	6	5	4	3	2	1	0
(6) 自分の考えが周りと同じかどうか気になる	6	5	4	3	2	1	0
(7) 周りには何を考えているかわからない人がいて怖い	6	5	4	3	2	1	0
(8) 自分の目つきが周りの人を不快にしているのではないかと思う	6	5	4	3	2	1	0
(9) 人と親密な関係になることは怖い	6	5	4	3	2	1	0
(10) 自分は他人に残酷な人間である	6	5	4	3	2	1	0
(11) 人から批判されることをひどく気にしている	6	5	4	3	2	1	0
(12) 知り合いに怒りっぽい人がいて怖い	6	5	4	3	2	1	0
(13) 自分の容姿がよくないために周囲の人に嫌な思いをさせている	6	5	4	3	2	1	0
(14) 周りに頼れる人はほとんどいない	6	5	4	3	2	1	0
(15) 人を精神的に追いつめてしまうことがある	6	5	4	3	2	1	0
(16) 他人が自分より優れていると不安になる	6	5	4	3	2	1	0
(17) 自分のことを決めつける人がいて怖い	6	5	4	3	2	1	0
(18) 人と会っていると目つきがきつくなる	6	5	4	3	2	1	0
(19) 自分は周囲に理解されない人間である	6	5	4	3	2	1	0
(20) 思ったことをすぐに相手に言ってしまい相手を傷つけてしまう	6	5	4	3	2	1	0
(21) 周りができることを自分一人だけでできなくて不安に思うことがある	6	5	4	3	2	1	0
(22) 周りに自分の気持ちを傷つける人がいて怖い	6	5	4	3	2	1	0
(23) 自分の外見は変だと思う	6	5	4	3	2	1	0
(24) 誰も自分のことを心配してくれないと感じる	6	5	4	3	2	1	0
(25) 自分の本音を話すと相手を傷つけてしまう気がする	6	5	4	3	2	1	0